
夕闇のいざないと鬱ドラゴン

甘森礎苗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕闇のいざないと鬱ドラゴン

【Nコード】

N7588J

【作者名】

甘森礎苗

【あらすじ】

榎本香乃はよりによって誕生日に恋人と喧嘩をしてしまう。怒りに任せて彼の部屋を飛び出し、自分の家に帰ろうとする。その途中で、いきなり空を飛ぶ何かにさらわれてしまった。

目を覚ませば異世界、目の前には絵に描いたようなドラゴン。

でもちよつと待って。ドラゴンといい、この世界といい、なんか変じゃないか？

茜色の拉致（前書き）

こんにちは、初めての方は初めまして。

作者の甘森礎苗と申します。

この度は『夕闇のいざないと鬱ドラゴン』をご覧になっていただき、
本当にありがとうございます。

この作品は、私作者が当サイトでの投稿システムに慣れるために試験的に投稿したものです。誤字脱字や編集ミスなど、個人的には表立たせたくないものが多々見受けられると思います。

作品自体の内容はそこまで手を抜くつもりはありませんが、難しい話にするつもりはありません。しかし、極度に感動や娯楽などを期待している方はちょっと答えるのが難しいと思いますので、ご了承ください。

では、本編をどうぞ。

茜色の拉致

高ぶる感情を抑えきれず、香乃^{かの}は怒りのままに扉を閉めた。乱暴に閉められた扉は、予想した通りの荒々しい音を立てる。

部屋を出る際、自分の荷物を持つてくるのを忘れてしまった。着替えどころか財布も置いてきたままだ。

だが、取りに戻る気にはなれない。戻れば、自分から謝りに行くような感じになるので、それだけはどうしても嫌だ。

かろうじて持っているのは、初めからパーカーのポケットに入っていた自分の携帯電話だけ。

本来電話や電子メールの機能を担っているそれだが、今の気分だと両方とも喪失してほしい機能にしか考えられない。

香乃はところどころペンキの剥げた鉄製の階段を荒い足取りで下りていく。他人が見ればはしたないとか女らしくないとか言われるだろうが、そんなもん構ってられない。言いたければ勝手に言っていればいい。

もうここには戻らない。戻りたくもない。

そう決めて、香乃は階段を下りきった。

外から吹きさらしの駐車場を抜けて、一番近い道路へと出る。そんなに大きな建物でも駐車場でもないから、気に障るほどの時間はかからなかった。

時刻は夕方。茜色の光が道路を染めている。一日も終わろうとする時刻なので感傷に浸ったこともあったが、今は無視して歩を進め

た。

ここまででは彼に送ってきてもらっていたので、自分が使える移動手段は徒歩だけだ。自分の住居までは幸いにもそれほど遠くはないが、普段の移動手段を乗用車に頼っている身としては徒歩なんて疲れるだけだ。

普段から彼に任せっきりだったことが、ここで災いしたように思えた。自分の車で来るべきだったと反省した。

いくつも思いつく不快点を並べ、香乃はますます機嫌を悪くしていった。

歩調は至って早歩き。可憐さとはかけ離れている歩き方だった。口は固く結ばれており、その顔は怒りのあまりに泣く寸前にも見て取れる。

彼の住居から出てきたのはほんの少し前だが、方が一携帯電話に連絡でもかかってきたら目障りにしなければならないだろう。追いかけてくるのかと心のどこかで期待してはいたが、彼が外に出てくる気配は全くと言っていいほど無い。

拍子抜けと裏切りのダブルパンチを受けたような気持ちになって、もう彼に関わることすら嫌になった。携帯電話なら繋がるだろうが、そんな手段なんか取らせない。簡単に追いつかれてたまるか。

香乃は彼からの伝播的な追跡を拒むため、携帯電話を開いた。

画面には、彼とのツーショットを治めた写真が貼られてある。いつもならそれを見るだけで嬉しい気持ちになっていたのに、今では憎悪の材料にしかない。

その画面を見ないようにと、香乃は携帯電話の電源ボタンに触れた。

不意に、画面が暗くなった。

いや、違う。携帯電話だけでなく、香乃までも括るほどの影が覆い被さってきた。

ちようど太陽に雲でもかかったのだろうか。それとも、今は夕方だし、太陽も地平線まで沈んできたのだろうか。

普段は気にしないのに、今は普段にない気分になっているせいかな、太陽の様子を見たくなくなって仰いでみた。

上空から黒い“影”が猛スピードで接近してきた。

異様な光景を前に、香乃は悲鳴を上げることなく“影”に覆い隠され、そして、

西日の差す道路に、女性の姿はなかった。

【夕闇のいざないと鬱ドラゴン】

「くしゅん！」

体が冷えたせいで出たくしゃみで、香乃は目を覚ました。寝起きがいいほうではない香乃は、起きたばかりの体をすぐに起こす気になれず、横たわった状態のまま両腕で自分の体を抱きしめた。つい

でに体も丸めて、自分のぬくもりで体温を保とうとする。

風邪を引きやすい体質ではないけど、それとは関係なく寒いのは嫌だ。なんか固い所に横になってるみたいで、そこからも地味にひんやりとした温度が伝わってくる。

少しの間そのままじっとしていると、正面のほうから温かい空気が伝わってきているような気がした。瞑った目からもかすかな光を感じる。そういえば、パチパチという何かが弾けているような音が時折聞こえる。

まだまどろみが消えないけど、ゆっくりと目を開けてみた。

案の定というか、目の前には焚き火が作られてあった。少し大きめだろうが、ドラム缶が燃えるならこれくらいの大きさに燃えると思う。

温かい。

高校時代の修学旅行で泊まりがけのキャンプをした時、みんなでキャンプファイヤーをしたのを思い出した。材料の木を組み上げて、大きな火を燃え上がらせた。

本番は、お決まりだったが、火を囲むようにみんなでフォーケダンスを踊った。基本的に男女で分かれていたからみんな恥ずかしそうで、少し男子が多かったから男子同士になった組みをみんなでかかって。

そして、思えばその時に初めて彼の手を握った。

彼も恥ずかしそうだったけど、しっかりと握ってくれていた。

まだ告白してなくて、お互いに片思いだった頃の思い出。

まだ喧嘩してなくて、毎日が嬉しかった頃の思い出。

あんなに仲が良かったのに、
思いが通じ合っていると思っていたのに、
どうして…。

香乃は幸せだった昔に戻りたくて、目の前の焚き火を見つめていた。

知らずのうちに涙がこぼれた。
どうして喧嘩なんかしちゃったんだろう…。
もっと、もっと、あの焚き火の暖かさに触れれば、あの頃に戻るような気がして。

二人とも好き同士だったあの頃に戻れるような気がして。
香乃は無意識の内に、焚き火に手を伸ばした。

「…？」

荒い鼻息が聞こえた。

同時に、低く喉が唸る音も聞こえた。

私はびっくりして眠気の残っていた目を一気に覚まして、急いで体を起こす。

目の前には見知らぬ場所が広がっている。それもそうだが、自分の住居に戻った記憶もない。

なのに、自分は今どこかの部屋にいた。
何を今までのんびりと寝こけていたのか。
香乃はさっき聞こえた音の正体を探った。こういう時は部屋の隅

の陰っている所からぬらりと犯人が登場するのが相場なんだけど、お願いだから怖いのはやめてほしい。特に蛇とかワニとかトカゲとかいった爬虫類とか、熊とか蜘蛛とかコウモリとかいった体のどっかがキラーンって光りそうな部類とか、とりあえず怖いの一部。

香乃が体をよじって身構えていると、焚き火の向こうの暗い所から本当にぬらりと何かが出てきた。

まず、ウニのように前へ突き出た鼻と口が荒い吐息を漏らしながら現れた。

次に、怪しくキラーンって光る目が出てきた。

なぜか、体よりも早く、コウモリみたいな翼が現れた。
最後に、巨大な体と太い尻尾が見えた。

「……い」

「ごめん、むり。」

「いやあああああああ！」

叫ばずにいられないって、こういうことなんだと香乃は思った。
なぜって、ウニみたいな口と鼻に蛇みtainな目にコウモリみたいな翼にでっかい体で尻尾付きって、我慢できるか。

「
● Φ ∧ ∩ %
…」

「やだー！ 来んな！ 近寄るなバカー！」

何か聞こえたような気がするが、香乃は無視した。何を言ったのか分からなかったし、分かってても自分の身の安全が保証できない今の状況で他のことなんか構ってられなかった。

とりあえず叫ぶしかない。

叫んで、他の誰かが助けに来てくれることに期待するしかない。

「仕方ないと思うけど、いきなりそんなふうに言われるのは傷つくよ……」

いきなり日本語が聞こえてきた。

びっくりして、香乃はもう一度そのトラウマになりそうな風貌を見た。

焚き火の向こうから出てきたのは、ウニのような口と鼻を持ち、蛇のような眼を持ち、コウモリのような翼を持ち、太い体と尻尾を持つ、巨大な生物。

どこからどう見ても、ドラゴンがそこにいた。

「襲ったりしないから、今は落ち着いてくれない？」

ファンタジーに出てきそうな翼竜は、巨大な身にそぐわない、腰の低い態度で言ってきた。よくよく見れば、ぱっと見は凶悪だが、目の様子からは敵意を感じない。人じゃないのに表情が分かるっていうのも不思議なもんだけど、そう見えるんだから仕方ないという

か、こういう時は都合がいいと思っていたほうが自分のためのよう
な気がした。

「えっと、言葉はこれで合ってる…よね…？」

ドラゴンは不安そうな表情で確認のように話し掛けてきた。
なんていうか、どういったらいいんだろ。

香乃はかつてないほどのギャップを感じていた。

香乃が知っているドラゴンは、太い体に大きな翼を生やし、鋭い
爪と牙で襲いかかり、時々火も噴く空想の生物だと思っていた。性
格は諸説あったり数多くの設定があったりするけど、凶暴だったり
知的だったりと、どこか手のつけられない性格が多かった気がする。
なのに、目の前にいるドラゴンはなんだろう。

見た目は最強に怖いのに、態度がどこかビクビクしているという
か、おっかなびっくりというか、なんか臆病っぽい。これじゃ、思
いっきり怖がる必要もないんじゃないかって思えてきた。

「合ってるよ。言葉分かるんだ？」

一応会話はできるようなので、返事をしておいた。話ができる相
手にシカトするのはさすがに失礼だと思ったから、仕方なくだ。

「うん。昔、それと同じ言葉を使う人が来たことがあるから」

ドラゴンは器用に頷いて見せた。やっぱりどこかイメージと違う。

とりあえず、香乃は目先のことだけでも訊くことにした。

「君、誰なの？」

「誰って、ここの部屋の持ち主」

「君の部屋って…じゃあ！ 私を連れ去ってきたのも君なの！？」
「さあ、わからない…。さっきトイレに行って、帰ってきたらあな
たがいたんだけど…」

期待する答えが返ってこず、香乃はもどかしくなった。

「ああもう！ いきなり連れてこられたと思えばこんなドラゴンっ
ぽいのに会っし、そいつは訳が分からないし！ 一体どうなってる
のよ！」

「連れてこられて…？」

「そう！ 連れてこられたの！ 家に帰ろうとしたら、いきなりが
ばあって！」

どこか頭の悪い説明の仕方のように思えたが、本当にそういうふ
うにしか説明できないのでこれこそ仕方がない。

「もしかして…」

ドラゴンは何かを呟いたが、香乃は先に口を挟んだ。

「ここって、どこなの？」

「えっ？」

「だから、ここはどこって訊いてんの！」

「だから、僕の部屋だって」

「そうじゃなくて！ もっと事細かくしつかりとよ！ 市町村名と
か地方名とか国名とか！」

香乃は構わずまくし立てる。なんでもいいから情報が欲しかった。

「どこの国…って、ああ、あなたが今年のか」

「？」

香乃の質問を受けて、ドラゴンは一人だけで納得したようだった。
それに、今年の、とはどういう意味なのか。

謎が余計に増えた現状だが、ドラゴンは質問の一つに答えた。
「ここは『天竜の国』。僕みたいのが住む国だよ」

Cloud or Spider

てん りゅう…？

そんな国名を、香乃は聞いたことがなかった。いや、ドラゴンが実在するなんてどこの人間も口に出したことなくない。なのに、そのドラゴンがここでは他にも多かれ少なかれ住んでいるという。

「待つて…待つてよ。ドラゴンがいるなんて、聞いたことない！」

「あなたの世界にはいないんでしょ。でも、この世界にはいるのが普通だよ」

「今、世界って言った！？　じゃあここは地球じゃないの！？」

「違うよ。そんな世界の名前は初めて聞いた」

「そん、な…」

香乃は眩暈で倒れそうになった。

いきなり拉致されたと思えば、地球でないどこかに連れてこられている。

「なんで…なんでよ………帰してよ…！」

ドラゴンがいる世界であれば、香乃が拉致された理由なんか一つしかない。自分を食べるつもりなのだろう。映画ではよくある話だ。その時がいつなのかは分からない。分かったところで恐怖が募るだけだが、知らないでいてもじわじわと恐怖が募ってくる。

一体、自分はどうなってしまうのだろうか。どれだけのドラゴンに囲まれて、この身を引き裂かれるのだろうか。

本当は帰るはずだった自分の部屋が恋しい。嫌、願わくは、あの人の部屋に戻りたい。自分から頭を下げてもいいから、いくらでも謝るから、こんな訳の分からない世界から元の場所へ帰りたい。

香乃はほんの少しまで自分から遠ざけた場所を切望していた。

「いきなり世界まで違う場所まで連れてこられて混乱したくなるのはしょうがないけど、安全は守られるだろうから安心していいと思うよ。」

ドラゴンは言った。

そんななか、かい体をして、何を根拠に言っているのか、香乃は理解できなかった。

「いい加減なこと言わないで！ どうせ私を食べるつもりで連れてきたんでしょ！ そんな言葉なんかには惑わされたりなんかしないんだから！」

「やっぱりそう思ってたんだ…。そんなことしないよ？」

「嘘だ！ 騙されるもんか！」

今のうちに甘言で安心させておいて、後になれば襲うつもりなのだ、香乃は策謀を読んで、相手に流されまいと、すでに覚悟していた。

「食べるつもりなら、もう食べてるでしょーに。あと勘違いしてると思うけど、僕たちは生き物を食べないの。」

そう自白したドラゴンは、一つ溜息をついた。

香乃は、意表を突かれたというか、考えもしなかったことを表明されたような、手加減してあげるって言っていたのに、ラインぎりぎりのスピンサーブでサービスエースを食らったような気分になった。「…ちなみに、何を食べてるの？」

思わず香乃は訊いた。

質問に対して、ドラゴンの返事は、

「雲」

たった一単語だった。

「あのわきわきしてる、例のアレ？」

ドラゴンは少し黙考して、

「いや、違う。小さいのじゃなくて、空に浮かんでるほうの、例のアレ」

別のほうを差した。異綴同音異義語というのは本当に誤解の種だ。

「…なんでそんなの食べてるのよ？」

不思議なものを見たような気がして、香乃は再び質問していた。

「なんでって言われても、そういうものだから仕方ないよ。あなただって、どうして自分にとっての食べ物を食べると栄養になるのかちゃんと理解しているの？」

「それは…」

聞き返されて、香乃は返答できなかった。

冷静に考えれば、自分が食べた物がどうやって栄養になるのかなんて、今まで気にしたことなんかなかった。カロリーとかタンパク質とかなら、ダイエット（現在進行形）の経験上気にはしている。しかし、それ以前の体のメカニズムを知らうとはしなかった。どうして自分は穀類やら肉類やら野菜類やらその他いろいろな食べ物を食べないといけないのか。しかもバランスよく食べないと体を悪くしてしまう。

ちゃんと、その手の専門家や知っている人がいれば答えられるのだろうが、生憎と今は香乃しかない。その香乃は、今までそんなことに興味を示さなかったから知らうとも思わなかった。

「この世界の僕たちにとって、雲が食料。だから、あなたを食べたりなんかしない」

ドラゴンも真剣な眼差しで断言した。

香乃はその目を見て、相手は嘘を言っていないのだと思っ…
いけない！

さっき騙されないうって決めたばっかじゃんか！

危ういところで香乃は思いとどまり、警戒の態度を直した。

「ああもう！ だからそんなこと言われたって信じられるわけないでしょ！ 早く帰してよ！」

香乃が罵倒するようにドラゴンへ要求すると、ドラゴンは一瞬びつくりして、見る見るうちにひどく悲しい目になった。

「…信じられなくなつていいけどさ、僕には関係ないし……」

そう言つて、いじけたように背中を向けてしまった。

香乃はすごく悪いことをした気持ちになった。慌てて弁明の態度へと変える。

「あ、あのさ！ そんな深い意味で言つたんじゃないだよ！ 私もちよつと混乱してたつていうか、どうかしてたつていうか！」

香乃は手を上下左右に振り回して本人にもよく分かつていないジエスチャーをいろいろと表現した。この表現がドラゴンに伝わることはもちろんない。

「……………いいよ、慣れてるし」

呟くように返事をしたドラゴンは、今度は哀愁を含んだ溜息を一つ突いた。

最初から控えめの態度といい、今のネガティブな言動といい、香乃はドラゴンの状態がどこか変だと思った。個性や性格だと言われればそれまでだが、同じような態度を取られたことが過去にあったことを思い出す。

「あの、さっきはひどいこと言つてごめんね？ 悪気はなかったんだよ？」

香乃は遅すぎると思ひながらも、詭弁じみたフォローを伝えた。

「……………もう気にしてないから、大丈夫。…その出入り口から集会場へ行けるから、訊きたいことがあるならそっちにいる誰かに訊けばいいよ」

…充分気にしているじゃないかと突っ込みたくなつた気持ちを香

乃は押しとどめた。

背中を向けたままの投げやりな雰囲気で、ドラゴンは部屋の先を四本指の手で器用に指差した。

香乃は考えていた。ドラゴンの言われたとおり、集会場と呼ばれる部屋へ行ってもいい。どうやら本当に敵意はないようなので、そこへ行けば自分を案内したり質問に答えたりするドラゴンがいるのだろう。

だが、それでいいのだろうか。

この目の前にいるドラゴンを傷つけたまま、この場所を離れてもいいのだろうか。

思い返せば、香乃は今まで相手を悪いようにしか見ていなかった。自分を食べるつもりだとか、信用できないだとか、そんなことばかり言っていたような気がする。

しかし、ドラゴンは私を親切に接してくれた。訊けば答えてくれたし、怖がらないように余計に近づいてこなかったような気がしないでもない。それに、気を失っている私の体を焚き火で温めてくれてもいた。

これだけ手厚くしてもらっていたのに、今の自分は恩を仇で返しているようにしか思えなかった。

香乃はドラゴンへ近寄り、その足下に丸くくるまれている太い尻尾に腰掛ける。ドラゴンはびっくりした様子で首から上だけをこっちへ向けてきた。

「私、鳥目なの」

「……え？」

ドラゴンは驚いた様子を隠せないでいた。

香乃は気まずい気持ちを抑えつけて、自分でも単純だと思えるような理由を並べた。

「だから！ 暗い所だと目が見えないの！ あんな明かりの届かな

い場所に放り込まれたって困るのよ！」

「じゃあ、誰かを呼ぶよ。それなら確実だし」

「い、いいから！　いらないから！　もうちょっと焚き火で温まりたいし！」

香乃は半分ヤケクソの気分で言い訳を並べた。鳥目ではないが、暗い所を一人で行くのは怖いし、何より今はこのドラゴンともう少し話をしたいと思った。…決して言ってはやらないが。

「集会場のほうが暖かいよ。広々してるし」

ドラゴンはまだ突き返そうとしている。けっこう頑固か“鈍ちゃん”らしい。

かと言って、言い訳を並べるにも限度があるし、並べるたびに疑われるのも目に見えている。ジリ貧が想定できるこのやりとりで終止符を打つには、やはりこれしかない。ドラゴン相手に通じるか分からないが、有効であることを香乃は祈った。

「…邪魔したりなんかしないから、ここにいさせてよ」

香乃はここでドラゴンと視線を合わせる。

そしてトドメの一撃。

「だめ？」

身長差で自然と上目遣いになる。それが功を奏したのか、ねだられたドラゴンは気まずそうに視線を逸らした。

「駄目ってことは、ないけどさ…。だけど、その……………」

ドラゴンはなんだか恥ずかしげに視線をそわそわさせている。

「あーもういいや。好きにしなよ…」

ドラゴンはとうとう折れてくれた。ふてくされたように完全に香乃に背を向けて、また溜息をつく。

よし、よくやった私。伊達に今の恋人を落としただけのことはある。

ドラゴンも、人間と同じような感情を持っているのだとわかり、安心した。また、狙ってやったというのに思った通りの反応をするドラゴンがちょっとかわいく見えた。

香乃は微笑みながら、会話のキャッチボールが完全に途切れないうちにと、別の話題でドラゴンを振り向かせようとする。その時点で、まだ香乃達がお互いの名前を紹介し合っていないことに気づいた。遅すぎる気もするが、しないよりは全然マシだろうと、香乃は話を切り出す。

「私、榎本香乃っていうの。人間っていう種族よ。君は？」

問いかけると、ドラゴンは煩わしそうに首を動かし、顔半分だけ振り向いた状態で答えた。

「…僕はイストリカム・ベルバーセン。天竜族だ」

名前を知っただけだが、それだけで相手に一歩近づくことができた気がした。ここにいる間は世話になるだろうし、仲良くなっておいて越したことはないだろうと香乃は踏んだ。

「変わった名前ねー。あと長いし」

「…どうせ見た目も名前も変ですよ」

「あのね！今の“変わってる”っていうのは“個性的だね”っていう意味の言い回しだから！分かりにくかったなら謝るけど、立派な褒め言葉だから！」

文化が違うとはいえ、つくづくやりづらい性格だと香乃は思った。

「えっと…念のため訊くけど、名前はどっち？イストリカム？」

ベルバーセン？」

「どっちって…どっちも名前だよ」

「名前にも、なんか区別があるでしょ？その人を差す名前と、家族とかを差す名前とか。私の場合、『榎本』が苗字…っていう家族を差す名前と、『香乃』が私自身の名前なの。そんな感じで、私はあなたの、あなた自身を差す名前がどっちなのかを知りたいの」

「その区別だと、『イストリカム』が僕自身の名前だよ」

ようやく通じた。時々変化球が飛んでくるが、少しずつやっていけば疎通も問題なさそうだと香乃は思った。

「じゃあ、ちよつと長いから君のことは『イズ』って呼ぶね。私は『香乃』でいいよ」

「……まあ、いいけど」

香乃は尻尾から降りて、イズのできるだけ正面まで移動する。

「じゃあ改めて。長くはない間だろうけど、よろしくね、イズ」

イズに向かって、右手を伸ばした。

「……何、それ」

イズは不思議そうに香乃の差し伸ばされてある右手を眺めている。

「握手よ。私の世界じゃ、親しみを込めてこういう挨拶をするの。」

ちよつとノつといて」

香乃は開き直って笑っておいた。笑顔を見せるのも親睦の一つだが、愛想笑いでも苦手ではない。

香乃の開示的な態度に、イズはおずおずと自分の右手を伸ばした。

「よろしく、カノ」

イズが香乃に倣った。

遅い出発のような気がしたが、香乃はひとまず腰を落ち着けられそつだと思った。

部屋の中央で燃え盛る焚き火は衰えることなく部屋を暖め続けている。炎の明かりで照らされた人間と竜のシルエットが、重なった。

常識という名の壁

イズとコミュニケーションが取れたことで少し気持ちが落ち着いた香乃は、再び彼の尻尾に腰掛けさせてもらい、改めて今いる場所を見回してみた。

イズが部屋と呼んでいるこの場所は、学校の教室二つ分くらいの広さがある。明かりは部屋の中央で燃える焚き火のみなので一番奥まではつきりとは見えない。

部屋自体は鉄とも煉瓦とも取れない奇妙な材質でできている。堅固さはあるが、触れても不思議な温かみがある。

見上げれば屋根はなく、綺麗な星空とそこに浮かぶ雲が見えた。あれが食料なのだと、普段とは違う視点で夜空を見ていた。

空を見上げまくと体勢的にイズに寄りかかる形になった。特に意識していなかったが、イズの体は温かい。体は細かい鱗で覆われているのか、背中や手の甲のような外側は固めで、逆に腹や手の平のような内側は若干柔らかかった。しかし、全体的に固いと呼べるほどの固さではないが、柔らかさに強い反発力がついたような絶妙な肌触りだ。

要するに、なんだか寝心地がすごくよかった。

「そつえばさ、今さらなんだけど」

香乃は寝てしまいそうになる煩惱を振り払って、イズに話しかけた。

「どうして私が呼ばれたの？　なんかさっき心当たりがあるような感じだったよね？」

優先すべき事項が他にできてしまったので、肝心なことを確認しそびれていた。

問われたイズは、分かりやすいくらい億劫そうに首を向けた。

「…訊いてくればいいじゃん」

とりあえず、面倒くさがらずに相手をしてほしいという願いは届かないのだろうか。

さつきから思っただが、やっぱりこのドラゴンどこかおかしい。なんていうか、こっ…根が暗いという印象だ。

元からこんな性格だと言われればそれまでだが、せめて邪険に遠ざけようとするのはやめてほしいものだと思っただ。

「そうできればいいんだけど、私そこまで社交性がいいほうじゃなくてさ。君が一番話しやすい相手だから、君に訊いてるの。知らなかったらそう言ってくれればいいし」

遠ざけるような態度の相手の場合、まずは接点を作ることが大事だとかのは身に付いていた。なかでも頼み事をするのが好適だが、
“その相手じゃないといけない”のような人選のニュアンスを込めて伝えると効果が上がる。あと、あまり無理強いしないのもポイントだ。

本当は香乃のほうがフォローされたい立場なのだが、この場合は仕方がないと割り切った。

「…僕が知ってるのは、今日が記念日だってことだよ」

イズはぼつりと答えた。

「年に一度、天竜族を集めて記念祭をするんだ。その年の和平を感謝したり、これから先の豊穰を祈ったりして。だけど、いつからか天竜族だけで祝うんじゃないくて、他の種族の人にもこの裕福を分け与えたいって考えが生まれて、別の世界の人を招待することになったんだ。…さつき身の安全は守られるって言ったのは、それが理由だよ」

少し長い説明を終えたイズは、息継ぎを上手くしていなかったのか深呼吸をした。

「…記念祭はだいたい一日で終わる。招待した異界の人も、その日が終われば元の世界に送り届ける。この世界に振り回されるのも今だけだから大丈夫」

細かいところで口下手なイズの様子に注意を逸らされそうになった香乃だが、さりと流されそうになった箇所について訊いた。

「別の世界の人を招待…って、そんなのどうやるの？」

どうやら異次元に住む人を勝手に連れて来るみたいだが、そんなことどうやるのだろうか。

「普通に。ここから異界に行って、誰かテキトーに攫って、行ききたいに帰ってくるだけ」

「それを説明しろって言うてるの！ちょっとそのコンビニまでみたいなノリで言われても分かんないよ！」

香乃は思わず強めに突っ込んでしまったが、当の本人は理解できていない表情をしていた。コンビニもローカルネタになるなんて、

なんて話にくい。

香乃がぎゃんぎゃん騒いでいると、イズは当てのない方角へ視線を向け、小さく唸った。

「…香乃は、意識しなくてもできることはある？ 呼吸とか歩行とかじゃなくて、例えば何かを使った技術的なもので」

妙な疑問を投げかけられた香乃は返答に困った。

自慢ではないが、香乃は特技といえるものは何も持っていない。計算も記憶力も人並みで、芸術面の技能に至っても無難な平均値を發揮している。

「私、技術なんて何も…」

「高度なものじゃなくても、香乃の世界じゃ常識に入るようなものでもいいよ。文字書きとか移動方法とか」

困惑する香乃に、イズがフォローを入れた。
そういうことならなんとなく思いつく。

「文字書きなら習うよ。国によって習う言葉は違うけどね。あと、自転車っていう乗り物も大抵の人は乗り方を覚えるよ」

常識的なもの、誰もが教わるもの。

自分にとっては当たり前すぎて思いつかなかったものは、イズにとっては…いや、他の世界の住民からすれば立派な技術と呼べるのだと香乃は思った。

当たり前すぎて、イズに持ち上げてもらわなかったら全然気づかなかった。

香乃が暗い顔から明るい顔になって答えるのを見たイズは、ようやくと言いたげに小さな溜息をついた。

「感覚ではそれと同じ。どうやるも何も、僕たち天竜族にとっては当然のようにできる技術なんだ。練習は必要だけど、できるようになればそんなに難しいことじゃないよ」

イズの淡々とした説明に、香乃はやっぱ理解できなかった。次元移動が自転車の運転と同じ感覚っていうのがまずワケが分からない。

あれか？自転車のハンドルを握ってペダルを漕ぐことは異世界に行く時にも必要なことなのか？それとも自転車に乗れば異世界に渡れるのか？そもそも天竜族が自転車に乗るのか？

香乃は翼を使わずに自転車に乗るドラゴンというシュールな妄想を脳内で広げた。

もっとワケが分からなくなった。我ながらバカだと香乃は悔いた。

なんだかもう頭がついていけそうもない香乃は、先程思いついた、今の話題に関連した話題を振った。

「じゃあ、今回みたいに、私の前にも地球人が招待されたことがあるのね？」

それが日本語に精通している理由だと香乃は思った。
しかし、イズは首を横に振る。

「ううん。地球っていう世界から来たのはあなたが最初」

「えっ？　じゃあ、なんでこの日本語を喋れるの？」

「最初に言っただけ、同じ言葉を使う異界種族が以前来たことがあるから。話もしたし。ニホンゴっていう名前じゃなくて『カヌジ・ラウ』っていう言語らしいけど、発音も単語もほとんど同じだった」

これがパラレルワールドというやつだろうか。発音も単語も文法も、ほとんど変わらない言語が別の世界で使われているという。

香乃はそこまでファンタジーに詳しいほうでものめり込んでいるほうでもないが、自分の国と似たような言語をもつ世界が別の次元にも存在するという事実感慨深い気持ちになった。

だが、これもどう考えてもおかしい。

「待つて。異界の人は今日一日しかないんでしょ？ だったらなんでそんなにすらすらとこの言葉が話せるの？」

香乃は率直に疑問をぶつけた。

言葉は発音を規則的に連ねたものだ。用いられる規則はその言語によって異なることが多い。イズが最初に喋った言葉は少なくとも香乃にとっては聞いたことのない言葉だったから、きっと日本語と似た『なんとかラウ』とかいう言語も発音や文法が異なるものだと考えられる。

発音も文法も異なる言葉を、たった一日で、しかも会話しただけで覚えられるなんてことがあるだろうか。

常識的に考えてありえない香乃の疑問を、イズは常識をもって返答した。

「その人と話したから。会話のやりとりを繰り返せば覚えられるんだ」

香乃は目が点になった。

…なんだろう、この会話になっているようでどこかズレている会話は。

香乃は少しの間口を閉ざして黙考することにした。

イズは、「話せば覚えられる」と言った。つまり、その言葉を使う人と話していれば、単語や発音、文法に至るまで理解が可能で、会話できるレベルにまで習得できると、そういうことだろうか。

…なんだその、英語が苦手でテストに毎回苦しんでいる日本学生に喧嘩を売られそんな道理は。

香乃は痛んできた顚こめかみ？に手を当てながら、イズに見せつけるように手の平を向けた。いわゆる“ストップ”のジェスチャーだ。

「イズさんや、ちよつといいかい」

「…なに？」

「話していればその言葉を覚えられるって、本当に？」

「本当」

「そつかそつか、ほんとうか…。………って」

香乃は我慢できなくなった。

「そんな理由で納得できるか————！！」

香乃の気合いの入った雄叫びに、イズが仰天した。

「なにそのパターン？聞けば覚えるってどんな理屈よ？君の頭ってどうなってるのよ？理屈って何よ？君達って一体何なのよ？」

「カノ、ちよつと落ち着いて…？」

一番手身近にある竜の体をばしと狂ったように叩き始めた香乃を、イズは戸惑いながら制止させる。

「説明を要求する！私は納得のいく説明を切望する！」

「分かった、説明するから。もう…」

イズは至極面倒だと思っていた。極端な環境にも早い段階で順応する心の強い女性だと思っていた。少し考えれば、最初こそ叫んだものの、そのあとはよく落ち着いていられたように思える。だが、わざとらしくも見える狂い方をされると誰でもいいから助けてほしいと思えてくる。そんなことは起こらないのに。

イズは香乃をなだめようと、翼を少しだけ広げ、器用に翼膜の柔らかいところで香乃を包むように覆った。そのあと、手の甲で彼女の体を撫でた。イズの手には爪があるので、それで怪我をさせないように気をつけた。

「あ…ご、ごめん……………」

冷静さを取り戻した香乃は、氣遣ってくれたイズに礼を言った。思えば、ここに来てからイズには世話になりっぱなしだった。混乱する自分を何度も落ち着かせようとしてくれている。

勝手に連れてこられたんだから良い待遇をされるのは当然だと思っていた自分が情けない。もっとしっかりしなければと改心した。

イズは香乃の様子を見て、改めて説明した。

「さっきの技術の話と似るけど、カノにとって当たり前のようにで

きることがあると思う。さっきの…ジテンシャだっけ？そういう“最初はできなかったけど練習したらできたこと”じゃなくて、いつの間にかできるようになっていたことがさ。例えば、カノの場合、両足を使って地面を歩けるよね？それと同じように、僕たち天竜族にも、いつの間にかできるようになっていたことがあるんだ。その一つが情報分析力ってこと。外部から手に入れた情報を無意識の領域で解析できるんだ。それを応用して、結果として言葉を覚えられるわけ。分かった？」

香乃は答えた。

「全然分かんない」

「えー…まだ？」

イズは輦蹙ひんしゅくした。

「だって、言葉を使うにはそれなりの記憶力も必要でしょ？でもイズの説明だとそこまで記憶力が高くはないみたいだし。それに、無意識に分析できるっていうのもなんだかさっぱりだもん」

確かにそれも一理あると、イズは思った。

しかし、それは香乃にとつての常識に従って考えた場合だ。そろそろ世界と共に常識も違うことを受け入れることができればもう少し苦労はしないだろう。

イズは香乃が持っている情報をなんとか利用して説明した。

「カノも、その二ホンゴって言う言葉が無意識に使っているでしょ？最初はきちんと練習したかもしれないけど、今じゃ言葉を使おうとする時に無意識に思いつく言葉だと思うんだ。確か、カノの世界

だと他にも言語があるんだよね？いろんな言語があるなかで、カノは自動的に思い出せるのがその二ホンゴなんだと思う。一番慣れた言葉だと、使うのに最低限の記憶力しか必要としないんだ。僕たちは言葉を聞いて理解してしまうから、その言葉を使うのに必要最低限の記憶力しかなくていいわけ」

カノの反応が芳しくないが、イズは構わず続けることにした。

「あとは…無意識の補足だけど、カノはジテンシャっていう乗り物をいつでも乗れる自信はある？」

「そりゃあ、まあ…」

「それはどうして？」

「どうして…って、一度覚えたら忘れるようなものじゃないからよ。なんかこう、体が覚えてるっていうのかな」

「じゃあ、カノは無意識に自転車に乗ることができる”って言うるんじゃないかな」

「まあ…そうね」

飲み込めてきたカノの様子にイズは若干安堵して、説明の仕上げに入った。

「それとおんなじだよ。カノは無意識の領域で自転車に乗れるように、僕たちは無意識の領域で言葉を理解して使えるようになるんだ。分野は違うけど、お互いにできることとできないことが根本的に違うだけで、そういうふうにできてるだけ。分かった？」

イズは確認の意思を求めてきた。

理屈は相変わらずむちゃくちゃだとは思っ。だが、それは香乃の常識で考えた場合だ。イズも言っていたように、ここは違う世界で、ものの在り方も根本的に違っ。自分の常識や先入観にいつまでも囚われていてはいけなないのだと香乃は思っ。た。

「…なんとなくだけど、なんとか」

香乃の納得の意志を聞いたイズは、今度こそ安堵した。

同時に、もうこんな長い説明をするのは嫌だと心底思っ。た。

剣の相手は剣か盾か兵士か

まだ腑に落ち切れていない香乃だったが、これ以上難しい話をさせては発狂じや済まないような気がしたので、言葉の通りに鵜呑みにすることにした。

自分が招待された理由。

それは、何かしらの特別な理由を持つ人物という厳選ではなく、単に手身近な所にいた人物といういい加減な理由だった。

香乃は呆れながら、腰掛けたまま上半身だけ背伸びする。体を弓状に反らせる。背骨とか腕とか肋骨とかのどこからぼきぼきという音が聞こえた。重心が後ろに傾くが、香乃は構わずそのまま仰向けに倒れ込む。寄りかかられたイズは、やはり居心地の悪そうな顔をするが、断ることもできない上に理由も思いつかないので、結局そのまま動かなかった。

体の筋肉を一時的に緊張させ、そして弛緩させる。一連の簡易リラクセス法を済ませた香乃は、落ち着いた気分で一息ついた。

「まさか、そんなテキトーな理由だったなんて思わなかったな……」

「…そう」

イズが素っ気ない相槌を打つ。

香乃は独り言のつもりでいったので主語が抜けていたが、イズはそこも理解しているのだろうか。

イズに確認しようとして、やっぱりやめた。考えれば、間違っても構わないようなことだ。それよりも、イズがちゃんと返事をしてくれることを喜ぶべきと思った。

イズは面倒なやりとりをするのが嫌なようで、こちらから求めな

い限り愛想のない返事しか返してこない。どこか変だという印象はまだ抜けなければ、少なくとも悪い人（？）ではないと香乃は自信を持って印象づけることができた。

小さな風が部屋の中に流れてきた。部屋の天井はないので、外で風が吹けば時々入り込んでくる。風を受けて、香乃は小さく震えた。イズと密着している所は温まっているが、吹きさらしの所はまだまだ焚き火の熱だけで温めている。充分に温まっているつもりだったが、風が予想よりも冷たいせいか体が敏感に反応してしまう。

焚き火も風を受け、香乃に見つめられながらゆらゆらと揺れる。常に形を変え続け、火の粉を撒き、パチパチと心地の良い音を立てる炎に、香乃は見取れていた。

炎が揺れては消える。激しく、淡く。

火の粉が飛んでは消え、飛んでは消え。

発生と消失を繰り返す赤の光景は、どうして彼を連れてくるのだろうか。

火の明かりで仄かに照らされている、はにかんだ彼の顔。
部屋で私に言われた直後の、悲しそうな彼の顔。

思い出したくなくても、ちよつとしたきっかけで思い出してしまふ。思い出さないようにしたいのに、そう意識することすらなかった。

いつか、忘れることができるのだろうか。

思い出しても疼くことがない日は来るのだろうか。

どんなきっかけをもつてしても蘇らずに済む時が来るのだろうか。
焦点の合っていない香乃の瞳から一滴がこぼれていたのを、焚き火だけが見ていた。

「……………帰りたく、ないな……」

香乃が不意に呟いた。

「ずっと、ここにいたい……………」

元の世界に帰ったところで、彼と会うかもしれない。今まで嬉しかったことが、今はつらいと、できれば避けたいことに変わっている。会うことが嫌だし、そう思うようになってしまった自分も嫌だった。

でも、こつちの世界にいれば違う。彼と会うことはないし、さっきまで他のことに夢中で忘れることができた。こつちの世界にすることが自分にとっての救いだと、香乃は思い始めていた。

「それ、無理。カノは絶対に帰される」

…傷心に浸っている女の子に、なんて血も涙もないことを言ってくれるかなこのドラゴンは。

冷徹なイズの返事にセンチメンタルさが吹っ飛んでしまった香乃は、いつの間にか流れていた涙を化粧が崩れるのも構わず乱暴に拭い、いつの間にか鼻の中に溜まっていた鼻水もこれまた力任せにすすってクリーンにし、イズに詰めかかった。

「あのね！ちょっとは私の気持ちも察してよ！なんでそんなこと言えるわけ？」

香乃は悲しさが怒りに変換されたように猛々しく言った。それに対して、イズはどこまでも暗かった。

「気持ちなんて知らないよ、そんなの。察しろ、なんて勝手なこと
言わないでよ」

イズは呆れたように溜息をつく。

その様子に、香乃はむかつ腹を抑えることができなかった。イズ
の暗い態度が気に入らないのではない。理解してもらえない悲しさ
でもない。

少しずつ信頼することができてきた自分の気持ちを軽く突き放せ
るイズの言い方が気に入らなかったのだ。

「分からなくても、言い方ってもんがあるでしょ！？そりゃ、勝手
だったかもしれないけど！」

感情を剥き出しにして抗議する香乃の様子に、イズはさぞ面倒臭
そうな顔をする。それが香乃の怒りを助長した。

「いいわよね、イズは！私みたいな悩みがなくて！どうせ呆れてる
んでしょ！面倒臭い女だっと思ってるんでしょ！でもね！私にとっ
ては大事なことなのよ！つらくて堪らないの！イズなんかに分かる
わけない！」

起こり続けるうちに、香乃は泣いていた。悲しい。嫌だ。どうし
てこんな。そればかりの感情ばかりが湧き上がってくる。

香乃の思いつくままに発せられた怒りをぶつけられたイズは、暗
い表情をさらに沈ませる。

そして、そっぽを向いてしまった。

「…そうだよ、分からないよ。どうせ僕は駄目だから」

イズはそっぽの方向に溜息を漏らした。表情が見えないのに、どれだけ沈んだかが分かるほど暗い雰囲気になった。

香乃はイズの変化を目の当たりにして、「しまった」という気持ちに駆られた。感情的になっていたとはいえ、少し言い過ぎたかもしれない。

反省しながら、香乃はイズに話しかけた。

「あの…イズ？」

「…もう、僕のことは放つとして」

イズが明確に拒絶した。

「…まだ何かあるんだったら、もういい加減に向こうへ行つたほうがいい。それじゃ」

低く押し殺した声と共に、イズは短い別れの言葉を告げた。

香乃はいつそう悲しくなった。傷つけるつもりはなかった。怒りたくて怒ったのでもなかった。

ただ、聞いてほしかったただけなのに。

「――」

言いたかった言葉を、香乃は飲み込んだ。伸ばしそうになった手を、静かに下ろした。

違うのに。

自分が言いたかったことは、こんなことじゃないのに。

伝えたい言葉を言うべきなのに、イズの悲しい背中を見ると、何を言っても届かないような気がしてしまった。

どうして、こうなってしまったんだろう。

自分が望む理想に反して、現実には上手くいかないばかり。相手にしてほしかったこと。自分に対して気にかけてほしかったこと。

求めたばかりに、相手が傷ついていく。どうして、私はこんなだろう…。

香乃は立ち上がり、イズから離れた。これ以上、イズに触れているのが申し訳なく思えた。自分と離れているのが彼のためだとも思えてきた。

一方、イズは自分に腰掛けていた香乃が離れたことに、煩わしい存在はいなくなった安堵と、温められていた体の一部が冷めていく感覚に知らない感情を覚えていた。

その感情が寂しさだと、イズは知らなかった。

もうここにいてはいけないのかもしれない。

香乃はイズを傷つけた。図る図らずを問わず、イズに嫌な思いをさせた。そういえば、香乃がイズと会ってから笑った顔や声を聞いたことがない。イズはいつも悲しそうな様子でいて、自分と話すたびに嫌な顔をしていた。

自分という相手は傷ついてしまう。

香乃は自分の存在がそう思えてしまった。

錯覚なのかもしれない。嫌なことが連続して起きてしまったための思い込みなのかもしれない。でも、目の前で起こした事実だけが香乃に突き刺さり、否定することができなかった。

香乃は通路に続くとイズが言っていた出入り口へ向かった。出入り口の向こうの通路は暗くてよく見えない。でも、行くしかなかった。

た。それが香乃の取るべき選択なのだから。

出入り口をくぐる直前に、香乃はイズへ振り向いた。イズは微動だにせずそっぽを向いて、ずっと暗い様子でいた。そんなくらい様子にした原因は自分なのだと香乃は自覚し、胸が痛んだ。

「ひどいこと言ってごめんね。そんなつもりじゃなかったの。焚き火、あつたかったよ。ありがとう。…じゃあね」

手遅れなのを分かった上で、香乃は別れにねぎらいを込めた。イズに聞こえてはいるだろうが、彼は振り向きもせず、ずっと向こうを向いていた。最後くらいはちゃんと顔を合わせてお礼を言いたかったのだが、それも叶わないようだった。

香乃はありったけの後悔に胸を痛めながら、暗い通路へと姿を消した。

再び部屋に吹き込んできた小さな風が、イズの体をそつと撫でた。

剣の相手は剣か盾か兵士か（後書き）

前章について評価・感想を出していただいた方、ありがとうございます。

その方から、読点が「、」が「、」になっていることを指摘していただきました。横書きで読むことを前提に考えていたので「、」のほうが自然かと思ったのですが、それは私の勘違いだったようです。この章からは「、」で統一させていただきます。

読んだ人にとって良い娯楽になれるよう、これからも練習していきます。感想がありましたら、どうぞ遠慮なく書いていただければと思います。

努力の種類

あの時、ああすればよかった。
今を生きる者はどれだけこの後悔を繰り返せばいいのだろうか。

香乃が部屋を出て行っても、イズの気持ちは曇ったままだった。
香乃の言う通り、自分でもひどい言い方をしたと思う。

そうなのだ。あんなことを口に出すものではなかったのだ。
本当はもっとやさしくしたかった。幼い頃より父から「他者の心を汲めるようになれ」と育てられてきた。幼少期は言いつけのまま目標としてきて、自我が確立した今になってもその志に賛成しているから別にいい。

でも、どうしても上手くできないことっていうのはある。香乃の気持ちを理解してあげたかったのだが、誰かと話をするのが久し振りだったせいで話をしただけで変な疲れが出てしまった。さっきも香乃の事情をよく知らないのに、自分一人だけの時間が欲しくなつて突き放すような言い方をしてしまった。香乃の話を聞いてあげればよかったのに、イズは拒んでしまった。

それだけならやり直しが利いたかもしれない。謝れば済んだかもしれない。でも、香乃が怒った時、イズは自分がとても嫌な存在に思えてしまった。香乃の些細な言葉を聞いて、心が無駄なくらい敏感に怯えてしまった。香乃の怒りをぶつけられて、いうべき言葉を忘れてしまうくらい心が傷ついてしまった。

その言葉が本当じゃないってことは分かっている。部屋を出て行く時に香乃は謝ってくれていた。

でも、違う人から同じようなことを言われていたら、簡単に否定できるものだろうか。

イズには分らない。

そう言った香乃。

そしてもう一人。

幼なじみから言われた言葉が、昨日のことのように思い出される。

天竜の国の民は基本的に自由な生活を送っている。それぞれの住处を持ち、家庭を築き、日々の享楽を求めて生きる。

しかし、過ぎた自由は治安の悪化を招くとして、国の代表者は治国を懸念した。考案を重ねたのち、苦肉の思いで一部の者に国の統括の役割を与えた。自由主義を基礎に置く故に、厳選した者に適切な範囲で民を管理・指導する権限を与えた。

その治国策は成功の形を収め、今もなお豊かな国として安寧を栄えている。

イズには幼い頃から仲の良かった友達がいた。

親の繋がりでもまだ空も飛べない頃から顔を合わせ、それからはいつも一緒に遊んでいた。

朝ご飯を食べたら親に連れて行ってもらい、日が暮れるまで飽きもせず遊んだ。お互いに腕白だったので、体のいろいろな所に怪我ができていった。しかし、イズも友達もそれについて嫌だとは思わず、むしろ誇らしい気持ちになった。

飛行の適齢期になると、今度は一緒に空の飛び方を練習した。自分の力で飛べるようになれば、親の力を借りずに好きな時に好きな場所へ行けるようになる。子供の頃に抱いていた、親の拘束力から解かれる夢を実現しようと、イズと友達は一生懸命練習した。

最初に飛べるようになったのはイズだった。体の成長度は個人差が出るため、その点ではイズのほうがわずかに先行する結果になっ

たようだった。その時のイズは嬉しさが勝っていたので気に留めなかったが、今思い返せば、先に飛べるようになったイズを見る友人の目つきは羨望と嫉妬に満ちていたような気がする。

翌日、友達は用事があると言って遊ばなかったが、次の日には友達も飛べるようになっていた。何も言っていなかったが、もともと怪我だらけの友達の体のところどころに、今までなかった傷跡が増えていた。

それからしばらくは一緒に遊んでいたが、いつの頃からか友達はイズと遊ぶのを断ることが増えていった。イズは当初、それぞれの用事があるのだと思って気にしなかった。

しかし、月日が経つにつれて友達が誘いを断ることが多くなり、イズも誘うことに遠慮し始め、ついには一緒に遊ぶことがなくなってしまった。

それぞれの用事がある。イズはそう自分に言い聞かせ、一人でいる時の楽しみ方を見つけてはそれで過ごしていった。

数年が経ち、イズの体つきはすでに成年と呼べてもいいほどの段階まで成長した。

これを機に、親の勧めで、イズは火の吐き方と次元移動の仕方を教わることになった。天竜族は体の構造上、火を吐くことはできる。同様に、成年に近づくにつれて発達する両翼によって飛行能力も備わるのだ。親の模範を見て、倣うことを繰り返してコツを掴んでいく。どちらも感覚的な部分が多いので習得するのは容易ではなかったが、半年の歳月を費やした頃ようやくできるようになった。

きちんとできるようになり、イズは、昔初めて飛び方を覚えた時のように大喜びした。これで天竜として一人前になれたのだと自賛した。

喜びが抑えきれなかったイズは、友達に自慢してやろうと考えた。

できるようになったのだと自慢してやりたかった。

友達の家を訪れると、イズは彼を見て驚いた。

友達は、昔の腕白さが抜け落ち、威圧感の漂う雰囲気になっていた。身のこなしの一つ一つに重みを感じられ、自分を見る目は無邪気さの欠片もなかった。

幸いにも時間の空いていた友達はイズを連れて静かな場所へと移動した。

腰を落ち着かせてから、イズは自分の努力の成果を話した。初めて火を吐けるようになったこと。異次元へ行けるようになったこと。イズは友達に、自分の努力の成果を見てほしかった。

それらを覚えるためにたくさん練習したことも話そうとした直前、聞き手に回っていた友達は突然一笑した。

友達は、そんなこと誰だってできると言った。

今頃覚えているのはお前くらいだと言った。

友達の口から出された冷たい言葉に、イズは何を話したかったのか分からなくなってしまった。

口を噤んだイズに、友達は話し始めた。

空の飛び方をイズに先を越されてから、彼は人一倍努力し始めた。何度も地面や壁に体をこ叩きつけて、むりやり身につけた。飛び方を覚えてからも、友達は努力を止めなかった。両親の縁を最大限に利用し、国学や哲学、心理学などの教養を身につけた。また、国の統率関係の者に弟子入りし、統治に係る知識を身につけていった。火の吐き方、次元の移動法などとうの昔に習得していて、現在は若くして治国者の一角を担うまでになったようだ。

それを聞いたイズは、平穩を望む自分には友達の考えが分からなかった。どうしてわざわざそんな地位を目指したのか。どうして自由気ままに暮らす生活を捨てたのか。

取り乱したイズに、友達は冷静に答えた。

友達の父親は長年治国者を務める要の一人だった。友達の父親は、

友達に幼い頃から厳しい態度で接していた。それは、いつか自分と同じ誇りある治国者とするための教育だった。

友達はそのような父親が嫌で、子供の頃は父親の近くにいたくなかった。近くにいれば何かとうるさく言ってくるからだ。友達はイズと遊ぶのを口実に、父親と距離を取っていた。

しかし、ある日イズのほうが先に空の飛び方を覚えられてしまった。その時、友達は今まで抱いたことのない悔しさを思い知らされた。目の前にいるお気楽な奴よりも自分が劣っていることを痛感した。

一生の不覚、生き恥をかかされる思い……友達は自分の低能さを恨み、イズに憎しみさえ抱いた。帰宅してから父親に練習の首尾を伝えると、イズが飛べたのに友達が飛べなかったことに激昂し、飛べるようになるまで私用の外出を禁じられた。友達はそれを嫌とは思わず、むしろ自ら進んで特訓した。無事に飛行技術を身につけると、友達は今度は父親に頼み、技術面、知識面などに手を伸ばした。友達は難題にぶつかろうと決して挫けず、努力を惜しまなかった。すべては、イズなんかに負けたくないという、歪んだ競争心からだった。

自分よりも先に飛べるようになったイズ。

自分よりも先に高みに昇ったイズ。

自分よりも先に優れていると見せつけたイズ。

友であれ何であれ、友達は深い所から湧き上がるどす黒い感情を抑えられなかった。

友達から真相と本音を聞いたイズは、絶句してしまった。

友達が、仲睦まじかった友達が、イズのことを恨んでいた。

あまつさえ、自分の言動によって大きな傷を負っていた。

長年親友と思っていた彼がそういうことを考えていることを知り、衝撃を隠せなかった。

イズから見ても分かるくらい、友達はすでに大人びた印象を讃え

ている。身につけた技術や知識は、イズには理解できないこともあるのだろう。たくさんの竜と関わり、たくさんの見聞を広めたのだろう。重要な役割を担う今、たくさんの竜から慕われているのだろう。他者から見れば偉大だと思ふ友達の成長は、すべてイズに対する憎悪が原因だというのか。

イズは口の中の乾きを感じながら、友達に問いかけた。どうしてそんなこと言うのか。どうしてそんな生き方を選んだのか。どうして今までどおり共に遊ぶ仲でいらなかったのか。

混乱した思考で問いを投げ続けるイズに、友達は一言だけ答えた。

「イズには分からないよ」

と。

友達はそれだけを言い置いて、僕の前から飛び去った。

イズには友達に話したいことも訊きたいこともいっぱいあった。

空白の時間を埋めたいほど、イズは友達とたくさん話をしたかった。それが、知りたくもなかった。いや、あるなんて思ってもみなかった。真実を告げられて、叶わない夢へと変わった。

その出来事以来、イズは他者と関わるのが怖くなった。自分のせいで誰かが嫌な思いをする。自分のせいで誰かを傷つける。自分のせいで誰かに恨まれる。自分のせいで誰かと憎しみ合う。自分のせいで誰かの生き方を変えてしまう。

イズは自らの出来の悪さを呪った。どうして自分はこうなんだろうと。どうして自分はそうしてしまうのだろうか。火の吐き方や次元移動を自慢するために友達に会いに行った自分の脳天気さに虫唾が走った。

自分のいる場所が嫌いになった。

自分の在り方が嫌いになった。

自分の全てが嫌いになった。

そして、イズは誰との関わりを断ち切った。

イズとて、何もしていないわけではなかった。その友達ができそうなことをできるように努力したこともあった。でも、どうしても自分は失敗ばかりする。簡単なことでも簡単に失敗する。もっと上手くやりたいのに、どうしても上手くいかなくて、いつも後悔ばかりする。上手くいかないことが積もり、いつしか失敗が怖くなって、すっかり臆病になってしまった。

本当はもっと自信を持ちたい。

できるようになりたい。

言いたいことを言えるようになりたい。

やさしくになりたい。

イズは特別を望んでいるわけではなかった。ただ、普通のことを普通にしかかった。

でも、上手くできない。その、できない苛立ちや悲しさを香乃に向けてしまった。関係のない香乃に、理不尽な感情を向けてしまった。そのせいで、香乃に謝らせてしまった。

違うんだ。香乃は何も悪くないのに。

言うべきこと。言いたかったこと。どちらももう届くことはない。香乃は別れ際に、焚き火のことへ礼を言っていた。

それすらもイズにとってはつらい言葉だった。なぜならば、この焚き火はイズが作ったものではないからだ。火を吐くのは大抵の者はできるし、イズも昔はできていた。しかし、外との接点をなくした今では、火の吐き方を忘れてしまった。

できないことはいまだできず、昔できていたことも今ではできず。普通の者なら簡単にできることを、イズはできない。

こんな自分をどうにかしたかった。どうにかしたいと思っているのに、どうすればいいのか分からない。変わりたいと願うのに、そ

の方法を知らない。そんな自分が嫌だし、怒りたくなるし、悲しくもなった。自分を蔑む感情を延々と繰り返すうちに、自分は存在していいのかと自問する自分が生まれたことも嫌になった。

こんなことを考えているなんて、誰が思うだろうか。

こんな隅っこにいる僕を、気にかける者なんかいるのだろうか。気にかけたところで、この気持ちが分かるのだろうか。

いや、とイズは自分で否定した。

いるわけない。自分なんかを気にかける者なんて、いるわけがない。

気にかけたところで、自分の気持ちなんて分かるわけがない。そういうことだ。誰だって自分以外の者の気持ちなんて分かるわけない。

僕の気持ちなんて、分かりっこない…！

イズは焚き火に淡く照らされながら、一人溜息をついた。

溜息をついた直後、背後のほうで足音が聞こえた。音に過剰に反応したイズは、出入り口に立っている人物を見て再度驚いた。

そこにいたのは、寒そうに体を震わせている香乃だった。

体をぶるぶると震わせ、両腕で自分を抱きしめるようにして寒さをこらえている。髪の毛は見て分かるほど乱れており、寒さで歯はかちかちと音を鳴らしている。

「火」

香乃が震える声で言った。

「…え？」

「だから、火！」

どこかの重役が下っ端に煙草の着火を求めるように端的に要求するやいなや、香乃は仏頂面ですかずかと部屋の中に入り、息を荒くしたままイズに背を向ける形で焚き火の近くにしゃがみ込んだ。

体を小さく丸めて自身の体温を逃がさないようにしつつ、焚き火からの熱で体を温めようとしている。少しでも熱を取り込もうと、手の平を焚き火に翳して熱を得ようともしていた。

呆氣に取られていたイズは、香乃に訊いた。

「…ど、どうしたの？」

「どうもこうもないよ！」

イズのおっかなびっくりな質問に、香乃は背中を向けたまま牙を剥いたように返した。

「何あれ！他の建物は遠くにあるけど、外に出てもヘリポートみたいな足場があるだけで、道なんかどこにも無いじゃない！どうりで暗いと何も見えないはずよ！道なんて始めから無いものね！おまけに冷たい風がめっちゃくちや吹いてるし！何よここ北海道か！それとも群馬か！かかあ天下とからっ風か！」

寒さが抜けず震える声のまま、香乃は不平不満を吐き出した。

「それは、まあ…。僕たちは飛べるから陸上の道なんて必要ないし。あと、この辺りは建物と地形の関係でちょっとだけ風が強いんだけ

ど…そんなにつらかった？」

「ちよつとどころじゃない！強すぎよ！壁に手を付いてないとまともに歩けなかったのよ！？」

イズにとってはそこまで影響する風力ではないのだが、人間代表の香乃にとっては冷たさも相まって風地獄だった。

怒りの収まらない香乃の様子に、イズは反省した。一人で外へ行くように促したのは他でもないイズだ。外の環境が香乃のような人間にとって過酷な条件だということに気を回せなかった。幸いにも怪我はないようだが、香乃の害された気分はイズの責任だと思った。

「…その……ごめんなさい。僕が行けって言っただけに…」

イズは謝った。罵られてもおかしくない。何を言われても受け止める責任がイズにはあると自負していた。

しかし、香乃の返事はイズの予想を裏切るものだった。

「どうしてイズが謝るの？私が勝手に出ていったのに」

いつの間にか首から上だけをイズのほうへ向けていた香乃は、先程とは打って変わって穏やかな声色で聞き返した。

ついさっきの怒りの延長で怒られるだろうと踏んでいたイズは、用意していた覚悟をどこへしまえばいいのか戸惑いながら理由を答えた。

「…だって、最初に僕が外へ行けって言っただし、カノにとってそんなにづらいだなんて思わなくて…」

イズはぼそぼそとした小さな声で答える。

返事を聞いた香乃は、焚き火へと視線を戻して頭を振った。

「怒ったのは、イズが憎かったからじゃないよ。自分の行動と自身にムカついていただけなの。ただの愚痴のつもりだったんだけど、嫌な気持ちにさせたのなら私こそ悪かったよ」

イズからは香乃を斜め後ろから見ている位置になるので、香乃の横顔しか見えない。しかし、揺れる炎を写すその瞳は今まで見たことのないような慈悲深さに満ちていた。

思わず見取れてしまったイズは何か返事を返さなくてはと、言葉を探した。だが、返事の内容を考えては自分で破棄し、さらには焦りによって上手い言葉が思いつかなくなる。その間、イズの口からは「あの…」とか「…」とかいう言葉とも取れぬ声が漏れていた。たった一言の返事さえできない、そんな自分がイズは嫌になった。

イズが返事の内容を熟考しているのに対し、香乃は返事を待たずに喋り始めた。

「私ね、いつもこうなんだ。自分の中で描いている理想が現実と違っちゃうと、どうしても嫌な気持ちになるの。仕事とかならなんとか割り切れるものはあるけど、私生活だとなかなか上手くいかなくて…。それで、嫌な気持ちになると、誰かに一方的に怒ったりして…」

この世界に来てから聞いたことのない香乃の静かな声に、イズは聞き入っていた。

「実はね、この世界に来る直前に、恋人とケンカしちゃったんだ。彼は真面目だし、頭もいいし、何よりもやさしいの。私のことを一番に考えてくれていて、そう信じられた。こんな私には本当に

もったいないくらい、いい人。…それでね、今日、私の誕生日なの。彼も祝う準備をしてくれててね。私は晚ご飯が待ちきれなくなつて、いつもよりも早めにご飯にして。…でもね、そこで、来週から彼が仕事で出張に行くことを聞いたの。出張っていうのは、住んでいる場所より遠くに行つて仕事をしに行くことね。何日か、場合によっては何ヶ月も行くの。それで、彼と離れ離れになるのが嫌だったから、私は彼と一緒にいきたいって言ったの。そしたら彼ね、『香乃まで来ることない』って言つて…。今思えば、それは私に対する氣遣いだったと思う。やっぱり遠くに住む場所を変えるのって環境も変わるから大変だつていうし。でもね、私、その時ね、彼の氣遣いに氣づかなくて、なんだか遠ざけられたような氣持ちになつちやつて、『そんなに私といるのが嫌なの?』って怒つて、勢いで部屋を飛び出ちゃつたの」

まだ香乃の震えは続いている。
それが寒さのためかそれ以外かは、誰も知らない。

「私が怒つた時の、彼の顔、はつきり覚えてる。すごく悲しい目をしてた。彼を信じているなら、彼の決めたことを受け入れてあげべきだったのかもしれないね…」

自らを抱きしめている香乃の腕に力が入る。

「本当はそんなこと言いたくなんかなかった。怒りたくなんかなかった。彼と一緒にいられればそれで良かったのに…。でも…もう…」

そこまで話して、香乃は膝に顔を埋めた。すすり泣く声がかぐもってイズに聞こえる。

「もう彼のところには帰りたくないって思つてた。私から戻るのは

きまりが悪い気もして、自分から戻ることはないって決めてた。でも、なんかこの世界に来てひどい目に遭うたびに、真っ先に彼の名前が思い浮かぶ。彼の顔が思いつくの。そしたら、なんであんなこと言っただろうって思っ、なんで飛び出てきちゃったんだろうって、それしか思えなくて……もう……やだあ……！」

香乃はぼろぼろと涙をこぼした。

こんな時、何を言えたいのだろう。

イズには地球人の恋愛観など分かるはずもなかった。それでもイズは必死で考えた。香乃に何かを言えたいのは分かっている。でも、何を言えたいのかが分からない。何を言えば香乃が喜ぶのかが分からない。何を言えば香乃がなくなるのかが分からない。

分からない。わからない。ワカラナイ。

どんなに考えてもイズには言葉が導き出せなかった。こんなに考えているのに、こんなに香乃は悲しそうなのに、何もできずにただ見ているだけの自分が腹立たしかった。

悲しそうな顔。こぼれる涙。あふれる声。

そんな様子を見て、イズは一つだけ理解できた。

香乃は今、すごく後悔しているっていうこと。

そして、イズは思った。友達から痛烈な真実を聞いたあの日の自分は、きつとこんな姿だったのだろうと。

香乃はずっと泣き続けている。イズもまた、いい言葉が思いつかないでいる。

しかし、イズは少しだけ違った。

香乃に何と言えたいのかは分からない。気持ちだって充分に分かっているわけでもない。それでも、イズは今の香乃に“何か”をしたいと思った。あの日のイズはこの時に他者のとの関係を断った

ことで、自信を持ってない他者嫌いで自分嫌いのイズが出来上がってしまった。このままだと、香乃まで同じ道を歩むことになるかもしれない。

でも、今の香乃ならまだ間に合う。イズが“何か”をすることで、イズのようになることを避けられる。

“何か”とは何か。イズはまだ分からない。どんな言葉をかければいいのか、いまだに思いつかない。

だが、自分にできることはそれだけではない。今の自分にできること。イズはそれに懸けることにした。

イズはその巨体をゆっくりと動かして、香乃の傍に歩み寄った。

一歩一歩近づくのさえ、なぜか緊張した。

口の中がどうしても乾いてくる。

本当は怖い。

失敗したらどうしようって、香乃に嫌がられたらどうしようって、何度も何度も後ろ向きな予想が思いつく。

しかしイズは近づいた。

たった一つだけ思いついた、今のイズにできる、イズなりの“何か”をするために。

イズは香乃の隣に行くと、その大きな手で香乃を持ち上げた。イズにとっては香乃の体は掴むのに難しくなかった。いきなり掴み上げられた香乃は一気に困惑した。

「ちょっと…えっ？ええっ！？」

慌てふためく香乃は、訳が分からないので訳を持っているはずのイズに問い詰めた。

「ちょっと、イズ！何するのよ！」

涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔を隠したくても両腕ごと掴まれて身動きができない香乃は、絞り出したような声で言った。

それに対してイズは表情を変えずに、無言のまま香乃を自分の背中に下ろした。

あっさりと拘束が解け、ついでに今いるポジションの意味が理解不能の香乃は、やっぱりもう一度訳を聞くためにイズに訊いた。

「ねえ、どうしたの？何か言つてよ…」

さっきまで泣いていたせいか、香乃のいつもの勢いが続かない。イズにはそれが不安がっているように聞こえた。

「空、見に行こう」

「え？」

「今度はちゃんと僕が案内するから。カノに、もつとこの世界を見てもらいたいんだ。…気分転換も兼ねてさ」

たぶん訳を説明された香乃は、一瞬呆気にとられてしまった。

いきなり掴み上げるといふ非常識なことをされた放ใจ感。極端に消極的なイズが自分から起こした行動。さっきまで泣いていた自分に対する、どこかそぐわないような提案。

考えれば考えるほどおかしい点が思いつくイズの言動だが、おかしいだけではなかった。

イズの少し強ばった声色に、彼なりの思いやりを感じた。不器用な彼なりにしてくれようとしている、香乃のためにしようとしてくれている思いやりを感じた。

泣き崩れてしまっていた自分のために動こうとしているイズに、

香乃は嬉しさと感謝の気持ちでいっぱいになった。

「あー、あのさ、私ついさっき外で凍えてきたんだけども？」

「大丈夫。この辺りの風は地形と気候のせいなんだ。これくらいだつたらずつと昔からこのままだよ。もっと強い日もあるし」

「いや、そうじゃなくてね、私は寒さで凍えそうなのを心配しててね？」

「風向きには気をつけるから大丈夫。追い風に乗って飛べば、そんなに風を感じないはずだから」

「そーじゃなくてね？単なる気温について心配しているんですよね、私は」

「…大丈夫、大丈夫」

「いやー、そんなにダイジョウブを連発したら余計に不安になるからね？あと一瞬迷ったでしょ？」

香乃とイズは離陸前に妙なやりとりを行い、香乃が観念して事なきを得た。

「いい？しつかり掴まってね。カノの力なら首にしがみつかれても平気だから。あと翼には触れないように。怪我しちゃうから」

「うん。じゃあ、よろしく」

香乃は頷き、イズの肩あたりにある凹凸に上手くしがみつく。

イズは飛び立つ前に、自分の翼を軽く動かしてほぐしている。

イズにとって、空を飛ぶのは久し振りだった。食事は部屋にいてもかろうじて摂取できたので飛ぶ必要がなかった。そのため、上手く飛べるか、それどころか飛び立てるかどうかも不安を消しきれなかった。

もし飛べなかったら、香乃に何と言えればいいだろう。香乃はどんな気持ちになってしまふのだろう。

傷つくだろうか。涙を流すだろうか。

否定的に走る思考を、イズは自ら振り払った。

できるかどうかではない。やるんだ。昔はあんなに飛べたではないか。思い出せ。感覚を思い出せ。自力で飛べることを喜ぶあの頃の気持ちを思い出せ。友達の顔が思い浮かぶ。友達が羨望と嫉妬と優越の感情を込めて、イズを睨みつけている。イズは彼ほど出来が良くない。彼のようににはできない。何をやっても上手くいかない。だが飛ぶことはできる！これしかできなくなったけど、友達よりも先にできるようになったことを見せてやる！後ろめたい気持ちになったイズだが、挫けそうになった気持ちを立ち上がらせた。

イズは翼を一度大きく羽ばたかせた。

「行くよ、カノ」

「いいよ、イズ」

イズは一度体を縮ませ、両足に力を込めて真上に跳躍する。同時に空気を掴むように全力で翼を動かす。途端、体が一瞬だけ浮いたような感覚になる。力強く羽ばたいたことによって大量の空気が振り下ろされ、イズの部屋に突風が吹き荒れた。カノは振り落とされないようにしっかりイズに掴まった。イズは何度も両翼を動かし、浮力を生み出し続ける。体を温めてくれていた焚き火が小さくなっ

ていく。

一人の人間を乗せた一頭の天竜は、幾千もの星を持つ夜空へと翔
ていった。

バスならぬドラゴンガイド

体を襲った浮遊感が少しずつ薄らいでいく。

上下への揺れは続いているが、地面に引き寄せられるような重力感や足下が心なしに安心できない状態から脱したようだ。

「カノ、大丈夫？」

イズに気につけられた香乃は、自分がいつの間にか目を瞑ってしまっていたことに気づいた。

だってそうだろう。あれだけの強風に晒された経験をしたのに、目を開けているなんて無謀なことできるわけがない。それに、一気に急上昇されたから振り落とされないように掴まろうとして、腕に力を込めたのだ。香乃にとってはすでに腕が少し痺れている。

香乃は恐る恐る目を開けた。

「わあ……」

はじめに視界に入ってきたのは、遙か彼方に霞む地平線だった。

夜の時刻のために薄ぼんやりとしているが、空と地上との境目をなくすほどではない。それどころか、夜は夜として、地上は地上として、それぞれ固有する暗い色がはっきりしており、見回せばどこまでも続く天地の境が世界の大きさを感じさせた。

イズの住むこの世界がどういう世界なのかは知らない。どんな見たことのないものがあるのかや、地球と同じものはあるのかなど、香乃には知らないことが多すぎる。

しかし、香乃は目の前に広がる広大な世界の景色を眺めて、素直

に綺麗だと思った。夜の暗さによって曖昧化されているが、細かく見れば夜こそその明かりによって生み出される暗闇のコントラストが美しさを引き出している。昼間であればまた違う景色に変わるのだから、それはまたどれだけ異なる美しさなのだろうか。

「きれい……」

香乃はあまりの壮大な風景を前に嘆息を漏らした。

イズに空へ連れて行くと言われた時、最初に思ったのは『空を飛べる』ことへの感動とはどういうものか』というものだった。

人はよく、空を自由に飛び回れる鳥を羨ましく思うことがある。飛べる鳥に憧れて、人間は科学を発展させ、空を飛べる術を発明した。

香乃が生まれた時にはすでにジャンボジェット機などの巨大な鉄の塊が飛べる時代になっており、香乃自身もすでに飛行機の搭乗経験がある。生まれて初めて飛行機に乗った時は未知への期待から来るドキドキ感や離陸時に感じた重力感にびつくりしたりして、恥ずかしながらも興奮したものだ。

その時に感じたのは、あくまで『飛行機に乗った感動』であり、『初めて空を飛んだ感動』ではなかった。

今、香乃は生まれて初めて空を飛んだ。

もちろん自力ではない。イズに背中を貸してもらっている。

しかし、香乃は現に空を飛んでいる。飛行機という安全な箱に入った状態ではなく、自分の体全体で風を受けながら空の中を翔ている。その事実を受け止めていくほど、香乃は感動が募っていった。

そして、目の前に広がっている大きすぎる景色。あまりの大きさに、この世界全体を眺めることができているのではないかと錯覚しそつなくらい、雄大な景色。

生身の状態で空へ赴かなければ見るできない絶景に、香乃は言葉を失っていた。

「カノ、鳥目だから暗いと見えないって言っただけ？」

イズの問いに香乃は我に返り、少々慌てた様子で返事をした。こんなタイミングで痛いところをクリアパスなんてひどい。

あれを嘘だというのは処世術としてどうかと思い、香乃は嘘を突き通すことにした。

「あーあれね！こんなにきれいな景色を見たら治っちゃったよ！ほんとにもう困っちゃうよね！あっはっはっは！」

我ながら苦しいと思いながらも香乃は必死で嘘を続けた。

「…それならいいんだけど。ところで、風は少なくするようにしているけど、寒くない？」

なんとか納得してくれたイズの鋭いんだか鈍いんだかよく分からない勘に感謝した。

「う、うん！だいじょうぶだよ。ありがとう」

イズが風向きを考えて飛んでくれているせいか、イズの言う通り建物の近くだけが本当に強風で荒れていたのか、今はそよかせ程度しか感じない。

返事を返すが、香乃はまだ景色に見取れていた。

世界は違えど、これだけ心を打った。空を飛べる者はこんな偉大なものに身近に寄り添うことができると思うと、香乃はイズたち天竜族が羨ましくなった。

「いいね、イズは。こんなにきれいな景色をいつでも見られるんだね」

香乃の正直な感想を聞いて、イズは表情を曇らせた。

本当は、空を飛んだのは久し振りだった。羽ばたく感覚を忘れてしまっていたほど前に見たきりだが、イズはそれほど美しいとは思わなかった。

イズにとって空を飛ぶことは苦痛以外の何物でもなかった。イズが飛べるようになったことで大切な友達を傷つけ、結果としてイズも傷ついた。そこにいい思い出などない。

香乃を連れてきて良かったとは思う。悲しい顔をしていた香乃は、今は楽しんでくれているようだからイズにとっては嬉しかった。しかし、同時に嫌な思い出と隣り合わせでいることが頭から離れなかった。

「…そんなことない。天竜族は飛べるのが当たり前だから」

嫌な気持ちが思考まで及び、イズは後ろ向きな返事をしてしまった。

イズは空を飛ぶことに対して言い、香乃は空からの景色に触れる頻度に対して捉えた。

あまりに多くを喋ると余計なことまで言ってしまいそうで、香乃にいらぬ心配をかけないようにしたかった。今はただ景色を楽しんでほしい。そのためには自分のことなど置いておけるようにと気を遣ったが、かえってとてもいい加減なことを言ったとイズは思った。

香乃はそんなイズの心境などいざ知らず、再び正直に言った。

「イズたちには当たり前のようなものかもしれないけど、やっぱり

いいと思うよ。だって、私からすればこんなにもすごいって思えるんだもん」

「そう、なの…かな…」

香乃の真っ直ぐな気持ちに、イズは戸惑った。香乃は景色について言っているのだろうが、イズには空を飛ぶことについて言われたように聞こえた。

香乃にはイズが何を考えているのか分からないだろう。

イズも、香乃が何を考えているのか分からないだろう。

両者とも互いに十分な理解を示すまでには至っていない。互いに知らないことが多い。

だが、イズが香乃にしてあげたことが今の香乃を喜ばせている。

イズにだけ嬉しそうな笑顔を見せてくれている。

それを見ていると、香乃の温かい気持ちがイズにも伝わってくるような気がして、どこか慣れないむずかゆさを感じた。

「星空、きれいだねー…」

香乃が独り言のような感想を漏らす。

香乃は風ではためく髪を片手で押さえながら、頭上を覆い尽くす夜空を見上げていた。

一面黒に染まる夜空だが、控えめに光る星々が至る所に見える。

「星の場所は、ちょっと違うのかな？知ってる星座は見当たらないけど、なんだか見やすい星空だね」

「…よく分からないけど、そうなんだ？」

「そうだよ。…あ、星座っていうのはね、私の世界じゃ星の並び方を動物や物に例えた覚え方なの。琴座とか白鳥座っていうのがあってね、それを使って占いをしたりするんだ。昔はそれを見て方角を確認するのに役立てたりしたみたいよ」

「…僕の世界には、そういうのはないかな」

「あははっ、文化が違うからかな。それともイズたちはみんな方向音痴じゃないのかも。あ、そういえば月はないんだね。何か物足りないなーって思ってたんだ」

「…ツキ？何それ？」

「うん、私もきちんとは知らないから詳しい説明はできないけど、この惑星の周りを回ってるちっちゃい惑星みたいなもの…かな？」

「…なんでそんな物が周りを回ってるの？」

「うーん…やっぱよく知らないから答えられないな」

「じゃあ、そんな物がどうしてずっと回り続けられるの？ぶつかったり、どこかへ行ったりしないの？」

「なんだっけなー、テレビで…あ、情報を伝えてくれる物ね。それで聞いたただだからよく分かってないんだけど、月が離れようとすると力と地球が引っ張る力が合ってるから…とかなんとか言ってたよ。うな気もしないでもなきにしもあらず…」

「…航行速度と引力が均衡しているってこと？」

「えーっと…たぶん合ってるかなー？…たぶん」

「それだと、カノの星が恒星を公転してるのならツキの公転軌道は正確な円を描かないよね？それでも離脱や衝突がないの？」

「…えっ、何？今の日本語？」

取り留めのないつもりで会話のいつの間にか専門用語で質問される展開になっていて香乃は焦った。なんていうか、無意識だとか何とか言っていたけど理解が早すぎる。

香乃は適当に誤魔化し、イズに煮え切らない思いをさせながら視線を下に移した。

イズの背中から少しだけ身を乗り出し、下の景色が見えるようにする。イズから転落してしまっただけは命の保障がしかねないので、両手はしっかりとイズを掴んでいる。力を込めながら下を覗くこの絶妙な力加減が難しい。

地平線より視線をやや下げると、大地がどこにも覗かないほど厚い雲が一面を覆っていた。夜でも白く見えるほど濃密なそれは、一体どうして大地を覆っているのか香乃には理由が思いつかなかった。

他に何かないかと視線をさまよわせると、雲から突き出るほどに高く聳える山々の上に、建物のようなものと明かりがたくさん見えた。

「あれがイズの国？」

「…うん、そうみたい」

「みたい…って、上からあんまり見たことないの？」

「…それは……新しい建物が建ったりするし、少しずつ変わっていくから…」

「あ、それもそっか」

空を飛ばなくなつてあまりにも時間が過ぎていたため、自分の国がどんな形をしているのか忘れていた、とはイズは言えなかった。歯切れの悪い答えだったが、香乃は大して気にしなかった。

「でも、けっこう大きな国だったのね。山の上なのにけっこう明かりがあるし」

「この辺りは標高の高い山脈が長く続いているから、先祖はこの辺りに腰を据えたらしい。いつからなのか正確には知らないけど、かなり以前から、国として成り立っているんだって、小さい時に聞いたことがある」

「へえ、そうなんだ…。けっこう長いのね」

イズの説明を聞いて、香乃は改まった気持ちでもう一度町並みを眺めた。

「…今さらだけどさ、ここってすんごく高いんだね…」

「ちょっと、飛びすぎたかな…。怖い？」

「う、ううん。平気だよ。駄目だったらとっくに気絶してるだろうから」

香乃は片手だけぶんぶん振って否定した。

とはいっても、高さに落ちたら本当に一巻の終わりだ。香乃は自分が高所恐怖症でなくて本当に良かったと思いつつ、イズを掴む手に力を込め直した。

「ところで気になったんだけど、あの曇ってどうしてあんなに濃い……」

眼下の光景について質問しようとした時、体がかくんと下がった。不意に体の高さが下がったような感覚だ。

びっくりした香乃は眩暈か何かが起きたのかと思ったが、どうやら自分は健康体のようなだった。

それならば一体なんだろうと原因を探っていると、イズからやや乱れた呼吸音が聞こえてくるのに気づいた。

「…………ふう…………はぁ…………はぁ…………ん……」

聞けば聞くほどイズの呼吸は荒れていた。肩で息をしているようだし、口の中に溜まった唾を飲み込むのもつらそうだった。そういえば、羽ばたき方も始めの頃よりずっと力が入っていないようにも見えてくる。

「イズ、どうしたの？大丈夫？」

「だ、大丈夫……ちょっと、疲れて、きた、ただ、から……」

香乃は心配になって声をかけてみたが、イズからの返事は絶え絶えの息と共に返された。

そういえば、と香乃はテレビで聞いただけの知識を思い出す。

鳥などの空を飛ぶ動物は飛行すると予想以上に体力を消耗する。渡り鳥などの長距離飛行をする鳥に至っては、長い飛行を遂げると体が痩せ細ってしまうという。飛ぶ際に体に負荷がかからないよう、飛びながらフンをして体を少しでも軽くしているのだとも言っていた。庭のマイカー汚しにはそんな事情があったのだと印象を改めたものだ。

飛びたての時はすんなり離陸できていたので安心しきっていたが、その安心感が一気に不安感に変わった。イズの体は大きいから、香乃には想像できないくらい体力を使うのではないか。そこに自分まで乗ることは余計に負担なのではないかと香乃は思った。

「い、いや！思いつきり大丈夫に見えないから！私そんなに重かった？」

香乃は自分が原因のように思っているようだが、イズとしては違う理由があった。

イズにとっては、飛び方を忘れてしまうほど飛行自体が久し振りであった。それまではずっと外出などしなかったため、すっかり身体が運動不足になっていた。運動をしなくなったせいで、気づかぬうちに体力が激減してしまったようだ。

また、久し振りだから、決して落下するまいと肩に力が入っていたのもある。香乃に負担にならないよう気を回したというのも。

確かに、誰かを背中に乗せて飛行することが初体験でもあるためというのも否定できないのであるが。

理由はあるものの、それを素直に言うことはイズには阻まれた。事実とはいえ、自分の内情や心情をさらけ出すことはまだ拒否感があった。

「そうじゃ、ない…。僕は、飛ぶのが、下手だし、あんまり、誰かを乗せたり、したこと、なくて…」

…それは暗に香乃が重いと言っているのではないだろうか。
気を遣ってくれているのはさすがに分かるが、それだけ飛ぶのに重かったと解釈できそうだ。

時々挫折したダイエツトの結果がこんなところで影響するとは香乃は思いもよらなかった。

相互に気遣いから生じる誤解に気づかないまま、香乃は口元がひくひくと引きつるのを必死で堪えながら、提案した。

「ねえ、休憩がてら、雲の下に行ってみない？」

香乃はついでに自分の欲望を織り交ぜた。

その提案を聞いて、イズはかなり迷う。

「…だ、駄目だよ。雲の下には、行っではいけないって、小さい頃、言われたことが、あるんだ」

「どうして？」

「…知らない。そう、言われただけ、だから…」

「んー…じゃあ、なんでダメなのか確かめに行こうよ。イズだってこのまま飛べるわけじゃないんだし、ちょうどいいんじゃない？」

「…部屋に、戻るっていうのは、ないの？」

「いやー、それだとなんないかなーって…」

「なにそれ…」

香乃が苦笑する様子を見て、イズは呆れた。
だが、このまま引くほど香乃は甘くはない。

「大丈夫。山があるならきつと陸地があるはずだよ。何もなければいいし、ひとまず休める場所へ行かなきゃ」

香乃の説得を受けたイズは、やはり承諾できなかった。

幼少の頃に言われた忠告には何か理由があるのだと思っ
ているからだ。大して理由がなければ、飛べない頃から言いつけられること
なんてない。そこには足を踏み入れてはいけない何かがあるのだと
考えられる。

イズ個人としては、気になるところではある。何があるのか自分
の目で確かめたいというのはある。

同族の中には理由を知るものもいるのだろう。しかし交流を絶つ
ているイズに關係する話が耳に入ることにはなかった。

どうして近寄ってはいけないのか。

飛行が可能な今の自分なら、雲の下へ行くだけなら容易だろう。
久し振りに空を飛ぶことができ、せっかくだから見に行ってみたい、
という考えも煩悩を過ぎる。

だが、今は香乃がいる。

雲の下には、行ってはいけない未知が存在している。その“未知”
に危険が含まれているのなら、香乃を連れて行くわけにはいけな
い。万が一命の危険に晒される可能性だって完全に否定しきれない
のだ。

イズは、やはり反対の意志を持つことにした。

「やっぱり、駄目、だよ。何かがあるか、分からないんだ」

イズの意志を聞いた香乃は、やれやれといった感じで肩を竦めた。

「…もう、サービス精神が分かってないなあ」

「…さーびす、せいしんって、何？」

「お客さんに対して献身的になろうとする心構えよ。もう少し広く捉えれば、身近な人への気遣いみたいなものかな」

「それが、カノの世界の、常識？」

「国や文化によって違うけど、私がいたところだと当然のことかな」

香乃が多少誇張して説明すると、イズが溜め息をついた。

「…カノの、世界の常識を、こっちでも通じると、思われても、困るよ。それに、今の…さーびすせいしん、っていうやつ？それは、献身する側が、心掛けることであって、してもらう側が、押しつけるものじゃ、ないと思う」

ちよつと冗談のつもりで戯けてみただけなのに、香乃は呼吸が乱れっぱなしのイズにモラルっぽいものを説教されたような気分になった。

そう来るならばと、香乃は負けじとイズの考えに反対しに向かった。

「じゃあ私も言わせてもらっけどさ。さっきのイズの理由、まるで誰かに言われたからダメ”ってふうに聞こえたよ?”」

「…だつたら、何?”」

「あのね、それじゃイズはただの言いなりってことじゃん。誰かに言われただけなんでしょ?理由とか何にも教えてもらってないんでしょ?だつたら、そんなの無いみたいなんじゃん。それにね、自分が取る行動くらい自分で決めなきゃ。誰かに言われたからって理由を並べてたら、これから生きてくのになんか損するよ?”」

「なんだか熱血野郎みたいなのを言っているなあ、と香乃は思った。」

だが、さっきのイズの決め方は、なんとなく気に入らなかった。自分の気持ちの入っていない決定なんて、自分のためになんかない。仕事とかならやむを得ないこともあるが、私生活の時はきちんとしておかないといけないと香乃は思っている。

「…」

強い口調で説得されたイズは、口を噤んでしまった。

何の返事も言わず、ますます荒れている呼吸音だけが聞こえてくる。香乃の視界の両端で忙しく羽ばたく翼が淡々と往復を繰り返している。

少し強く言いすぎたかな、と香乃は心配になった。

言葉は選んだつもりだった。なるべく責める意味合いを持つ表現は避けたつもりなのだが、イズにとっては傷ついたのかもしれない。

今までの会話の中で、香乃が何気ない一言を言ったあとにイズの

テンションが下がることに気づいてはいた。

ただ、イズがどんな事情を抱えているのか知らないし、どの部分にイズが反応したのかも分からない。イズが話してくれることを実は期待しているのだが、一向に話す気配がない。

まだ信用してくれていないのかと寂しくなるが、香乃はそれについて自分から訊くことはないと決めていた。そういうものは他者の意志によって掘り下げるものではない。

イズが話してくれるまで、そう香乃は決めている。

香乃が心配の面持ちでイズの様子を窺っていると、イズが大きな深呼吸をした。

「分かったよ。雲の下に、降りてみよう」

イズは香乃の提案を受け入れる意思を表した。

一時はイズを二度も傷つけたことを気にしていた香乃だったが、イズの賛同の意思表明を聞くとロケット花火の勢いで上機嫌になった。

「ほんとにつ？ほんとに行ってくれるの？」

「降りる場所は、山脈の付近、だからね。探険なんて、もつてのほか。あと、僕がまた、飛べるようになったら、すぐに帰るよ」

「う……。ま、まあいいでしょ。それで飲むよ」

イズの交換条件を香乃は受け入れた。

行き先を決めた香乃とイズは、天竜の国からあまり離れない位置から降下することにした。

高度を少しずつ下げていく。あくまでもゆっくりと、ゆっくりと。天竜の国にある一番高い建物と同じ高さまで降りてきた。イズは親の目を盗んで忍び込む子供のように挙動不審になりながらも、確実に高度を下げていった。

やがて天竜の国よりも低い位置まで到着した。

すぐ下には分厚い雲が下界への眺めを阻んでいる。近くまで来れば少しは見えるかなと考えていた香乃だが、それが甘かったことを知った。本当に何一つ見えない。

手を伸ばせば届きそうな位置で、イズは今一度確認した。

「準備はいい？」

「うん、いつでもどうぞ」

香乃ははつきりとした態度で返事をした。

それを確かめたイズは、さっきのよりも落ち着いた深呼吸で息を整えた。

雲の下。

到達を禁じられた世界。

その先に何かがあるのか二人とも知らない。

未開への出発に、不安と期待を胸に抱いて。

「行くよ」

香乃とイズは雲の中へと沈んでいった。

バスならぬドラゴンガイド（後書き）

●補足

月は惑星ではなく衛星ですので悪しからず。

月をはじめとした天文学分野について、私は半解です。一応調べた上で描写していますが、間違っていたらごめんなさい。遠慮なく指摘していただきたいです。

体験は一番の勉強

雲とは、大気中に存在する水蒸気が気圧や気温などの外的要因によつて膨張し、それら同土が凝結して微細な水滴状となつたものが群を成し、大気中に浮遊しているものである。

気体状ではあるが、水分であることには変わりはない。

つまり、触ると冷たい。

「さー――――ぶ――――い――――」

雲の中に、寒さで震える香乃の声が響いた。

少し前は風で凍えたが、今度は雲で凍える展開が待っているとは思わなかった。

雲自体はそこまで低温ではないのだが、水の常温は人体よりも低いのが常だ。温度は高いほうから低い方へ流れる性質がある。香乃の体温は雲よりも高いため、体温を奪われる立場になっている。

雲の中を進んでいる間に、香乃の着る服が雲の水分を吸っていた。つまり、今の香乃はまるで雨の中を傘も差さずに吹き曝しになっているようなものだった。

また、液体は気体へと蒸発する時に吸熱という現象を起こす。これは物質の状態が変化する際に触れている物の温度を下げる効果で、注射の前に消毒用アルコールを塗るとあとでひんやりするのが例に当たる。

水蒸気に触れるだけでなく、体に付着した水滴状の水分が吸熱を起こして相乗効果を生み、結果として香乃の体は冷え続けていた。

他に通り道など知らないので雲の中を強行突破する手順になったが、香乃はそれを思い切り後悔する。女性はあまり体を冷やしてはいけないというのに、これは堪える。

「いいいいいずず、まだままだまだつつ着かないのの…?」

がたがたと震えるながら、ぶるぶると震撼している口で絞り出すように香乃が言う。

一方で、高地なりの寒さに慣れているイズはいつもの調子で答えた。

「…分からない。僕も行ったことがないし、こればかりはちょっと…」

「じじじじゃあ、ももつとはや早くくく…!」

「そうしたいのも山々だけど、いつ陸地が見えてくるか分からない…っていうか陸地があるかどうかはまだ分からないから、様子を見ながら少しずつ降りないと」

自分たちの周りは全て雲であるため、視界のほとんどが暗灰色で占めている。香乃とイズとの距離ならまだ見えるので大丈夫だが、下手をすればそれすらもぼやけるほど雲が濃い。

「つつつつうううう…!」

できる限り迅速にこの状況から抜け出したい香乃だが、イズの安全重視な返事に変な唸り声を上げるしかできなかった。

いつもなら抗議するところだろうが、生憎と今の香乃は寒さで冷静さがこれっぽっちもない。早く体を温まりたいという自己防衛の本能しか働いていないため、まともに話すことすら困難だった。

イズは香乃から恨めしげな視線を感じるが、お願いだからそんな理不尽な視線を送らないでほしいと思う。

香乃にとってつらい状況に晒されていると考えたと、やはり雲の下に降りる判断を誤ったように思えて不安になる。

イズが香乃の提案を了承したのは、自分でも不可思議な理由だった。

いくら考えても、下層に行くのは心配の種が多すぎる。何があるか不明な以上、近づかないことが一番安全なのだ。

飛んでいるのはイズなので主導権はイズにあったはずだった。部屋に戻るうと思えば、香乃は否が応でもイズと共に戻らなければならない。決定権はずっとイズにあったのである。

しかし、香乃の言葉を聞いた時、イズの後ろめたい部分が扱われた。

自分のことを自分で決めるということ。

イズにとってそれは、今までの自分の在り方と敵対するものだった。

イズは自分が他者と関わることで相手との関係が粗悪になることが嫌になり、自ら外との接点を捨てた。イズが世間と疎遠になることが世間のためだと自分に言い聞かせた。これが周囲を思った自分なりの最良案であり、自分で選んだ道でもある。

だが、イズが望んでいたことか、というところ少し違う気がした。自ら孤独になったのは、あくまで他者を思つての採択である。そ

れしか思いつかなかったもので、結果的にそれを徹底していた。

他者は関係なかったら、自分は何を望んでいるのか。

香乃に言われて、ずっと悩んでいた。

自分はどうしたいのだろう…？

本当は何をしたいのか分らない。自分のことなのに、全然思いつかない。空っぽすぎる自分の心を今さら自覚したイズは、得体の知れない恐怖を覚えた。

何もしたくない。それが正直な気持ちではある。何かをすれば、また嫌な思いをするから。

でも、やっぱり何かが違う。

それは心のどこかで無意識に導かれる、いわば洗脳のような答えのような気がする。

何かをすれば悪いほうへしか転ばないから。自分が何かをしたいと思うだけで誰かを傷つけるような気がするから。

何かを望みたくてもできなくて、始めから望んでないみたいに自分を誤魔化して。

そしたら、いつの間にか何も望まなくなっていたんじゃないのか。何も望んでないことを周囲から求められていると思っていたんじゃないのか。

もしかしたら、自分でそう決めつけていただけかもしれない。

我が儘を言っているのなら。

誰にも迷惑をかけないのなら。

行ってみたい。

雲の下に何があるのか、見てみたい。

それが本心だった。

周囲の目を気にして押し込まれていた自分を、イズは表に出し

た。

自分のために何かをしよう。

他の誰でもない、ちっぽけな自分のために動いてみよう。

そう思い、イズは香乃の提案に乗ったのだった。

「ふええええええええ……さ、寒いー……！」

ただ、これでは決心が揺らいでも仕方がないんじゃないかと思う。今はあまりの寒さに、イズに力強く抱きつく形で温を取っている。別に苦しくはないが、首に力がこもっているのが分かる。

イズにとっては大したことのない風でも、香乃にとっては体調に影響するほどのものだった。ついさっきそれでつらい目に遭わせたというのに、自分の決断によって二度も香乃につらい思いをさせている。

本当にこれで良かったのかと迷う。

せめてつらい思いをするのが短く済むよう、イズはより警戒しながら降りる速度を気持ち速めた。

しばらく雲の中を下降していくと、視界を覆っていた色が薄れてきた。

暗灰色が徐々に取り除かれ、代わりに深い闇が覗いてくる。

そろそろかと思ったイズは、降下する速度を緩めた。

高度を下げるほど雲が薄まっていくので、イズは完全に雲から抜けきらない所で一度滞空した。

少し頑張って翼を羽ばたかせ、周りの薄くなった雲を一気に払う。すると、ぼやけていた視界が晴れ、下に広がる世界を一望できた。

目の前に広がっていたのは、どこまでも黒い影に染まった世界だ

った。

夜の時間帯ではあるが、雲の上にいた時とは違う暗さに覆われている。見上げて星の輝きはなく、代わりに暗灰色の雲がそれを阻んでいる。

光が遮られているため、イズの目にはほとんどが闇に覆われていてはつきりと眺めることができない。足の下を見ても遠くのほうを見渡しても、黒ばかりが目に入る。

「暗いねー。雲の上と全然違うね」

突然イズの背後から香乃が言った。

びっくりして肩が跳ねるが、そういえばいつの間にか香乃の震えはやんでいた。

急な出来事に鼓動を早めた蚤の心臓を落ち着かせながら、イズは訊いた。

「か、カノ、大丈夫なの？」

心配するイズに対して、香乃はけるつとした様子で答えた。

「うん。まだ少し肌寒いけど、こっちのほうが暖かいみたいだからさ、ちょっとじつとしてたらちょうど良くなったよ」

標高の高い場所と違い、地上付近では地中からの地熱と日中の日光によって温められている。また、雲がかかっている場合、まるで服を着ている時のように保温効果が生まれるため、地表面では気温が上がりやすい。

雲の上ではそれがないので、香乃をはじめとした人間にとっては寒く感じる場所だった。しかし、そこよりも比較的温かい場所に来たことで、香乃の体を温めることができたようだ。

イズは図らずとも良い方向に結果が流れたことに胸を撫で下ろした。あのまま香乃が寒がつていたら、自分の体力が戻らなくても無理矢理帰っていただろうから。

香乃の隊長は思うほど心配がないとして、今度はイズの身が心配だった。体力切れからしばらく経つがまだ休憩する目処が立っていないで、正直しんどい。

しかし、どこで休憩すればいいのだろうか。視界は暗く、下がどんなふうになっているのか視認できないでいる。着陸地点が決められないため、イズの体力はただただ奪われる一方だった。

早く着陸できる場所を見つけないと…！

イズは焦燥を募らせる。だが気をつけても暗い空間を見えるようになれるわけではない。見えるのは暗い闇でしかなく、何かあるのかも何かあるのかも確認できない状況が続く。一向に悪いほうにしか進んでいかない今の状況がさらにイズを焦らせる。

何か、せめて目印になる物が見つければ…！

「それにしてもすごい森だね。ずーっと向こうまで続いてるし」

香乃が言った。

香乃が感想を言った。

香乃が、風景を見た感想を、言った。

「…カノ」

「ん？なに？降りないの？」

「もしかして、見えるの…？」

「えっ？見えないの？」

香乃は答える代わりにイズに訊き返した。

イズは信じられないものを見たように驚き、香乃に問い詰めた。

「な、なんで…？こんなに暗いの…」

上手く言葉が出てこないせいで拙い訊き方になったが、香乃は逆に不思議そうな表情をした。

「だって、ずっと外にいるんだもん。暗い所にいれば目が慣れるでしょ？」

人間にとっての可視光線は幅が広いとは言えない。見えるのは光の三原色を基礎とした色彩のみであり、赤外線やエックス線を見ることはできない。

可視光線の範囲でも、明るすぎれば目を瞑ってしまうし、暗すぎでは何も見えなくなる。それでも可視の範囲であれば、人間の視界は順応性に優れている。明るい場所に行けば明順応が働き、ある程度の眩しさでも目を開けていられるようになる。暗い場所ならば暗順応が働き、ある程度の暗さならば色彩を判別できるようになる。

香乃にとっては当たり前のことなので、景色が見えていても何ら不思議ではなかった。

しかし、イズをはじめとした天竜族は明暗の順応性がそれほど高くはなかった。雲の上では星の明かりがあるのでその程度ならば適応しているが、これほどの暗闇はイズにとって初体験だった。また、昼行性であるだけでなく、暗くなる夜には火を燃やして照明を確保

できるため、過度の暗さに適応する必要がなかった。

「ごめん、僕には見えないんだ。その、暗すぎて…」

イズは内心、理不尽にもずるいと思った。香乃の様子から、特に意識してやっていることではないようだ。それでも、できる香乃とできない自分を比べてしまい、嫉妬の気持ちが生まれてしまう。

しかし、香乃にとって天竜族の理解力が理解できなさそうだったのはこんな気持ちだったからだろうかと思い、勝手に能力差を妬んだのを反省した。

一方、イズの申し訳なさそうな言い分を聞いて、香乃はちょっと笑ってしまった。

まだ出会って短いけれど、香乃は今までずっとイズができることを羨んでいた。

聞いた言葉を覚えられる。

高い理解力を持っている。

ある程度の寒さにも強い。

空を飛べる。

火を吐ける。

どれも香乃にはできない要素だ。

だから、イズができることを意識する度に、すごいと思うし、いいなとも思った。

自分よりもできることが多くて、どうしても劣等感が湧いた。情けないと自分を詰った時も、イズには秘密だが、本当はあった。

しかし、イズにもできないことがあると知ったら、もやもやとしていた気持ちが嘘みたいに晴れた。

自分よりも優れていると思っていたのに、ひょんなことから苦手なことを知った。

イズには悪いと思っっているが、奇妙なほど心が明るくなった気がした。

イズと自分は違う。

そんな簡単なことを、今さらながら本当に理解した。

…いや、人間とドラゴンという時点で根本的に違うんだけれども。

また、イズの性格がもう少し分かった気がした。

ネガティブに考えがちなのと他に、気にしなくてもいいようなことを大袈裟に気にする。それがイズの癖なのだと思った。

謝ることもないのに気が病んでしまいそうなほど真剣に悩む。

そんなひたむきな姿が、なんだか可愛く思えた。

「そんなこと気にしなくていいの。なんだったら道案内を請け負ってあげてもいいよ?」

香乃はイズの沈んだ雰囲気を少しでも軽くしてあげたくて、ちょっと戯けて言ってみた。さり気なく首をちょこんと傾けた拍子に、髪を濡らしていた水滴がイズの背中に落ちた。

香乃の軽い調子で言われたイズは、それに乗ることなく真剣な態度を保ったまま考えた。

「…じゃあ、降りられそうな場所、探してもらえる?」

ちよつとしたおふざけをスルーされて軽くブルーになりそうになった香乃だが、なんとか平常心を意識しまくってイズの低姿勢から来た頼み事を受理した。

Encroachment

目立つた明かりのない世界を、香乃とイズはゆつくりと滞空していた。

香乃は暗所で目の利かないイズの分も埋めるために、彼に地形の説明をした。

もちろん夜行性というわけではないので明瞭さに欠くのは否めない。しかし、少しでも手にできている情報を重宝し、イズと共有しておいたほうが良い。

香乃は判別できる範囲で、イズに話す。

「見た感じ、すごく広い森って感じかな。細かい所までは分からないけど、時々出っ張ってる山の周りを森が埋め尽くしてるみたい」

眼下に見える景色のほとんどは、逞しい枝葉を携えた森林で占めている。夜の暗さを受けて葉の深みが増し、圧倒的な存在感に反して喧噪とは無縁の静けさがある。

一見、写真で見たアマゾンの熱帯雨林を連想させたが、大自然の壮大さではなく未知の不気味さを感じる。

森の所々からは大小様々な山が隆起している。丘のように見える小さなものから、上空の雲を貫くほどの大きさを持つものまで。形も無論それぞれ異なる。

一番近くにある山は、さすがイズの国を建てられるだけあり、他の山を遙かに逸している。イズは山脈と言っていたが、近くから眺める今は頂上の見えない巨大な壁にしか見えない。

「この上に、イズたちの国があるんだよね？」

「…そう…だよ、ね…？」

イズも驚いていた。

幼い頃に自分の国を上空から見たことはあった。

しかし、その土俵となつていている山の全体像を見たことなんてあるわけがない。

目の前の山脈はこの場所に堂々と鎮座し、いかなる風が吹こうとも、どれほどの雨が降ろうとも、全く動かない。

普段の日常は、文字通りこんなに大きな山の上にあるということを実感し、感嘆せざるを得なかった。

いつからここで聳え立っているのかは知らない。どんな経過で山ができたのなんて興味はない。

この場所にこの大きさの山ができたから、イズの国はできた。

愛国心など持つておらず、理解もできないイズは、不思議な気持ちに苛まれていた。

この山さえなければ、自分はある嫌な体験をすることなんてなかったのかもしれない。もっとちゃんとした天竜として成長できていたかもしれない。

太古に遡ってまでぶつけたくなる逆恨みがあるのに、どうして…

こんなに尊敬したくなる気持ちになるのだろう。

自分の中から湧出する感情に理由がつけられない。

意味すらも分からないのに、振り払うこともできない。

イズは息切れしているにもかかわらず休憩するのも忘れて、目の前の山脈に見入っていた。

イズは疲労感を堪えて翼を羽ばたかせ、目的の場所へと飛ぶ。
香乃と相談して、なんとか降りられそうな場所へと向かっていた。

しばらくの間山の前で滞空し、香乃も声をかけづらくてそのまま
でいたのだが、あまりにも疲れてしまつて見るどころではなくなつ
た。体力的にも休憩の潮時だと考え、香乃に周辺を見てもらつて適
当な場所を探した。

最初は

「すぐ下の森に降りればいいじゃん」

と言う香乃の提案が挙がったが、周りの様子が見えなくなるから
心配だというイズの保守的な意見で却下された。

「すぐ近くの山の頂上へ行く」

とイズも提案したが、風が強そうですすがにこれ以上冷えるのは
ヤバイという香乃の意見が出たので、体調を心配してイズは引き下
がった。

イズの国のある山脈の、とある麓にちょうど降りられそうな空間
の空いた場所を見つけた。発見した香乃は鼻を高くしていたが、イ
ズは妙な不自然さを感じて取り下げ、他の場所を探した。その時に
香乃は納得できなくてイズのぽかぽかと叩いていたが、頬を膨らま
せながら渋々引き下がってくれた。

それから少しの間、香乃が不機嫌になってイズが何かいろいろと
気を回したのは余談。

しばらく探し回った末、香乃とイズは山脈から流れてくる川の近
くへ降りることにした。

周囲の様子を見るのに適しているとは言えないが、密林の中に身

を埋もれさせるよりは良い。

また、水分を摂れるという点が決定に背中を押した。イズは大丈夫だが、香乃は喉が渇き始めていたので水分補給をしなければならぬ。

なんとか今見つかるベストを厳選して、目的地へと急いでいた。

イズの体力がギリギリに差し掛かった時、目標の川へ到着した。山脈より流れ来るせせらぎが深い森を分断するように続いている。流れはとても穏やかで、不規則ながらも一定の流れが心地よい音を鳴らしている。

香乃とイズは川に面したところから森へと降りた。

初めてあの広大な森の中へ足を踏み入れたが、密林を構成している木を見て、香乃だけでなくイズも言葉を失った。

幾重にも折り重なっている枝葉の下は、意外なことに広い。木の一本一本がある程度の間隔を開けて生えているため、予想していたほどの閉鎖さは感じない。

しかし、その意外性がどうでもよくなるほどの驚異性が目の前にあった。

木が、あまりにも巨大だった。

高さは一体どれほどだろうか。香乃よりも体の大きいイズでさえ、てっぺんを見るのに大きく見上げなければならない。幹の太さは両腕を広げて抱えようとしても届くわけがなく、壁に張り付いているようにしか見えない。香乃の感覚では、一戸建てよりも太いんじゃない。

ないかと思った。

巨大という言葉が似合う幹から分岐する枝は、それすらも既に常識外れの大きさがある。香乃達とは距離があるはずなのに、普段見る街路樹よりも太く見えた。

枝の端から生える葉の大きさは、ここからでは確かめられない。しかし、大きさなど関係なく、夜空を隠しきってしまうほどの無数の葉はそれだけでも圧倒するに事足りた。

あまりの壮絶さに、香乃は上から下までまじまじと見回してしまふ（もちろん頂上など見えないのだが）。

不意に、気になる部分が目に入った。

場所は木の根本。この巨木を支える、まさに根本的な部分。

太い幹から分岐して土に潜るはずのそれは、幹からいくつかに分岐している。捻れるようにして伸びる箇所は、そこから根が始まるのだと分かる。

根は地面から派手に剥き出しており、根と根の間をくぐることもできそうだった。

その根の部分に、小さくて決定的な違和感があった。

根の部分から、枝が生え、葉が付いている。

香乃の常識だと、植物の根からは根毛という水分を吸収するための細い毛しか生えていないはずだ。だが、目の前の大木からは枝が生えている。

よくよく観察すれば、分岐した根は地面との境目に至ってから再び根が分裂している。これは、幹が太いからとか、この世界では普通だとかいう理由で済めばいいのだが、やはり常識的におかしい。最初の根の分岐から次の分岐までの感覚が、あまりにも不自然なのだ。

根の分岐の異様な間隔。捻れた根の伸び方。根から生える枝葉。巨大に生長した木の等身。森の中が予想より空洞化している状態。小さいがいくつも拳がる不自然さ。そこから導かれる答え。

（まさか…）

香乃は自分の推理した結論を疑った。
不自然を自然にする常識。
地球では決して有り得ない現象。

（木同士が、くっついてる…？）

植物は動物と同様に、通常は個体同士が融合することは有り得ない。外皮の細胞分裂が別個であることや、遺伝子が個体それぞれで異なるからだ。環境ホルモンや奇跡的な偶然により体の一部が結合している双子の新生児が誕生することがあるが、そのような症例は極めて稀である。ソメイヨシノなどの桜の木を代表として、個体数を増やすのに挿し木がよく採用されるが、遺伝子は同一でも二つの個体が一つになることはない。

だが、イズの世界の植物は“これ”が常識のようだ。
複数の樹木同志が集まり、螺旋状に捻れながら幹を一つに束ねることで、一本の巨大な大樹を形成する。

そんなのありか、と香乃は呆然としながら再度目の前の巨木を見上げた。

この木があつて、あの森あり。
香乃とイズは会話することも忘れて、未踏の地にある自分の住む

国との違いに息を飲んでいた。

「すごいね……」

「うん……」

しばらくの空白の後にようやく出た会話は、感動に支配され過ぎていたために短く終えた。

森の中に入ってから風を感じていない。川との境目まで行けば少しは吹いているだろうが、ほんの少し奥に入れば台風の目のように閑静になる。

おそらくこの森がそのような環境を作っているのだろう。しかし、見た目といい、もたらす影響といい、成長の仕方といい、一体どこまで自分達を驚かせれば気が済むのか。

「……んん……！」

香乃の体が震えた。思わず自分の体を抱きしめる。

何かがあったわけではない。単に体が冷えたことから起こるシバリングだった。

小さな声に反応したイズは、香乃を心配する。

「カノ、大丈夫？」

「うん、寒いのを思い出したただだから、心配しないで」

香乃は苦笑しながら答えた。

そう言うものの、両腕を摩って暖を取ろうとしている。

ずっと背中に乗せていたのでイズは見逃していたが、香乃の服や髪は湿っていた。雲の中を通った時に服が水分を吸ってしまったのだろう。水滴が垂れるほどではないが、濡れた服が張り付き、香乃の体のシルエットを浮き上がらせている。生地の薄いところは肌の色まで透けてしまっているので、殿方が見れば恥ずかしくて目を背けるか凝視するだろう。

香乃本人が気づけばすぐに隠すだろうが（すでに腕で隠している体勢ではある）、イズは人間という異種族のセクシーさなど理解していないので、結局のところ誰も気にしていない。

とても寒そうな様子に、イズには心配しないほうが無理だった。

だが、何をすればいいのか分からなくなった。

寒そうなのだから、温かくしてあげればいいことくらいは分かる。そこまで分かるのに、そこから次の段階…具体的に何をすればいいのかが思いつかなくなる。

こんな時に、火が吐ければ、と悔しくなる。同族ならできることが自分にはできない。それがこんなところで改めてイズを苛んだ。

香乃は何も言っていない。

どうして何も訊かないのだろう。

イズの部屋での中央で、温かい火が燃えていたのを知っているはずだ。あんなにも温かそうに当たっていたじゃないか。

どうして訊いてこないんだろう。

今なら素直に話せそうな気がするのに。

話し方は下手だろうけど、ちゃんと本当のことを話せるような気がするのに。

もしかして、とイズは勘繰る。

氣遣われているのだろうか。

自分がこんな体たらくだから、余計な気を遣わせているのかもしれない。

もしそうなら…。

僕はなんて駄目な奴なんだ…！

イズは図らずとも見上げていた視線を下げた。

その様子は、香乃の視界の端に映っていた。

「でも、イズにとっては内心ウハウハだったんじゃない？」

突然訊かれて、イズは曇った表情を慌てて持ち上げた。

「…なんで？」

「だって、イズたちは雲を食べるんでしょ？雲の中にいる間は食べ物に囲まれて天国気分だったんじゃないかなーって思っ」

そう言っ、香乃は笑う。

ただ、香乃は勘違いしている。イズはそれを諷めた。

「…僕たちが食料に充てているのは、あれじゃない。あれは、食べられなくはないんだけど違うんだ。香乃の世界にもあればいいんだけど、雑草とか海水とか、その類だよ」

「あれ？そうなんだ？」

確かに、それは食べられないけど食べたくはない。

よく知らなかったとは言え、香乃は変に決めつけていたことを少し反省した。

しかし、すぐにくろつと笑顔に変える。

「そっかー。てつきりイズには極楽なんだと思ってたよ」

深く考えてからの理由ではなかったことにイズは呆れて、小さく溜息を漏らした。

「…もう少し考えてよ。僕たちはカノが思っているほど粗食じゃないんだから」

「あははっ、ごめんごめん」

香乃は気にする様子もなく笑う。

「いやー、イズって見かけによらず食いしん坊なほうなのかなーとか思ってたんだけどな。天竜族も、食べ物があんなに近くにあっていいなーって思ってたし」

「それは偏見。僕たちはそんなのじゃない」

「…あれ、怒っちゃった？」

「怒ってない」

「怒ってるじゃん」

「怒ってないって言ってるだろ！」

イズは声を荒げた。

そして、すぐにはっとした。

自分らしくもなく大きな声を出してしまった失態。

何も考えずに感情を剥き出しにしてしまった恥。

感情のままに発言した軽率さ。

イズは自分自身に怒りと情けなさを感じた。

どうして香乃に怒ったりしたのか。彼女は何も悪くない。ただ普通に会話してただけじゃないか。

なのに、急に怒りを抑えられなくなった。

怒りたくなっただのは、香乃が天竜族に変な先入観を持っていたからだ。

別に自分だけが卑下されるのは構わない。自分でさえ天竜であることを嫌に思うことだって

何度もあったし、他の天竜族のことを忌み嫌ったことだってあった。イズ自身が同族のことを嫌おうと、どうせ誰にも届かないのだから一向に良かった。誰にも気にされないのだから、自分だけが我慢していればそれで済んでいた。

でも、香乃が天竜族を馬鹿にしたような気がして、我慢できなくなった。

今までいくらかでも我慢できていて、これから何があっても我慢できるといつ歪んだ自信がついていた。なのに、香乃という異世界の住人に自分を含めた天竜族全てを侮辱されたような気がして、気がつけば怒っていた。

こういう展開を自分で起こしておいて、このあとに起こる相手の変化が、イズにとってトラウマだった。

きっと、香乃はびっくりしたあと、すぐに悲しい顔をするだろう。

あの時だつてそうだ。

イズは、幼なじみの友達に感情のままにひどいことを言つて、そして傷つけた。

僕に言われたあとの、複雑な感情の末に現れたあの据わった表情を、イズは忘れることはできない。

誰も傷つけないように、誰にも傷つけられないように、今まで他者と距離を取っていたのに。

なんで、自分は…。

恐る恐る、イズは香乃に振り返った。

本当は見たくなんかない。

できれば逃げ出したい。

でも、逃げることにすら怖いのか、なけなしの責任感が生まれてくるのか、何かの理由でイズは香乃と顔を合わせなければならぬような気がした。

どんなことを言われても構わない。

でも、言われたあとに、どうすればいいのかは分からない。

中途半端な覚悟のまま、イズは香乃と向き合った。

「カノ、ノ…」

まずは謝るべきだ。

誰が悪いとか、何が悪いとか、そんな細かいところを考えている余裕なんかない。

謝らないと、香乃との仲が悪くなりそうな気がして、それだけは嫌だとイズは思った。

「カノ、その…」

「ごめん、と言おうとして、イズの手が香乃に握られた。

「っ!？」

突然で意味不明なことをされて、イズは体がビクついた。

「やっと、見せてくれたね」

よく分からない言葉をかけられて、イズは香乃を見る。

本当は見たくなくて、でもどうしても確かめたかった、香乃の様子。
子は。

怒っていると思っていたのに、目を細めて微笑んでいた。

慈愛に満ち、体の大きいイズが包まれてしまいそうな、柔らかい笑顔だった。

「初めてだよ。イズが怒ってるところを見るの。イズってば、全然本当のことを言わないんだもん」

香乃は握る手の力をほんの少しだけ強める。

「イズに会ってから、イズが言うことはずっと説明みたいなものなんだもん。自分のことをあまり言ってくれないから、イズの気持ちが分からなかったの」

手を離れた香乃は、イズとの距離を少し開いた。

「私がずっと質問ばかりしていたのが悪かったのかもしれないけどね。でも、イズは私のことを心配してくれるけど、それしか考えてくれてなく思えてさ。せっかくこんなに凄いものを見られたのに、

自分のために楽しまなきゃもつたいないよ」

香乃はおもむろに両手を広げて、その場でくるりと回った。

「そのためには、まずは自分に正直にならなきゃね。楽しかったら笑って、不安だったら悲しくなつてさ。さっきみたいに、ム力ついたら怒って全然いいんだよ」

香乃はイズの過去を知らない。

今までどんな生き方をしてきたのかも知らない。

だが、香乃が話す内容はイズの在り方に鋭く突き刺さった。

「でも、僕は…」

しかし、今さら誰かに言われたところで、生き方を変えることなんかできない。

イズは、香乃が元の世界に帰ったあとも、また孤独に帰るつもりだった。

自分でそう決めたことだ。変えるつもりもない。

それが、自分の力量を理解した上での、自分で決めた生き様だ。

「誰も傷つけたくないんだ…」

弱々しく本当の気持ちの一部を言った。

それを聞いた香乃はさらに嬉しくなつて、イズでさえも見入ってしまうほどのとびきりの笑顔で、言った。

「いいじゃん。傷つけたら仲直りすればいいんだもん。たとえば誰かとぶつかることがあつても、自分の本当の気持ちを出すことは間違つてなんかないんだよ」

イズは目を見開いた。

香乃が言ったことは、ただの説教だ。それ以外に何もないはずだ。自分があまりにも情けない態度だったから、矯正するために言っただけだ。

なのに…。

どうして言っただけだったことを言うことができる？

自分自身が他者との関係を断ちきりたくなつたのと、過去に冒した友への非礼を贖罪するために、イズは自分の在り方を内向的なものへ変えた。そういった方法でしか償い方が分からなかったからだ。それしかないと決めつけつけられたから、今までそうしてこれたのだ。

だが、香乃に言われて、思い出した。

本当はそれに納得していないのだということ。

本当は言えるものなら、もう一度友達に自分の気持ちを言いたいのだということ。

自分がしたことが間違いではないのなら、もう一度だけ友達と話したいのだということ。

そして、香乃もまた、自分で言った言葉に気づかされた。

本当の気持ちでぶつかる大切さ。

我が儘であっても、一番好きな人に本音を言うことがどれだけ大切なのか。

恋人とは、結局自分の気持ちだけを勝手に吐き出しただけでその

場所から立ち去ってしまった。

香乃は恋人の本音を聴いただろうか。

彼の取った行動の真意を聴こうとしただろうか。

そこまで考えて、香乃はようやく己の馬鹿さに気づいた。

恋人と分かり合うために必要なこと。

たとえ考えが異なるうとも、異なることを見せることで理解できること。

それを香乃は忘れていたのだ。

「私が恋人と喧嘩しちゃったっていうのは話したよね？それね、よく考えたら、相手の……彼の気持ちを聴こうとしなかったのが悪かったんだなって思ってるの。彼がどんな理由であんなことを言ったのか、予想はできても本当は分からないよ。でもね、まだ聴いてないんだ。また傷つくかもしれないけど、でもね、聴きたいの。彼の本当の気持ち」

香乃の言う“彼”とは、恋人なのか。それともイズのことなのか。途中からどちらとも取れるニュアンスになっているような気がして、イズは混乱した。

「嫌な気持ちになる予想から逃げちゃダメだと思って。だって、本音で話せば、傷つけ合うことはあっても、許し合うことだってできるんだから」

そう言って、香乃はにこりと笑顔を見せた。

言ってもいいのだろうか。
話しても大丈夫だろうか。

笑わずに聞いてくれるのだろうか。

自分の気持ちを分かってくれるのだろうか。

こんなに自分のことを話したいと思ったことは、イズにはかつて無かった。

本当に初めてだから、話していいのかどうか分からない。

ただ、この機会を逃したら、イズはこの先ずっと誰にも言わないような気がした。

こんなに開示的な気持ちになることなんてないと思った。

もし、理解されなくても、傷つくかもしれないけど。

香乃だけには話しておこう。

自分の本当の気持ちを話しておこう。

そう思っ、イズは香乃と向き合い、

香乃の背後に黒い影が現れてぎよつとした。

突然現れた“それ”は香乃を背後から抱き寄せるようにし、自由を奪った。

「えっ、わ！なにっ!？」

なんの前触れもなく後ろから抱きつかれた香乃はパニックになり、とにかく動かせる両足をばたつかせた。

「は、離して!」

必死に藻掻いて拘束から逃れようとするが、一向に弱まる気配がない。

香乃が襲われるのを目の前にしたイズは、呆然となって動けなくなっていた。

得体の知れない“それ”は全身真っ黒で、頭部と見られるところに二つの黄色い目が不気味に光っている。

知らぬ間に全身に恐怖が行き渡り、足が棒のように動かない。

「カ、カノ……！」

呻くように漏れた声はあまりに小さく、香乃の悲鳴に掻き消された。

「イズ！助けて！」

香乃が助けを求める。

自分の名前を呼ばれ、イズは我に返った。
何をしているんだ！香乃を助けるんだ！

イズは恐怖を必死で押さえ込んで、黒の“それ”に飛びかかるように翼に力を入れる。

羽ばたこうとした直前、翼に何かが乗っかってきた。何があったのかと振り返ろうとした瞬間、後頭部に重い衝撃が走る。

視界が一瞬白く染まり、再び暗く戻ると景色が歪んで見えた。
気分が悪くなる。

背中のにしかかった重みがさらに加わり、イズはその場に倒れ込んだ。

「イズー！」

香乃の悲痛な声が、夜の樹海に響いて消えた。

某日某所某者の報告

「なに？それは真か？」

突然の報告を受け、耳を疑った。

確認を返された報告者は、それを肯定する。

「左様です。警備の者から確かに見たと」

事実であると現実視した瞬間、眩暈で倒れそうになった。

報告されたのは吉報と凶報の両揃いだった。片方だけでも卒倒するくらいの出来事だというのに、よもや一度に来訪するなんて予想外もいいところだ。

事態は一刻を争う。

このまま野放しにしておいたらどの方向に流れていくか予測がつかなくなる。

混乱を避けられなかった頭をなんとか稼働させ、対策を出そうと隣に待機している補佐に意見を求める。

「さて、どうすればいいと思う？」

補佐は冷静さを忘れない者だった。まだ若く、補佐の役職に着任して間もないが、それを補い切るほどの秀才ぶりを発揮していた。博識で、頭も切れる。欠点をこじつけるならば経験が浅いということくらいだろうが、既に信用に足りる実績が認められる。

以前もこういった突然の事態にも、沈着した対応をしてくれた。

だから、今回も優れた妙案を考えてくれると信頼した。

しかし、すぐに帰ってくると思っていた返事はいくら待っても帰ってこなかった。

不思議に思い、補佐の様子を窺う。

補佐は、いつもの澄ました目ではなく、驚愕で見開いた目をしていた。

補佐は普段、仕事中に表情を変えることが滅多にない。毅然と佇み、年齢にそぐわないしつかりとした態度を確立させていた。

その、どんなことでも冷静さを崩さない補佐が、誰から見ても分かるほどに冷静さを欠いている。

「…ほ、本当に、真なのか!？」

補佐は動揺した様子で、報告者に再度聞いた。答えは同じに決まっているのに、本当にらしくないと思った。

沈黙が肯定を代弁する。

肩をわなわなと震わせながら、補佐はようやく事実を飲み込んだ。

そして、居ても立ってもいられないという雰囲気丸出しで部屋を飛び出そうとした。

慌てて制止する。

「待て!どこへ行く気だ!？」

補佐は返事をするのも急いで答える。

「奴を追跡します!」

答えるや否や、補佐は返しの言葉を待たずに部屋を飛び出ていった。

慌ただしく補佐が立ち去ったあとに、空っぽの風が小さく流れた。

「…全く、あいつのこととなるとすぐ頑固になっちゃうんだから」

隣を独断で留守にされ、小さく肩をすかす。

「仕方なかるう。長年懸念していた複数の事柄が、ここに来て一度に訪れたのだからな」

報告者ではなく、始めから目の前にいた者が言った。

来客である彼を招待しては談笑しながら大事な話を進めていた。双方の合意の基で良好な展開に話を進めることができていたのだが、その最中にこの重大事項が報告されたのだ。

彼の意見に、事情を知るものとしては頷かずにはいらなかった。

「確かに。しかも、よりによって今日だもんなあ…」

眉間に皺を寄せながら、後頭部をがしと掻き筆る。心配事が増えるというのは個人的に好きではない。もつとのんびり平和ボケしていたいと切に願う。

その様子を見ていた来客は、高齢の身であるにもかかわらず豪快に笑った。

「仕事が充実していて結構なことではないか。少なくとも、暇そうにはしていられまい」

あまりにも他人事のように言うので、恨めしげに睨みつけてやった。

「……ヤーバックよお、これはお前も無関係とは言えないんだからな？ そこんトコ分かってる？」

「重々承知しているとも。お主がこれからやろうとしていることも、な」

「それはどうも、ご理解いただきまして」

溜息をつきたくなって、客の前では失礼と思い、しかし我慢できなくて結局一つ漏らした。

ただ、全てが嫌になるような出来事ではない。むしろ、これは長年懸念してきたことを解決するための一過程に過ぎないのだろう。そう思うと、若人たちの軽率な行動が面白く思えてきて、自然と笑みがこぼれた。

「まあ、これくらい忙しそうでこそ若いモンらしいのかもな。そう思わないか？」

独り言で済ますのは寂しいので、ちょうど目の前で暇そうにしている報告者に振ってみた。

報告者は、ちよつと困ったそぶりを見せたあと、苦笑しながら「左様です」と答えた。

天の竜、地の猩（前書き）

今回は人によって残酷に感じられるシーンがあります。

表現は自重しているつもりですが、苦手な方は前ページへお戻りください。

せっかく読んだくださっているのに、申し訳なく存じます。

天の竜、地の猩

目の前でイズが殴り倒された。身動きすることも封じられ、ただだた一方的に打ち伏せられた。

目の前で起きた集団リンチに、香乃は彼の名を叫ぶ。

「イズ！イズー！」

なぜこんなことが起きているのか分からない。何がこんな待遇に繋がっているのかが分からない。

何か悪いことをしたのか、と香乃は自問する。香乃達はただ天竜の国から雲の下に下りて、広すぎる森の一角に入っただけだ。

香乃はこつちの世界の常識や禁則を知らない。善悪の分別を判断する知識があまりにも不足している。

しかし、今日の前で起きていることは「知らなかった」で済まないのだということを、本能的な恐怖とともに知った。

そして、香乃を捕縛し、イズを殴り倒した目の前のそれらは、自分達にとって味方でも親交的な関係でもないことは察した。

「全¥【 0 ▼ 「」

「 я ɛ ʌ、 — 0 Ж Ъ Ч Ц」

毛むくじやらのそれらは香乃の知らない言語で会話をしている。香乃がいくら叫んでも意に介している様子はない。いかにも興味を示さない風で、香乃がいくら叫んでもそれは彼らにとって獲物が無駄な抵抗と言わんばかりに喚き散らしているくらいにしか考えていないように思えた。

イズのような言語理解などできないため、抵抗どころか介入する余地もない。

こいつらは何だ。こいつらはどうするか。

そんな内容が聞こえてきそうだった。

はつきりと聞き取れたわけではない。毛むくじらのそれらは香乃の知っている言語を一切使っていない。

あくまでも予想でしかない。しかし、自分の正誤を区別する情報もない。

「かもしれない」という、万に一つの可能性は、自分の根拠もない予想を確かなものへ昇格させるのに充分だった。

自分で判断できないため、どんな予想でも正解に思えてくる。

何を話しているのか。

答えは今まさに自分の周りで飛び回っているのに、無知な自分はそれを掴み取ることができない。

知らない国へ放り込まれる恐怖を、香乃はここで思い知らされた。

毛むくじらのそれらは少しの間検討すると、そのうちの一人の合図によって動き始めた。

イズにのしかかっていた数名は、彼を運ぼうとしているのか、イズの下に潜り込もうとしている。

香乃は捕縛している毛むくじらにそのまま連行されるようだった。

「ちょっと、ねえ！待って！離してって言ってるでしょ！無視しないでよ！」

香乃は必死に抵抗した。なんとか手足を動かそうと、じたばたと

暴れる。だが、毛むくじゃらの力は強く、やっぱり緩む気配がない。毛むくじゃらの体格は、イズよりは小さいようだが、それでも香乃よりずっと高い。体格差に加えて単純な腕力でも適いそうにない。

このままではダメだ。何かで抵抗しないと。

そう思うが、身動きを封じられ、腕力で勝てそうもない相手に、今の香乃は全くの無力だった。

このまま相手の思い通りにされていく。

不条理な接遇に、香乃は唇を強く結んだ。

『ま、待て』

聞き慣れた声に、香乃ははっとなった。毛むくじゃらのそれらも同じように驚いている。

今からまさに運搬されようとしていたイズは、体を重たそうに起き上がる。

『…その人を、離せ…！』

香乃の知らない言葉で、イズは抵抗した。

イズが何を話しているのかは、香乃には相も変わらず理解できていない。

イズと毛むくじゃらとが会話できるのかという重要なことも分からない。

一つだけ確かなのは、香乃は今後の展開をイズに任せなければならないという歯痒い事実だ。

『ほっ、あれを食らって動けるのか』

毛むくじやらの一人が言った。周囲の反応からして、この一群のリーダー格らしい。

『お前達は何なのかは知らないけど、その人にだけは手を出すな……！』

イズが精一杯の力を込めて起き上がろうとする一方で、リーダー格の毛むくじやらへ話しかける毛むくじやらがいた。

『すみませんっ、力いっぱい殴ったつもりだったんですけど……』

毛むくじやらの一人が申し訳なさそうに言う。

『まさか、加減した、とは言うまいな？』

リーダー格は威圧するように尋ねた。

その様子に、訊かれた毛むくじやらはひどく焦って弁解する。

『そそそそんなことはありません！森羅万象に誓います！』

『ということは、奴がただの石頭だったというだけだ。気にするな』

香乃には理解できなくて幸いだったが、言葉が通じたイズにとっては挑発としか捉えられないことを言われた。

思考が朦朧としていてもその言葉はイズに届き、言い返そうとする。しかし、先にリーダー格の毛むくじやらが喋り、機会を逸してしまった。

『貴様、天竜の分際で我々の存在を知らぬと申すか』

予想外なことを尋ねられたイズは、朦朧とした思考がさらに混乱した。

香乃だけでなくイズも雲の下の世界に来るのは今回が初めてだ。もしかしたら、雲の下へ下りたのはイズ達が初めてなのかもしれない。

立ち入ることを禁じられていただけで予備知識も何も持っていないイズには、その質問に正答を返すことはできなかった。

『…そんなの…うう、気持ち悪い……知ってるわけ、ないだろ…！』

正直に答えたイズの返答に、毛むくじゃら達から不満の声が上がる。

至る所から罵声が飛んでくるので言い返そうかと思ったが、その前にリーダー格の毛むくじゃらが一喝し、静かになった。どういうつもりなのか、さっきからイズの発言権を奪っているようで不完全燃焼のような気持ちになる。

『我々の存在を知らんのは不愉快極まりないが、これから嫌でも知ることになるだろう。今のうちに、その矮小な脳味噌に刻み付けて置くがいい』

不意に、夜空が明るくなった。雲に隙間が開いたのか星の光が届き、毛むくじゃら達の全貌が明るみに出た。

わずかな星の光によって、暗闇からいくつもの姿が浮き上がる。いつからそうだったのか、香乃とイズは彼らに囲まれていた。

『我々は陸狸族^{りくじょうぞく}。太古より母なる大地の秩序と共に生きる高尚な種族だ』

香乃の世界でいえば、オランウータンに似ているだろうか。二足歩行で地に立ち、少し前傾した姿勢を保って佇んでいる。長い腕を持ち、その先端には五本に分かれた指がある。

オランウータンと違うのは、その体格だ。その身長はイズには及ばないものの、香乃よりはずっと大きい。捕縛されているとはいえ一応立っている香乃の頭が、毛むくじやらの胸か腹だと思われる高さにある。

手の平以外は黒くて濃い体毛に覆われており、肉体そのものを窺うことはできない。しかし、香乃に気づかれずに背後へ回ったことやイズに奇襲したことから、かなりの運動能力を有していることは推察できた。

首から上も体毛で覆われており、人間と同じような場所には山吹色に光る目が不気味に浮かんでいる。イズや香乃と違って、陸猩族は夜目が利くらしい。

『貴様等にはこれから人質となつてもらふ。無駄な抵抗はするな』

毛むくじやら改め、陸猩族のリーダー格は自己紹介を端的に済ませ、用件を冷やかに言った。

イズは陸猩族が言ったことに耳を疑った。

『人質、だつて……？なんで僕たちを捉える？』

『貴様等は知らんで良いことだ。直に自然と知るだろう』

イズの質問に陸猩族は答えず、曖昧な返答だけ投げて寄越した。用は済んだと言わんばかりに、リーダー格が大きな掛け声を上げる。

周囲を取り囲んでいた陸猩族が一斉に円の半径を狭めてきた。香

乃は捕縛役に肩で担がれると、そのまま森の奥へ連れて行かれる。

「ちょ、待っ！そんな！イズっ！」

叫んでも捕縛役が止まってくれるわけがない。香乃を抱えているというのに陸猩族の動きは速く、すぐにイズとの距離が離れてしまった。

視界の片隅で香乃がどこかへ連れて行かれるのをしっかりと捉えていたイズは、もう接近してきた陸猩族の群れから逃れるために飛び上がった。

数の圧倒を一時的に凌いで安心する。

胸を撫で下ろそうとした瞬間、頭上からわずかに枝葉同士が擦れる音がした。イズは目で確認する前に、危機回避の本能で滞空していた場所から離れる。一瞬遅れて、今さっきまでイズが滞空していた場所に陸猩族が急降下してきた。

数が多すぎる。

分が悪すぎる。

イズは回復しきっていない体力を奮い立たせ、全力で翼を羽ばたかせる。一刻の早くこの付近から離れたほうがいいと考えた。

目指す場所は香乃が連れて行かれた方向だ。

最後に聞こえた香乃の声がイズの鼓膜に蘇る。

自分の名を呼ぶ声。

助けを求める声。

自分に縋って出された心の叫び。

香乃の声が脳内を反芻することに、イズは香乃を助ける義務を無意識で己に課した。

森のほとんどは異常な大木で構成されているため、中は広い。体の大きなイズが飛行しても困難はなかった。

香乃が背中にはいない分、案じるのは自身だけでいい。文字通り荷がなくなったイズは幼少時代にも出したことのない速度で香乃のもとへ向かった。

できるだけ最短距離で飛びたいため、イズはほとんど直線に滑空する。

それは、追跡する側としては無難だが、追跡される側が取つてはならない行動だということを、イズはすぐに知ることになる。

一直線に進むイズは夜目が利かない目を必死に駆使して、香乃と連れ去った陸猩族を探した。

方向は合っているはず、と自分に言い聞かせて探していると、確信も混迷も抱く前にイズは目標を見つけた。

進行方向と同じく、イズの前方。

香乃を抱えた陸猩族が森の中を飛ぶように移動していた。

香乃は肩に抱えられているため、進行方向とは逆向きにされていた。ちょうどイズと向かうようになっていた。

「イズ！」

香乃が呼ぶ。

その表情は恐怖で強ばっており、掴めるなら藁でも掴みたいという気持ちが表れていた。

そんな香乃の様子を見て、イズは飛行速度を上げた。

これ以上あんな気持ちにさせてはいけない。
少しでも早く救出しなければいけない。
イズの中に義務を通り越した使命感が芽生えていた。

速度を上げたので陸猩族との距離が狭まっていく。前方からの障害物に気を配りながら、必死で後を追う。

もう少し、もうちょっと…。

陸猩族との距離はすでにイズの身長よりも少ない。

香乃の表情がはつきり見える距離まで来て、イズは手を伸ばした。香乃も手を伸ばす。

あともう少し。あともうちょっと…！

イズと香乃の手が届く、

寸前。

香乃を抱える陸猩族が急ブレーキをかけた。

「っ！？」

驚いたイズは最高まで上げていた速度を殺すことができず、バランスを崩した。

浮力の均衡が崩れて失速し、イズは立て直せないまま地面に突っ込む。

長く長く転がり、全身に生傷を作ったところでようやく止まった。

「っっ…」

「イズ！だいじょう…むぐっ！」

香乃の心配した声が聞こえたが、口を塞がれたのか途切れた。だが、それで充分だった。

イズは目で見える前に香乃の声が聞こえた方角へ再び飛翔する。地面を蹴った瞬間、イズの背中に強烈な衝撃が走る。

イズがその衝撃で地面に叩きつけられてしまった。

「くっ…！」

イズは腹這いになりながら、頭だけを上げる。何が起きたかを確かめるよりも、香乃がいるであろう方向を見上げた。

香乃の周りにはいつの間にかいくつもの陸狸族が集っていた。イズは直線に移動していたため、追跡する側としては安易に追うことができたようだ。

香乃は恐怖に加え、イズを見て悲しい顔付きになっている。

イズは全身の痛みを堪え、最後の力を振り絞って香乃のもとへ行こうと立ち上がる。しかし、進もうとした時に自分の周りを陸狸族が押さえつけようと寄ってきた。これでは飛ぶどころか歩くこともできない。

振り解こうとしても陸狸族は離れず、体力が徐々に奪われる。

身動きが取れなくなったイズはもどかしさでいっぱいになった。

自分がどうなろうと気にする者なんかいない。だから自分だけが冷遇されようと一向に構わない。

だが、香乃は違う。自分のような低劣な立場ではなく、この世界に来てくれた来客だ。こんなところで危険な目に遭うなんて許され

ない。

自分が雲の下へ降りることに賛成しなければこんなことにはならなかった。香乃にあんな悲しい思いをさせずに済んだ。

香乃を取り戻さないと、イズは自分が許せなかった。

そのためには今すぐにも飛びたいのに、陸猩族が抑止しているためにそれができない。

訳の分からない連中がいるために、香乃が危険な目に遭い、香乃を助けられない。

もどかしさから来る不満が、怒りに変換される。

『うわあああああああああ！』

振り解けないならと、イズは暴れるように藻掻いた。陸猩族がそれを止めようとするが、構わずがむしゃらに全身を動かす。陸猩族の力が強いとはいえ、決して適わないというわけではなかった。

まとわりつく陸猩族を少し振り落とし、自分が出せる最大限の声で叫ぶ。

『カノを返せえ！！』

『何をしている！さっさと羽根を狙え！』

イズの怒声と重なって、リーダー格から指示が飛んだ。

直後、イズを取り囲んでいた陸猩族全員が一斉に後退し、距離を取った。

前へ前へ進もうとしていたイズは急につつかえがなくなったために前のめりになる。

バランスはすでに崩れ、地面とイズの顔との距離が近づく。

イズは咄嗟に手を伸ばし、地面とぶつかる前に手を付こうとした。

風が唸る。

『！』

イズの翼に激痛が走った。

陸狸族はイズの動きを封じるために、杭のように先端を尖らせた丸太をイズの翼に投げつけていた。

杭は翼膜を容易に貫き、イズと地面を繋いだ。

「いやあ…！」

香乃の目の前で、残酷な捕獲現場が行われる。

杭は一本だけで終わらず、そのあとに投げつけられ、十数本がイズの翼に穴を開ける。

あまりの激痛にイズは動くこともできず、そのまま倒れ込む。地面に礫にされ、度を越した痛覚がイズの意識を奪ってゆく。

「イズーーーーー！！！」

夜の森に香乃の悲痛な声が響く。

自分の名を呼ぶ声さえ遠のくのをぼんやりと聞きながら、イズは完全に気を失った。

天の竜、地の猩（後書き）

前書きにもあったと思いますが、今回は人によつては残酷だったかもしれません。気分を害された方、本当にすみませんでした。

火は近づくと火傷をするからみんな遠ざかる

大地に群生する、深い深い森。

静寂と喧騒、飽和と空虚、単純と複雑、それらが局所的に集合し、巨大化した自然。

一体どこが森の起源なのか見当もつかない。

あまりにも規模が拡大しているため、その面積や共生する生物を把握するのは至難の業だ。

鬱蒼とした森の中に、簡易住居を敷き詰める一団がいた。巨木の枝葉が大地と大気を隔てているため、上空からでは決して発見できない。彼らは軽くて丈夫な植物を材料に使用して一時的に住む家を作り、隠遁するつもりで構えていた。

住居の仕様には個性がなく、大きさを除けばどれも同じような外観を持っている。

木の板で囲んだ壁に草薺きの屋根を被せるといふ、最低限の機能のみ持たせた様式。室内の保温効果はあるが、およそ雨天に向いているとは思えない。しかし、雨粒は全て大木が繁らせる分厚い枝葉のバリアによって逸らされるため、必要のない機能とも取れる。

比較的小さな住居の中にはイズが監禁されていた。部屋は面積を檻で二分しており、その片方にイズがその大きな体を横たわらせている。

屋内は部屋の隅に据えられてある二つの篝火かがりびによって明かりがつけられている。燃料の木材がパチパチと音を鳴らし、篝の灯火が不規則に揺れて室内をゆらゆらと照らしている。

翼にはまだ杭のような丸太が刺さっている。傷口からの出血は止

まっているようだ、少し擦っただけで再び血が溢れ出すだろう。
瞼は固く閉じられており、目を覚ます気配がない。

柵の向こうには守衛役の陸狸族が二名配置されている。体軀はリーダー格のそれと大して変わらないが、個々の性格が極端に異なっていた。

『しかしまあ……』

片方が独り言のように相方へ話しかけた。

『アレだな』

相方は、守衛の勝手な呟きをスルーする代わりに至極面倒臭そうに返事を返す。

『…アレって何だ？』

『アレはアレだろ。アレに決まってるじゃないか』

『だから、何だ？』

『アレっつーのは、その……』

守衛は頭をぼりぼりと掻いて、出てこない言葉を必死に出そうと四苦八苦し、思いついたようにぼつりと言った。

『ヒマだ』

『最初からそう言え』

相方は呆れた様子を隠せなかった。

『だってよ？せっかく久方ぶりの重用任務を言い渡されたつてのに、肝心の当事者が寝てるんだぜ？拍子抜けもいいところだろ』

『いいじゃないか、仕事の難易度がぐつと下がって』

『そうじゃないんだよー。俺が求めているのは違うんだよー』

守衛は悔しそうにその場で地団駄を踏む。

『もっと、こう…抵抗しまくって力ずくで檻をこじ開けようとする捕虜を期待してたんだ。そいつを前に俺は力と知恵をもって地べたにひれ伏させたいって思ってた。なのにさあ…』

『それは仕方ないだろ。捕縛するのに必要な損傷だったんだから』

面倒臭そうに寝めるが、それが拍車にかけた。

『あーもー、ノルバノももっとやる気のある奴を捕虜にしてきてくれよー！』

守衛は自分の願望をどこかの誰かに届けるつもりで大声を出しながら仰ぐ。その様子に、相方は堪らずに溜息を一つついた。

どこか変わった熱意をもつ守衛は申し分ない実力を備えた陸猩族だ。同族での戦闘演習では毎回上位の結果を出すし、狩猟に行かせれば大物を獲ってきたり栄養価の高い食料を大量に採ってきたりする。今も捕虜のいる檻の守衛を任されていることは、それらのよう

な結果が信頼を高め、多くの者から実力が認められているからだ。

ただ、闘争心が高いというか、体を動かすことを好む性格が一長一短の評価を生んでいる。さっきの発言も、捉える側によっては物騒だとも判断されてしまう。

自らの言動によって図らずとも誤解を生んでしまう、損な性格。だからこそ、周囲の者が守らなければならないのだと思う。例えば、彼よりも発言に信用のある者を近くにいさせるとかだ。

相方は守衛の熱意を削がないよう、関連した小話を聞かせてやることにした。

『捕まえる際は、やる気満々だったみたいだな』

『えっ？マジで？』

予想通り守衛は食いついてきた。顔も嬉しそうだ。

『ああ。力づくで済まなくなつたから、あんな損傷を与えざるを得なかつたんだそうだ』

檻の向こうの天竜族を運び込んだ時に、偵察へ出向いていた同胞から聞いた話だった。戦闘を予期した備えがなかったとはいえ、予想よりも抵抗されたらしい。どうやら別の場所へ運び込んだ異界の民が暴れた理由のようだが、その民が捕虜の天竜族とどんな関係なのかは聞いていない。調査中というところだろう。

自分が知っている情報を守衛に話してやると、彼は目をキラキラと輝かせ、今度は頭を抱えて空を仰いだ。

『くあー！まさに俺が見たかった暴れ方じゃないか！めんどくさがらずに偵察へついていけばよかったー！』

『…お気楽者』

相方は心底呆れた。

イズが監禁されている建物よりやや離れた位置にある建物。形は大差ないがやや小振りの建物の中に、香乃は捕われていた。同じように、室内を二分するように檻が張られている。

薄暗さの隠せない牢屋の中で、香乃は憤慨していた。

「ちょっと！こんな所に閉じ込めてどうするつもりなの！？」

手を拘束されていないので、思う存分柵を揺すったり叩いたりしている。柵は金属ではなく何かの植物の幹を磨いた物ようだ。だが、材料の植物は相当に堅固のようで、いくら衝撃を与えてもびくともしなかった。

「ねえってば！そこにいる…人？猿？ああもう！そこにいる奴！黙ってないで何か言いなさいってば！」

周囲を気にせず汚い言葉で檻の向こうで見張りをしている陸猩族に向かって、香乃は騒ぎ立てる。しかし、言葉は通じないにしろ声は届いているはずなのに、聞こえないフリをされているようだった。つまらなそうに欠伸もしている。

こうなったら色仕掛けでもしないと太刀打ちできないだろうか
真剣に考え、手元に都合よく化粧道具はないかと香乃が辺りをキョ
ロキョロ見回している時、出入口から別の陸狸族が入ってきた。

香乃の目には陸狸族の外見における個性を判別することができな
いので、たいていの場合には誰が誰だか見分けられない。

だが、今入ってきた陸狸族は違う。体格に大きな差はないが、自
然の佇まいにすでに周囲を威圧するような雰囲気漂っている。現
に、さっきまで怠惰丸出で見張り番をしていた陸狸族が、今はい
かにも忠誠心丸出ですと言いたげに姿勢を正して直立していた。
こんな極端な態度を見ると捕まっているのが馬鹿馬鹿しく思えてく
る。

不良分子を正してしまうほどの驚異的な空気を撒き散らしている
そいつは、間違いなくリーダー格の陸狸族だった。

リーダー格の陸狸族は見張り番に目もくれず、さも当然のように
目の前を通り過ぎた。

その歩みの先は考えなくとも分かる。というか、他にない。

リーダー格はずっしりとした歩みを、香乃のいる檻の前で止めた。
照明のある部屋で目の前まで来られて、改めてその図体がいかに
大きいかを知った。

見上げなければ頭が見えず、体毛のせいかどうか不明なほどが
つしりとした体格。単純な筋力では敵わないと平気で納得させられ
るほどに大きい。たぶん交通バスには乗れないんじゃないかと思っ
た。

リーダー格が目の前に来たのは別に構わないが、ただ香乃を見る
だけで何もしてこなかった。仲間と囁き合うわけでもなく、鼻で笑
い飛ばすわけでもない。高低差で見下されているような気持ちには

なるが、それ以外は何もしてこない。

あまりにも凝視されるので、香乃は耐え兼ねてリーダー格に言った。

「ねえ、黙ってないで何か言いなさいよ。一応待ってるんだけど」

状況的な流れとしてはそれが上等な流れだろうと思う。そうじゃないと香乃がじれったくなって困る。

「何か言いなさいってば！ついでにここから出して！」

「それはできないついでだ」

突然、リーダー格が問い掛けに答えた。

香乃は思わず絶句してしまった。寡黙だった相手が何の前触れもなく喋ったからというのも、もちろんある。

それよりも驚いたのは、リーダー格が香乃と同じ日本語を使ったことだ。

「…な、なんで、同じ言葉…？」

驚きを隠せなかった香乃は、狼狽したまま言った。その様子を見たリーダー格は、あからさまに呆れた様子を見せた。

『やはり話せんのか。異界の民にも低脳な種族がいるとはな』

「ちょっと！いきなり宇宙語で呟かないで！っていうか今すっごい失礼なこと言っただしょ！」

地球でも異国の言語を駆使することによって暗号化を図る手段が用いられることがあるが、ここまで表立って失望したような態度を取られれば、内容はともかく意味合いぐらいなら類推できる。目的も何も分らないまま馬鹿にされるのは我慢できない。

リーダー格は騒ぎ出した香乃を一睨みし、それに怯んだ香乃は騒ぐのを半ば強制的に止められる。今度ははっきりとした敵意を持った眼差しだった。

「貴様の種族が我々の言語を理解できんようだから、こちらがわざわざ合わせてやっているのだ。無駄に騒ぐな」

今度は明朗な発音とともに命令してきた。

他の言語を聞けば使えるようになる驚異的な理解力は、どうやら天竜族だけでなく陸狸族も備えているらしい。なんか知らないが、どうやらこの世界の住民はよほど地球の学生と喧嘩したいらしい。

「いったい、なんなのよ、あなたたちは」

「貴様に質問を許した覚えはない」

リーダー格は静か過ぎる一言で香乃を黙らせる。

「貴様はただ事務的にこちらの質問に答えることだけ考えていれば良い。所詮、その低脳さで対処できる策はそれくらいだろうからな」

「言わせておけば何よそれ！毛むくじゃらのあんたらよりよっぽどマシよ！」

「貴様！ノルバノ様になんという無礼を！」

直立不動を装っていた不良見張り番が香乃の罵倒に食いついてきた。忠誠心満々、任務を全うしてますよとアピールしたいのだろうか。

「うっさい剛毛筋肉！」

ムカついたので、見た目そのまんまで表現してやった。

「あのねえ！私は天竜の国に拉致されて仕方なくこの世界にいるだけなの！あなたたちが何を企んでるのかは知らないけど、これ以上無関係な私とイズを巻き込まないで！」

「それはできぬと先刻言い付けた筈だ。理解だけでなく記憶力も劣等なのか、この種族は」

ノルバノと呼ばれたリーダー格の陸猩族はぴしゃりと拒否した。

「先刻言った通り、貴様達は人質なのだ。我等陸猩族の志のためなの」

ノルバノは言い放つ。

手にある情報が足りない香乃には、目の前の陸猩族の状況や真意が読めなかった。

「何よ、大志って…。あなた達は何を狙ってるの！？」

ノルバノの揺らぎなく言った内容に、香乃は得体の知れない恐怖を覚えた。ただの目標や個人的な願いとは異なる感情が含まれてい

るような気がした。

監禁している香乃に漏洩させてもさして問題ないと判断したノルバノは、種族全体が抱いている嘆願を話した。

「我等陸猩族は、天竜族共とは相容れない関係だった。数百年もの前、陸猩族と天竜族は相互の優劣差を明確化するため、誇りをかけた戦を繰り広げた。結果は陸猩族が惜敗。優性を誇示した天竜族はこの近辺で屈指の標高を持つ『久巖峰』に領地を構えた。この無念の戦果に、多くの同胞が涙を飲んだ。しかし、長い長い年月を経た今、その復讐を果たす時が訪れたのだ」

凍えそうな風が吹く空と、圧倒的な広さを持つ森。気が遠くなるほどの年月も不動だった山。幾千幾万もの生命を育み続ける大地。

イズと一緒に飛んだ空。

イズと一緒に降りた森。

驚かされ、振り回され続ける、イズの住む世界。

新たなことを知るたびに地球と同じところや違うところを感じさせる世界。

夜は綺麗な星が輝き、昼間はもっと違う風景が見られるんじゃないかと期待できる世界。

たくさんのことを見て、段々と素敵なところが分かってきたこの世界の、影の部分を知ったような気がした。

だが、あの弱気なイズを思い出す香乃は、ノルバノの語る歴史を信じるができなかった。今まで通ってきた場所に、天竜族と陸猩族の血が流れていたなんて、簡単には納得できない。

「そんなの嘘よ！天竜族がそんな野蛮なことをするわけない！」

香乃の不審的な態度に、ノルバノは焦りも困りもしなかった。ただ静香に佇むだけだった。

一つ違うのは、次のノルバノの言葉に、怒りが含まれているような気がしたことだった。

「虚言であるものか。我輩の父は天竜族に殺められたのだぞ」

彼らの理由

香乃は絶句した。

天竜族の誰かが陸猩族を殺した。

気持ちが悪えていなかった香乃は、今度こそノルバノの証言を飲み込めなかった。

「我が父が用事で外出した日、次に見た父は全身を焼け落とされた姿だった。死を迎えた瞬間を見たわけではない。我輩が見たのは黒く焼け焦げた遺体でしかない。だが、小娘。当時のこの辺り一帯に活火山はなかったし、山火事が起きてもしなかった。そのような条件下で我が父が焼死する原因は、天竜族の吐き出す火炎以外に存在しないのだ」

ノルバノは確信したように決めつけている。その説明に、香乃は腸が煮えくり返りそうな気持ちになった。はらわた

天竜族に知り合いがいるからとか、陸猩族が気に入らないからとか、そういう感情に振り回されているわけではない。ノルバノが言っていることがあまりにも空中楼阁に思えたからだ。

「そ、そんなの予想でしかないじゃない！確かなこともないのに勝手に疑うなんてどうかしてる！」

天竜族を庇うつもりではないが、香乃は反論した。だが、ノルバノにとっては天竜族の側につくと判断するのに充分な反論だった。

「ならば他にどんな可能性があるというのだ？火事か？火元の不始末か？同胞による暗殺か？」

ノルバノは一気にまくし立てる。

「我々として無能ではない。考えられるあらゆる可能性を列挙しては否定する論証を見つけ出して一つ一つ打ち消した。そして否定仕切らずに最後まで残された可能性が天竜族によるものなのだ」

陸猩族の長年の調査結果を言い終えたノルバノに、香乃は反論しきれなかった。

どこまでが事実かは不明だ。ノルバノが嘘を言っている可能性もある。彼の父親の死因が焼死ではなく、本当は別の原因だったという考察もできないはない。

だが、ノルバノが異世界人である香乃に対して嘘をつく理由が思いつかなかった。

香乃とイズが陸猩族と遭遇したのはつい先程だ。イズが翼を潰されたあと、香乃は仕方なく陸猩族に連行される形になった。その間、陸猩族からなんの尋問も受けていない。

香乃が陸猩族のことをよく知らないのは無論だが、陸猩族にとっても香乃のことをよく知らないはずだった。

香乃がどのような種族なのか。

香乃とイズがどうして森の中にいたのか。

香乃とイズはどういった関係なのか。

陸猩族にとって、香乃という人間は未知の存在として注目されていると考えていいはずだ。

しかし、陸猩族は何も尋ねてこないし、何の手も出してこない。

まるで、何かをすることも必要ないとも言っているように。

「そんなこと言っていると、今イズが暴れて火を吐いて、おんなじ思いをさせてやるんだから！」

香乃は相手のペースに乗るまいと、今考えられる打開策を提示してノルバノ立ちを焦らせようとした。

森から連行される時に礫にされたイズを遠目に眺めたが、完全に気絶してぐったりとしていた。追跡するのに飛行したのだって体力を使っただろうし、一度大きく不時着して体中を地面に擦りつけた。無事だとは思えず、香乃は心配になった。

心配だが、ここはイズに動いてもらわなければならない。行動するにはイズのような機動力を持った者の協力が必要だ。

一眠りして目を覚ませば体力も戻るだろう。飛行は難しいが、イズは火を吐けるのだから戦力をカバーできるかもしれない。

陸狸族が我が物顔でいられるのはイズが目を覚ますまでの束の間だと、香乃は思った。

だが、ノルバノは一言で香乃の意図を容易く打ち砕く。

「奴は火を吐けん」

ノルバノの発言内容に、香乃は不意打ちを食らった。

「なんでそんなこと分かるのよ？イズはドラゴンなのよ？天竜族は火を吐けるって、さっき自分で言ってたじゃない！」

訳の分からない香乃は、ややヒステリー気味に言った。対して、ノルバノは至って冷静に答える。

「天竜族は吐火能力を身につけると、その行使を繰り返すことで歯が溶解し鋭利さが失われるのだ。しかし奴は永久歯に生え変わっているにもかかわらず、全ての歯に鋭さが残っていた」

ノルバノの観察点に、香乃も関連した記憶があった。

イズを最初に見た時、ワニのような大きな口の中に鋭い歯が光っているのを思い出す。あれがあったせいで、香乃は得体の知れない恐怖を味わう羽目になったのだ。

「そんな、だって…」

しかし、だ。

イズの部屋の中央には温かい焚き火が燃えていた。あの部屋の周りに火を焚く道具なんて見当たらなかったので、焚き火はイズが用意したものだと思っていた。

イズはドラゴンだし、香乃の知る空想と合致しているなら、火を吐くぐらいできると思っていた。

そこまで考えて、一つ大事なことを忘れていた。

香乃は、イズが焚き火を作る場面を見ていない。

イズと出会ってから、イズが火を吐こうとするところを見たことがない。

自分の記憶を、別の自分の記憶で否定する。

香乃が知る事実を繋ぎ合わせると、その事実が浮上してしまった。

おそらく、陸猩族もこのように事実を元にして否定や肯定を繰り返し、ノルバノの父親の死因を突き止めたのではないか。

否定できない事柄があったからこそ、思わぬ場所から答えが見つかってしまったのではないか。

同じような思考パターンを踏んでしまった香乃は、もう手遅れだった。

陸猩族が天竜族を恨む理由を、否定できなくなってしまうていた。

理解できた香乃の様子に気づいたノルバノは、部屋の隅に据えられてある台の上から、小さな球を一つ手に取った。大きさは野球のボールほど。何かの木の実のようだ。

「たとえ今の時点で貴様が理由を納得しようとも、我々の起こす行動まで納得することは叶わぬだろう。…故に」

ノルバノはその木の実を指の力だけで勢いよく弾いた。

飛ばされた先は、香乃の顔面。

あまりにも突然で心の準備が整ってなかった香乃は猛スピードで向かって来る球体に一切反応できなかった。

そのため、

「いだっ!？」

額に激痛を走らされる羽目になった。

脳を力ずくで揺さぶられたような衝撃が襲うが、それだけでは終わらなかった。

強い衝撃が加わった木の実は香乃の額に衝突した瞬間、中身が一気に破裂した。

中からは薄い靄のようなものが溢れ出し、香乃の顔の前に撒き散らされる。

木の実をぶつけられて一瞬だけのけ反っていた香乃は、気づいた時にはその靄を思い切り吸い込んでいた。

一瞬を終えた香乃が目を開けると、面白いぐらいに視界が霞んでいた。ノルバノの毛だらけの顔どころか、目の前にあるはずの檻でさえ焦点が合わない。

視力が落ちたのだろうか。いや、香乃は一・五だ。

「ちよつと！いきなりなにす…る…の………」

理由を探す間もなく、香乃はその場に昏倒した。

目の前の捕虜に狙い通りの症状が出て、ノルバノは満足する。

『お言葉ですが、予定外の存在とはいえ、』すいれん『睡蓮』まで使う必要があつたんでしょうか？』

猫被りの見張り番がノルバノに意見した。

『睡蓮』とは、この森の中で限定された場所に群生する植物だ。

果実は衝撃に弱く、その中身は揮発性があつて吸い込んだ者は睡眠状態に陥る。その特性から、陸狸族は狩猟の際に用いることが多い。睡眠効果は丸一日もあるので、重宝している植物だった。

だが、それを使わなければならないとは見張り番は思わなかった。知能も身体能力も陸狸族に劣るのに、気絶させる理由が思い当たらない。

『確かに予定外だが、同時に未知の存在という点を失念してはならん。今までは檻に監禁しても大人しくしていたが、いつ何をしてくるか予測しきれん。ならば、何かをされる前に何もできなくしておいたほうが我々の都合に良いのだ』

自分の対処に疑問を持たれたノルバノだが、感情を荒げることなく沈着に答える。

『効果はあったが、いつ目を覚ますか分からん。しっかりと見張っておけ』

明朗な説明と的確な判断を下したノルバノに、見張り番は尊敬の念を抱いた。真面目とは言えない自分に対しても有能さあふれる命令を出す姿が胸に響いたからだ。

この方には応えなければならないと、自然と忠誠心が湧き上がり、

『御意』

見張り番は本当に真面目さの感じられる返事をした。

イズのいる檻の前では、守衛とその相方がまだやりとりを繰り返していた。

『ああもう！いつまで寝てやがるんだよコイツは！早く起きろっつの！』

『そんな都合よく起きるわけないだろ。起きたら起きたでうるさいだけだぞ』

『いいんだよ、うるさいの上等！こんな退屈な状態よりもマシだ！』

『俺は平和でいいと思うけどな』

『なあ、石ぶつければ起きっかな？』

『やめとけて。天竜族って結構頑丈らしいし』

『なら、勇気を出して尻尾を踏んづけてやるとか』

『…お前、どんだけ危険か考えてないだろ』

『じゃあよ、いつそのこともう片方の捕虜を連れてこようぜ！大事なもんが目の前にあったら飛び起きるんじゃないか？』

『寝てたら見えないだろ』

『こいつの名前を呼ばせるんだよ。意識がなくても耳には入るだろうし』

『だからやめとけよ。かえって逆鱗に触れるかもよ？』

『それでいいんだよ！俺はコイツの怒った様子が見たいんだから！そのもう片方の捕虜だって、どうせあとで食うんだろ？』

『まあ、捕まえてても意味がなくなったら、だろうけどな。生き物なら火を通せば食えないことはないだろうし』

『んじゃいいじゃねえか。早いか遅いかなら少しでも役立たせてや

ろっぜー！』

『…なら訊くが、どうやって連れてくる気だ？』

『どう…って、直接向こうの牢屋に行つて連れてくるんだよ』

『馬鹿かお前。檻の外に出せるわけないだろ』

『ちよつとの間でいいんだよ、ちよーつとで。少し借りるぜー、つてノリで』

『向こうに行つてゐる間、ここはどうするんだ？』

『ん？お前に任せるつもりだけど？』

『俺は別にいいが、ノルバノが見に来たらどうする？お前がいないことを知ったら大目玉だぞ』

『…やっぱやめとくわ』

『そうしとけ』

『あーあ、いい考えだと思つたんだけどなー』

『俺も向こうの捕虜を見たい気持ちはあるんだがな』

『だよなあ。ノルバノが向こうを処分する前に、コイツを暴れさせてえよ』

『お前のその熱意を真面目な方向に矯正できればどんなにいいこと

か
』

『うはははっ！それは無理だから諦めてくれ』

牢屋に守衛の笑い声が響く。

檻の中で、齒ぎしりをしていたイズの口から、わずかに火の粉が漏れた。

怒り、燃え上がる

怒りが満ち、自我が一つの感情に支配される。

香乃が危ない。

なのに、自分は何もできない。

薄ぼんやりとした意識の中で、守衛らの話を聞いていた。

事が終われば、香乃は食われる。

食われるだって？

なんだよそれ。

香乃が何をしたっていうんだよ。

何でそうなるんだよ。

カノはただ、天竜族の都合で勝手に連れて来られただけなんだぞ？
こんな僕の背中に乗りながら、この世界を綺麗だと言ってくれた
んだぞ？

こんな僕の傍にいたのに、楽しそうに笑ってくれたんだぞ？

なのに…。

なんだよ…。

なんでだよ…。

カノに一体何しようとしてるんだよ！！

咳込む声が聞こえて、守衛と相方は檻の中へ振り返った。

そこには、咳込みながら立ち上がるうとするイズの姿があった。前進に生傷を残し、両翼を礫にされたまま、痛みを忘れているかのように無理矢理立ち上がるうとしていた。

その無謀で無鉄砲で無茶苦茶な天竜族の行動を見て、守衛は嬉しそうに口端を持ち上げる。

『やっと起きやがったか！いいぜ、その調子だ！そのサクを破れるもんならやってみるよ！』

守衛は挑発の言葉を投げつける。

一方、相方はイズの様子に違和感を持った。

力ずくで立ち上がるうとすることは大して問題はない。抵抗するためには、まず体を起立させなければならぬからだ。

目の焦点が合っていないような気がするのも特に注視すべき点でもない。昏睡から覚醒した直後なら意識がまどろんでいてもおかしくはない。むしろ、行動が単純になるので都合だろう。

疑問に思ったのは、どうして咳込んだか、という点である。

捕縛の際、砂塵系や粉塵系の攻撃を取ったとは聞かされていない。取っていれば呼吸困難に注意しべしと申し送られるだろうし、昏睡時にも咳込んだりするのが自然だろう。

ならば、どうして今に限って咳込んでいるのか。

『おかしい。様子が変だ』

相方は守衛を制止する。

守衛が輦蹙していると、目の前の天竜族の口から大量の火の粉が吹き出た。

『ここで放火するつもりか！』

イズの行動と相方の言葉に守衛はぎよっとする。

『嘘だろっ！？こいつ、火を吐けないんじゃないのかよ！』

守衛と相方が悲鳴じみた声を上げると同時に、イズが大きく息を吸い込んだ。

『とにかく、早く逃げるんだっ！』

守衛と相方が出入口へと急行する。イズはそれらに向かって躊躇いなく吐き出した。

口から高熱の火炎を噴出させ、山吹から深紅までの色彩に代わりながら、巨大な壁と化し、突き進み続ける。

守衛と相方が屋外へと飛び出たすぐ後から、守衛と相方は、業炎に食われかけながらも命からがら脱出した。

牢屋の中は既に火の手が回っていた。辺り一面が真っ赤な火で覆われている。

灼熱が盛る屋内で、イズはゆっくりと身を起こした。今まで彼を磔にしていた丸太も、すでに灰となって抜け落ちていた。

もともと天竜族は高温を含めた温度変化に耐性のある種族だ。火中に晒されても平気だし、凍えるような寒さにもある程度なら耐えられる。

自身の炎に焼かれることがないイズは、目標に向かって歩き出す。

香乃を救い出すという目標。

今の自分がしたいことはそれしかなかった。

木製の住居はさすがに燃えやすく、気づいたときには火が全体に回っていた。壁は燃え盛り、壁を伝った火が屋根をも巻き込んでいく。

イズは壁に向き直り、渾身の力を込めて殴った。

灰になる途中だった木製の壁は以前持っていた弾性を失っており、易々と崩れた。

外との出入口を作ってしまったため、屋内へ新鮮な空気が流れ込み、業火が膨れ上がる。

フラッシュバックと呼ばれる火災現象によって、小屋は一瞬で吹き飛んだ。

圧倒的な熱量が噴き上がっている。

大火と化した小屋から、イズの体がゆっくりと這い出てきた。

自身の熱に焼かれることなく、両足で地を踏んで進む。

全身に生傷を抱え、荘厳さを感じさせるはずの大翼はボロ雑巾のように穴が開いてしまっている。

満身創痍のイズがそれらの激痛に耐えられるのは、たった一つの確固とした目標があったからだった。

香乃。

彼女を助けたい。

陸狸族の餌食になってしまう前に、自分が救い出すのだ。

イズは付近を軽く見回し、最寄りの住居を見つけた。そしてその方向へ歩を進め始める。

天竜族は歩行を必要とした種族ではないため、イズの歩く速さとはとてもゆつくりだ。一步一步の歩幅が大きいためにある程度の速度が出ているものの、動作は緩慢である。

体の痛みを底いながら、イズは一つ一つの足取りをしっかりと踏んでいく。

突如、その隣の暗闇から一人の陸狸族が飛びかかってきた。

手には棍棒を持ち、勢いを利用してイズの頭部を狙う。

イズはその動きの際のわずかな音に反応した。

確かに天竜族は夜目が利かない。イズも例外ではなく、暗闇では確かな光がなければ何も捉えることができなくなる。

しかし、聴力まで劣ることはない。広い範囲から音を集め、様々な角度から音の情報を拾う。さらに指向性も持ち、特定の音に対して意識を向けることでその他の雑音を排除して取り入れたい音を聞き分けることができる。

イズは音に敏感に反応し、音源に対して視線を向ける。

イズの目には、暗闇の中から自分に向かってくる陸狸族の姿が視認できていた。なぜなら、ついさっき自分の放火で住居を燃やしたため、炎上した炎が光源となり、辺り一帯を橙色に照らしていたからだ。

飛びかかってくる陸猩族の位置を瞬時に確認したイズは、片足を軸にしてその場で体を回転させる。同時に尻尾を振る上げ、陸猩族がいるであろう高度に向かってそれを振るった。

太い尻尾は遠心力と勢いで撓り、頭部を殴ろうとしてきた陸猩族の脇腹に直撃する。地面から離れていたために踏ん張りが効かず、陸猩族は直角方向へはじき飛ばされた。

先鋒を一撃で撃退したイズは、再び前進する。だが、その進路を大勢の陸猩族が取り囲んでいた。辺りをぐるりと見回してみる。進むも引くもできないような布陣ができている。最初の一人がイズに挑んでいる時間を図に、多数を投入してでの包囲作戦が取られていたのだ。

イズはそれを一瞥し、まるで自分とは無関係のことのように足を進め始めた。

『今だ！放て！』

どこからか聞こえた命令を合図に、取り囲んでいる陸猩族一人一人から何かが投げつけられてきた。それは野球のボールほどの大きさを持つ木の実、『睡蓮』だった。是か非でも生け捕りのまま手中に収めておきたい陸猩族は、イズを昏倒させる作戦に出ていた。

全方位から麻酔効果のある木の実が飛んでくる。

回避するには空を飛ぶしかないが、今のイズは翼を傷つけられているためにその手段が取れない。

絶体絶命。その言葉がふさわしい状況。

誰もが諦めそうな瞬間に立たされているイズは、誰もが持てるわけではない冷静さをもって状況を打開しようとしていた。

イズはその場で大きく息を吸い込み、自分の足下に向かって火炎を吐き出した。

吐き出された火炎はすぐに地面と衝突し、イズの足下から生えるように全方位に広がった。地面から吹き出したかのように燃え上がる火炎は、壁のようにその高さを上げつつ、範囲を広めていく。

炎の壁に晒された『睡蓮』の実は、揮発性に富む果汁によって容易く弾け散った。

一瞬にして攻撃手段をはねのけた炎の壁は、その勢いを止めることなく広がり続ける。灼熱を帯びながら、今度は取り囲んでいた陸猩族に襲い始めた。

容赦なく伸びる火の手に、陸猩族は為す術なく逃げるしかなかった。陣形は崩れ、多くの者が自分の安全を優先して持ち場を離れていく。

障害物がない火炎はその勢いのまま、近くの住居に火をつけた。壁が焼け、屋根が燃え上がる。

中から陸猩族が這い出てくる。焦りに満ちた表情で、脱出する途中で転ぶ者もいる。

無様だった。あまりにも滑稽に見えた。

こんな奴らに捕まっていたのかと思うと、自分という在り方が無性に情けなく思えた。

今ならなんだってできる気がした。

こうして自力で対抗できている今の自分なら、どんなことでもできるような錯覚を覚えた。

今の自分にできること。今の自分がしたいこと。

それは、香乃を助けること。

イズにとって、もはや簡単に手が届くことに感じた。

自分がもたらした火災に右往左往と逃げ惑う陸狸族を尻目に、イズは近くの住居から片端に爪を立てていく。堅固さに信頼のある木材のようだが、燃やされて炭化してはその堅さも失われ、イズの力でも充分に破ることができた。

一つ目の住居には香乃はいなかった。違うと分かったイズは他のことに目もくれず、次の住居に向かう。

香乃がいなければ、また次へ。またいなければ、そのまた次へ。

イズは勝手気儘に陸狸族の住処を荒らしていった。

四つ目の住居に手をかけようとした時、背後からイズを呼びかける声が聞こえた。

『やい、てめえ！ずいぶんとメチャクチャにしてくれるじゃねえか！』

勇んだ様子で挑発したのは、イズの牢屋で見張りをしていた守衛だった。所々の体毛が焦げているのに対し、双眸は闘志に満ちている。

『これ以上暴れるってんなら、この俺を倒してからにするんだな！』

守衛はついに訪れた対戦の機会に戦意を漲らせ、イズを指差しながら挑戦状を叩きつける。

対戦を強要されそうな状況になったイズは、面倒さから生まれた

憎しみの感情を剥き出しにして睨み返した。

イズにとってはそんなことをしたくもない。なぜなら時間がもつたないからだ。

今こうしている間にも自分が助けたい香乃がどんな目に遭わされているのか知れたものではない。

一時の無駄も省きたいイズにとって、守衛の挑発など無意味に等しい。

イズは無視しようと踵を返そうとする。

無視されることを想定していた守衛は、事前に考えていた“餌”を撒くことにした。

『いいのか？もしてめえが勝ったら、てめえが探しているモンの場所を教えてやるぜ！』

無視を決めようとしていたイズの耳に、その虫の良すぎる交換条件が聞き取れた。

イズは再び守衛を睨みつける。

ちらつかせた餌に興味を持ったイズの様子に、守衛はにやけそうになる口元を我慢した。

イズの捜し物の場所を教えるという言い分は嘘ではない。捕縛された異界の民が監禁されている場所は知っているから、条件に出すには問題ない。問題は、その異界の民が相手の探し物で合っているかという確証がないことだ。

だが、そんなことはどうでもいい。今は相手の天竜族の興味を自分に向けさせられれば何だって良かった。

一方、イズは守衛の言葉を勘ぐっていた。

守衛の言葉を信じられるかどうか考えると、おそらく嘘の可能性がある。あまりにもイズにとって都合が良く、守衛にとって利点がないからだ。だが、相手はこの住民で、詳しい存在でもある。完全には否定できない。

それに、今ここで無視を決め込んだとしても、あの闘志を剥き出しにした様子ではしつこく追いかけてくるだろう。

幸いにも、他の陸猩族は退避やら救助やらでイズを止めるどころではなくなっている。

ならば、ここで先に潰しておくのが得だとイズは考えた。

燃え盛る森の中で、イズと守衛が向き合う。陸猩族の阿鼻叫喚を背景に、双方は互いの動作に注視している。

今でも決闘が始まるうとしている状況を見ていた相方の陸猩族は、思わず声を上げて制止した。

『やめろ！一人じゃ無理だ！』

相方の声が聞こえたが、それは守衛にとって火に油を注ぐものではなかった。

『うるせえ！邪魔すんな！』

制止の声を守衛は跳ね返した。

『これは俺の問題だ！』

守衛にとって、同族と訓練するのは嫌いではなかった。

だが、所詮は訓練で、自分の強さを秤にかけた戦いではない。そこには必ず加減という足枷が付きまとい、常に全力を出すことが憚

られる内容だった。

自分を抑えなければならぬ訓練に嫌気がさした守衛は、食料調達の狩猟へ積極的に参加した。相手が同族でなく、手加減こそが命取りになる状況下ならば、自分を思いきり出すことができると思えた。

しかし、そこにあるのはチームワークを重視せざるを得ない計画的な戦略ばかりで、気の向くまま力を振るって良い場ではなかった。

それから守衛は全力を出せない日々で悩んだ。

確かに狩猟ではしかるべき結果を出してきたかもしれない。しかし、それは自分一人が死に物狂いで食いついたものではなかった。そこには共通した目的を持つ仲間がいて、効率を考えられた成功しやすい戦法しか取られてなかった。

何もが計画的。全てが想定内。

そんな動き方に、守衛は反吐が出そうになった。

もつと本能的に飛びかかっていきたい。

作戦などなく、自分の身一つでぎりぎりの戦闘をしたい。

そう思いながら、日々を燻っていた。

だから、これはまたとないチャンスなのだと守衛は感じていた。自分の力を思う存分出せる。仲間の助けがない中で、勝負の行く先は全て自分の実力にかかっている。だから、この瞬間だけは誰にも止められなかった。

守衛は足の裏に力を込め、踏み出す瞬間を見計らう。
イズもまた姿勢を正し、呼吸を整える。

相方は、もう止められない陸猩族と天竜族の戦いを見届ける覚悟を決めた。

睨み合いが続く中、燃えていた住居がまた一つ崩れた。

戦闘本能の挑戦状

イズと守衛は睨み合う。

炎が住居を焼いている。

広漠たる密林に覆われながら、炎は衰えることなく燃え上がっていた。

炎の周りには沢山の陸狸族が悲鳴を上げている。

一刻も早くこの場所から離れたいと生存本能に従う者。

自らの危険を二の次にして、同族の救助に奔走する者。

状況に完全に飲み込まれて身動きの取れなくなった者。

危機的状況に陥った現場では、生き残るために必要な行動をおのおの取っていた。

パニックに陥っている状況下で、それを意に介していない者たちがいた。

片や、陸狸族一の英雄と噂され、牢屋の守衛を務めていた戦闘の天才。

片や、今夜拉致されたばかりでこの場を焼き払おうとしている張本人の天竜族。

双方ともに互いのことしか視界に映っておらず、相手の一挙手一投足に息を鎮めて観察していた。

炎がやむことなく燃えている。

燃え続ける住居の一つが、音を立てて崩れた。

その音を合図にしたように、守衛が力一杯踏み込む。

イズに向かって真っ直ぐ走り寄り、一気に距離を詰める。

守衛の接近を見ていたイズは、彼が自分に向かって直線上に来るのを見た瞬間からすでに息を吸っていた。相手の姿を見逃さないまま、イズは口から火炎を放射する。守衛はイズが息を吸い込む呼び動作を確認した瞬間、すでに右に跳躍していた。速度を維持しつつ体が完全に地面から離れないような足捌きを意識する。イズの口から炎が見えた瞬間に右に回避し、そのまま回り込む。

イズも放射を短く抑え、その姿を追う。守衛はイズが方向転換する前に距離を詰め、攻勢に出た。大地を縫うように疾走し、向かって右側、すなわちイズの左足に狙いを定める。

頭部でなく側部を狙うのには理由があった。守衛がイズにダメージを与えるのに最も効果的な部分は頭部だ。

しかし、守衛とイズとは身長差があるため、そこを攻撃するには跳躍するなどして高低差をなくさなければならない。

だが、跳躍して地面から足を離してしまうと先の同族のように咄嗟の軌道修正ができなくなり無防備も同然の状態になる。

高低差をなくすには、自分の高さを変える方法の他に、もう一つある。それが、相手の高さを変える方法だ。

つまり、イズの頭部の高さを自分の攻撃が届くところまで下げさせればいい。

そのために、まずは体を支える足下を掬い、急所を自分に近づけさせるという段階的な戦略を採るつもりだった。

守衛は自分が出せる敏速さを持って接近し、イズの足下に向かう。イズは向き直るのがわずかに間に合っていない。守衛はその隙を逃

さず、自身を速度に乗せたままイズの大腿部の外側へ体当たりした。自分に強い衝撃が伝わる。同時にイズの体もぐらつくことと予想していた。しかし、目の前の天竜はぐらつくこともなく、さらに体当たりした左足が遠ざかっていくのが見えた。

守衛は閃光のように発想し、後ろ向きに飛びすさる。先程まで守衛がいた場所に、イズの太い尻尾が唸りながら通り過ぎた。

守衛は着地すると少し距離を離れた場所に居直る。イズもゆっくりと守衛の姿を目視する。

イズは守衛に体当たりされる直前、右足を軸にして構えていた。守衛が左足に体当たりする寸前に体を回転させ、足から伝わる衝撃を殺しつつその衝撃を利用して自転を加速させ、尻尾を振るう力に変換した。守衛は体当たりした左足が不自然に離れていくのを見て瞬時に予測し、回避に移ったのだった。

呼吸を忘れてしまう攻防。

一瞬の判断が勝敗を分ける時間。

自分の生死をかける瞬間がそこに存在していた。

守衛はその現実を前に体が震えていた。

長年望んでいた瞬間が与えられたことは確かに嬉しい。だが、同時に恐怖心も芽生えていた。

味方はいない。

武器も持っていない。

作戦も何もない。

嘘偽りなく自分の身一つで敵と対峙している。

嬉しいはずなのに、不安が拭えない。これほど自分自身の実力を

疑いなくなった時はなかった。

今までの成功は全て他者の協力によるものであり、決して己の実力そのものではなかったのだと思ってしまうた。

今まで甘えていた自分。

疑心に駆られた守衛は、一度己を見直す。

果たして全てが自分の実力無しにやり遂げた成功だったのだろうか、と。

本当に自分の力は凡庸なものなのだろうか、と。

卑下の思いに駆られそうになった守衛は、頭かぶりを振って己に問うた想像を否定した。

自分は誰かの協力がなければ何もできない奴ではない。今まで築いた成功の数々は錯覚ではない。

それを照明する方法が、目の前にある。

守衛たちの燃え上がる住居を背景に自分を睨みつけている、この惨事の元凶。

ノルバノの父を殺した天竜族という種族。

この敵を自分だけで倒すことができたのなら、今度こそ己の強さに確信を持つことができると守衛は思った。

イズの攻撃パターンは単純だ。

遠距離なら火炎放射。

近距離なら尻尾回転。

場合によっては足下に火炎を吐いて全方向への攻撃を取る。

これだけだ。今のイズに飛ぶことはできないから、飛行能力を加味することは無駄と言ってよい。

イズの動作に注視して決定打を受けなければ、守衛一人で充分対

戦できる相手だと踏んだ。

守衛が攻め方を分析していると、イズはすかさず火を吹き放った。動作を見逃さなかった守衛は自慢の敏捷さでそれを左に避ける。

守衛の位置が動いたのを観察していたイズは、今度は火を吐き続けながら首を振った。そうすることで直線上にしか飛ばなかった火炎が弓状に広がり、広範囲の攻撃となる。守衛は横方向に移動しただけでは避けきれないと考え、高く跳躍して近くの大木によじ登った。

炎を回避できたことを確認すると、守衛は最も近くにある住居に向かって飛び降りた。

ほとんどの住居の傍には道具が積まれて置かれている。それは寒さを凌ぐための毛皮だったり、住居を補強するための材料だったり、狩猟する時に用いる投擲の道具だったりする。

守衛が目をつけたのは木を削って作成した長い棒だった。それを両手に一本ずつ手に持ち、再びイズの元へ近づく。

イズは守衛が住居の近くに降りた時点で焼き払おうかと思っていたが、それはできなかった。なぜなら、守衛が近寄った住居は、まだ香乃がいるかどうかを確認していなかったからだ。

今までは香乃がいないと分かっていたから躊躇なく燃やしていたが、まだ未確認の対象を燃やすことはできなかった。

守衛はイズに近づきながら、片方の棒をイズに向かって投げつけた。

槍投げのように先端を向けながら軌道を描く棒を、イズは火炎を吐いて対処する。

だが、イズの炎がいくら高熱であつても高速で飛ぶ棒に対しては焼き尽くせなかった。

イズは炎の中から飛び出てきた棒を見て咄嗟に体を半身に反らし、それを避ける。

守衛はそれを待っていた。

イズの意識が守衛から棒に移ると、必然的に守衛を見逃すことになる。

守衛はそれを狙い、イズが対処しにくそうだった投擲攻撃を繰り返した。

それが功を奏し、守衛はイズの背後に回り込むことができていた。

イズは守衛の位置に気づいておらず、必死で守衛の姿を探している。チャンスだと守衛は確信し、全速力で距離を詰め寄る。

イズは守衛が踏み出した音に敏感に反応して背後を振り返ろうとするが、遅かった。

守衛はすでに棒を構えてイズに突き立てる準備ができている。狙いは膝の裏だ。関節への集中的な打撃は激痛を生むし、加減によっては脱臼させることもできる。

『おらあ！』

守衛は渾身の力を込めてイズに棒を突き出す。

棒の先端が狙いの部分に衝撃を与える、

刹那。

守衛の視界の横から何かが遮るように現れた。守衛は驚くが、全身の力を込めた攻撃は止めることができない。

繰り返された棒はイズの膝裏をつく前にその何かを突いた。渾身

の力が込められていた棒はそのまま突き破り、代わりに勢いを殺されたために止まってしまった。

守衛は横槍を入られた何かを見た。

柔らかくて弾力があるが、簡単には破れない材質。

あちこちに穴が開いている何か。

所々に浮いている血管と、棒を突き刺したところから新たに吹き出していた鮮血。

それは、イズの翼膜だった。

イズはすでに使えなくなっている翼をさらに犠牲にして、守衛からの攻撃を防いでいた。

突然の敵の対応に守衛は視界をほとんど奪われ、何が起きたか状況を掴み切れていなくなっていた。

イズはその隙を突いた。

握り拳を作り、翼膜に開いている穴に向かって繰り出す。

翼膜によって死角だらけだった守衛の顎下にイズの拳が当たり、その場に叩きつけられた。

顎下に衝撃を与えられた守衛は脳を揺さぶられ、抵抗する力を出せないまま昏倒した。

二人の勝負は、イズの拳によって幕を下ろされた。

守衛を振り返りにしたイズは、目の前に倒れる陸猩族を見下ろしていた。

やはり、今の自分になら何でもできるのだ。
錯覚ではなく、事実としてイズの力量が実証された。

目の前の戦果にイズは、自分にはこれだけのことができるほどの力があるのだと思った。

敵を倒すことができる。敵の集落を襲うこともできる。これだけの力があつて、できないことなんてあるだろうか。

イズは自らの力に陶醉していた。

目の前に倒れる守衛が簡単に起き上がれないよう、追い打ちをかけようとした時だった。

『待て！それ以上手を出すな！』

声のしたほうに振り返ると、一騎打ちの一部始終を見ていた守衛の相方が声を張り上げていた。

『汚らわしき竜の民よ！早くクレムから離れる！』

見ると相方の手には睡蓮が握られている。クレムという名前に聞き覚えはないが、おそらくは目の前に倒れている陸狸族の名前だろうとイズは推察した。

イズは相方に対してどう対処しようかと考えていた。

相方の要求を吞んでクレムから離れば何もされないかもしれないらしい。

だがクレムのように、ここで逃すところまでも追跡してくるような気もある。

どうしようか。イズには闘って勝てるだけの實力はある。

ならば、どう転んでもいいように、守衛同様ここで潰しておくべきだろうか。

そこまで瞬時に考えを巡らしたイズだが、そのわずかな時間も相手にとつては長かつたらしい。相手はイズに向かって睡蓮を投げつけた。

イズは今さらの攻撃と、余裕を持たせながら火炎を放射してそれを焼き払った。火炎はそのまま相手のほうに飛ばされていくが、相手はそれを回避する。

当たるものがなくなった炎はすぐに勢いがなくなるわけではなく、惰性でさらに置くまで飛ばされていく。

その先には、イズがまだ確認していない住居があった。

『！』

炎はその住居に迫り、止まりそうな勢いで緩やかに住居を焼き始めた。

イズは背筋が氷りそうな思いになった。まずい、という判断。嫌な予感。

イズは相手と対峙していることも忘れて、今さっき燃え始めた住居のもとに急いで近寄った。相手もイズの態度の急変に戦闘せず、済みそうだと直感で思い、クレムのもとへ駆け寄った。

すでに屋根のほとんどに火が回っており、壁も反対側まで火が回りそうだった。

イズは焦る気持ちを止められず、夢中になって壁に爪を立てる。燃える木はやはり本来の堅固さを失ってはいるが、燃えて間もないために若干の強度が残っている。切り崩すのに予想以上の時間がか

かり、それがさらにイズを焦らせる。

手が入るくらいの大きさが空くと、イズはそこに手を入れてこじ開けるように壁を力ずくで開いた。

中にはまだ火が回っていなかったが、イズが外との出入り口を作ったために瞬く間に勢いを強め始めた。

イズは火の粉を浴びながら住居の中を見回す。

最初に目に飛び込んだのは、頑丈そうな木材で作られた檻だった。向こう側には椅子代わりの丸太と、本来の出入り口であろう扉がある。

そして、檻の手前を見た。

手足を投げ出すように横になっている、人間という種族がいる。

イズにとっては馴染みのある顔が、今はこの惨事の中でも固く目を閉じている。

そこに、香乃が、倒れていた。

いつかこんな日が来るんじゃないかと心配で心配で夜もろくに眠れなかったぐら
目を覚まさない香乃を見て、イズの目の前は真っ白になった。

自分の目に映るものを現実として受け入れることができなかった。

香乃が、横たわっている。

こんなに騒ぎになっているのに、こんなに火が燃えて暑くなっているのに。

瞼が開く気配がない。

イズは香乃の体を抱え上げた。

そつと、イズの爪で傷つけないように。

これ以上、傷が付かないように。

間近で香乃の顔を見る。

どこにも力は入っておらず、その体すべてをイズの腕に預けている。

手の平から香乃のぬくもりを感じる。だが、体を揺すっても目を覚まさない。

まるで、死ん

目の前で力無く横たわっている人物に、すべての感覚が向けられている。なのに、何も考えられない。

考えて、答えを出すことを全身全霊で拒否している。

住居は飽きることなく燃え盛り、次々と燃え殻へと変えていく。

炎が取って代わるその行程は、イズにとってはあまりにも静かだった。

現実として受容できなくなっている光景。

これが夢ならば、どれだけ救われていただろうか。

これが夢だと思い込めるのなら、どれだけ受け入れられただろうか。

これは夢だと思い込みたい。

心の底から現実逃避したい気持ちになってくる。

夢だと認識しようとするほど、それは紛れもなく現実だという証左に成り上がっていた。

目の前は現実。

出来事は事実。

香乃は、イズの手で、

死んだ。

背中が痛む。

新しく開けられた翼の傷が悲鳴を上げている。

それよりも痛いのは、カノが死んだという事実だった。
しかも、その死因はイズのせいである。イズの炎によって、香乃

は命を落とした。

すべての原因が自分にある。他の誰でもない、自分のせい。自分のせいで、守ろうとしていた人の命を絶った。

悲惨な現実を前に、イズの心は壊れた。

思わず天を仰ぎ、声も出せずに泣いた。悲痛な涙がこぼれ続ける。泣いて目の前の光景が変わるわけではない。目を背けたくなる事実が直るわけではない。

でも、イズには泣くことしかできなかった。泣きたくないのに、あとからあとからと止むことなく悲しみが溢れてくる。

自分がもつとしっかりしていれば。

陸狸族なんかに負けないくらい強ければ。

香乃を守るくらいの力があれば。

悲しみとともに後悔が一緒に押し寄せてくる。

いくら拒否したくても、気持ちの正直な部分が嘘をつきたがらない。い。

この取り返しのつかない状況を作り出した原因は、すべて自分にあるのだ。

未熟な自分が生み出した結果。
いくら弁解しても意味を成さない現実。

「あの時こうしていれば」と思い、同時に「あの時どうしてそう
しなかったのか」と自責の念に駆られる。

すべての現実を前にしたイズは、すべてが嫌になった。
目の前で起こったことも、起こした原因として関係している陸猩
族も、陸猩族がただけで何もできなかった自分自身も。

何もかもが嫌いになった。

嫌いなものを否定しなくなった。

せめて、自分の心がこれ以上荒まないようにしたかった。

自分が見たくないものの全部を消し去ってしまいたくなった。

そうしなければ、いや、そうするまでもなく、イズの心は耐えら
れなかったから。

『そこまでだ!』

イズの慟哭が響くなかで、空気を打ちのめすような声が響いた。
声の主は、陸猩族のリーダー格であるノルバノのものだった。

『よくも我等の住み処だけでなく、我が同胞にまでも手を出してく
れたな…』

ノルバノの声は怒りで震えていた。自分の計画通りに事が進まなかったことだけが理由ではない。自分達の寢床を荒らされ、何よりも同胞から負傷者を出させたのだ。

同族を統括する者として、今の事態は決して見逃すわけにはいかなかった。

『見る！貴様にはもう逃げ場はない！好き勝手に暴れるのもここまですだ！』

イズの周囲にはいつの間にか大勢の陸猩族によって取り囲まれていた。イズがこれまでに二度対戦しているうちに、ノルバノは反撃の態勢を整えていたようだった。

今イズを取り囲んでいる陸猩族の数は、最初にイズと香乃を包囲した時のほぼ倍が揃っていた。いくらイズ個人の戦力が高いといえども、飛行能力が失われていては抵抗することも逃げることも敵わない差となっている。

イズは、全ての逃げ道を失っていた。

だから、何だというのだ。

ノルバノの包囲宣告を受けても、イズにとってはどうでもいいことにしか聞こえなかった。

数で負けていることなど事の始まりから承知している。今さら取

り囲まれている事実を聞いたところで、遅かれ早かれ起きることが起きたのだから驚くことではない。

それに、イズは飛ぶことができない。飛行能力を失っているのだから、逃げることは叶わないことくらい理解している。徒歩で逃げ切れる勘違いな自信を持つつもりもない。

すべて分かりきっている状況だというのに、ノルバノの自信に満ちた声が気に入らなかった。この状況下でさえ、イズはノルバノの支配から逃れてはいないのだと誇示しているかのように聞こえた。

確かに、逃亡する力をイズは持っていない。

だが、何も抵抗せずに終わるつもりなんかなかった。

目の前の敵たちに一矢報いてやりたい。

どんな方法だっていい。手段なんて構うものか。

同族が二人も敗北したというのに、しつこく捕縛しようとする陸猩族の執拗ぶりが気に障った。

香乃をこんな目に遭わせた陸猩族全員が、憎らしかった。

香乃を不幸に陥れた元凶を、自分が動けるうちに壊したかった。

自分たちから生きること奪っていくこの世界そのものを、無くしたかった。

そうだ。無くなってしまうばいいんだ。

こんな世界なんかいららない。

傷ついてばかりで、傷つけてばかりで、つらい思いしかないこんな世界なんか、最初から無ければよかったんだ。

香乃だって巻き込まれることはなかった。アイツだってそうだ。

最初から無ければ、みんな苦しい思いをしなくて済んだんだ。

こんな世界、有るべきじゃなかったんだ！

イズは、自分の中で無限に溢れ続ける悲しみが、怒りに変わった。

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

イズの巨大な咆哮。

長く、低く、響く。

森の中をデタラメに鳴り響く声は、大地を震わせ、幾千幾万もある巨木を振動させた。森の中を住処とする生物を叩き起こされ、悲鳴にも似た鳴き声があちこちから聞こえてくる。震撼は大気にも伝播し、それを聞いた鳥たちは次々と空へ逃げていく。

腹の底から全身へ伝わる叫声。ビリビリと響き、鼓膜ははち切れそうになる。

声を聞いているだけなのに、全身が震える。
体が震える。

まるで、恐怖しているように。

皮膚に、筋肉に、骨に、内臓に、脊髄に。

体を構成するすべてを震わすその咆哮に、陸猩族たちは目の前の獲物を恐れ始めていた。

イズの声が途切れたあとにも、陸猩族たちの鼓膜にはイズの怒りの声が響き続けている。

声が脳裏を離れない。

恐怖が消えない。

炎がすべてを飲み込もうとしている中、動こうとする者は誰もいない。

状況は、たった一声によって大きく変わってしまった。

数なら陸猩族のほうが圧倒的に多い。手には武器もある。多少の差はあれど戦闘経験もある。

状況的に有利でしかない陸猩族は、眼前にそびえる怪物にいつしか部族の誇りである使命感を削ぎ落とされていた。

そして、リーダー格であるノルバノでさえ、恐怖の芽は宿っていた。

数を揃え、陣を組み、絶対包囲を配置することに成功した瞬間、事態の軍配がどちらに挙がるか確信した。否、敵のほうに挙がるほうがおかしいのだ。何はともあれ、これで事態の收拾がつくと思われた。

その矢先だった。

天竜族の全力の叫び声を聞いたただだ。それ以外は何もない。そのはずなのに、一体どうして自分は目の前の天竜族に恐怖しているというのだ？

何故獲物を握る拳がこんなにも震えるのだ？
何故大地を踏みつける両足にこんなにも力が入らないのだ？

一体自分は どうしてしまったというのか？
自分の前にいる奴は、一体何なのだ…！

ノルバノは自分にも理解できない恐怖があることに困惑していた。さつきまで矮小に見えていた天竜族一頭が、今は触れてはならぬ邪神に見える。

『お前らがいたせいで…』

咆哮後静かにしていたイズが、ぽつりと呟いた。
森の中に静寂が戻ったかと思った途端の、突然の独り言だった。

前触れのない声に、陸狸族の体はびくりと跳ね上がった。

先程の叫声のせいで、イズの声は陸狸族の恐怖の種になっていた。

そして、イズの発言の内容。

独り言のようだったが、確かにはつきりと“お前ら”と言っていた。

陸狸族に意識を向けて。

まだ終わらない。

恐怖はまだ終わらない。

その場にいる陸猩族は、これからの展開を悟った。

『お前らなんかが、いたせいで…！』

イズの歯ぎしりの音がやけに鋭く聞こえた。

とても小さな音でさえ、陸猩族たちには敏感になっていた。

イズの怒りがひしひしと伝わる。イズの悲しみがじわじわと伝わる。

陸猩族たちの住居を焼き落としている炎が、彼の感情そのものに錯覚してしまう。

イズは息を大きく吸い込んだ。

炎を放射するつもりだ。誰もがそう予感した。

だが、逃げようとする者はいない。

その場にいる者は全員、足が竦んでいた。

逃げようとしないうちに、イズは狙いを定める。

すべてが憎い。全員が嫌いだ。

その中でも、特に。

香乃とイズをこんな目に遭わせた首謀者。

イズを取り囲む陸猩族の群れの中に、独特の雰囲気を持つ標的を見つけた。

そして、イズは、

全身の力を振り絞って、巨大な炎をノルバノに向けて吐き出した。

今までにない火力。

触れる物すべてを焼き尽くすであろう、その熱量。

見たこともないその大火球が自分へ向かってくるのを前に、ノルバノは逃げることで以外のことを考えていた。

父も、こんな気持ちだったのだろうか。

空に住む異種民族に焼き殺されそうになった時、こんな気持ちだったのだろうか。

迫り来る大火球の熱が肌で感じられるようになり、我に返ったノルバノの恐怖は絶頂に達した。

『うわあああああああああ！！』

逃げることも許さなかった炎は、ノルバノを含め陸狸族十数名のいた所に着弾した。

凝縮された熱が膨れあがり、触れるものすべてを灰に変えようとする。

ゆだるような熱さが辺りに撒き散らされる。大火は強い風を生み、その場にいる者たちを煽った。

他者の妨害を許すこともなく、イズの火炎は目標を焼いたのだ。

焼かれずに済んだ陸狸族たちは、ノルバノという指揮者が葬られたことにショックを隠せないでいた。自分たちの代表が、一族の誇りともいえるあのノルバノが、焼き殺された。

自分たちが動けば助けられたかもしれない。後悔はすでに生まれているのに、事実として何も手を出すことができなかった。

炎の勢いがわずかに収まる。

なけなしの同情のように、炎の規模が少しだけ小さくなる。

火が小さくなることで、火の中の様子がわずかに見えるようになる。

イズの炎が燃えた跡には、

一頭为天竜族が立っていた。

最悪な再会

全部を焼き払うつもりだった。

陸猩族も、他の生き物たちも、この広大な密林も、目に入る物を片端から消し去るつもりでいた。

すべてが憎かった。

自分を、そして香乃を追い詰めたこの世界に対して、怒りを抱かずにはいらなかった。

その後のことなんてどうだって良かった。

ただ、今この瞬間にあらゆる物を壊せるのなら。

どんな目に遭おうが、それは自業自得だと責めたい。

イズたちをこんなにも苦しめた相手が悪い。

自分がこんなにも乱暴に反抗したって当然のことだと思った。

反抗することが許されないのであれば、それすらもできないこの世界をもっともつと憎んでしまっただろう。

だから、イズのしていることは正しい。

陸猩族がイズから報復を受けることは正しい。

この夜のすべてが消えて無くなっても当然の結果である。

そう、自分に都合のよい考えで陸猩族を襲った直後のことだった。ノルバノに向かって炎を放射し、怒りのほんの一部が解消されたと思った。

その燃えた亡骸を眺めれば、何の後悔も残さずに暴れ続けることができるような気がした。

だが、炎の中に見えたのは、ノルバノの焼死体ではなく、同族の姿だった。

『止まれイズトリカム！これ以上の攻撃は、私が許さない！』

ワニのように前へ突き出た鼻と口、コウモリのような翼、巨大な体と太い尻尾。

イズと同じ特徴を持った体格。

そして、腕白さが抜け落ちた代わりに漂う威圧感。動作一つ一つに重みを感じられる身のこなし、無邪気さの欠片もない目つき。体のあちこちに薄く残る、擦り傷の跡。

同じ姿形をして、自分の名前を呼ぶ天竜族。

どうして…。

どうして君がここにいるんだ…。

『シルゼーロマ…！』

かつては友達と思っていた彼女が、そこにいた。

『なんで…こんな所に…』

イズは思わず訊いていた。

いや、そんなことを訊きたいんじゃない。そう訊かざるを得ない気持ちになっていた。

本当ならば、予想もしなかった増援に喜ぶべきだろう。それも加勢に来た者が旧友であれば頼もしい限りだ。

積もる話もある。互いに懐かしさを共有して、いつか感じていた居心地の良さに浸りたくもなる。

だが、イズにとっては最悪の瞬間だった。

自分が暴れているところを見られた。悪いことをしているところを見られた。非難されるべき行為を、よりによって知り合いに見られた。

シルゼーロマの登場が、激情していたイズを一気に後悔の奈落に突き落とした。

両者の様子を見ていたノルバノは、現状がどうなっているのか理解できずにいた。

捕虜のイズトリカムという天竜族と目の前に現れたシルゼーロマという天竜族は知り合いのようではある。敵の仲間が加わるとなると、一頭でも手を焼いていた相手がさらに抵抗が激しくなる。

しかし、目の前の天竜族は自分たち陸猩族を庇い、さらに捕虜の天竜族を説得し始めている。

この様子を見るに、仲間の加勢と捉えるのは性急なのかもしれない。むしろ、目の前の天竜族は自分たちにとっての増援なのか？

ノルバノは不本意と感じながらも、シルゼーロマに尋ねた。

『貴様、一体何のつもりだ？なぜ我々を助けた？』

当然の質問を投げかけられたシルゼーロマは、何も応えず、肩越しにノルバノを一瞥しただけだった。

一瞬交わした視線。
瞳に秘められた光。

そこに宿っていたのは、怒りのようどこか違う熱意だった。信念を意地でも曲げない強い意志が、彼女の目つきを形作っていた。

シルゼーロマとノルバノが視線を交わす様子を、イズは憤慨して見ていた。自分の怨恨の源である陸猩族に対して、彼女は敵視するどころか自分から守った。香乃が死んだのは、もともと陸猩族のせいだというのに、同族が彼らを庇ったのだ。

しかも、彼女はただの天竜族ではない。治国組織の所長補佐を務める秀才だ。天竜族を率いる者として数えても遜色ない彼女が、自分の敵を守った。

文字通り立ちはだかった事実が、イズを納得できない思いに駆り立てた。

『シルゼーロマ！一体何のつもりだ！？』

イズは図らずもノルバノと同じ質問をぶつけていた。

同一の質問をされたシルゼーロマは、イズと向き直って冷静に答えた。

『あなたには悪いけど、彼らを殺させるわけにはいかない。だから庇ったんだよ』

シルゼーロマは、この場の状況を概ね察していた。炎上する密林と住居。取り囲む陸猩族の布陣。イズが抱える異世界の民。

それらを観察して、大方、イズが感情のまま暴れ出したのを陸猩族が総出で食い止めているのだらうと類推した。

理由が分かっているからこそ、シルゼーロマは止めなければなら

なかった。

これ以上、イズに陸猩族を傷つけさせてはならなかった。

一方、返事の内容に、イズは理解を示せなかった。

イズにとって、陸猩族は香乃の敵だ。どんな理由があろうと、いかなる過程があろうと、彼らがいたせいで香乃は命を落としたのだ。失わなくて済んだ命。落とすはずがなかった命。

陸猩族とは何の接点もない香乃が、なぜ死ななければならなかったのだ。

口封じとでも答えるつもりだろうか。

もしその通りならば、あまりにも酷すぎる。

陸猩族は香乃を死に追いやった。

言い訳なんて許さない。自分達がしたことを思い知らせたかった。だから、イズは暴れているのだ。

なのに、シルゼーロマは明確な意志をもって陸猩族を助けた。その事実、イズに紛れも無い不信を抱かせた。

なぜ。

どうして。

なんで。

『何を……何を言っているんだよ！シルゼーロマ！』

訳が分からなかった。

シルゼーロマの行動も、その狙いも、イズには理解の外だった。

『なんでだ！？そいつらなんか助けるなよ！』

イズの愚直な疑問に、シルゼーロマは明朗に答える。

『彼らを殺させるわけにはいかない。それだけだよ』

真つすぐな目で返された言葉だったが、イズは納得できなかった。理由と呼ぶには曖昧すぎる理由。核心を隠しているような理由。それを言おうとしないシルゼーロマの態度。

イズの我慢が限界に達した。

陸猩族に向けていた憎しみが、そのままシルゼーロマに向けられた。

『もういい…もうたくさんだ…！』

幼なじみだろうと関係ない。邪魔をするなら退かすまでだ。

『そこを、どけえっ！！』

イズは息を大きく吸い込み、先刻のような業火を放った。

灼熱の球が猛烈な速度で中を走り、近づかれた野草や木の葉が燃え散る。

大火球がシルゼーロマに迫る。

攻撃されたシルゼーロマは、微塵も焦る様子を見せずに、その場で大きく息を吸い込んだ。同時に、一対の翼を大きく広げる。

吸い込んだ空気を一気に吐き出すように、シルゼーロマは口から火炎を吐き出した。その熱量はイズのそれに劣らない。

同時に、シルゼーロマは広げた翼を一度だけ大きく羽ばたかせた。

大翼によつて突風が生み出され、炎を後押しする形になる。

イズのがむしゃらな炎と、シルゼーロマの洗練された炎が、ぶつかった。

イズは自分の体を盾にして、香乃の体を庇う。
激突した二つの炎は籠められていた熱を一気に弾けさせる。

本来ならば怒濤の爆発はこのまま互いに返つてしまふのだが、シルゼーロマが繰り出しておいた後続の突風が爆炎の中心を叩き、四散させた。空圧を受けた炎は上空へもその熱量を向けたことで、イズとシルゼーロマに帰ってくる熱は最小限に留まった。

炎が予想とは違う動きを見せて、イズは煮え切らない思いになった。

イズの狙いは、今の炎でできるだけ多くの陸猩族を焼き払うつもりだった。

シルゼーロマが炎を止めるには同じように炎をぶつけるしかなく、それがあたりに飛び散ることだけでできるだけ広い範囲に炎を届かせるつもりだった。また、万が一彼女が炎を避けても、向かう方向にいる陸猩族を焼き払うことができる。

どちらにしてもイズの都合のいいようになるはずだった。

だが、シルゼーロマが据えておいた布石によつて、イズの予想は易々と崩された。

是か非でも陸猩族に痛手を与えたかったイズにとって、最も望まない結果が生まれた。

目の前の旧友によつて。

イズはどうあっても陸猩族を傷つけたかった。
しかし、今はそれをシルゼーロマが妨害している。

ならば……。

陸猩族の前に、この邪魔な旧友を排除する必要がある。

昔からの知り合いだからなんだというのだ。

彼女は、自分の気持ちなど知らないから、妨害する立場にいるのだ。

別に自分の気持ちなんか理解してほしいとは思わない。
理解できなくていいから、せめて自分がすることに横槍を入れないでほしかった。

イズは、覚悟を決めた。

どんな結果になろうと、邪魔する相手が悪いのだ。

今から、シルゼーロマを倒す。

一度深呼吸して、抱える怒りのすべてを相手に向けて。

接近するために両足に力を込めた、その瞬間。

「ん……………んん……………」

イズの腕に抱えられているものが、動いた。

イズははつとして、腕の中にいる人物を見る。

「まだ、だよ……。ジャムに言わないと、おコゲになるんだよ……」

その人物は少し身じろぎして、よく分からないことを呟いている。開いた瞼はまだ浅く、焦点も合っていない。

しかし、徐々に意識もはつきりしていき、緩慢な動作でイズと視線が合った。

「あれ……？イズ、どうしたの……？ふあああ……」

腕の中の人物は、香乃は、欠伸を一つするとまだ朧気な目元を擦る。香乃はまだ眠気が残っているようで、何度もまばたきを繰り返している。

「……カ、ノ……？」

香乃が意識をよりはつきりさせようと、頭を左右に振る。

香乃が寝起きの習慣にしているように、その場で腕を伸ばす。

香乃が、起きている。

香乃が、香乃が……。

死んだと思っていた香乃が、起きている！？

イズは度肝を抜かれていた。

全身の力が抜け落ち、騒動の中でも目を覚まそうとしなかったため、イズは香乃が死んだと思い込んでいた。ただの気絶であれば、今までの喧噪で起きてもよかったはずだ。それでも目を覚まさなかったのだから、時間が経つにつれて死んだという思い込みが確信に変わっていつていた。

彼女が死んだと思い込んでいたからこそ、今までの怒りが沸き上がっていた。

だが、それがなくなった今、イズの中には憤怒とは別の感情が取って代わっていた。

失ったと思っていたものが、そうではなかった事実。無くしたと思っていたものが戻ってきたような錯覚。それに伴う、強ばった体が弛緩する感情。

安堵。

今のイズは、その感情で満たされていた。

香乃は起きた時の習慣として、イズに笑顔を向ける。

「おはよう、イズ。なんか明るいけど、もう朝？」

香乃の何気ない挨拶で、イズの安堵は塵と化した。

忘れていた。香乃は今の状況を何一つ知らない。いつから気絶していたのかは知らないが、今の一言の様子だと、事が起きる始めから知らないようだった。

密林が燃えている理由も、住居が燃えている理由も、陸猩族が包囲している理由も、シルゼーロマが立ちはだかつている理由も、何も知らない。

イズにとっては、それを知られることが嫌だという気持ちになった。

自分の失敗を知られること。自分の醜態を明かされること。自分がどんなにひどい奴か伝わってしまうこと。

親しい者、自分を信用してくれる者には、絶対に教えたくない内容だった。

格好つきたい男心。心の奥底に秘められているプライドが、隠蔽という卑怯な手段を思いつかせる。

なんて言い訳をしようか。どう説明すれば誤魔化せるか。なんて釈明すれば誤解されなくて済むか。

香乃に挨拶されてから、イズはそんなことばかり考えていた。

「それに、ちょっと暑いね。……何か燃えてるような気がするけど、気のせい？」

そう言っつて、香乃が周囲を窺う。
今燃えている物。それを燃やした者。

言えるわけがない。

さっきまでの自分が、すべてを焼き尽くそうとしていたただなんてシルゼーロマの妨害がなければ、本当に完遂していたかもしれない。

旧友の名前が思考を過ぎったところで、イズは自分を疑いたくな
った。

シルゼーロマは、なぜイズを止めようとしたのか。

なぜ、自分から攻めてくるつもりもなく、ただ庇護という姿勢の
まま、イズを妨害したのか。

彼女は「イズに陸猩族を攻撃させるわけにはいかない」と言っ
た。その真意は分からない。

しかし、理由はそれだけなのだろうか。

あのままイズが暴れ続ければ、時間はかかれど、この辺り一帯を
焼き尽くしていたかもしれない。シルゼーロマ激突した時、彼女が
突風を後続にしていなければ、炎は確実に自分たちに返ってきていた。

そうであっても、天竜族であるシルゼーロマは温度変化に耐性があ
るため、効かない。イズも同様だ。陸猩族には危険だっただろうが、
それぞれで逃避できるのなら被害は最小限に抑えられただろう。

では、香乃は？

急激な温度変化に適応できず、自力で回避行動も取れない彼女は、
どうなったのだろうか？

イズが身を挺して庇ったかもしれないが、穴だらけの翼では完全
に守ることなどできなかったのではないか。

シルゼーロマが機転を利かせてくれたからこそ、香乃に危険が迫らずに済んだのではないか。

シルゼーロマが来てくれなかったら、イズの身勝手な怒りのせいで香乃は本当に命を落としていたのではないか！？

自分がしでかしたことを、イズは思い知った。

自分勝手な感情をぶちまけたせいで、どれだけの危険があったのか、今さらながらに気づいた。

腕の中の香乃が不思議そうに周囲を見回し、そして、ごく自然に、イズに視線を戻す。

綺麗な目。

疑いなく向けられた瞳。

イズは愕然とした。

この腕に抱える人物を、イズは自分の手によって殺めようとしていた。どんな言い訳も通じない。失いたくない人物の命を自分で奪いかねなかったのだ。

（あ……ああ……！）

香乃から向けられた視線が痛い。怖い。彼女を抱える腕が震える。香乃の体温が腕に伝わってくる。直に触れているその温もりが、イズの後ろめたい心に突き刺さってくる。

失われずに済んだ、大切な人。無事だった、守りたかった人。嬉しいはずなのに、イズは今すぐにでもこの場から逃げたい気持ちになった。

『…！』

イズの様子を観察していたシルゼーロマは、今頃気づいて戦慄している彼の変化にいち早く反応した。

必要最低限の可動域で翼を羽ばたかせ、イズに向かって滑空する。

イズとの距離が射程内に入ると、飛んだままその場で体を縦に回転させると同時に、尻尾に力を込める。強靱な筋力と遠心力によって繰り出された尻尾は、シルゼーロマの狙い通りにイズの頭部に直撃した。

『がッ！？』

一瞬だけ呻いたイズだったがそれだけで、その場で昏倒した。

「ちよっ……きゃあ！」

イズに抱えられていた香乃は、ごく自然にイズの体に巻き込まれた。幸い下敷きにはなかったが、地面に投げ出されたような形になった。

地面に打った肩の辺りを擦る。どうやら痛みがあるだけで怪我になっではないようだ。

「痛ったあ……」

香乃にとっては、事の流れが全然分からなかった。

起きたらなぜかイズに抱えられている格好になっていて、辺りは燃えている。遠目にはたくさんの陸狸族もいて、ちらっとしか見え

なかったがイズと同じ天竜族がいた。で、なんか知らないけどイズがびっくりし始めたと思ったらもう一人の天竜族がイズを攻撃した。正直、何が何だか分からなかった。

香乃は身を起こし、今さっきイズを昏倒させた張本人を見上げる。イズと同じような輪郭に加え、牙や翼や尻尾がついている。

どこからどう見てもドラゴンそのもの。体格や顔立ちのわずかな違いや体のそこいらに傷跡があるような違いはあるが、イズと同じ天竜族に違いないと思った。

ただ、味方かどうかは不明だった。イズをいきなり攻撃したし、今現在も自分たちを見下ろしている。目の前に見せつけられる巨体に、香乃は押しつぶされそうな気持ちになる。

目の前のドラゴンが、香乃に手を伸ばしてきた。突然の動作に香乃は思わず体を強ばらせるが、その手は香乃に届く一歩手前で止まった。

「カノさん、早く私に乗ってください」

全く面識のないドラゴンがいきなり女の声で日本語を話してきて、香乃は度肝を抜かれた。

そんな様子をそっちのけで、シルゼーロマは言葉を繋ぐ。

「私は味方です。イズトリカムも一緒にここから逃げます。急いで！」

早口に話す目の前の天竜族は一刻を争うように香乃を誘う。

香乃にとって、目の前の天竜族は知らない。だが、イズの名前を知っているということは、少なくとも敵ではないような気がした。彼を気絶させた理由は分からないが、同じ天竜族なら何か狙いがあるのだろうと適当に考えておくことにした。

香乃は両手で自分の顔を叩き、完全に目を覚まさせた。そして覚悟を決め、目の前の天竜族が差し出す手の平に自身を近づけさせる。

シルゼーロマは香乃が決心を固めたことを汲み取り、彼女の体を抱え上げる。自分の背中あたりに載せ、香乃に首元を掴ませるよう指示する。

香乃がすっかり把持できたことを確認すると、シルゼーロマは倒れているイズを後ろから腋窩を抱える。

二、三度翼を慣らすと、力強く羽ばたかせた。

イズと香乃を抱えたシルゼーロマは地面から浮き上がり、それらの重量をはねのけているかのように滞空する。そしてすぐに密林の一角へと滑空した。

一連の出来事を傍観していたノルバノは、はっと我に返った。

『貴様等、何をしている！早く追え！このまま生かしてなるか！』

放心していた陸狸族は、ノルバノの鶴の一声によって再び動き始めた。

目指すは、シルゼーロマが消えていった密林の入り口。

斯くして、今宵の逃亡劇が始まった。

使命の味方よりご案内申し上げます

空を覆う雲は変わらずに色濃い厚みを保っている。星の明かりは時折雲の隙間から漏れる時でしか注がれることはない。

その時折の光によって、鬱蒼とした密林に明かりが届けられていた。

生ける者の眠りを包む常闇。しかし完全な闇はならず、気まぐれに光を忘れない。

活動するには不向きな密林の中を、香乃とシルゼーロマは飛び抜けていく。

香乃はシルゼーロマの首元に腕を回し、振り落とされることがないように懸命に掴まっている。シルゼーロマもまた、香乃が落ちないように飛行の姿勢に注意して飛んでいた。

シルゼーロマの両腕にはイズが抱えられている。頭部への一撃がうまく決まったようで、ずっと気絶している。

「大丈夫でしたか？ カノさん」

不意にシルゼーロマが尋ねた。いまだに違和感を持ったままの香乃は、狐につままれたような気持ちでぐっと堪え、平常心で返事をする。

イズの時もそうだったが、日本人どころか人間でない者が自分と同じ言語を使っていると非常に違和感がある。日本語が流暢な外国人のグレードアップ版というか、カレーライスのほうが美味しいラーメン屋みたいな、そんな感じだ。

しかし、相手が香乃の言葉を使ってくれていることは感謝しなければならぬことだろう。彼女が意識して言語を変えてくれているからこそ、香乃は不便を感じなくて済んでいるのだ。

香乃はなんとか沈着に事実を受け止めようと気持ちを入れ替えた。

「はい、私は大丈夫です。でも、イズが……」

香乃は返事をする。背中に乗せてもらったままでは格好がつかないが、声をかけられて何も返さないわけにはいかない。

だが、自分を背中に乗せているこの天竜族はイズを攻撃した。素直に礼を言う気持ちになれなかった。

「彼には痛い目に遭ってもらいましたが、仕方がなかったのです。理由は追々説明します」

暴力を振るわれなければならない仕方なさというのは何だというのか。香乃はシルゼーロマの目論見が読めなかった。

だが、今はその他にも優先すべきことがある。今の香乃とイズは、シルゼーロマにかかっているのだ。

曖昧な説明をした理由は、きっと陸狸族のことだろう。

彼らが見ている前で逃げ出したのだ。このまま何事もなく済むはずはない。

いつまで逃げ切れるのか、いつ追いつかれるのか。逃げる側としての不安を、香乃は抱かずにはいらなかった。

「……まだ、あなたに名乗っていませんでしたね」

これから起こると予想される事態に口をつぐんでいた香乃は、シルゼーロマから話しかけられてようやく思考が現実に戻った。相手がいるというのに、それを無視して不吉に捕われるなんて、なんて自分勝手だろうと反省した。

そんな香乃の心境を察し、シルゼーロマは香乃の返しの言葉をもらうより先に話した。

「私はシルゼーロマ・エンテツフォ。天竜の国で治安組織の指揮官補佐を務めています。宜しければお見知り置きを、カノさん」

シルゼーロマと名乗った天竜族の女性は、適度な堅苦しさで自己紹介をした。

天竜族の女性が名乗ったので、香乃も自己紹介しようと思った。

だが、ふと思い出す。

シルゼーロマはさつきから香乃の名前を呼んでいる。彼女に名乗った覚えはない。

「あの……私は、榎本香乃といいます……」

香乃は釈然としなかったが、礼儀を優先して一応名乗った。

「エノモト・カノさん、ですね？よろしく願います」

シルゼーロマは初めて聞いたかのような振る舞いだ。

「ちょっといいですか？どうしてさつき、私の名前を知っていたん

ですか？」

香乃の質問に、シルゼーロマはさも当然のように答えた。

「先程、イズトリカムがあなたをそう呼んでいたからです」

先程……というのは、陸猩族に取り囲まれていた時のことだろうか。その頃の香乃は気絶していたため、イズとシルゼーロマとの間にどんな会話があったのか知らない。

そもそも、イズとシルゼーロマはどのような関係なのかも、香乃は知らないままだった。

「シルゼーロマさん、あの……」

「私の呼称に敬称は付けなくて結構ですよ。皆そう呼びます」

「……シルゼーロマは、どうしてこんな所まで来てくれたんですか？」

香乃の疑問に、シルゼーロマはやや唸った。

「カノさんとイズトリカムを連れ戻すためです。誰の命令ではなく、私の独断ですが」

シルゼーロマは答えるが、真っ当すぎるためにかえって不明瞭さが浮き出ている。

香乃はそのあたりを訊いてみた。

「でも、天竜族にとっては、雲の下は立入禁止だってイズが言っていましたよ？そんな所に、治安組織の指揮官レベルなあなたがたつた

一人で来るものなんですか？」

香乃の鋭い指摘に、シルゼーロマは感嘆した。
族長から知能の高い種族だということは聞かされていたが、成る程推理が的確だ。

「……その通りです。実は、カノさん達が雲の下に降りた事实は、町の外周部に住む同族からの目撃情報から知ったのです。お恥ずかしいことに、今夜はカノさんを歓迎する宴をご用意して、準備のために外部監視が手薄になっていました」

香乃がこの世界に連れてこられた理由は、天竜族の祭に参加してもらったためだ。行事のために、多くの天竜族を割いて準備しているのだろう。

香乃とイズはその忙しい中を誰にも言わずにこっそり抜け出してきたのだ。目撃者がいたとはいえ、すぐに連れ戻されなかっただけでもおかしくはない。

「目撃情報を聞いた私は、手遅れになる前にここへ急行しようと思いました。しかし、十分な照明がない上に、大した特徴がない樹海の中からカノさん達を見つけ出すのは困難を極めました。ですが、イズトリカムが吠え上げたことで大まかな位置が分かり、樹木や陸狸族の住居を燃やしたことで煙が見え、ようやく追いつくことができました」

途中の出来事は香乃の身に覚えがないのだが、それもまた自分が気絶していた時のことなのだろう。シルゼーロマが話すように、香乃とイズを発見することになりの搜索時間を費やしたのだと察した。

しかし、いくつか腑に落ちない点がある。

天竜の国に連れ戻すために助けに来たという、シルゼーロマの話、イズを気絶させるという、彼女が取った行動、納得するにはどうにもしっくり来ない。

それに、香乃が目を覚ました瞬間の、あの状況もまだ分からないままだ。

どうして陸猩族の住処が火の海に変わっていたのか。気絶していたとはいえ、香乃が無関係だと決めつけられなかった。

「シルゼーロマは、私達を助けに来てくれたことは分かりました。でも、どうしてイズを気絶させたんですか？今こうやって運ぶ手間になることくらい、あなたには予想がついていたでしょ？」

シルゼーロマの両腕にはイズが抱えられている。彼女は隠そうとしているが、香乃が乗っているのも合計して、飛行の負担になっている様子が窺える。

「イズトリカムをあのままにしておくわけにはいかなかったのです。こちらの言葉も聞き入れられないような状態で、協同して脱出するのは難しいと判断しました」

「あのまま……？」

香乃が目を覚ました直後のイズは、うる覚えだが、なんだかひどく驚いていたような気がした。同時に、今まで遇ったことのないような怖い物を見たような表情でもあったような気がする。

化粧でも崩れたのだろうかと思った香乃は顔をぺたぺたと触りたかったが、両手が塞がっているので諦めた。

「イズに、何があったんですか？教えてください！」

香乃は事情を知っているかもしれないシルゼーロマに訊いてみた。迫るような剣幕で質問する香乃に、シルゼーロマは質問で返した。

「私がお教える前に、まずは私が来るまでに何があったのか、教えていただけますか？あなたが途中で気を失っていたのは知っていますので、最後に見たところまでで構いません」

香乃はシルゼーロマに事の流れを話した。

とは言っても、シルゼーロマの言う通り、香乃は途中から気絶していた。また、香乃にはこの世界の言葉が分からないので、イズとノルバノが話していた内容までは聞き取れなかったことを白状しておいた。

イズと出会い、部屋で話をしたこと。

落ち込む香乃を励まそうとイズが外へ連れ出してくれたこと。

香乃の提案で雲の下へ行ったこと。

降りた森の中で陸狸族に拉致されたこと。

ノルバノと話したあと、木の実をぶつけられ、そのあとの記憶がないこと。

全てを嘘偽りなく話した。

「カノさんがぶつけられたという木の実ですが、おそらく睡蓮ですね」

「すいれん？」

「中身に揮発性の高い果汁が内包しており、それには睡眠作用があるのです。陸猩族はそれを使って狩猟することがあると聞いたことがあります」

「へえー、便利なモノがあるんですねー」

香乃はぶつけられた時のことを思い出し、心なしか額がひりひりした。

「ごめんなさい。全部私のせいなんです。イズに、雲の下に行こう、なんて言ったから……」

「いえ、お気になさらないください。無事で何よりですし、正直に話してもいただきました。それに、事情を聞いて、私も合点が行きました」

そう言ったシルゼーロマは一度大きく羽ばたき、飛ぶ速度を上げた。

「……私も、事情の全てを知っているわけではありません。お話ししたように、私はいわば乱入者ですので、直接見ていません。飽くまで私個人の推察となりますが、よろしいですか？」

事実を元にした謙虚さで前置きされるが、香乃はそれでも構わないと答えた。今は掴めるなら藁でも葦でも良かった。

それに、天竜族は理解力が高いことを知っている。肩書きや言葉遣いからエリートだと分かるから、信頼してもいいだろう。

香乃の縋るような態度に杞憂を感じたシルゼーロマは、最初から教えるつもりで話す。

「カノさんとイズトリカムが別々の場所で監禁され、カノさんだけは眠らされた。おそらく、そのあとでしょうね。イズトリカムが暴れ出したのは」

シルゼーロマの口から出た言葉に、香乃は耳を疑った。

「あ、暴れた！？イズが？なんで！」

衝撃を受けた香乃は、言葉が纏まらないまま疑問を吐き出した。

「正確な理由は私にも分かりません。ただ、彼が陸猩族の住む場所で力のままに暴れ、彼らの住処を焼いたのはイズトリカムで間違いありません」

「そんな、どうして……！」

香乃は予想もしていなかった顛末に困惑せざるを得なかった。シルゼーロマに力無く抱えられているイズが、どうしてそんなことをしたのか。

イズを心配し始めた香乃の様子に、シルゼーロマはある可能性を有力視した。

「……確証がないまま考察を他者に話すのは私の流儀に反するのですが、」

シルゼーロマは話しづらそうに切り出す。

「イズトリカムが暴れた理由は、カノさんだと思います」

不明だった理由の可能性に自分自身が拳がり、香乃は不意打ちを受けたように驚いた。

「ど、どういことですか？」

「気の弱いイズトリカムがそう簡単に乱暴な手段を取るとは考えられません。暴れたくなるほどの理由があつたと思えるのが筋です。その理由が、一番近くにいたカノさんではないかと思つたのです」

説明されるが、香乃にはさっぱり飲み込めなかった。

「彼はあれでも下手に責任感が強い奴です。自分が雲の下に連れてきたのに、カノさんに万一のことがあつたらと思ひ、居ても立つてもいられなくなつたのでしょう。いくつかある方法の中で、イズトリカムは力ずくで助ける手段に決めたのかと」

「だからって、何も住む場所まで焼いただなんて……」

香乃は不思議がつているが、シルゼーロマにはそれに関わる可能性を考え出していた。

シルゼーロマがイズに追いついた時、彼は香乃を大事そうに抱えていた。我を忘れ、怒りを剥き出しにしていた。

まさかとは思つが、イズは麻酔という言葉を知らなかったのではないだろうか。

中枢神経を抑制した睡眠状態は外からの刺激を加えても覚醒することは稀で、呼吸を観察しなければ死亡したと誤認することもある。

そんな可能性の一つを、シルゼーロマは思いついていた。

「……それだけ、彼にとっては大きなことだったのかもしれませんが、ただの可能性でしかない。何の確信もない。それ故、シルゼーロマは香乃にその可能性を話さなかった。

イズが無知であつたという可能性は、確信がないまま話すのは無礼であり無責任でもある。

香乃に対してではなく、イズ本人に対して、だ。

「カノさんがノルバノから聞かされたように、現在の天竜族と陸猩族の関係は劣悪です。数の多少にかかわらず、鉢合わせれば争いが起きるのは目に見えていました」

「……それが、“手遅れ”ですか？」

香乃はここぞとばかりに確認した。

シルゼーロマの話の中にあつた、他の疑問点。聞いたところだと重要そうなのに、具体的な内容までは話されていなかった。

「はい。闘争状態に陥らせたくはありませんでした。死者が出なかったことが不幸中の幸いでしょう」

治安組織の統率役であるシルゼーロマは、両方の種族が衝突しないように警戒していた。今回はその責務に泥が塗られたのだ。

話の途中でシルゼーロマの声のトーンが落ちたことに香乃は気づいた。

香乃から見たシルゼーロマの印象は、使命感は強いがお堅い性格だった。今までの言動は全て自分の仕事から来るもののように感じていた。

しかし、イズの気持ちを考える一言には彼女の感情が滲み出ているような気がした。

情に流されないと思っていたシルゼーロマが見せた感情。その理由は何なのか。

香乃は聞いてみたくて、遠回しに尋ねてみた。

「……イズは、シルゼーロマが言っていた組織の一人なんですか？」

「え？違いますよ。どうしてそう思ったのですか？」

「いやー、シルゼーロマって、やけにイズを理解しているんだなって思いました」

シルゼーロマの推察には、イズの性格や傾向が含まれていた。万人の心理を推察したのではなく、イズ個人の動き方として推察していた。

香乃はそれが気になった。単なる知り合いくらいでは分からない

のではないかと思ったのだ。

イズから自分に話題が移ったシルゼーロマは、ぴくんと反応を露わにする。

「知らないのも無理はありませんね。カノさんは天竜族どころか、この世界に来たばかりなのですし」

速度を維持したまま、シルゼーロマは抱えているイズを一瞥する。

「私とイズトリカムは、昔ながらの親友なのです」

今度は予想を超えた答えに、香乃は素っ頓狂な声を上げた。

「えーっ！親友なんですか！？」

「もっとも、彼はどう思っているのかは知りませんが」

「……なんか妙な言い方しますね？イズはそう思っていないんですか？」

「確認したことも、誓いを交わしたこともありませんから」

「あー、だから躊躇いもなく頭をがつんと殴れたワケですか」

「これで嫌われてしまったかもしれませんね」

シルゼーロマは自嘲する。彼女から冗談を聞かされるとは香乃は思わなかった。

シルゼーロマと話をしていると驚かされるばかりだった。

そもそも、香乃がイズ以外の天竜族に会うのはこれが初めてなのだ。

イズが話さなかったこと、イズが知らなかったことを聞かされる。この世界をまだ一握りも知らない香乃にとっては嬉しい情報源だった。

もう少しイズのことを聞いてみたくて話そうとした時、シルゼーロマから制止の一声がかかった。

「詳しい話はまた後ほど。追いつかれたようです」

シルゼーロマの冷静な一言に、香乃の全身に緊張が走った。背後に耳を傾けてみると、確かにがさがさ何かが木々の間を抜けてくる音が聞こえたような気がした。

「速力を上げます。振り落とされないよう、しっかり掴まっただいさい」

香乃の返事を待たずに、シルゼーロマは羽ばたきに力を込めた。大量の風が後方に送り出され、推進力を生み出す。

「待って！あなた、ちゃんと見えてるの！？イズは見えないって言うだけだ！」

「ご心配なく！鍛えてますから！」

シルゼーロマはよく分からない自信に満ちた返事をした。

ますます暗闇が濃くなり、香乃にもはっきり見えるわけではない。
その中を猛スピードで飛び抜けているのだ。ぶっちゃけ怖い。

香乃は追跡されることは別の心配を抱かされながら、もう一度
シルゼーロマに掴まっている腕に力を込め直した。

ズル、即ち勝つための常套手段

追跡する側として、ノルバノは暗闇の中を駆け抜けていた。同族を引き連れ、翼ある者に劣るまいとその距離を縮めようとする。

木々の間を縫うように移動する中、ノルバノは考え事をしていた。自分たちを助けた天竜族の目的は何か。その一点に尽きる。

捕虜の天竜から渾身の炎を吐き出された時、ノルバノは死を覚悟した。避けても無駄だと悟った瞬間、全身の力が抜け落ちていた。諦観の念に駆られて矢先に、別の天竜族に助けられた。

天竜族に圧倒され、天竜族に命を救われる。怨敵を相手に、これ以上の屈辱があるだろうか。自分たちが歯向かおうとも歯が立たず、借りまで作るなど、ノルバノのプライドが許さなかった。

一方、腑に落ちない点があるのも確かだ。

あとから闖入した天竜族はなぜ我らを助けたのか。

陸狸族と天竜族の中は険悪といいていい。知らぬほづが珍しいだろつ。

消し合って当然。殺し合っのが自然。

そう思っていたノルバノには、天竜族の行動の意図が読めない。目の前とはいえ、敵対する相手が死ぬのを阻止するだろうか。

何か、他に理由があるのだろうか。

……いや、あるに違いない。あるからこそ、敵を助けるなどといった奇行に走ったのだ。

ノルバノはそう考え、ますます逃亡する天竜族を拘束しなければならぬと思った。

我ら陸猩族を助けた理由を照明できなければ、自分たちはただ敵に助けられた無力な一族に成り下がってしまう。

それだけは何としても回避したかった。

奴らをこれ以上野放しにするわけにはいかない。

陸猩族の誇りに懸けて、必ず理由を吐かせてくれる。

『全員準備はいいな？今回は特例だ。肆ノ壺を許可する。多少の傷害は構わん。絶対に逃すな』

ノルバノの命令に、一同は短く頷く。

陸猩族の数名が全体より前に出る。

彼らの肩には、先程までは所持していなかった物体が担がれていた。

視界の端で大きな翼が力強く羽ばたく。何度も何度も空気を漕ぐ。体が上下に揺さぶられる。しかしながら振り落とされたが最後と思いい、香乃は必死にしがみついている。

「い、今さらなだけどさ！どこに行こうか決めてるの！？」

腕に力を込めていたので、声にもそれが伝播してしまった。シルゼーロマの耳元で叫ぶ形になる。

「無論です。策もなく飛びは致しません。それがたとえ敵地でも、です」

対してシルゼーロマは飛行経験が豊富なことを見せつけるように冷静だった。

いい加減に飛んでいるわけではないと思ってはいたが、きちんと目標を定めて進んでいたことに少しだけ安心した。

「で？その行き先っていうのは？」

香乃は当然の疑問を振った。

「もう少し行けば山の麓に着きます。そこから私達の国へ帰還しようと思います」

「……このあたりも麓だと思っただけど…って、そっか、風向きね」

シルゼーロマの説明に疑問を持ったが、理由が思いついて自己解決した。

香乃の推理をシルゼーロマは肯定する。

「はい。陸猩族の集落は、狙ったのかどうかは不明ですが、追い風が吹く場所とは正反対の位置にありました。まずは私達がいる位置を修正しなければ」

「このまま天竜の国までひとつ飛び…ってワケにはいきませんか」

「山々ですが、カノさんとイズトリカムを抱えたこの状態では正直自信がありませんね。誠に申し訳ないのですが」

さりげなくダジャレを言ったことに気づいていないシルゼーロマの弁解を、香乃は聞き入れた。

だって、ここまでしてくれてるのにこれ以上のワガママは御法度だろう。

「とにかく、今は目標地点まで移動しなければ次の段階に移れません。それまでは何としてでも陸狸族の方々を撒く必要があります。多少の揺れはご了承しておいてください」

「わ、分かりました……」

香乃は変に身構えた。乗り物酔いする体質ではないが、こうも前置きされると自信がなくなる。自家用車やバスで寄ったことはないから大丈夫なはずだが、と安易な考え方をしたが、そういえば船全般に乗ったことは一度もないことを思い出し、自分から不安のどん底に落っこちた。

承諾の返事を聞いたシルゼーロマは、香乃の不安な心境を考えるよりも優先して、翼に意識を集中した。

香乃とイズがいることを気にして今まで少し加減して飛行していたが、追いつかれる恐れが浮上したからには手を抜くわけにはいかなかった。

自分の意志で動けない二人には申し訳ないが、シルゼーロマは全力で飛行する予定に変更した。

大きく翼を羽ばたかせ、今までの速度にさらに上乘せする。空気の力を最大限に生かし、空気抵抗を最小に抑え、暗闇の先に視線を集中し、飛行する。

シルゼーロマ達が飛び抜けたあとには突風が巻き上がり、大木の幹を撫で、黒く染まつた枝葉を騒がせる。

翔る輪郭が霞む彼らは、まさに風だった。

決して直線に飛ぶことはなく、しかし速度を緩めることはない。

逃亡する側の者が取るべき手段を駆使して、シルゼーロマは飛ぶ。

逃亡する時は、ギザギザに屈曲しながら遠のく方法が効果的であると言われている。直線に逃げるのに対して、距離を稼げるとはいえない。しかし、障害物の死角を利用することで追う側の目から逃れやすくなる。

追いつかれなくする目的で逃亡する以上、その利点を念頭に置くことは定石だ。

この方法で逃れられればいいとシルゼーロマは祈りたかった。

しかし、しばらく飛行して、その祈りは無情にも碎かれた。

「……駄目ですね、追いつかれそうです」

「えっ？」

香乃が訊く。何のことは分かりきっているが、事実が予想した結果と反していたから質問するような感情が声になって漏れただけだ。

「距離は辛くも拮抗状態を保っているようですが、撤くまではいかないようです。流石は陸上を支配する種族ですね」

シルゼーロマは香気に相手を賞賛している。

「そんなことはどうでもいいから！なんとかならないんですか！？」

「現状ではなんとも……。逃げ切れるとは思えませんし、攻撃することは極力避けたいです。このまま目的地点まで追いつかれないように努めるしかありません」

「そんな……」

対抗できる手段が春香に少ない事実、香乃は先行きが不安になった。

少しでも早く目的のポイントまで移動しなければならない。

そのためには追っ手の陸猩族に追いつかれてはならない。

目的地点まで移動できても、陸猩族から邪魔されてはいけない。

邪魔を振り切っても、そこに至るまでにシルゼーロマの体力を温存してもらわなければならない。

現状で突きつけられる課題は多い。本当にこれらを全て乗り越えられるのだろうか。

「私もできるだけのことはしてみます。少々荒くなるかもしれませんが」

「どうぞ好きなだけ！こうなったら捕まらないだけマシって思えま

すから」

「それもそうですね」

香乃の同意を得たシルゼーロマは、危険のために今まで捨てていた対抗手段を改めて考慮に入れた。最低でも追いつかれないよう、逃走の算段をつけていく。

どんな手段が効果的か。

どんな方法が生産的か。

互いのメリットとデメリットを背景に、シルゼーロマは策謀する。

シルゼーロマが黙考し始めたので、香乃はせめて陸猩族が今どのあたりにいるのかを確認しようと思った。

シルゼーロマに掴まる腕を緩めないようにしながら、できるだけ後方に視線を回す。

広がる暗闇。

次々と後ろへ消えていく巨木。

その中に、あの黄色い双眸が見え隠れしていた。この辺りは気に茂る枝葉が少し薄いのか、陸猩族の姿も臍気ながら見ることでもできていた。肩越しに後ろを向いているから後方全体を見渡せているわけではないが、かなりの数がすぐそこまで追いつかれていることを知った。

このまま本当に逃げ切れるのだろうか、と香乃が不安に感じた、直後。

香乃達に一番近い陸猩族が何かを肩に担いでいた。

太くて長い、筒状の物。

先端を香乃達のほうに向けている。

木々の枝葉からわずかに漏れた光を反射させる、金属質の肌。

（ッ！？）

香乃の背筋に怖気が走った。

「シルゼーロマ避けてッッ！！」

香乃の切迫した叫びに、シルゼーロマは素早く反応した。今から通過しようとしていた経路を急遽変更し、すぐ脇に逸れる。

方向を変えたすぐあとに、何かの爆発音が聞こえた。間髪入れずに何かが凶悪な轟音を立ててシルゼーロマの横をかすめる。ほぼ直線に突き進んだそれは進行方向に立っていた樹木に衝突すると、破砕音とともに灼熱の爆炎を上げた。

突然吹き荒れる熱風。密林に満ちた宵闇を退かせる。

視界の端でそれを見たシルゼーロマは驚愕した。

今さっき起きた一連の現象を初めて見たためだけではない。陸猩族が爆発物を取り扱っているという情報を聞いたことがないからだ。

基本的に狩猟をする時は棍棒や槍のような原始的な武器を使うことが多い。その他には補助的な役割で弓矢や特殊な果実を使って狩猟をする。

それがシルゼーロマの把握している陸猩族の狩猟手段だ。

だが、今この瞬間、その情報は太い書き替えなければならない

なつた。

それも、自分たちにとって分の悪い方向へと、だ。

一方、もう一つの疑問があった。

「なつ……なんであいつら、バズーカ砲なんか持ってるのよ!？」

自分の背中に乗るこの人間は、どうして陸猩族が持っている物の危険性だけでなく名前まで知っているのか。

とりあえず、シルゼーロマは香乃の質問に答えることにした。

「おそらく、他の世界の文化品を押収してきたのでしょう。彼らも次元を渡ることができますから」

律儀に返答するシルゼーロマだったが、問題はそこではない。

次元渡りという言葉を久々に聞いた香乃は、天竜族もそれができるといふイズの話进行思い出した。だが、それは天竜族だけにしかできない特技だと勝手に思い込んでいた。他の種族、例えば陸猩族も同じ芸当ができるとは今まで思っても見なかった。

シルゼーロマは変更した経路を修正しながら、香乃に疑問をぶつけた。

「カノさんは、彼らが持っている物が何なのかご存じなのですか？」

訊かれた香乃は答える。

「知ってるも何も、あれ、私がいた世界で使われてる殺人兵器だもん!」

なるべく平常に尋ねたシルゼーロマだったが、その配慮を無に返すぐらいに香乃は切羽詰まった様子でいた。

長い歴史の中で積み重ねてきた殺し合い。

信念と使命のぶつかり合い。

理想を現実へと変えるための犠牲。

戦争。

地球の歴史を語るのに欠かすことはできない、人間の業。

敵に勝つために、今もなお生み出され、流され続けている狂気。陸猩族が持っているのは、その片鱗だった。

「……こう申し上げるのは大変失礼ですが、カノさんの世界では、あんな物が平気で使われているのですか？」

「そうよ」

香乃は即答した。

「私の世界ではいくつもの国がありますが、国内や国同士で戦争をすることがよくあるんです。私の生まれ育った国はそこまでじゃないんですけどね。でも、昔から、今日この日も、どこかでは殺し合いをしている。……あれはその証拠なんです」

香乃の声色が沈む。

「人の命を奪うためだけに作られた、悪い物ですよ……！」

またもや爆発音が聞こえ、シルゼーロマは再び回避行動に出る。今度は一発ではなく複数打ち込まれ、より大きく避けなければならなかった。

必死で飛行しながら、シルゼーロマは思う。

香乃のいた世界はどんなところなのだろう、と。

人間という種族はどんな歴史と文化を育んでいるのか、と。

興味はあったが、今は訊かないことにした。今訊いたところで、好印象の情報を聞けるとはとも思えない。

今は、そう、逃げ切ることだけに専念するべきだと改めて思った。

「ねえ、シルゼーロマ」

前触れもなく香乃が質問した。

「なんででしょうか？」

「このまま、逃げ切れそう？」

単刀直入に訊かれて、シルゼーロマは即答し損ねてしまった。

確かに、今の状況は芳しくない。今通っている場所は完全に陸獣族の縄張りだ。彼らのほうが地の利がある。また、今は辛くも追いつかれてはいないが、少しでも油断した瞬間に距離を詰められるだろう。距離を拮抗させていても、再びバズーカホウとかいう武器に襲われ続ける可能性が非常に高い。

すでに危険度は最高値にあるといっても過言ではなかった。

「言うべきではないのですが、正直先行きが見えません。ここは彼

らの詳しい土地ですし、あんな遠距離武器を持ち込まれたのでは……」

本当はシルゼーロマのプライドとしては言いたくなかった。自分の力では逃げ切れないと自信をなくすことも、これを言うことで香乃を失望させることも、あつてはならなかった。だが、見栄を張って仮初めの自信を答えたところで希望にはならない。悔しくても、現実と向き合わなければならなかった。

シルゼーロマが口を苦くしているのとは裏腹に、香乃は現状を打破するべく提案した。

まだ残る手段の中から無理矢理希望を捻り出すために、香乃は提案した。

「だったら、ここから別の所へ行きましょう」

シルゼーロマは香乃の意図が読めなかった。理解しようにも、今度は香乃が何を考えているのか何も読み取ることができない。いや、読み取りたくない。それが一番近い感覚だった。

だが、シルゼーロマは聞かなければならなかった。せっかく香乃が考え出してくれた提案を、シルゼーロマは恐る恐るでもいいから聞く義務があつた。

「べ、別な所って、どこですか？」

「そんなの決まってます！」

香乃は答える。今の状況を変える提案を。

「私がいた世界、地球へ！」

シルゼーロマは耳を疑った。いや、逃げる手段の一つとして取り上げてはいたが、危険が伴うために早々に却下したのだ。

だが、香乃は何も恐れずそれを口に出している。本当に実践しようとしている香乃の真意を疑いたくなかった。

「無茶です！危険すぎます！」

シルゼーロマ達には都合がいかもしれない。こちらには香乃がいるから逃げるにあたって優位に立つことができるだろう。

しかし、香乃の世界にいる住民に迷惑がかかる。天竜族のような巨大な飛行生物だけでなく、陸猩族のような毛深い陸上生物が鬼事を繰り広げたら、どんな被害が出るか予測がつかない。陸猩族がチキュウでバズーカホウを使ったら死傷者が出かねない。

払う代償が多すぎる。

そう考えたシルゼーロマは、すぐに却下するべきだと思った。

「でも、このままじゃ逃げ切れないかもしれないでしょう！？？イズだって、今度捕まったら絶対に殺されちゃいます！」

シルゼーロマは両手にかかる重みが何かを思い出した。

ただの同族ではない。幼少時代を共にした親友。失いたくない仲間が抱えられている。

守りたいもの。守るべきもの。
守るために、危険を冒さなければならぬこと。

いつだったか、総指揮官に言われた言葉だった。それが分かったら、初めてお前は一人前だと。

言われた当時は何のことか理解できなかったが、今ならあやふやながら理解できるような気がした。

「……本気なんですね？」

シルゼーロマは再度確認した。

「もち！」

香乃は景気よく答える。

シルゼーロマは香乃の意志に敬意を払い、覚悟を決めた。

「分かりました。ではカノさんの世界へお邪魔させていただきます。
……少しの間目を瞑っていてもらえますか？」

香乃はきよんとするが、理由を尋ねるような余計な時間はない
と思い、言われるままに目を閉じた。

「少々荒れます。しっかりと掴まっていてください！」

シルゼーロマの掛け声に従って、香乃は腕の力を入れ直す。

前方から雷のような音が聞こえたかと思うと、全身の感覚が軽くなった。何かに包み込まれ、五感が鈍くなる。無重力状態というの

はこういうものなのだろうか、と錯覚してしまうような感覚。

なんとなく気持ちがいいと思った瞬間、耳を劈く音が聞こえ、目を閉じているのに眩しい光に包まれた。

瞼に当たる光がなくなったかと思うと、風が髪を撫でた。それも自然の風ではなく、生活臭を帯びた風だった。

夕飯のものだろうか、食欲をそそる匂いや、酒の匂い。入浴剤でも入れたのか風呂の匂いもかすかに混じっている。

そして、すぐ傍から聞こえてくる自動車のエンジン音。

香乃は瞼を開く。

目の前に広がっていたのは、香乃が慣れ親しんだ町並みだった。

鉄の帳

次元を渡る途中、シルゼーロマは胸中で確認していた。

自分の気持ちを揺るぎないものにするため、そして、香乃に誤解を招くような言動をしないために。

いいですか、カノさん。

私がカノさんの世界に行くことに賛成したのは、是か非でも陸狸族から逃げ延びるためです。

少しでも現状を打開できたら、即座に元の世界に戻ります。

理想の段階を越えるまでに、多少なりとカノさんの世界の住人に迷惑をかけることになるでしょう。その時は本当に申し訳なく思います。

少しの間、そう、ほんの少しの間でいいのです。

イズトリカムを助けるために、利用させてください。

次元渡航を終えた直後にシルゼーロマの目に飛び込んできたのは、眩い光で満ちた夜の町だった。

深い暗闇で慣らした目はすぐにはそれに順応できず、シルゼーロマは一瞬だけ目を瞑ってしまう。

飛行バランスを崩し、ふらつきを見せる。

「シルゼーロマ、前！前っ！」

背中から声がかかり、シルゼーロマは必死で瞼をこじ開ける。
飛ぶ先には、飛行経路を塞ぐように通路のような物が横渡になっていた。

「ッ！」

まだ明るさに慣れていないシルゼーロマは柄にもなく力任せに羽ばたき、高度を上げた。

空気を沈ませ、浮力を持たせる。突風が生み出され、下から人間の悲鳴が上がった。

まるで乗り上げるように間一髪で歩道橋を飛び越え、再び元の高度に戻るうとする。

しかし、香乃がそれを制する。

「低くしちやだめ！電線に引っかかっちゃう！」

理解不能の域を易々と超え、シルゼーロマは考えるよりも先に羽ばたく力を込める。

何のことだかさっぱりなシルゼーロマだが、とりあえず飛び方を確認するようにバランスを取った。

「大丈夫？シルゼーロマ」

こちららも必死でしがみついていた香乃は、後ろからシルゼーロマを心配して再び声をかけた。

次元移動の最中は訳が分からず余裕などなかったが、自分の慣れ親しんだ町の風景が目飛び込んできたら不思議と気持ちが落ち着いていた。そのおかげかどうかは知らないが、シルゼーロマが目の前歩道橋に気づいていなかったようなので教えることができたのだ。

徐々に目が慣れてきたシルゼーロマはようやく冷静さを取り戻し、香乃に返事をする。

「…ええ、もう大丈夫です」

人間と同じように、天竜族にも明順応は備わっている。人のそれとはやや遅いが、訓練を積んでいるシルゼーロマは同族の平均よりもずっと早く順応していた。

「よかった。低く飛ぶと危ないから、なるべく高めに飛んでね。だいたい六階くらいの高さがいいと思う」

助言をもらったシルゼーロマだったが、言葉の意味が分からず何も答えられなかった。

何らかの単位のように聞こえたが、何の単位か今すぐに思い当てることができない。

視界が回復し、シルゼーロマは改めて香乃の世界、すなわち地球の町を見渡す。

就寝してもおかしくはない時刻だと思うのだが、町中には香乃と同じような体格をした生き物で溢れていた。

服装や頭髪などの外見から大まかに男女の区別は付くが、中には瞬時に区別しかねる者もいる。というより、頭髪の色が黒や茶色や黄色だったり、肌が黄色や黒や白だったり、外見に少数ではあるが異なる者もあり、特徴が一律でない。強いて言うならば二足歩行ぐらいか。

シルゼーロマは今、通行路の上を飛んでいる。中心と両端の二種

類に区分されており、先ほどから観察している人間はその両端を通っている。

中心は広い幅が使われており、その中を固そうな物がいくつも行き来していた。どれも高速で、シルゼーロマの飛行速度に匹敵し得る。

通行路の歩道の隣には、人間の住処と思われる物体が肩を並べて建っている。どれも硬質で、人間の平均的な体格を考えるとやや巨大ではないかと思う。

種類は様々だが、建物の壁には透明な壁が等間隔で混在しており、そこから中の様子が見えるようになっている。

あらゆる建物、そして通行路の所々に設置されてある証明台から、光が溢れている。炎のような熱源は見られず、しかし炎よりも遙かに明るい。

どんな仕組みでこれを実現させているのか、見ただけでは類推すらできない。

空を見上げると雲の少ない夜空が広がっている。しかし、町の明るさのせいか始めからそうなのか、向こうの世界にはある星は見えない。

代わりに、巨大な星が一つだけ夜空に浮かんでいる。あまりにも大きく、表面の模様まで見えた。

その巨大な星のすぐ傍を、鳥のような影が飛んでいた。鳥にしては動きがなく、翼や尾の先などから光を点灯させている。香乃の世界にも天竜がいたとは思わなかったが、なぜだか仲間とは思えず不気味に感じた。

町並みを一望して、シルゼーロマは思う。

一体、どうしてこうなったのか、と。

どんな理由、どんな理想、どんな夢があつたら、このような形の
世界になったのだろうか、と。

地球の歴史など聞いたこともないシルゼーロマだが、素人目に見
ても町の在り方が半端ではないことが分かる。

自分の背丈よりもずっと重くて大きな住居を造る技術。

炎を使わずに町を照らし出す技術。

通路を高速で走り抜ける種族。

空に浮かぶ巨大な星と不気味な鳥。

向こうの世界に存在する自然な物がなく、目につく物すべてが人
為的と思えない町並み。

あまりにも存在を異にするような種族が共存する異質さ。

どれもシルゼーロマの常識を凌いでいた。

正直に言えば、香乃の世界に移ると決まった瞬間、一瞬だけが、
どんな世界なのだろうと期待に胸を膨らませた。

他の世界なら訪れたことはあるが、地球は経験がない。

外見も文化も能力も自分とは違う種族の世界とはどんなものだろ
うと楽しみに思った自分がいたのだ。

知的好奇心を押さえきれないまま地球に訪れたわけだが、果たし
てこの経験は吉なのか凶なのか。そんなふうにさえ思ってしまう。

他の目的で地球に訪れたというのに、シルゼーロマはショックを
隠しきれずにいた。

一方、なぜか黙りきってしまったシルゼーロマに香乃は疑問に思
った。

無事に次元を渡り終えたのなら、今のうちに今後どのように動いて陸狸族からの追尾を振り払うか話し合うものだと思っていた。ところがその話を切り出すと思っていたシルゼーロマが口を閉ざしてしまっている。

沈黙を始めたのは先ほど自分がお勧めの飛ぶ高さを教えてからだ。彼女の性格はよく知らないが、他人から物を言われるのが好かない性格なのだろうか。

怒りに触れてしまったのなら、知らなかったとはいえ香乃に非がある。

「あの、でしゃばったことを言っすみませんでした。悪気はなかったんですけど……」

「え？」

香乃にいきなり頭を下げられてシルゼーロマは動揺を隠せなかった。

でしゃばったこと、というのは高度についての助言のことだろう。高度の目安を教えられたのは、地球の文化を知らないシルゼーロマにとってありがたかった。しかし、それが香乃の尊大さにどう繋がるのかが分からない。

「カノさんからの助言はともありがたく思っていますよ。どうしてそんなことを言うのです？」

「だって、シルゼーロマ、ずっと黙っちゃってましたので、怒ったのになって……」

香乃の深慮にシルゼーロマは申し訳なくなった。

確かに町を観望していたため沈黙していたのは事実だ。

その様子を見てシルゼーロマの機嫌が変化したと判断し、その原因が自分にあると思いこむ香乃の気遣いは、どれだけ自分が愚かしいのか痛感させられてしまう。

他者に責任を問うのではなく、まずは己の非を探してそれを詫び、相手に不快感を与えることなく関係を築いていく。

自分よりも体がずっと小さい種族なのに、精神面が自分たちよりもずっと高次の領域にいる。

心が進化したから、このような町ができあがったのかもしれない。香乃という人間を少し理解できたシルゼーロマは、そう思った。

「違いますよ。ただ、圧巻させられる町でしたので、少し見とれてしまっただけなんです。耄^{ほう}けてしまってすみませんでした」

シルゼーロマの感情的な理由に、香乃は呆氣に取られる。

「……シルゼーロマってそういうところあるんだ……てつきりワーカーホリックかと……」

「え？えっ？何ですか？」

「あ、いえ、こっちの話です、あはは……」

呟きで失礼なことをぶっちゃけたが、シルゼーロマが横文字を理解できなかったので香乃は有耶無耶にする。

話がかなり脱線してしまったので、香乃は今度こそはと今後の予定の打ち合わせを切り出す。

シルゼーロマも反省して気持ちを改め、話し合う。

「無事にこっちに来たのはいいんですが、これからどうするんですか？」

香乃の質問に、シルゼーロマは即答する。

「手段は大きく変わりません。彼らに追いつかれないように、目標地点まで移動します」

明確な説明だが、シルゼーロマの表現に疑問を感じた。

「待って……追いつかれないようにって、こっちの世界にいれば陸猩族が来る心配はないんじゃないですか！？」

香乃たちは次元を渡って地球に来た。陸猩族も次元を渡ってくる可能性は充分にあり得る。

だが、異世界というのは天竜族のいる世界と地球の他にも存在することをイズとの会話で知った。

異世界がいくつあるのかは知らないが、複数ある異世界の中で陸猩族がこの地球をピンポイントで当てることなんて不可能なのではないだろうか。

香乃の疑問に、シルゼーロマは次元移動について補足の説明を加える。

「次元移動は痕跡が残るという性質があります。カノさんは知っているはずありません。次元移動を行うと、実施者がどの世界に行ったか道のように痕跡が残ります。とても短時間ですが、彼らは私たちの後ろをずっと追跡していましたから跡を辿るのは充分可能だ

「と思います」

「そ、そんな……」

香乃は自分の提案が浅かったことを後悔した。
違う世界に移動してしまえば陸猩族は追ってこれないんじゃないかと思つて提案したのだ。

提案した直後にシルゼーロマが血相を変えて「危険です」と言つた理由が今分かった。

あの時は香乃やイズを抱えたまま次元移動することが危険だと思つていたのだが、本当は地球に陸猩族が来ることが危険だと言つていたのだ。

もしかしたらとんでもないことを言つてしまったのではないかと、香乃の血の気が引かれる。

衝撃を受けている香乃に、シルゼーロマは付け加える。

「あくまでノルバノ次第ですが、彼らは決して野蛮な種族ではありません。地球の皆さんに迷惑はおかけするとは思いますが、直接実害を与えるような事態は起こすとは考えにくいです」

「ど、どうしてそんなことが言えるんですか！？しよせん他の種族のことでしょ！？」

落ち着きのなくした声で香乃は責めるようにシルゼーロマに詰め寄る。

対して、シルゼーロマはまるで確信しているように答える。

「彼らは、陸猩族は私たち天竜族と同じく、平和を愛する種族だからですよ、カノさん」

そう言つて、シルゼーロマは微笑んで見せた。

香乃は諭すような彼女の態度に熱くなっていた頭が一気に冷えた。

穏やかな声色に落ち着きを取り戻ただけではない。

恐ろしいほどの違和感を覚えたからだ。

いや、もつと前から感じていなかったか。

どうしてシルゼーロマはこんなに陸猩族に詳しいのか？

雲の上と下で分断され、互いの領域を禁断の地として足を踏み入れることを頑なに禁じているのに、なぜ？

丁字路に差しかかり、シルゼーロマは体を垂直に傾ける。ある程度の速度で重力がかかっているので香乃も落ちることはないがさらに腕に力を入れる必要があった。

速度を維持したまま、旋回するように丁字路を曲がる。

いまだかつて香乃はドリフトよろしくスピードを出してカーブを曲がったことはない。

「話を戻しますが、こちらに移動しても目的地点までの距離を稼がなければなりません。こちらで移動した距離は向こうの世界にも反映されます。必要な距離を移動したら再び向こうの世界に戻りますので、ご安心を」

香乃が質問する前にシルゼーロマは話を進める。最後の一言は香乃の気持ちを慮った社交辞令のようだ。

問い詰めるタイミングを逃した香乃は、どう言い始めれば自然に

訊けるのか思いつかない。

訊きたい気持ちだけが溢れてそれを晒し出したいのに、もう片方の自然に見せたい気持ちに邪魔をする。

拘る必要などないのに、それを許さない自分がいる。

いい訊き方がひらめかず、香乃は結局訊くことをやめた。

「そういうことですので、カノさんの家はどこですか？」

「……は？」

香乃は目が点になった。

そういうことというのはどういうことだろうか。

「せっかくカノさんの世界に来たのですから、このままお帰りください。この先は私とイズだけで逃げます」

突然の提案に、香乃はショックを受けた。

これから完全に逃げ切るまで行動を共にするのだと思っていた。だが、シルゼーロマはそれを制している。

「どうしてですか！あなた達二人だけ残して、自分だけノコノコと帰っていいんですか！」

「はい、そうです」

香乃の猛抗議を予想していたかのように、シルゼーロマは沈着とした調子で答えた。

「陸狸族が遠距離の凶器を持ち込んだと分かった以上、カノさんを

危険から遠ざけなければなりません。これは治安組織指揮官補佐としての考えです」

「そんなこと今さらでしょ！？ハイそうですかつて聞けるわけないじゃないですか！」

「そうですね、気持ちは分かります。こちらで用意した宴の料理を召し上がらないままですし」

「ちつがーう！！私そんなに食い意地悪くないっつー！！」

香乃はシルゼーロマの耳元で思いっきり否定する。今のシルゼーロマからの勝手な発言で香乃の変な印象が町中にばらまかれたのではないかと思い、穴があつたら入って埋まりたい気持ちになった。

「そんな理由じゃなくて、私にも逃げる手伝いをさせてくださいって言いたいです！この辺は私が暮らしている町ですから道案内できます。陸猩族から逃げ切るにはここで距離を稼がないといけないんでしょう？だったら、少しでも有利になれるように協力させてください」

わざわざ地球に来たのは陸猩族との優位性を逆転させるためだ。向こうの世界よりも彼らが慣れていない世界に移動し、地の利を活かして逃亡の助力とする目論見があつた。

効率よく活かすには、その土地の者に案内させるのが一番だ。それくらいシルゼーロマには分かっているはずである。

「きつと役に立ちますから。イズのために協力させてください」

ここまで言われても、シルゼーロマは断らなければならない。

これ以上こちらの事情に部外者を巻き込むわけにはいかないのだ。

だが、香乃の献身的な姿勢と最後の言葉に、シルゼーロマの意志が揺らぐ。

イズのために。

地球に来る前、自分の心の中で誓うように言い聞かせた言葉をそのまま使われてしまった。

今自分たちは何のために逃げているのか。陸猩族から逃れるためだ。

どうして逃れなければならないのか。イズトリカムを陸猩族の手に渡してはならないからだ。

彼らの手に渡れば、イズトリカムはほぼ確実に殺されるだろう。

復讐か、他の天竜族への見せしめか、どんな理由でも後付けできそうだ。

大切な親友であるイズトリカムを失いたくない。自分の知らない所で親友が残酷な目に遭うことに耐えられない。

だから、自分は飛び出してきたのではないのか？

総指揮官の言葉を振り切ってまで、イズトリカムを探しに来たのではないのか？

自分の本音はそこに込められているのではないのか？

「……」

かつてない葛藤に悩まされるシルゼーロマは、公私の線引きが鈍っていった。何よりも優先するべきであることを選択すると、現状ではどうしても私情が紛れ込んでしまう。

これでいいのか？

本当にいいのか？

本当に正解なのか？

「……う……ん」

誰だ今肯定したの。

呻いたのはシルゼーロマではない。香乃の様子を窺うと、同じように不思議がっているので違うようだ。
ということは消去法で行くと……。

「……あ、頭、痛い……」

シルゼーロマが抱えているイズが臍気な意識で後頭部のあたりを痛がっている。気絶させるために打ち込んだ一撃が残っているらしい。

「あれ？ここ、どこ……？って、飛んでる……？」

イズは現状を飲み込めず暢気に周囲を見回している。自分の世界とは違いすぎる文明を目の当たりにして最初のシルゼーロマと同じような反応をしているが、飛行しているのが自分の力でないことに気づくと慌て始めた。

「こ、こんな時に……」

気絶している時間を予測してはいなかったが、まさかこの場面で回復するとは予想外だった。

彼は一刻を争わなければならぬ状況で真っ先に混乱しそうな人物だ。暴走状態ではないことは幸いだが、精神面では香乃のほうが頼り甲斐がある。

頃合いとしては最悪だとは思えないシルゼーロマに対して、違う反応をしている人物がいた。

「おはようイズ！いきなりだけどちょっと聞いて！」

香乃がシルゼーロマの肩越しに声をかけている。その様子は自然而然に大喜びだった。

「カノ？おはよう……、えっ、シルゼーロマ！？」

声の方を向こうと位置的に見上げる格好となったイズは、いきなり目の前に旧友の顔が現れて仰天する。

「……………目、覚めた？」

シルゼーロマは眉間に皺を寄せつつ口元をひくひくさせながら不機嫌な声で簡単な挨拶をした。その短い言葉には、どうして今目を覚ました？というのと、暴れたら落とすというのが含まれているのだろう。

角度の関係で香乃には見えず、その形相にイズは訳が分からないまま縮こまる。

「突然だけどねイズ！提案があるの！」

二人の絶妙な絶望をそっちのけにしたカノが再び話しかける。

「今ちよつと込み入った複雑な事情で追われてるの！イズの世界だと逃げるのが難しかったから今私のいた世界にいるのね！これからちゃんと逃げられるように私が道案内するからそれでいいよね！」

「へ？」

「いいよねっ！」

「あの……何のことだか分から」

「いいって言え」

「い、いいと、思う……たぶん」

「よし決定！」

いつの間にか多数決で決める流れにしている香乃は、イズを怒濤の説明で強引に同意させることに成功した。最後の最後は脅迫だっ

たかもしれないが細かいことは気にしない。

いまだに状況が理解できないイズは何のことかさっぱりな様子で頭に疑問符を並べている。

「この付和雷同が……！」

シルゼーロマの重圧感のある声にイズは震え上がった。

シルゼーロマはイズを抱えているこの腕を放してしまおうかと邪悪な思いに駆られそうになり、自分を必死で制した。

「まあまあ、もう決まったことなんですから怒らない怒らない」

「あなたという方は……」

物凄く嬉しそうな香乃は何の余裕かシルゼーロマを静めている。

これからどんな危険が待ちかまえているのか予想できないこの状況で楽しんでいるようにしか見えない。

だが、これで迷いはなくなった。

不本意ではあるが、賛成できないわけではない。

結果論だが、香乃の突飛押しもない行動力に感謝するべきなのかもしれないとシルゼーロマは一つ溜め息をついた。

「もう結構です。私も覚悟しましょう。カノさん、道案内をお願いしてもよろしいですか？」

「もちろん。どっちに行けばいいんですか？」

シルゼーロマはある程度の方角を示す。

あれから止まることなく町中を飛び回っているので正確には言えなくなっているが、シルゼーロマは方向感覚に自信があった。

正確な地点へ行けなくても、可能な限りそこへ近づけさえすれば現状としては妥協できる。

方向を知った香乃は、現在位置と自分の頭の中にある地図を照らし合わせる。

「ありや、駅のほうじゃないですか」

「何か問題がありますか？」

「いえ、問題ってほどじゃないんですが……」

香乃の記憶が正しければ、向かう先には駅がある。しかもただの駅ではなく、いくつもの鉄道や新幹線、地下鉄が発着する結節点として機能している有名な駅だ。

今が夜間帯であることが吉と出ているのか、町に目立った混乱は出ていない。だが駅構内は電車を利用する人で混雑しているし、駅前には商店街まである。販売店の中にはそろそろ営業を終えているところもあるだろうが、夜のほうが盛んになる店もある。ゲームセンターとかキャバクラとかの風俗店がその例だ。

あまり人に見られて騒がれないといいのだが……。

「問題がないのならその方向にします。人間の方々にご迷惑をかけることになるでしょうがやむを得ません。なるべく最短経路をお願いします」

進行方向は決まった。あとは面倒事が起きなければ問題はない。香乃はなかなか難しい注文をこの先にいる人間全員に妄想テレパシーで送っておいた。

「イズトリカム、無駄に動いてくれるな。邪魔したら叩き落とすぞ」

「う、うん……」

女性二人に圧倒させられて口を閉ざしていたイズは気の弱い返事をする。

「……来ました。二人とも、くれぐれも舌を噛まぬよう」

離れた位置で次元移動の振動を感じたシルゼーロマは、香乃とイズに短い指示を出す。

これから道案内をしなければならぬ香乃にとっては難儀な注文をされたものだと思いながら、シルゼーロマにしっかり掴まる。

シルゼーロマは羽ばたき方に力を込め、速度を速める。

その羽ばたき方がどこか疲れているような気がしたのは香乃の気のせいだろうか。

そんな香乃の心配に気づくはずもなく、シルゼーロマは全力で日本の町の空を飛んでいった。

ファンタジック・風のいたずら

「いいか白井、仕事にはな、忘れちゃならない心構えってもんがあるんだ」

黒木は隣で一緒に飲んでいる部下に話しかけた。

二人は今、屋台で構える飲み屋に寄っていた。この店の席は少なく、外付けの延長席などないから五人ほどしか座れない。しかし、駅から離れているため徒歩でわざわざ寄りに来る人間は少ないので、二人ほどの人数なら席を取りやすい。出す酒や料理も悪くはないので、知る人ぞ知る都合のいい店である。

今日の仕事も終わり、あとは家路に着くのみとなった黒木だが、たまには部下を連れて同じ酒を飲んでみたくなった。

そこで、部下である白井を誘い、この店で同じ酒を飲んでいるのである。

黒木は積極的に酒を飲み下し、白井にも半ば無理矢理飲ませ、いつしか二人は互いに顔を真っ赤に染めていた。

仕事を忘れ、疲れを癒すために束の間の享楽を味わう。それが明日の仕事への活力になりもするのだと知っている黒木は、白井にもそれを知ってほしくて飲ませていた。

説教でも始めるような切り出し方をしたものだから、白井は一瞬身を縮ませる。だが黒木はすでに酔っていたので、特に気に留めずに口が動くままに話を続けた。

「上司だろうが部下だろうが、売り手だろうが買い手だろうが、男

だろうが女だろうが、世の中を上手く渡するには絶対に必要なことがあるんだ。それはな……」

黒木は今年から営業部の主任を任されている。いくつかの班に分かれているうちの一つに過ぎないが、三十三歳にしてようやくこの地位まで出世できた。

白井から見た黒木は“堂々とした上司”という印象だった。決断が早く、行動すると決めた時には班の人間に指示を出している。そのかけ声には迷いが感じられず、白井が入社してからその鶴の一声に何度も圧巻されてきた。

この人について行けば間違いはない。そんな先入観さえ根付いてしまいそうなくらい頼り甲斐がある上司だった。

一方、黒木から見た白井の印象は“期待のできる新人”だった。白井は黒木班の人員の一人だ。白井は今年入社したばかりの新人で、不況のご時世の中でも実力を買われた若者だ。

度胸や思い切りに物足りなさを感じることはあるが、言葉遣いや態度の丁寧さに好評があり、パソコンなどの機械にも自分より遥かに詳しい。

現代の若者らしさとともに、教育の仕方によって成長の期待できる人材だった。

成長の見込みのある人間に自分の教訓を伝え、頼り甲斐のある人間へ変える一役となる。

もし今日の言葉が白井の何かに良い影響を与えることができるのなら、職場の先輩としてなかなか喜ばしいことではないか。

そう期待を込めて、黒木は自分の経験を踏まえたアドバイスを送る。

「どんな時でも思いやりが欠かせないってことだ。職場内でもそう、得意先との電話の時だってもちろん大事だ。俺たちの会社の利益っていう肝心なところは忘れちゃいけないのは確かなんだけどな、自分のワガママを押しつけるばかりじゃいけないんだよ。職場内だったら、誰かが困っていたら、自分から気づいてあげて手助けする。その代わり、今度は自分が困ったら無理をしないで手伝ってもらう。先方との交渉の時も同じだ。俺たちの会社の利益のことばかり考えず、相手にもできるだけ利益が出るような話で進めるようにするのがベストなんだ」

無論だが、先方が抱える赤字を一緒に返済していくという意味ではない。共倒れになることが予想できるのなら契約を結ばないのは当然だ。

今教えてもいいのだが、これは経験の量も関係するから言葉で説明しても実感が湧かないだろう。現状は現場の見込み期間でもあるのだから、利潤のノウハウは今後経験を積み重ねると同時に身につけていってもらえば良い。

今は白井がこれから会社のために働く上で基礎となることを教えたいと、黒木は考えた。

「お前はまだ若い。でもな、若いことは力でもある。これからいろんなことを頼まれていくと思うが、自分にとってプラスになる経験だと思っ取り組んでみる。いつでもアンテナを張りながら、いろんな角度の見方を身につけていくといい」

この仕事を選んだ以上は誰でも通る道なのだが、今後自分に降り

かかる仕事を案じたのか、白井は一瞬怯えたような目をする。

そんな青い新人を見て、黒木は笑い上げた。

「心配すんな。最初のうちはプリセプターか誰かが一緒にやるからいきなりお前一人に任せたりはしないっての」

黒木はそんな助け船を出しながら白井の肩をばんばんと叩いた。少々痛かったが、白井はその手洗いスキップに気持ちが楽になったような気がした。

入社してからは毎日のように気を張りっぱなしだった。仕事を早く覚えなければいけないという気持ちと、先輩社員にも気を遣わなければならぬという配慮が続き、負担が募るばかりだった。新人のうちは心身ともに追い込むのが当然だと思ってしまい、正直早くも仕事が嫌に思ったこともあった。

だが、こんなふうに自分を気遣ってくれる人が身近にいると分かれると、自然と気持ちが楽になった。

気を抜いたという意味ではなく、今よりもリラックスしてこれらの仕事を意欲的に取り組めるようになる気がしたのだ。

いつの間にか、白井の心には黒木に対する尊敬の念が生まれていた。

自分に大切なことを教えてくれた黒木という上司に恩返しをしたい。そのためには、もっともっと仕事ができるようになりたい。

白井は今の自分にできる一番近い恩返しを考えて、それを実現できるように努力しようと思った。

黒木がおもむろにコップを口に運び、白井もそれに倣うように酒

を飲んだ。

その時、遠くのほうから怪獣の鳴き声のような音が聞こえた。

町中からは車や歩行者信号から流れる音楽がそこかしこから聞こえてくるが、騒音の中でもはつきりと聞き取れた。

黒木と白井は同時に顔を見合わせる。互いに音の正体が思いつかない。

他の客も同じような様子で、屋台の店主に目で尋ねても首を捻っている。

こうなれば考えるよりも見たほうが早い。

興味本位で音のしたほうを見るため、屋台の暖簾のれんの外へ出る。

刹那。

二人の頭上を巨大なものが飛んだ。

長い首と尻尾に巨大な翼を羽ばたかせるそれは、視界の端から端へ一瞬で飛び抜け、通過する時に暴風をまき散らす。

二人のいるところにも突風が吹き荒れ、屋台の屋根や幟のぼりが風で煽られ、コップがいくつか倒れては地面に落ちて割れた。

風が通り抜ける途中、白井は見てしまった。

目を疑うが脳裏に焼き付いたそれは忘れることができなくなっている。

認めたくはないが、事実としてすでに現れている現実。

黒木の頭から髪の毛が飛んでいた。

黒い固まりは風の中を優雅に回転しながら飛び、なかなかの距離を飛んだあとに大きな音を出すこともなく地面に着地した。

目の前で起きたことに白井だけでなく黒木も呆然としてしまい、自分たちから離れた場所に落ちた黒木の男のプライドをただぼんやりと見つめている。

数秒、感覚では何分も経った頃、黒木がようやく我に返り、自分の頭に載っていた物を取りに行こうと慌てて足を踏み出す。

再び突如として何かが頭上を飛び越え、黒木が向く方向へ着地する。ズシンという重い音を出すながらも一瞬で、すぐに跳んでいつてしまった。

跳んでいったものはとても巨大で、成人の背丈を遙かに越えていた。

重量もかなりあるようで、それが踏んだ跡のコンクリートには小さな凹みとひび割れが残っている。

狙ったのかどうかは知らないが、その小さな凹みの中央には、黒木が取りに行こうとしていた男の見栄っ張りが踏み潰されていた。

黒木は目の前が真っ白になった。

一連の流れを見ていた白井は、得体の知れないものが目の前を飛んでいったこと、尊敬していた上司が若ハゲだったこと、彼のプライドが踏み潰されて泥まみれになったこと、それぞれに大変なショックを受けた。

頭が上手く働いてくれないので、目の前で打ちひしがれている黒木に何と声をかければいいか思いつかず、尊敬する人間をただただ見守るしかできなかった。

郷に従わざるは業の道

猛烈な勢いを保ったまま、シルゼーロマは交差点を曲がった。

陸猩族に距離を詰められないよう、シルゼーロマは可能な限り速度を上げている。しかし、上げすぎると今度は道路を曲がれなくなってしまう。陸猩族に追いつかれず、かつ方向を変えられるぎりぎりの中間点を意識して飛んでいた。

「後ろの様子は分かりますか？ カノさん」

町中を滑空しながらシルゼーロマが尋ねる。

香乃は肩越しに後方の様子を見る。

「……距離はだいたい同じくらいだけど、ぴったりついてきてるたいです」

「やはり、そう上手くは撒けませんか……流石は陸猩族ですね」

現状を知り、シルゼーロマは敵ながら天晴れと言いたげな感想を漏らした。

「私達、無事に逃げ切れそうですか？」

今度は香乃が尋ねる。その声は不安を含ませていた。

シルゼーロマは、気遣いは無駄に不安を煽るとして、現状を冷静に捉えた自分なりの考えで答えた。

「……正直なところ、現状は厳しいです。進退のない逃走は体力的にも精神的にも負担をかけます。数は向こうの方が圧倒的に有利と

考えると、このままではいずれ追いつかれるでしょう」

「そんな……！」

香乃はショックを受けた。

こんなにも必死なのに、いまだ不利の立場から脱出できていない。なによりもシルゼーロマが一番頑張ってくれているのに、このままではその努力も無駄になってしまうのだろうか。

香乃の絶望的な心情を尻目に、シルゼーロマは根拠を付け足す。

「陸猩族は五感を含め、身体能力が驚異的に発達しています。腕力は私たち天竜族より高いですし、薄暗い陸地で生活する彼らは目も耳も遥かに優れています。私たちが逃げ切れるかどうか、運に頼らざるを得ません」

陸猩族には天竜族のような飛行能力はなく、火炎放射能力もない。その代わり、余るほどの運動能力を持ち、研ぎ澄まされた五感を駆使している。暗黒の広がる夜を自由自在に移動できる所以だった。

陸猩族の能力の高さを聞いたイズは、望みを捨ててしまいそうな気持ちになった。向こうは精鋭が多数。対してこちらは単体。しかも移動を任されるシルゼーロマは自分や香乃を連れているせいで、本来の動きを出せないでいる。

自分さえいなければ……。

どれだけシルゼーロマの負担を減らせていただろうか。

そう考えざるを得なくなる。

一方、香乃は全く別のことを考えていた。

現状が不利であることは分かっている。それをどうすれば打開で

きるのか。シルゼーロマの背中に乗っている間、そのことばかりをずっと考えていた。

イズは自分を助けるために無茶をしてくれた。シルゼーロマも、まだきちんと顔を合わせて挨拶していない関係だというのに、イズと一緒に必死で守ろうとしてくれている。

このままでは自分の気が収まらない。今の自分にできることはないか。そのことばかりを考えていた。

そして、見つけた。

イズにもシルゼーロマは知らないこと。イズとシルゼーロマにはできないこと。イズとシルゼーロマを手伝えること。

香乃は思いつき、早速実行に移すことにした。

気に障る。

ビルとビルの間を抜けながら、追尾するノルバノは胸中で悪態をついていた。

追跡を続けて、人間という種族が住まう世界まで追うことができたのは良かった。しかし、奴らとの距離を一向に縮められずにいた。

慣れない環境であることは間違いないが、決して初めての世界ではない。今同胞の手に持っている物の一部はこの世界から奪取してきたものだ。奪取する際、この世界の文明がどのようなものなのか簡易的に調査を済ませてもいたので、ある程度の慣れはある。

しかし、この世界にも国という境界があることを失念していた。境界がある以上、国際的な交流がどの程度行われているかによって

文明も文化も差が生じることがざらにある。今回は差がある代表例だった。

通路は人工的に舗装され、至る所に驚異的な高さを誇る家屋が軒を連ねている。自分たちの世界の樹木ほどではないが、中にはそれに匹敵しうる高さを持つものもある。一度の跳躍で飛び越せないことが多く、こちらの動きが大きく制限されてしまっていた。

初見の側にとっては悪条件が揃っているようにも思えたが、道が舗装されているという点についてはこちらにとって不利とはならなかった。

町並みを見ると、道の曲がり角はほぼ直線か直角に作られており、進む方角を限定していた。上空からの偵察隊の話によると、詳細な点を挙げればキリがないが、ほぼそのような作りになっていることで間違いなかった。

シルゼーロマ嬢は“お荷物”のせいで高度を上げることができない様子だ。ならば、逃走経路を推理し、包囲網を張れば追いつくことが可能だと考えていた。

しかし、現状では小康状態が続いている。これはおそらくシルゼーロマ嬢がこちらの推理した逃走経路を読み、間一髪で包囲網を抜けているためだろう。

細かく道を変えたり狭い道へ入ろうとしたりと、こちらを撒こうとする挙動が窺える。だが、それ以上の攪乱は見られず、ただ情性的に逃走している。

どこか決まった場所へ向かおうとしているのかもしれないが、先程から進行方向を頻繁に変えており、決まった方角を進もうとしていない。

遠回りか、道を見失ったか、時間稼ぎか。いずれにしても、長時

間の飛行はシルゼーロマ嬢の体力を消耗させる。狙いもなくあのような逃げ方をするのは愚策としかいえない。

この世界はどうやらあの異世界の住民の出身地のようだ。先程からシルゼーロマ嬢と何かを言い合っている。

見知らぬ土地で逃走するなら、あの無力な種族では意見することは無いだろう。通る道筋は全てシルゼーロマ嬢が決めるはずで、あのよう言い合うとは思えない。異世界の住民の知る世界だと推定するのが自然だろう。

問題は、この土地を知る者が何を目論んでいるかだ。我々から逃げるためにどのような手段を取るのか、予想しなくてはならない。

あの睡蓮をわずか数分で無効化した種族だ。単に体質的に抵抗力が強かっただけかもしれないが、その潜在能力は計り知れない。

自分たちを退けるために何を考えるのか、至難だが推測しなければならぬ。

逃走しながら反撃してくるか。否、この世界の文明を鑑みるに、容易に闘争を起こせる社会ではない。どの住民も闘争意識に欠けているし、咄嗟の状況判断も鈍い。自ら脅威に立ち向かおうとする者は見られず、皆安全な場所へ避難することに躍起になっている。破壊行為や殺傷行為は避けるだろう。

罠に誘導しようとしているか。否、逃走するので精一杯なはずだ。身体能力に雲泥の差がある我々を嵌めるほどの罠を準備できはしない。

この世界の住民の協力が来るのを待っているか。否、我々がこの世界に来たのはつい先刻だ。目の届きにくい高所を使うようにしているし、目撃された地域も広くはない。それにこちらは常に移動し

ているから、協力者がいたとしても合流することすら困難なはずだ。

当の本人はシルゼーロマ嬢にしがみついているのがやつの様子であるし、テレパシーでも使えなければ連絡など取れない。この世界の住民がそれを使う種族ではないと確信している。

テレパシーを使用する種族は、総じて口数が少ない特徴がある。意思の疎通に発声は不要だし、中には声帯そのものが退化して声が失われた種族もあるくらいだ。

あの異世界の住民と一度会話したが、その特徴に該当する種族ではなかった。この世界は我々と同じく、発声による意思疎通を用いている。

その種族が短時間で大勢の仲間に連絡を取るなど不可能だろう。

何を画策しているのかは予想しきれない。だが、猶予を与えすぎるとこちらの不利に繋がることは間違いない。

ならば、早々に決着させるのが得策だ。

シルゼーロマ・エンテツフォ。流石は天竜族きつての天才、我等が族長が一目置いているだけのことはある。若くして天竜族首長の補佐の地位に就いた実力は伊達ではないらしい。ここまで逃げ切ってきた貴女を賞賛する。

だが、舐められていては困る。こちらも陸猩族を代表する精鋭揃いだ。すぐにけりをつけてくれよう。

全く、気に障る。

香乃達は現在、駅へ繋がる大通りを飛んでいる。この辺りは整備

された町並みなので、体の大きいドラゴンが翼を広げてもぶつかることはない。また、方角的には都心へ向かっているせいだ。道路も広く設計されてある。それでも渋滞になる時はなるのだが、空を飛ぶ側にとっては好都合だった。

「あー！また通り過ぎちゃったじゃないですかっ！ちゃんと曲がってって言ったのに！」

「仕方がないでしょう！どこを曲がればいいのか分からないんですから！」

香乃とシルゼーロマは喧嘩をしていた。

二人が怒っているのは、香乃の指定した曲がり角をシルゼーロマが曲がらずに通り過ぎたことが原因だった。

シルゼーロマが遠慮なく速度を上げているので、建物が目で追えないほどの早さで後ろへ流れていく。しかし、シルゼーロマはいつでも方向転換できるように制御して飛んでいるため、速力が曲がれなかった原因ではない。

では何が原因かというと、

「だって、吉野家の所って言えば普通分かるじゃないですか！看板にも書いてあるし！」

「ヨシノヤなんて知りません！それとこの世界の文字は読めなんですよ私達は！」

香乃の案内が地球で使われる名称に依存しているからだった。

ちなみに先ほど交差点を曲がったのは、香乃の予定していた場所に曲がることのできなかつたために取った妥協案である。

「シルゼーロマ、たぶんアレじゃないかな、道のあちこちに生えてる蛙手カエルデの木のことじゃ……」

長らく大人しくしていたイズが口を挟むが、

「違うし！誰でも知ってる牛井屋の全国チェーン店だし！ていうかマニアックな草食系の無駄知識なんか道案内に使うか！」

火に油を注いだけだった。

「とにかく！早く大通りから離れたいんですから次はちゃんと曲がつてくださいね。あと四つ先の信号を右に曲がりますから」

「ですからカノさん！シンゴウって何なのか教えてください！」

「ああもう、めんどくさいなあ！」

次元規模のカルチャーショックのせいで思うように話が進まず、香乃は地団駄を踏みたくなった。

予定している道順ではないが、シルゼーロマが飛ばしているおかげでまだ陸狸族に追いつかれてはいない。彼女によるとすぐそこまで距離を縮められているそうだが、香乃には彼らの姿が見えない。

時間の経過とともに夜の町の光が強くなっていく。すでに室内灯は落ちているが、町並みも商店もデパートや商店が増え、人や車が多く行き通うようになっていく。間違いなく駅のほうへと近づいている証拠だ。

駅を通り過ぎる頃が勝負所だ。そこでどう動くかで陸狸族に後れを取らせられるかどうかが決まる。

「シルゼーロマ、確認しますけど、さっきの話は本当なんですね？」

香乃は勝負所に着く前にシルゼーロマに話しかけた。香乃の計画通りに進めるには、シルゼーロマから聞いた情報が正しくなければならぬ。仮に一部でも間違いがあるなら、香乃達だけでなく駅にいる人達全員を巻き込むことになるかもしれない。

計画を無事に進めるには、シルゼーロマの情報と香乃の解釈に語弊をなくす必要があった。

香乃の問いに、シルゼーロマは答える。

「本当です。彼らにも誇りがあるように、犯してはならない禁忌も存在します。次元を渡り、異世界に干渉できる側の者として遵守しなければならぬ当然の規則なのです。例外はありませんし認められません」

「うん、それなら大丈夫です」

情報の再確認ができたところで、香乃は計画通りに進められることに安堵する。

それに心配がないとすれば、残された不安要素はあと一つ。

香乃は駅に着く前までに、イズとシルゼーロマにこの世界の常識を叩き込むことにした。

イズとシルゼーロマに道路交通に関する説明を簡単に済ませた香乃は、

「あーもう！！電線じゃまー！！」

町中に張り巡らされている送電線に悪態をついていた。

「邪魔なら切りましょうか？あれぐらいなら少しの火で焼き落とせますが」

「やめなさい！！このへんが一遍に停電しちゃうっての！！」

やはり天竜族の感覚はどこか違う。

「もー！！なんでそんな乱暴なことしようとするかなあ！！」

考え方の違いを知ると、この町の命運は香乃の手にかかっているような気がした。

「ところで、カノさん」

「何？」

「どうして先程からそんなに声を張り上げているのですか？」

つい先程から、香乃は人が変わったように騒ぎ立てている。いや、声を上げるのは変わっていない。そこは訂正する。

おかしさを感じたのは、意味もなく喚いていることだ。冷静さなど欠片もなく、がむしゃらにうるさくしているだけに見える。

シルゼーロマの指摘に、香乃は不敵な笑みを浮かべた。

「確信しているわけじゃないんだけどね……」

そう前置きを置いてから、悪戯っ子のように口元を歪めながらシルゼーロマに囁いた。イズも耳を傾ける。

「……—」

香乃の目論見を聞いたイズとシルゼーロマは、目が点になった。

「そ、そんなことが起きるんですか？」

シルゼーロマは香乃の予測する現象を簡単に信じられないでいた。

「別に特別なことじゃないですよ？今時大人になれば持っていないほうが珍しいですし」

「…香乃もできるの？」

イズが遠慮がちに聞いた。もしできなければ不躰なことを言つたと心配だからだろう。

香乃は風ではためく上着の、ポケットの中にある重みを確認した。

「うん、できるよ。今はしがみつくので手一杯だけどね」

そう答えて、あはは、と苦笑する。

一方、イズとシルゼーロマの内心は、それぞれの理由によって穏やかではなかった。

特にシルゼーロマは、今まで往路で香乃の指示に従えず、陸狸族

を攪乱できなかったことを後悔した。

香乃の指示通りに動けていれば、もっと早くこの事態に対応できていた。

それほどの打開策を、香乃は身につけていた。

天竜族よりも素早く動けず、空を飛ぶこともできない異世界の民を、侮っていたのかもしれない。長時間逃走を続けていたせいから、逃げきれるかどうかは自分にあると思いつ込んでしまっていたのかもしれない。

シルゼーロマは己の過信を恥じた。

イズはこんな時にでも何もできない自分自身が恥ずかしかった。シルゼーロマは追いつかれまいと必死で飛んでくれ、香乃は逃げ切るための妙案を提案している。

それに比べて、イズは何をした？空も跳べず、何の考えも出さず、香乃とシルゼーロマに頼り切っている。ただの負担でしかない。

こんな時でさえ何もできない自分が腹立たしい。

せめて飛べれば。

本当にそう思う。

僕がいけないほうがいいんじゃないか？

そういう言葉で、どうしようもなく聞きたくなる。

でも、それを言ったあとの香乃とシルゼーロマの返事が怖い。表情が怖い。どんなことを言われて怒られるかわからない。どのような悲しい顔をするかわからない。

そんな気持ちにさせるために言いたいんじゃない。

真剣に、今の状況を見て考えたイズなりの打開策なのだと主張し

たい。

言えるだろうか。

勇気を出せるだろうか。

イズは一つ深呼吸をして、声を出した。

「……あのさ、」

「イズトリカム」

言おうとした矢先にシルゼーロマに名前を呼ばれ、肩が跳ね上がった。

読まれたのだろうか。今から自分が言おうとしていることを。そして、何も聞かずにそれを叱責するのだろうか。

「一緒に吠えるぞ。協力しろ」

「……………え？」

今度こそ予想外なことを言われ、イズは思考が停止した。

「要は、できるだけ広い範囲の人間の方々に、私たちの存在を知らせればいい。ついでに言えば、予想しやすい方向へ私たちが向かっていけばいい。そうですね？ カノさん」

「はい。そういうことです」

香乃が肯定する。

「そういうことだイストリカム。事態は一刻を争う。さっさと実行するぞ」

シルゼーロマの目はすでに決意が固まっていた。

それに比べて自分はいままでおろおろと迷っているのだろつかと、イズは卑しい気持ちになる。が、それも一瞬だけで、すぐに言われた依頼を全うしなければならぬという気持ちに切り替わった。

「いくぞ。……カノさん、合図を」

「うん…！」

シルゼーロマの鶴の一声により、イズとシルゼーロマは大きく息を吸い込む。

限界近くまで吸い込んだと頃を見計らい、

「いくよ……せーのっっ！」

香乃の合図により、二者は肺から空気を押し出した！

グオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオン！！

全身全霊をかけた二者分の咆哮は、香乃の町全域に鳴り響いた。

ビルのガラスは戦慄し、コンクリートで固められた道路さえ震え上がり、誰もが不意に夜空を見上げては不安に駆られた。

夜の日常を切り裂いた絶叫は人々の視線を空に向けさせる。仰ぎ見る人の一部に、町の光で星の見えなくなった夜空に大きな影が過ぎるのを目撃した。

非日常的な現象に遭遇した人々は、我先にとその場を逃げ出し、少しでも安全な所へと向かう。

逃げるだけでいっぱいいな者もいれば、ある程度精神的に余裕を持つ者もいる。余裕のある者は、皆共通して懷に手を探り入れた。

取り出したのは携帯電話だった。

異常な現象を発見した場合、報告するのが住民の義務だ。義務付けられていることを知らなくても、対抗機関に処を依頼することは幼少から教育づけられている。

対抗機関というのは、警察機関だ。携帯電話を取り出した大半は緊急通報『一一〇』を押し、中には回線の混雑を予想して警察相談専用電話『九一一〇』を押し、現状の報告と処を依頼する。

警察機関の中央窓口では、住民からの電話対応に追われていた。この一時間のうちに内容の一致する報告が多数寄せられており、今もなお報告が途絶えることがないのだ。

場所も同じ。翼を持った巨大な影も同じ。恐ろしい鳴き声も同じ。そして、住民全員が恐怖に陥っていることが推察された。

初めは報告される数もさほど多くなかった。「巨大な影が飛んでいる」というオカルト紛いな報告で、警察も対応するかどうか腕を拱いていた。

しかし、この数分間だけで同一と思われる報告が爆発的に増え、半信半疑のまま対応することを決定した。

まずは現状を正確に把握するため、現場に最も近い派出所から捜査官を派遣した。

報告を受けたパトロール中の警察官はサイレンを鳴らし始め、中央管理室からの報告を聞きながら標的の向かっている場所へと向かった。

あまりの大声だったので、香乃はまだ耳鳴りが続いていた。
イズとシルゼーロマの巨大すぎる咆哮から五分ほどが過ぎた。まだ香乃の予想した展開にはなっていない。

シルゼーロマは速度を落とさないように頑張ってくれている。だがスピードを落とさなかった結果、人口が密集する駅まですぐに到着してしまいそうだ。それまでには何とかしたいのに、まだ町に変化はない。

最近は緊急性のない通報が増えていくらしく、到着まで時間が遅くなっているのかもしれない。

いや、そもそも目的のものが飛んだり跳ねたりして非常識な速さで移動しているからかもしれないが。

このまま何も起こらなかつたらどうしよう。

香乃の脳裏に一抹の不安が過ぎる。

その時、今までにない音が耳に届いた。

飛行して風切る音で包まれる中で、香乃はサイレンの音を聞き取

った。本当に来てきれるか不安になったが、確かに期待した物の音を聞いた。

香乃は後ろへ振り返る。

自分達の後ろには、陸猩族がぴつたりと追って来ている。そのまた後ろには、夜の街中で点滅する赤いライトを見つけた。

ライトの持ち主であるパトカーから、騒々しいほどの大音量で緊急避難勧告が放送される。

『パトカーが通ります。道をあけてください。市民の皆様は、付近の警察の指示に従い、安全な場所へ避難してください』

その音が町中に響いた瞬間、追尾していた陸上族が一斉に転倒した。

「があああっ！！」

音に堪えられなかった陸猩族の一行は苦しそうに耳を塞いでいる。予想していたよりも高い効果に、香乃は啞然としてしまった。

「お見事」

シルゼーロマが短く称賛する。

「……なんか、可愛いそうなくらい効いちゃったみたいね」

「そ、そうだね……」

「まあ死にはしませんし、今まで攻められた分、あれぐらい効いてもらわないと」

香乃の素直な感想に、イズは同意し、シルゼーロマはさりげなくねちっこいことを言う。

シルゼーロマから陸狸族について詳しく聞いた際、香乃は気になる証言を聞いた。

（「陸狸族は五感を含め、身体能力が驚異的に発達しているのです。腕力は私たち天竜族より高いですし、薄暗い陸地で生活する彼らは目も耳も遥かに優れています。私たちが逃げきれるかどうか、運に頼らざるを得ません」）

一見自分達が不利であることの証左でしかない情報だった。

しかし、香乃は偶然にもひらめいた。

自分達だけではどうにもならなそうなら、周りの人に協力してもらえばいい。

大騒動を起こせば、おそらく国家機関が動くだろうと踏んだ。

都合よくも、現在地は香乃の地元だ。社会の仕組みならイズやシルゼーロマよりも詳しい。

そう考え、香乃はできるだけ大きな声で叫んで、より広範囲の人に気づいてもらおうとした。

結論から言えば自分よりもイズとシルゼーロマのほうが効果があったようだが、結果オーライというやつだろう。

「小癪な……！」

派手に転倒したノルバノは苦虫潰したような顔をしながら起き上がった。敵の奇策によって無様な格好をさせられ、ノルバノの一族

の誇りを侮辱されたような気持ちになった。

「異世界の民の分際で、我等を愚弄するのかあ！」

体勢を立て直した陸猩族はすぐに追跡を再開する。

「あちゃー。怒らせちゃったみたいね」

「左様ですね」

「うわ……どどどとするんだよ……！」

香乃とシルゼーロマは呑気に見ており、イズだけ焦っていた。

「できればもうちょっと寝ててくれると、こっちはゆっくりできるんだけどな」

さてどうしようか、とシルゼーロマが傾斜をつけて交差点を曲がりながら、次の案を考えようとした時だった。

反対側の角から別のパトカーが疾走してきた。別経路から追跡していたほうが合流してきたようだ。

パトカーは可能な限りの速度を出して、自分達に追走してくる。

その必死な走り方を見て、香乃ははっと気づいた。

思えば、イズやシルゼーロマはこの騒動の根本原因だ。陸猩族の妨害はそのおまけでしかない。

今の警察には、天竜族は恐ろしい怪物にしか見えないだろう。

日本は拳銃の使用に対して使用の妥当性とか傷害した場合の責任問題とかにうるさいくらい問い詰められるから消極的だ、とは聞いたことがある。

だが、もしも発砲してきたらどうしよう!?

香乃の頭に最悪の展開が浮かんでしまった。ここまで事が起きてから、危険性を考えていなかった自分の浅慮を恥じた。

「シルゼーロマ! 急いでパトカーから逃げて!」

「カノさん?」

香乃の一変した様子に、シルゼーロマは首を傾げる。

「いいから早く! じゃないと……!」

理由を説明しようとパトカーへ振り向いた香乃は、ぎょっとした。すでにパトカーの助手席の窓が開けられ、警官が身を乗り出している。

香乃は一気に青ざめた。脳内で最悪の流れが想像される。発砲してきたらどうしよう。弾がイズカシルゼーロマに当たったらどうしよう。自分に治せるのか。医者に頼むことなんかできるのか。そんなことになったら陸狸族から逃げきれるのか。

助手席の警官が片手で掴まりながら、もう一方の手で何かを取り出そうとしている。

どうしよう。どうしよう!

どうすればいい? どうすればいい? どうすればいい? どうすれば

いい？どうすればいい？
どうすればいいの！？

パニックに陥った香乃に構わず、警官は片手を外に出そうとしている。香乃にはその動きがひどく緩慢に見える。

警官が取り出した物から、

音が発した。

『君！大丈夫かー！』

警官が持っていたのは、携帯型の拡声器だった。

警官は取り出したそれを口元に当て、必死に香乃に声を張り上げている。ついでに「キーン」とハウリングも起きて、周囲に迷惑極まりない音を撒き散らしている。

香乃は全身全霊で脱力した。自分が心配したのは一体なんだったのか。

「カノさん、呼ばれているようですが、答えなくて宜しいのですか？」

「……うん、ちょっと無視したい気分なの」

焦りで前進から吹き出していた汗が、今では風に吹かれてやけに寒い。

陸狸族はどこまで来ているだろうかと思い、何気なく後ろを向い

てみた。すると、陸狸族はまたもや転げ回っていた。
拡声器の音も陸狸族にとっては堪えがたい高音らしい。

それに気づいた香乃は、にたりと不気味な笑みを浮かべる。己の
内に眠る小悪魔が目を覚ました。

「イズ、シルゼーロマ、ちょっと大声出すね」

「分かりました、どうぞ」

「う、うん、いいよ」

両名からの承諾をもらった香乃は、大きく息を吸い込む。肺に目
一杯の空気を取り入れると、一気に押し出すと同時に声を乗せる。

「助けてーっっ!!」

香乃は自分が出せる精一杯の音量で張り上げた。

「いやー！お願い！早く助けてー!!」

イズとシルゼーロマは、香乃の叫ぶ内容に驚きを隠せなかった。

香乃の世界の住民に助けを求めたのだ。

自分達といることは苦痛だったのだろうか。いや、香乃は天竜族
と知り合ってまだ半日も経っていない。今まで何事もなく接するこ
とのほうが不思議だった。

積み重なった壮絶な経験が香乃を精神的に追い込んでしまったの
かもしれない。

「力……力、ノ？」

イズは不安で堪らなくなり、声を震わせながら名を呼ぶ。
自分達から離れようとしている香乃の言動は、裏切られる気持ちにさせる。

両名の胸中を何となく察した香乃は、声の音量を元に戻して付け足すように言った。

「ああ、これ演技だから。本気にしちゃダメだよ？」

本音を聞くと、自分達の予想が容易く外れたことで、別の形で裏切られた気持ちになった。

香乃の狙いが何かは知らないが、彼女の言動に一喜一憂している自分が情けなくなった。

イズとシルゼーロマが憮然とした表情になっている間も、香乃は大声を出し続けている。

すると、香乃の声に追跡していたパトカーが反応した。

『大丈夫かー！？今助けるからな！そのまましっかり掴まっているんだぞ！』

香乃の身を案じる警官の声が夜の町中に響く。拡声器を持っている助手席の警官は一度車内に体を引っ込ませ、中に設けられてある無線機で何かを報告している。おそらく謎の飛行生物に人が乗っていることと応援要請の報告だろう。

「あれ？戻っちゃった。もうちょっと言い続けててほしかったんだけどなー」

香乃の独り言にイズとシルゼーロマは首を傾げる。

「カノ、何を狙ってたの？」

「陸狸族のみんな、拡声器の音も苦手みたいなの。キーンって鳴る音もね。だから、あの警官に拡声器をもっと使ってほしくて大声を出してたわけ」

「カクセイキって、あの変な形の道具かな？ 凄いな、こんな小さな物からあんなに大きな音が出せるなんて」

「でしょ？ もっと人間を褒めちゃって！」

両名はすでに感嘆していた。

一方、

「足止めは上手くいったようです。あとは、このまま逃げ切れればいいのですが……」

シルゼーロマだけは懸念を拭えなかった。

Lord of the Storm

未だかつて、これほどの屈辱を受けたことがあっただろうか。

たった二人の天竜族とちつばけな異世界に振り回されているなど我慢ならない。

目と鼻の先に憎々しい種族がいるというのに、このまま逃すわけにはいかない。

種族の誇りにかけて、父親の無念に誓って。

このまま逃してなるか！

ノルバノは進行方向の道端に駐車されている自動車に目を留めた。追走しながら、そのボンネットを片手で鷲掴みにする。

「貴様等……思う儘に行くと思うなあ！！」

ノルバノの怒声とともに、自動車がぶん投げられた。

夜の町に響いた大声に思わず振り返った香乃は、車が一台回転しながら飛んでくるのを見た。

「うそっ！？」

自分の目を疑った。

「シルゼーロマ避けて！！」

切迫した指示にシルゼーロマは考えるよりも先に従い、翼を大きく羽ばたかせて進行方向の直線上から離れる。

その直後、位置的に一番下にいるイズのすぐ足元を鉄の塊が唸りを上げて通って行った。それは慣性に従い、放物線を描いて向かう先のビルに激突する。側面のガラスを砕き、骨格のコンクリートに遠慮なくめり込む。砕けたガラスやビルの破片は真下の歩道へ降り注ぎ、偶然そこにいた人の絶叫が聞こえた。

鋼鉄の剛速球は一瞬にして夜の町をパニックに陥らせた。

慌てふためく人々とビルに突き刺さった異様な光景を見てしまった香乃達は息を飲んだ。

「シルゼーロマ！陸猩族は異世界に危害を加えないんじゃないの！？」

香乃はシルゼーロマを責めた。そんなことをする意味などなく、している場合でもないことは分かっている。しかし香乃の聞いた情報と違ったことが起きたため、図らずともなじる口調になってしまっていた。

「それだけ彼らも必死だということです！しかし、これほど力任せの手段を取るなんて……！」

シルゼーロマも信じられないという様子だ。

彼女から聞いた情報では、陸猩族は異世界について技術物品を物色することはあっても危害を加えることはないという話だった。陸猩族は天竜族と同じく平和を愛し、慈悲の心を持って自然とともに暮らす穏やかな存在だと聞かされた。事実、つい先ほどまでは携帯しているはずの重火器を町中で使用していない。

だが今日の前で起きたことはそれを容易に覆した。

陸猩族が、なかでも指揮者的な存在が自ら香乃達に攻撃を行い、

さらには異世界の物体を破壊してまで手にかけようとした。これは由々しい事態だ。

シルゼーロマからの情報が正しいままだったならば、町に手を出せないことを盾に逃げ続けるつもりでいた。この町は香乃が一番知っているし、時間が稼げれば考える時間も増えると狙っていた。しかし、その策略も塵と消えた。

「は、早く人間が少ない場所へ行かないと！」

イズが切羽詰まった様子で言う。

「そんな場所ないよ！駅の近くは人が集まるし、ここの周りには住宅街が続いてる！すぐに人気のない所なんて移れないよ！」

一時凌ぎでしかないと言香乃が反論する。

「とにかく、彼らの投擲力の射程外まで離れます！しっかり掴まっ
ててください！」

そう言うや否や、シルゼーロマは速度を上げる。今まで掴まりっぱなしだった香乃の腕には疲労がたまっており、かなり堪える。

「カノさん、余裕があれば郊外までの最短経路を教えてください」

疲労の様子を察したのか、シルゼーロマの言葉の中に配慮が含まれていた。

香乃は別の何かに意識を向けていたほうが気が楽になるだろうと思
い、正面を向く。

ここから郊外まではかなり距離がある。すでに駅の近くまで来ているので人口の少ない所まで移動するとしたら時間がかかるだろう。空を飛んでいるとはいえ、陸狸族を近づけさせないようにしながら長距離を移動するのだから簡単にはいかないだろう。

ということは、やはり駅を通り過ぎる瞬間が勝負を握っているようだ。

警察が包囲を固めてくれているれば、また何らかの方法で陸狸族の足を止めてもらうことができるかもしれない。今のところ香乃達だけでは太刀打ちできない状況なので、人間に協力を依頼するしか手がなくなっている。

なら、今のところの目的地は決まる。

「……このままで大丈夫。道は変えてもらって構わないから、方向はこのままでお願い」

「分かりました」

シルゼーロマは向かい先を決めると、気合を入れるように一度翼を大きく羽ばたかせた。

「とにかく、駅のほうへ急いでください！たぶん警官が集められているかもしれない！」

「……了解です。方向の指示をお願いします」

香乃の提案にシルゼーロマは従うことにした。これ以上余計な道草も手間もしてられない。彼女の考えがある場所へいち早く辿り着くことが何よりの優先事項だ。

ついさっき香乃の指示を軽んじていたばかりだ。この土地は自分

よりも香乃のほうがよく知っている。もう後悔するわけにはいい。

案内に従って一度角を曲がり、広い道路に出た。そのまま直進する。

直線だと追跡されやすくなるが、その可能性を考慮したシルゼーロマは今まで出さなかった速度を出した。正直なところ疲労が蓄積していて全力とはいえないが、現時点で出せる最高速度だった。

時折高度や位置を変えて陸猩族の照準をずらす。

「このまままっすぐです！もう少しで駅に着きます！」

先程の警官が騒ぎの実態を報告しているならば、人が密集する駅前には緊急避難勧告が敷かれているはずである。同時に、迎撃するための人員が配置されていると考えている。

そこにいる警官達の何らかの対処によって陸猩族達と距離を離すことができれば、人目の付かない駅舎の真上で次元移動を行える。ある程度の距離を離せば、次元移動の際に残るといふ痕跡をなくすこともできるだろう。それが香乃の魂胆だった。

できるだけ速度を維持して飛行していると、遠くに大きな建物が見えてきた。高さはビルほどではないが、屋根は大きく、上から見た面積がとても巨大である。

シルゼーロマはようやく見えてきた目標地点をその目で見る事ができ、一瞬安堵する。そこへ向かって、最後の力を振り絞るつもりで翼を羽ばたかせた。

瞬間、真上から陸猩族の一人が降ってきた。

「！」

手には長大な棍棒を持ち、降り下ろそうとすでに構えている。本能的にシルゼーロマは陸狸族の攻撃を避けるため、偶然すぐ傍にあった曲がり角を曲がった。

「だ、だめ！こっちは……！」

やや狭い道を通る中、香乃が青ざめたような声を上げる。いずれ戻るつもりなのだから心配はいらない、とシルゼーロマが返事をしようとした瞬間、信じられないことが起きた。

ビルとビルの間を抜けていき、やや樹木が多くなってきたと思った矢先、

いきなり視界が開けた。

ビルや店舗など人工物が軒を連ねていたはずなのに、瞬く間に自然一色の景色が視界を占める。

香乃はその場所を知っていた。

緑地公園。

都会に設けられた、自然の大切さを感じてもらおうと意図的に作

った人工的な自然広場。

そこには鉄やコンクリートでできた高いビルもなく、鉄でできた自動車が猛スピードで走ってもいない。信号もない。電線もない。開けた風景がそこにあった。

「なっ……！？」

なぜこんな場所が？

目の前委に広がる景色に驚愕したシルゼーロマに当然の疑問が浮かぶ。

しかしそれを口にすることはなかった。

前方から、左右から、後方から、陸猩族が飛びかかってきた。視界の効くこの場所で待ち構えていたらしい。

このまま飛んでは捕らわれに行くものだ。

高度を上げるか。いや、上にも気配がある。動きを完全に読まれている。

逃げ場はない。

逃げ道を塞がれたシルゼーロマは最後の手段を使った。

「掴まってください！」

陸猩族の手が届くより一瞬早く、シルゼーロマは次元をこじ開けた。

香乃もシルゼーロマも、陸猩族からある程度逃げることができてから使おうとしていた、逃走手段の奥の手。

あの間合いでは移動先の次元を辿られてしまうだろう。時間稼ぎ

に過ぎないが、あの場で捕まるよりは建設的だとシルゼーロマは判断した。

甲高い音が鳴り響く。視界の所々で閃光が走る。原因の分からない振動が体を揺らす。

短くも長い時間が過ぎると、それらが一斉にやんだ。

広がっているのは、今や懐かしささえ覚える巨大な樹木が乱立している風景だった。

天竜族と陸猩族の住む世界に戻ってきた。

不思議と安心感が胸の中に広がる。この場所なら何とかなると思えてしまうのは、元の世界だからだろうかと思シルゼーロマは思う。

一方、香乃はかつてないほどの不安感に襲われていた。根拠があるわけではない。ただ不思議に感じただけだ。

陸猩族の生まれ育った土地に戻って、このまま簡単に逃げられるものだろうか。

シルゼーロマが能力を高く評価している陸猩族が、自分達がこの世界に戻らないことを想定していないのだろうか。

シルゼーロマに忠告しようとした時、進行方向に一名の陸猩族が現れた。

やはり待ち伏せされていた。そう気づいた時には、すでに遅かった。

現れた陸猩族は手に持っていた球状の何かを投げつけてきた。投擲されたそれは香乃達の目の前に迫ると、自動的に弾け、中に収まっていた網が広げられた。

かなり大きく、体の大きい天竜族でさえ四名くらいは入れてしま
うだろう。

避けきれない。

シルゼーロマは反射的に両手を離し、イズを解放した。

「え？」

飛べないイズは間の抜けた顔をしながら重力に引かれてどんどん
落ちていく。

シルゼーロマは彼の様子を見る間もなく、開いた手を背中に回し
た。

そこにいる香乃を掴む。

「へ？」

香乃が間抜けな声を出す。

シルゼーロマは構わずに、驚掴みにした香乃を全力で投げた。

「イズトリカム！」

「ぎゃー！！！」

香乃があまりにも酷い扱いでイズのほうへ投げつけられた。

落ちながらイズは、悲鳴を上げながら飛んでくる香乃を受け止め
る。空中でバランスを取るの難しいが、運良く香乃と向き合う格
好を取ることができた。

イズは香乃を両腕で包み込み、落下に備える。やがて地面に衝突し、全身に衝撃が走る。

「ぐっ！」

イズは堪えた。慣性で勢いの続くまま地面を転がる最中も、両腕の力を緩めることはなかった。

勢いの止まったイズは、腕の中の香乃が無事であることを確認する。

上を見ると、網に絡んで飛べなくなっているシルゼーロマが見えた。網を放った陸狸族はその端を掴むと、勢いをつけて地面へと振り下ろす。

羽ばたくことのできないシルゼーロマは、されるがままに地面へと叩き付けられた。

「がはっ！！」

ズシンという重圧の音とともに全身に激痛が走る。天竜族の外皮は腹部などの前部を除けば固い皮に覆われている。ある程度の衝撃に堪えられる体を持つが、今の衝撃はその“ある程度”を完全に超えていた。

四肢が痺れる。骨が軋む。肺の空気が握り潰されるように抜ける。シルゼーロマは蓄積した疲労感も相まって、体を起こすことができないでいた。

「全く、手間をかけさせたな。だが、これで終いだ」

いつの間にかノルバノが合流している。香乃とイズ、シルゼーロマを取り囲むように、陸狸族が輪を作っていた。

「諦める。貴様らの運命は、我等陸猩族が貰った」

香乃達は周りを見回して、気づいた。

飛ぶことのできないイズ。

動くこともままならないシルゼーロマ。

力では到底及ばない香乃。

香乃達は抵抗の許されない状態であることを悟った。

逃げるのはここまでだ。

香乃達は一様に諦めようとした。

その時、遙か上空から何かが落ちてきた。

「ちよおつと待ったあああああつ!!」

制止の声を出しながら落ちてきたそれは、ちようど香乃とイズ、シルゼーロマの中間に着地した。

ドガン!というほとんど爆発音にも近い音を出して着地したのは、紛れもない天竜族だった。

着地の衝撃で、シルゼーロマの網を掴んでいた陸猩族は思わず飛び退く。

降り立った天竜族は、天竜族で間違いないのだが、その体格はイズやシルゼーロマよりも遥かに大きかった。一回りか二回りは大きく、誰もが見上げる形になっている。

「そこまでだぜ。俺の目が黒いうちは、お天道様が許しても俺が許さねえぜ!」

なんか頭の悪そうな決めゼリフを口走った天竜族はノルバノに対して指を突き立てている。

よく分からないが、増援に違いない。でもシルゼーロマをよく見るとさらに落胆しているようにも見える。

「なんか、頭悪そうなのが来たね」

「……そうだね」

イズが生返事のように短く答える。

思わぬ闖入を許したノルバノは、その風体や口調に覚えがあった。一度だけ見聞きしたことがある、そのふざけた在り方。そして……。

「貴様、スラストハル・ベルバーセンか！？天竜族を統べる長が何故ここに！？」

ノルバノの言葉に香乃は聞き覚えがあった。それをイズに聞いてみることにした。

「ベルバーセンって、どこかで聞いたことあるような……。何だっけ？」

問われたイズは、端的に答える。

「僕の下の名前だよ」

「ああそうだった、そうだった」

言われてやっと思い出した。

そして、さらに気づいた点をもう一つ聞いた。

「……ってことは、ご家族？」

突然乱入してきた馬鹿でかい天竜族を指差す。
イズは言いにくそうに口ごもりながら答えた。

「僕の……父親」

あれが、イズの父親。

あんな口も頭も悪そうな天竜族が、イズの父親。
イズにもシルゼーロマにも雰囲気が違うその人物に、香乃は別の
生き物を見ているような気分でした。

「……マジ？」

「まじって何？」

「本当、って意味」

「ああ、うん。マジ」

イズが日本で使われる言葉に早くも順応する。

「じゃあ……イズのお父さんは天竜族で一番偉い王様？」

「そんな感じ」

なるほど。香乃は合点がいった。

イズは天竜族の王子様だった。

なんかイメージが違う気がするが、父親が王様なら自動的にそうなるんじゃないだろうかと思った。

でもやっぱりイズにしてもその父親にしてもイメージが違うので今は決めつけないことにしておいた。

他にも、あんな性格の持ち主を一族のトップに座らせておいて大丈夫なのだろうかと天竜族の心配をしなくなる。

だがそれも考えすぎというか、口に出していないけどボロクソに言い過ぎだと思ったのでこの辺りでよしておいた。

イズが感情のない返事をしていたのも頷ける。実の父親がああでそれを小馬鹿にされたのでは内心複雑だっただろう。

香乃がどうフォローを入れればいいのか迷っている間も、ノルバノとスラスタハルのやりとりは続いていた。

名を呼ばれた天竜族は、いかにも、と首を縦に振った。

「俺の名を知っているなんてさすがだな、ノルバノ・ハチキ」

そう返されたノルバノは、自分の本名を言い当てられたことに酷く驚いた。だが、聞き返す前にスラスタハルが先に口を開いた。

「これ以上同胞に手を出さないでくれねえかな。俺も手荒な真似はしたくねえんだよ」

やり取りを聞いていた香乃は、使われている言語が日本語であることが幸して理解できていた。もしこの世界の言語だったらまたアウェーな気分になるところだった。

「貴様、なぜ吾輩の名を知っている？」

ノルバノがようやく疑問を口にする。

「そりゃ知ってるさ。お前の親父さんとは昔、意見をぶつけ合ったからな」

「我が、父だと？」

「ああ。……陸猩族としては不本意な最期だったな」

囚われの身だった時、ノルバノから陸猩族のことを聞かされたのを思い出した。過去に陸猩族一名が原因不明の死を遂げたが、ノルバノはそれが天竜族の仕業だと推理していること。香乃としては半信半疑の話だった。

「な、なぜ父の死に際を知っている！？我等陸猩族の情報など、貴様等天竜族が知り得るわけが……」

そこまで言って、ノルバノははっと気づいた。

「まさか、貴様！」

「そうだ。その通りだよ」

スラストハルは包み隠すことなく、遠回しの言い方もせず、告げる。

「俺がお前の父親を焼き殺したんだ」

天地の双壁

ノルバノが聞いたことは、生涯でもっとも大きな衝撃だった。

香乃は、イズやシルゼーロマのような、争いを好まない考え方を
持っているのが天竜族だと思っていた。だから、陸狸族の一人が天
竜族に殺されたというノルバノの話を信じ込めなかった。

しかし、スラストハルによつて認めたくない事実が証言された。
天竜族は昔、陸狸族の一人を殺めたことがある。それも、焼死と
いう惨い方法で。

その場にいる誰もが動きを止めていた。皆、明かされた事実を前
に動けないでいた。

たった一人を除いて。

自分の推理が正しかったノルバノは、感情が高まっていた。
父親を手にかけたのが天竜族の仕業だということが証明された。
相手はそれを認めている。

「そうか……父を殺したのは、貴様なのだな……」

握り拳がわなわなと震える。

考えるよりも先に、怒りが、憎しみが湧き上がる。

「認めるということは、我が輩に殺される覚悟があるのだろっな！」

ノルバノの手に握られていた重火器が向けられ、

「父の無念、思い知れっ！！」

引き金が引かれる。耳を割くような爆発音と共に、鋼鉄製の弾が撃ち出された。

空気を切り裂き、スラストハルへ迫る。

スラストハルは片手を前へ突き出した。

それで受け止めるようとしているなら無茶だ、と香乃が叫ぼうとしたが、もう間に合わない。

バズーカ砲の弾は、スラストハルの寸前で透明の壁に衝突し、爆発した。

何もない空間に淡い光が波紋を広げ、衝撃のエネルギーを分散させていく。ドーム状に伝う波紋は、よく見れば香乃とイズ、シルゼーロマのいる場所まで展開されていた。そこまで透明の壁が覆っていることになる。

香乃はSF映画などで時折描写されるのを見たことがある。

「シールド……？」

スラストハルの手には何かの塊が握られていた。外枠は銀色だが、中央に宝石のような半透明の何かが埋め込まれている。

「悪いな。ズルできるのはお前らだけじゃねえんだよ」

掌にあるのはシールドの発生装置のようだった。おそらく、地球ではない別の異世界で作られた化学兵器だろう。

しかし、バズーカ砲や拡声器に比べれば技術レベルは遥かに進んでいる。

攻撃を止められたノルバノは悔しそうに表情を歪める。

「往生際の悪い奴め！」

ノルバノが吠える。

「だが忘れるな！守ることはできても、貴様がここを出ることは叶わないのだ！」

周囲を囲んでいる陸猩族が手に持つ武器を構え直した。

スラストハルが降りたのは陸猩族の包囲のちょうど中央だ。イズは飛べないし、シルゼーロマは網にかかって動くこともできない。救出するそぶりを見せたらすぐにでも飛びかかってくるだろう。

天竜族二名を抱えて香乃も乗せた上で、陸猩族に捕まることなく脱出するなんて不可能に近い。

どうして降りて来ちゃったんだと香乃が責め立てようとしたが、スラストハルは困ったように頭の後ろを掻き始める。

「あちゃー、それは困ったな。これじゃあすぐに捕まっちゃうよな」

わははっ、と緊張感のない苦笑を見せる。

「ようやく分かったか。貴様もすぐに拘束し、天竜族への脅迫の材料にしてくれる」

「同胞が捕まってちゃ、天竜族は言うことを聞かざるを得なくなるよねー。頭いいなあ、お前」

すでにシルゼーロマは捕まっているし、イズも逃げられないとい

う理由で捕まっているのと同じになる。香乃という来客も手中に収め、一族の長を押さえられている。

状況は全くもって陸猩族が有利に傾いている。
勝負はもう決まっているといっても過言ではないだろう。

危機的状況を見せられているスラストハルは、ふとニヤリと口元を曲げる。

「確かに俺たちを捕まえたら、勝負はお前の価値だよ、ノルバノ。
……だけどな」

気障^{きざ}な笑みは、不気味に歪んだ。

「一体、どんだけ捕まえるつもりなんだ？」

頭上を覆う巨木の枝葉がざわめく音が聞こえた。その場にいる全員が上空を見上げる。

ばさばさと枝葉を分け入りながら、羽ばたく音が聞こえてくる。
それも、真上だけでなく、その周りからも同じような音が聞こえてくる。

「ま、まさか……」

「そう。生涯には三つの坂があるんだってな。『上り坂』、『下り坂』、そして『まさか』」

上空の枝葉から、天竜族の増援が現れた。それも二名や三名ではない。今見える範囲の天井全体を天竜族が覆っていた。

「俺たち天竜族にとっちゃ上り坂なんだけど、お前にとってはどん

な坂なんだろうな？ノルバノ」

増援の天竜族は高い空を滞空し、陸猩族を見下ろしている。
天を覆うほどの同胞を統べる器。これが一族の長の実力なのだと
ノルバノは思った。

そこに、別の声が降ってきた。

「やめんか」

スラストハルのように、巨木の枝を避けながら誰かが降りてくる。
天竜族のようだが、言ったのは彼ではない。彼に誰かが乗っている
ようだ。

「まったく、そのような言い方をしては、余計に誤解を受けるでは
ないか」

「分かりやすいのが一番だろ。これからあんたと説明するつもりだ
つたんだし。つーか、もっと早く降りてくれりゃ良かったんじゃない
？」

発言の主を乗せた天竜族が、ゆっくりと地に到着した。

「無茶言うでない。これ以上早く降りたら、気圧に順応できなくて
鼓膜が潰れてしまうわい」

天竜族の背中から一名、降りた。

それは、陸猩族だった。

今まで見た陸猩族よりも、体毛に白髪が交じっている。人間と同

じように思っているのか迷ったが、香乃の目には年齢の高い人物のように見える。

「なっ!？」

一番驚いたのは、ノルバノだった。陸猩族だったからではない。その人物がどういう立場の者が知っているからだ。

「ヤーバック、族長……!？」

陸猩族をまとめる長が、天竜族と同じ所から登場したことに、ノルバノは目を疑った。
彼だけではない。他の陸猩族も、イズや香乃も驚いた。辺りからどよめきが聞こえる。

シルゼーロマは動じていない。様子からして、彼女は一度ヤーバックに会っているのだろう。

いや、族長の補佐を務めている彼女は、天竜族と陸猩族の長同士が接触していることを知っていたのかもしれない。

周囲からたくさんの疑問の視線を受けながら、ヤーバックは口を開く。

「ノルバノよ、儂が天竜の者と一緒にいることに驚いているようだ。その説明をしようと思うのだが、聞く耳はあるか？」

「はっ、も、勿論であります！」

ノルバノが平粛している。今までの高圧的な態度が嘘のようだ。
他の陸猩族も、すでに戦意をなくしているようで、動く気配はな

い。

辺りに静寂が巡る。

ヤーバックはこれから話そうとして、一つ気がついた。

「異世界の民よ。せつかくだ、貴女も聞いておいてもらいたい。こちらの事情に巻き込んでしまった、せめてもの見返りだ。言葉はこれで合っているかな？」

確認を取られた香乃は状況にまだついていけなかったため、

「は、はい、合ってます」

しどろもどろに答えるのがやっとだった。

ヤーバックは皆の様子を窺い、そして改めて話し始めた。

「ノルバノ。お主の父親は、確かにこのスラストハル・ベルバーセンによって殺された。しかし、それには理由があったのだ」

「殺した理由……ですか」

殺さなければならなかった理由とは何なのか。今、知られざる過去の封印が解かれようとしている。

「お主の父親、クセイロ・ハチキは当時、儂の補佐を務めていたのは知っているな？その時期から、儂とスラストハルは極秘に会合を行っていた。天竜族と陸猩族、双方が共存できる協定を締結するための、な」

「陸猩族と、共存……？族長、気でも狂ったのですか？」

ヤーバツクの口から出た言葉は、ノルバノの理解しがたいものを含んでいた。

我が父を殺した。

故に、天竜族は敵だ。

天と地が触れ合うことのないように、敵と共に生きることなど考えられなかった。

ヤーバツクはノルバノの疑問を汲み取り、答える。

「疑問に思うのは無理もない。双方の種族が天空と大地に別れたのは、太古のいざこざが原因だ。それ以前は何も疑うことなく富を分け合っていたのだから」

それから、ノルバノはこの世界の歴史について語り始めた。

遙か昔、この世界には天竜族と陸猩族が手を取り合って暮らしていた。互いの個性を認め合い、届かぬ所は助け合い、自然の豊穡を祝い合っていた。

ところが、一時期に気候の厳しい時期が訪れたことがあった。例年のように作物は育たず、食糧は貴重なものになった。

その時期から、種族の優劣を明確化するべきだと主張する者が現れた。自分たちの種族のほうが優れている。劣等な種族に富を与える必要ない、と。

この思想は両方の種族に現れ始め、始めは少数だったが確実に支持を伸ばしていった。いつしかその思想は同じ内容であるが故に種族間での衝突を招いた。

当時の族長らは同胞に冷静な対応を呼びかけていたが、焼け石に水だった。声の届かぬ同胞を前に、族長らは頭を抱えることになった。

騒動を抑えるため、族長らは話し合った。対抗の理由は偶発的なものであり一時的なものはずである。しかし、食糧の不作は一時の時期であつても食糧事情は長期間継続する。毎日欠かすことのできないものであり、食糧が安定するまでの間を全員が自制しなければならぬ。それまでが富に恵まれていた分、突然強いられた我慢はたとえ十日間であつても苦痛となる。解決は容易ではなかった。

結果、天竜族は冷風の止まない山頂へ、陸猩族は闇の絶えない密林へ、それぞれ住む場所を分けた。

事実上、異種族間の社会の終焉である。

そして、現在。

天竜族の長スラストハル・ベルバーセン、陸猩族の長ヤーバック・ココリは互いに意気投合し、異種族混合の社会の再現を目指すことを決めた。

困難は覚悟の上で、少しずつ同胞に理解をもらえるよう努力していた。

だが、それに反対する者がいた。改革を行う時には批判や反発は付き物だ。柔軟な対応をするつもりで変わらず理解を求めた。

話をして、反対派の者たちは納得しなかった。むしろ、反対側の意志を伝えているのに族長の意見が変わらないことに、反対派としては憤りを感じた。

そして、反対派の中からどんな手段を用いても異種族混合社会の実現を阻止しようとする過激派が生まれた。

その一人が、ノルバノの父親クセイロ・ハチキだった。

クセイロはヤーバックの補佐でありながら、正反対の意見を持つ

ていた。どんなに理解を求めても、ヤーバックの態度は変わらなかった。

ある日、ヤーバックとスラストハルが定期の会合を終え、帰路につこうとした時のことだ。

ヤーバックは何者かに襲われた。あとで聞いた話では、襲ったのはクセイロだった。

いつまで経っても意見を変えないヤーバックに、クセイロは我慢の限界だったのだろう。暗殺することでこれ以上話が進むのを阻止しようとしていたらしい。

会合の時に渡しそびれた物を届けようと、スラストハルが追いかけ、追いついた時にはすでにクセイロがヤーバックにとどめを刺そうとしていた。

スラストハルは無我夢中でそれを妨害した。

スラストハルの妨害が入っても、クセイロは暗殺をやめようとはしなかった。失敗は許されない、失敗したら陸猩族の社会へ戻れないと知っていたのだらう。

攻撃のやめないクセイロを、スラストハルはヤーバックを助けるために仕方なく火炎を放ち、殺害した。

「俺だつて殺したくはなかった。だが、そうでもしなきゃヤーバックはやられていた。そんぐらいの剣幕だったのさ」

スラストハルが悲しそうに話す。先ほどの軽い雰囲気はない。

「クセイロに家族がいることを知ったのは、そのあとだ。ヤーバックにいろいろと協力してもらってな……」

クセイロの遺体は内密に埋葬することになった。また、クセイロの家族には不慮の事故があったと報告した。特に、当時まだ幼かったノルバノには絶対に真実が伝わらないように細心の注意を払った。

父親が無惨な死に様を見せただけでなく、殺される理由がクセイロ自身にあったなどと言えるはずなかった。当時の父親を慕う幼い心には、真実はあまりにも残酷すぎた。

それから幾年。知識が身についてきたノルバノは、偶然にも父親が不自然な死を遂げていたことを耳にした。偶然にしては原因が不明すぎる、変死である可能性が高い、と。

ノルバノは独自の情報収集で父親の死について追い始めた。地道な作業をしていくうちに、父親が天竜族に殺された可能性が浮上した。

この時ノルバノは陸猩族の他にも種族がいることを初めて知ったのだが、内心は感動でも興味でもなく、憎悪だった。天竜族という自分でもよく分らない者に、自分の父親が殺された。

動機はそれで充分だった。

「あとは、お主の思う通りだ。天竜族を憎み、彼らの住処である山の頂上へ奇襲しに行き、無差別に攻撃しに行くつもりだったのだから」

「そ、そのようなことは……」

「弁解してくれるな。天竜の者に焼かれた駐屯基地を発見した。それに、『久蔵峰』の麓にも同様の基地を発見した。大方、中継地点として機能させるつもりだったのだろ。無駄な隠し事はよせ」

「くっ！」

ノルバノは悔しそうに顔を歪める。

ヤーバツクの話が終わると、スラストハルが続けた。

「こんなことを言うのは卑怯かもしれないけどな、俺はお前に会えるのをずっと待っていたんだ。会った時は、必ず父親の話をしよう」と心に決めていた。どんなに憎まれても構わない、真実を教えよう……ってな」

自分たちを襲おうと企てていた相手に、スラストハルは穏やかな口調で話す。

「今まで隠していてすまなかったな」

ノルバノの天竜族を憎む気持ち。イズやシルゼーロマに手を出した事実。それらは全て、ノルバノが父親クセイロを慕っている証だった。

慕っているからこそ、ヤーバツクとスラストハルはそれを理解し、その時その時に適切な対処を取ろうとした。全てはノルバノを思っていることだった。

「なんだ、それは……」

ノルバノの手からバズーカ砲が力なく落ちる。

「それでは、我が輩が間違っていたようではないか……」

膝をついたノルバノには、もう天竜族を憎む感情はなくなっていた。

「知らなかったのだから仕方のないことだ。俺らの老婆心が過ぎた

だけなのだからのう」

ヤーバックはスラストハルに振り返る。

『スラストハル、儂らはこれで引き上げるぞ』

香乃の知らない、この世界で使われている言語で話しかけた。客人には悪いが、やはりこちらのほうが感覚に馴染んでいる。別れの挨拶くらいは母語で伝えたいのだ。

『なんだ、もうかよ。これから来れば飯も出すぞ？』

『肖りたいのも山々だが、今日はよししたほうがいいだろう。陸狸族の側は意気消沈だし、天竜族にも儂らに対する不信感が拭えんかもしれん。今日のところは引き上げて、事が落ち着いた頃にまた会うことにしようぞ』

今回の事件は天竜族に怪我人が出た。正直なところ、スラストハルも内心は穏やかではないだろう。気にしていないような様子を見せているが、外面と差があるのが奴らしいところなのだ。

『……そうだな。また来いよ』

スラストハルはヤーバックの思慮深さを知っているが故に、今回は受け入れた。考え方が広すぎて、心でも読んでいるのではないかと疑いたくなるほどなのだから。

『うむ』

短い返事とともに、ヤーバックは陸狸族を一拳に指示し、引き上

げ
て
い
っ
た。

帰り道の気持ち

大きな風を纏わせて、その巨体を浮かばせる。一対の大翼は空気を掴み、空へと導く。

香乃はシルゼーロマの背中に乗って、深く暗い密林から脱出した。

頬を風が撫でた。香りのしない、爽やかな風だった。森の中では感じられなかった自然の風が肌に触れて、慌ただしいままだった気持ちが落ち着いていく。

眼下に視界いっぱい森が広がっている。久し振りに森を見下ろした香乃は、自分でも不思議なくらいの安堵が生まれていた。

危険を伴う騒動だったが、それぞれの種族を統括する長が制止してくれたおかげでなんとか収めることができた。陸猩族がどんな収集の仕方をしているのか心配だが、ヤーバックの統率力を信じるしかないだろう。

今はたくさん天竜族と一緒に国へ戻ろうとしている。

あとから聞いた話では、ここにいる天竜族は全員治国組織の者だという。

種族を守る使命を背負っているだけあって、いずれも立派な風体を成している。

ざっと見回してもかなり大勢いるので、一斉に襲いかかれそうになったノルバノの気持ちはよく分かった。

「無事で何よりでしたね、カノさん」

香乃に背中を貸している人物が話しかけてきた。

かなり疲れているはずで帰路くらいは他の天竜に乗せてもらって

とで遠慮したかったのだが、本人の要望でまたお世話になることになった。

シルゼーロマの言う通り、香乃は大きな怪我もなく難を逃れることができた。

怪我といえば、火に当てられたための軽度の火傷と転んだ際にできた擦り傷程度だ。怪我と呼ぶには可愛すぎる。

香乃は無事だったが、その代償にイズとシルゼーロマはどちらも大怪我を負わせてしまった。

イズは両方の翼に穴を開けられ、痛々しい出血の跡が残っている。今はすでに止血しており、失血の虞はないと説明されている。

シルゼーロマは軽い酸欠と全身打撲を負った。骨折してもおかしくないくらいの衝撃だったはずだが、幸運にも大事には至らなかったようだ。

どちらの状態を見ても幸運というべきか、天竜族がいかに頑丈な体を持っているのか感動できそうだった。

シルゼーロマは休憩したら回復し、自力で帰還できそうだと言つて力強く飛んでいる。

その代わりに飛ぶ速度はかなり抑えてくれており、香乃はどこにも掴まらずに背中に乗ることができている。シルゼーロマもこれぐらいの速度なら香乃を乗せて飛行することは苦ではないようだ。急ぐ道ではないので、一事を無事に乗り切ったあとの遊覧飛行となっている。

一方、イズは翼を潰されて飛べないので、今は他の天竜族に抱えられて帰っている。

「これもシルゼーロマが助けに来てくれたおかげです。私とイズだ

けじゃどうしようもなく、もうダメだっと思ってましたから」

香乃はつい数時間前の恐怖を思い返す。しばらくはトラウマになるかもしれない。

「カノさんも、長い時間よく持ち堪えてくれました。私たちが無事だったのも、カノさんの尽力のおかげです」

シルゼーロマが労いの言葉をかける。

「そ、そんなことはありません。シルゼーロマにしがみついているのが精一杯で……役立たずなせいであなたとイズが大怪我しちゃっているじゃないですか！」

自分自身のことだから、何も及ばなかったことを一番よく知っている。嘘でもお世辞でもなく、本当に申し訳ない気持ちだった。

香乃の自責の込もった返事を、シルゼーロマは微笑みで否定する。

「充分協力してくださいましたよ。カノさんの世界で良案を考えてくれましたし、腕もさぞ疲れたでしょう」

そんな大したことじゃない、と返そうとしたが、腕の件に関してはだいたい正解だった。

長時間腕に力を入れ続けていたせいで両腕の感覚が若干麻痺していた。力を上手く入れることができず、手を握るのも儘ならない。そんな自分の体を振り返ると、本当に頑張ったんだという気持ちにはなる。

香乃とシルゼーロマはお互いの頑張りを褒める。無事に乗り切った喜びを共感する。

この気持ちを、もう一人の人物を交えてもつと共感したかった。自分たちだけで喜ぶのはまだ早い。欠かさずに交えたかった。

周りを見渡し、イズの居場所を確認する。

「シルゼーロマ、イズのほうに行ってもらえませんか？」

香乃の依頼にシルゼーロマは承諾し、イズに近づいていく。他の天竜族に抱えられているイズは頭を垂らしたままずっと同じ体勢でいる。くたびれたのか、元気な様子もない。

運搬役の天竜族に軽く会釈をして、イズに話しかける。

「無事で良かったね、イズ。大丈夫？」

香乃の声かけに、イズは返事をしなかった。ずっと下を向いている。

落ち込んだ様子に、香乃は首をかしげた。森にいた時は普通に話していたのに、調子が悪いのだろうか。

もしかして、翼の怪我が痛むのだろうか。それも当然だ。穴が開いてしまっているのだから痛まないほうがおかしい。

「ねえイズ、翼痛い？」

またもや返事がない。いくら待ってもだんまりだった。もう一度話しかけようとした時、

「……ほつといて」

「っ！？」

イズから冷たい言葉が発せられた。

予想もしない、あまりにも冷たい返事を聞いて、香乃は何も言えなくなってしまった。

二人の様子を読み取ったシルゼーロマは静かにイズとの距離を取った。

このままの間を過ごしても言葉の投げかけを続けてもやりとりが荒れるだけだと予想する。一度距離を取って落ち着く必要があるだろう。

少し離れた場所に移ったシルゼーロマは、香乃の様子を窺う。かなりシヨックを受けているようで、どこか呆然としている。

「カノさん」

「……なんで……」

「カノさん」

「……は、はいっ！はい？呼びました？」

よほど放心していたのか、一度の呼びかけに反応できなかった上、我を取り戻した瞬間にきよろきよと辺りを見回している。

「カノさん、イズトリカムが失礼を申し上げました。私では足りないとは存じますが、代わりに非礼をお詫びします。どうかお気を悪くしないでください」

シルゼーロマは謝罪してくれたが、怒ったわけではない。彼女には「大丈夫です。気にしないでください」としか言えなかった。

あえて感情を沈黙の理由にするなら、悲しさだった。どうしてイズがあんな言葉を言ったのか分からない。

さっきまで普通に話せていたはずなのに、この差は何なのだろうか。

やはり、翼が使えなくなった事実を受け止められないでいるのだろうか。

人間でも同じだ。突然の変化が起きると気持ちが追いつかず、一定期間は混乱するものだ。家が火事になったり、事故で一生足が動かなくなったり、信じたくない事実を突きつけられたりしたら、誰だって穏やかではいられなくなる。

イズは今そういう状態なのかもしれない。

同じ天竜族であるシルゼーロマに、そのことについて訊く。

「あの、その……イズは、大丈夫なんですか？もう二度と飛べないんですか？」

イズは帰る間、ずっと俯いたままだ。さっき香乃が話しかけたことを気にした様子もなく、伏し目で何かを考えている。何を考えているのか分からない。何を思い返しているのか分からない。

心配しかできない自分がかしく思う。

カノの心配に、シルゼーロマは答える。

「ご心配には及びません。傷ついたのは翼膜と健だけで、骨格もどこも切断されていません。時間はかかるでしょうが、また元のように

に飛べるまで治るはずです」

筋だけでなく骨まで狙われていたら治癒は困難だっただろう。今回は不幸中の幸いだった。

あるいは、陸狸族が大怪我のないように翼膜と健だけを狙ったのかもしれない。考えすぎだろうか。

シルゼーロマの答えを聞いて、「よかった」と香乃はほっと胸を撫で下ろした。

しかし、安堵の表情を見せたのは束の間で、すぐにイズのほうを見やっでは憂いの帯びた目で窺い始める。

イズを思いやる香乃の気遣いを聞いて、シルゼーロマは改めて思う。

人間という種族は、こんなにも温かい種族なのだと。まだ出会って間もないというのに、自分以外の者のために時間を割く仲間思いの存在だと思った。

イズを心から心配してくれ、自分の危険を省みずに惜しみ無く協力してくれた。

その誠意に、シルゼーロマはどのような形で答えなければならぬと思った。

問題は、具体的にどのような形で気持ちを返事すればいいのか、だ。

持っている物ならいくらでも差し出したい。だが、それは感謝の気持ちは込められていても、何か違う気がする。香乃がしてくれたことに対するお礼にはならない気がする。

イズを心配してくれるかのに対して渡すことができる物。
そんな都合のいい寄贈品があるのだろうか。

イズのようにシルゼーロマも一瞬黙考し、一つの“差し出せる物”が思いついた。

だが、しかし。

それはシルゼーロマにとって差し出たくない物だった。

仕方なく別案を考えるが、一度思いついた物が頭から離れず、むしろそれがもっとも適した寄贈品のような気がしてならない。

シルゼーロマは考えるというより悩み込んだ。

「あ、あのー、もしもーし？なんでシルゼーロマまで黙っちゃうのよー？」

話し声のなくなった空で、香乃の疑問の独り言だけが虚しく響いた。

途中でやめた積み木

自分がどれだけ小さな存在か知ることができた。
今回の外出で、それが分かった。それだけ分ければ、もう充分だった。それ以上なんて分かりたくもない。

香乃はシルゼーロマに案内されて、集落の中でも一際大きい住家に来ていた。

中の空間は広がった。できるだけ多くの天竜族が入れるようにと考えた結果なのだろうが、だいたい公立体育館八つ分は下らない広さを持っている。

その建物は組織が集まるために利用しているものなんだそうだが、場合によっては天竜族全体の集会場としても使うらしいと説明された。

案内された理由は、これから異世界人である香乃を交えて祭を催すそうだ。忘れていたが、香乃はそれに強制参加させられるためにこの世界に来ているのだ。

今は集会場の奥間に案内されている。天井は相変わらずぽっかり開いていて、時折風が吹き込んでくる。壁も同じく石や土に似たように異なる材質をしている。床にはタンブルウィードのような枯れ草が敷き詰められており、座っても温かかった。

「俺らは地べたに腰を下ろすのが普通なんだけど、カノさんみたいに何かに腰掛けたり肌が固くない種族もいるからね。少しでも苦痛が和らぐように、こうさせてもらっているワケさ」

というのがスラストハルから聞いた理由だ。

標高の高い山にこういった植物が育つものかと疑問に思ってた訊いてみたが、この世界では普段から繁殖しているとのことだった。

香乃の世界で高山といえば、冬季の積雪と平均気温の低さ、一日の最高気温と最低気温の温度差が大きいこと、風が強いこと、貧弱な養分の土壌、陽射しが強く特に紫外線が多いこと、など多くの点で植物の生育には厳しいことが多い。

様々な要因があるために、高山植物といえば草本が思いつきやすい。樹木は育たないことはないが、地面に沿ってクッション状に育つことが多い。

しかし、スラストハルから聞いた話ではそれらの特徴が一つも当てはまらない。つくづく地球の常識が通用しない世界だと思った。

スラストハルは香乃の目の前でお尻を付いて座っている。他の天竜族も同じようにしている。彼等の体格の関係からそれが一番簡単で楽な座り方なのだろうと思った。

陸狸族との追走戦から無事に戻った香乃達は、ひとまず休憩を取らせてもらうことになった。そして、気分が落ち着いたら祭を開催しよう、と提案してくれた。

正直なところ、香乃の疲労はとても溜まっていた。前触れもなく異世界に連れて来られた上に、その世界のいがみ合いに巻き込まれ、命の危険にも晒されたのだから。

久しぶりに訪れた安寧に、香乃は遠慮する気持ちを二の次にしてくつろいだ。

体が休憩できているぶん、意識は思考に集まっていく。

そつえば、と香乃は気になったことを尋ねたくなった。

「あの、スラ……スラ？スハ？」

「ス・ラ・ス・タ・ハ・ル。覚えにくくて悪いね」

「い、いえ、私こそ覚えが悪くてごめんなさい！」

出だしに失敗した香乃は改めて質問する。

「スラストハルさん、先程よりも身長が縮んでいる気がするんですけど、私の目が悪かっただけでしょうか？」

香乃の他人行儀な話し方にスラストハルは指摘を入れる。

「俺のことも呼び捨てでいいぞ。……カノさんは正しいよ。今の身長が元々で、さっきはでっかくなっていたんだ」

「でっかく、って天竜族ってそんな能力まであるんですか？」

天竜族は一对の翼で飛ぶことができ、灼熱の火を吐き出すことができる。

また、他文化の言語でも一度聞いただけで理解し、駆使することができるほどの知的能力まで兼ね備えている卑怯くさい性能持ちだ。その上で、体の大きさを自由に変えられる能力まで持っているのだろうか。もしそうなら、この世の造物主とやらを即座に正座させてお腹が減るまで説教したい。

香乃がこの世の理に三白眼さんびやんを向けていると、

「ないない。さっきのはこれを使っただけ」

そう言って、スラストハルは手元から何かを取り出した。

自分さえいなければ、こんなことにはならなかっただろう。

香乃を元気づけてあげたい。そんな一時の衝動で行動してしまった結果がこれだ。

せめて香乃に被害がこないようにと願ったけれど、それは叶わなかった。怪我をさせ、怖い目にも遭わせてしまった。

彼女が掴まった時、自分は必死で助けようとした。助けるために、自分はどんなことをしてしまったのだろう。

たくさんの陸猩族を傷つけ、たくさんの住居を燃やしてしまった。彼らの暮らしを脅かしてしまった。

そんなつもりはないと弁解したくても通じはしない。暴れたのは紛れもない自分自身なのだから。

途中でシルゼーロマが止めに来てくれたけれど、自分は邪魔する者を退かせようと彼女までも傷つけようとした。大切な親友でさえ、傷つけようとした。

あの時の自分は頭に血が上っていて、彼女の考えが分からなかった。たったそれだけの理由で、自分は手を出したのだ。

なんて浅はかなのだろう。

なんでこんなにも馬鹿なのだろう。

そんな自分をシルゼーロマは見捨てず、一緒に抱えて陸猩族から逃げてくれた。

攻撃もされなし、何度も危険な目にも遭ったし、最終的には怪我もした。

これだけ迷惑をかけて、彼女は怒っているに決まっている。怒ら

ない理由があるなら教えてほしい。

自分がその時だけの気まぐれで行動したから、これだけの惨事になっってしまった。

たくさんの同胞に迷惑をかけた。父親にも親友にも心配をかけた。これだけのことをしておいて、自分は一体何をした？

誰かのために尽くせたのか。香乃のため？それは自分の本心なのか？

誰かのためにしたいと思っても、結果は危険に晒しただけだったではないか。

誰かのために何かをしたいと思うことは、所詮自分の感情を満たすだけの勝手な衝動だ。

そうであることを今回痛感させられた。

実力が伴わなければ、やろうとすることは全て間違いなのだ。誰かのためだからといって、何かをしたいと願うことも許されない。それを今回思い知らされた。

何かを望んではならない。

何かを満たすことも許されない。

それが、自分のような存在の在り方なのだ。

スラスタハルが取り出したのはガラス玉のような小さな物だった。透明に透けるそれは宝石のような光り方をしており、部屋の篝火の

明かりを受けると中で複雑に乱反射して虹色を見せる。

プリズムのような視覚効果を見せるそれを、スラストハルは手の平の上でころころと転がす。

「こいつは『幻現^{げんげん}』っていう、一種の鎧なんだよ」

香乃の手でも収まるほどの小さなそれが、戦闘で使われる鎧だという。今ひとつ飲み込めなかった。

「これを身にまとって、なりたい姿を思い浮かべる。するとこの鎧が感知して、思った通りの姿になれるんだ。体を大きくすることもできるし、別の誰かの外見になることもできる」

香乃が釈然としないでいると、「まあ、見たほうが早いだろうな」スラストハルはおもむろに幻現という名の鎧をつつく。

すると、ガラス玉ほどの大きさからサッカーボールほどの大きさまで膨れ上がった。

球を形作るその表面から極薄の膜が何枚も開いていく。

透けるような膜が幾重にも重なってガラス玉になっているようだ。

薄い膜は不規則に見える規則的な順序でスラストハルの体を包んでいく。

香乃が見取れている間に、幻現はスラストハルの体を隙間なく包んでしまった。

「あとは、どんな姿になりたいか念じるんだ。幻現はそれを読み取って、想像した姿を現実にしちまうんだよ」

説明するや否や、スラストハルの体が大きくなっていく。香乃が

自分の目を疑っている間に、スラストハルは巨大化していた。

香乃が見上げるほどの大きさになりながら、スラストハルは両腕を広げ、手を閉じたり広げたりしている。

「幻現の凄いところは、かりそめの姿になっても感覚が反映されていることだな。物を掴むこともできるし、温度も分かる。俺達はたくさんさんの世界の文化に触れてきたけど、間違いなく高水準の技術じゃねえかな」

幻現を発明した世界を褒めながら、スラストハルは元の姿に戻った。瞬きしている間に起きた一瞬の変化だった。

香乃の生きる時間の中にはたくさんの異世界があり、それぞれが異なる文化や文明を持っている。天竜族のいるこの世界に来たときにも思ったことだが、香乃は文字通り世界の広さを知った。

「ただ救援に来られるだけでしたら、わざわざ巨大化しなくとも良かったのでは？」

シルゼーロマが腑に落ちない様子で意見する。

それに対してスラストハルは自信の笑みを浮かべて答える。

「ふっふっふ、分かってねえなシルゼーロマ。相手を圧倒させるのには見た目から出る威圧感ってのも大事なんだぜ？」

「外見の問題でしたら、数で圧倒するだけで充分だったかと」

「そうじゃないんだよ。要はアレだ、ロマンだよ。男なら誰しもが夢見る浪漫砲だよ」

「言葉の意味が解り兼ねます」

「知らねえのかよ。しょうがねえ、俺が直々に教えてやるよ。いいか、ロマンってのはな、男が許される夢の中にあつてだな、静かにそして煮え滾るほどの情熱を注ぎ込む価値のある、正義も邪悪も兼ね備えた伝説の、」

「すみません、カノさん。お耳が腐る前に黙らせますので」

「いえ、お構いなく。どの世界でも男って同じなんですネ」

「おいおい、二人揃ってそりゃないんじゃないかねえの」

スラストハルは豪快に笑う。それに釣られて、集会の場には笑い声があふれた。

香乃もくすつと笑ってしまった。

しかし、笑いたい気持ちは一瞬で消え去った。

ずっと気になっていたことがあり、そのことを思うととても笑う気分にはなれなかった。

「……あ、あの」

香乃の笑いのない一言に、スラストハルたちの笑い声が止まった。その場を悪くしたと思う。でも、今は何よりも優先したいことがあるのだ。

「あの、イズの様子は、どうなんですか……？」

たった一言は、その場を沈下させる。

現在最も触れにくい話題だった。

しかし、香乃は踏み切った。どう考えても無視できない話だからだ。

全員が何も喋り出しにくそうとしている中から、スラストハルが代表として話し出す。

「俺の倅せがれのことは気にしないでいいぜ。普段からあんな感じだしな」

「そんなこと言われても気になります。イズはこの世界に来てからずっと一緒にいてくれた恩人ですから、無視なんてできません」

「そう言われてもなあ……」

スラストハルは困った様子で頭のでっぺんを中指でぽりぽりと掻く。

「確かに私はまだこの世界に来て間もない、事情の知らない他人です。でも、どうしようもない事情こそ、私には知らないことです。目の前にある問題を見逃すことなんてできません」

「しかしだな……」

「イズはちゃんと話せます。ちょっと臆病だったり、すぐに落ち込むことはあるけど、それは彼なりに考えた結果が見えているだけです。……私は、さっきイズに拒まれてびっくりしました。それはひどいことを言われた悲しさのせいじゃありません。自分のやさしいところを言葉に出せないだけの彼が、私を絶対に傷つけると分かってきている言葉を使っただけです。どうしてそういう気持ちになったのか、彼なりの理由があるはずですよ。……なのに、どうしてイズを決めつけるんですか？」

香乃の剣幕に、スラストハルは黙っていた。

「たとえ今のイズが昔から変わらないのであっても、今のイズの様子に問題がないだなんてどうして思えるんですか？ あんなにつらそうな顔をしているのに、おかしいと思わないんですか！」

「思ってるさ。こんなでも親だからな」

スラストハルは落ち着いた声で答えた。だが、その表情は今まで見たことのない、悲しい表情をしていた。

「あいつが閉じこもり始めた頃から、ずっと気になってたんだ。けど、育児は女房に任せっきりで、今まで仕事一筋でやってきたから、どう接すりゃいいのかわかんなくなっちゃったんだよ。まして、閉じこもっている奴に対して、なんて声をかけりゃいいのかなんて……」

「だからって、ずっとイズを独りにしてきたんですか？」

「そんなつもりだったわけじゃねえよ。俺が直接言いに行こうとしたことも何度かあったさ。でも、あいつは耳を貸そうともしなかった。つらい気持ちがあるなら、ある程度時間をかける必要があると思うって、気長に構えることにした。いつかあいつから動き出してくれるって期待も込めてな。……好きなように生きてほしいと願ってはいたけど、諦めた生き方をしてほしいと思ったことはねえよ」

スラストハルは自分の不甲斐なさどこにぶつけられればいいのかわからない怒りを込めて、苦渋の表情を浮かべた。

スラストハルの弁解を聞いて、なんて不器用なんだろうと香乃は思った。

本当は伝えたい気持ちがあるのに、肝心の相手が聞く耳を持ってくれない。それはイズだけでなくスラスタハルだってつらいことだ。

では、そんなにまで心を閉ざした理由とはいったい何なのだろうか。

香乃はイズに何か理由があるのだと思っていた。彼をそうまで変えた理由が。

誰もが黙りきってしまった場に、一人が沈黙を破った。

「……少し、お話をさせていただいてもよろしいですか？」

シルゼーロマだった。

「カノさん、私とイズのこと、聞いてもらえますか？」

唐突の降り出しに、香乃は何度が瞬きをした。

「あなたと、イズの？」

昔話のようだが、言われて香乃は思い出した。

香乃はイズの過去を知らない。

何も知らず、イズも話そうとしなかった。

いや、話そうとしていたことがあつたかもしれない。ただ、まだ気持ちが充分でなかったり、予期せぬ邪魔が入ったりして、なんとなく機会を逃していた。

「もし、カノさんが宜しければ、の話なのですが……」

イズとシルゼーロマの過去。

今の自分がもつとも知らなければいけない話だ。

本当は本人の口から聞きたかったが、些細なことだろう。この先イズから話してくれるとも限らない。

ならば、開示してくれる瞬間を大切にしなければと思う。

香乃は気持ちを整える。

「是非聞かせてください。イズのこと、少しでも分かってあげたいんです」

ただ単に好奇心に従っているのではない。時折イズが見せる、悲しげな横顔の理由が知りたいからだ。

シルゼーロマから聞かされる話がそれに絡んでいるかどうかは分からない。もしかしたら的外れな昔話かもしれない。

でも、たとえどんな話でも、イズの過去であることには変わりはない。どんな過去でも、今のイズの理由の一つだ。そう信じたい。

香乃の意志を聞き、シルゼーロマは一瞬の躊躇を覚えずにはいられなかった。

なぜなら、今から話す内容は誰にも話したことがないからだ。

自分の両親にもイズの両親にも話したことはない。第三者に話すことで、なんらかの経緯をたどってイズの耳に届くことを恐れていた。

自分とイズしか知らない出来事。
自ら蟠りへと変えた秘密。

可能なら墓まで持っていこうと決めていた話を、今自分曝け出そうとしている。

誠に恥でしかないが、この者には私情で隠しておくわけにはいかないと思った。

香乃なら、必死でイズの味方になってくれた香乃なら、話すべきだと思ったのだ。

「……私とイズトリカムがまだ子供だった頃、私たちは同い年の幼なじみとしてよく遊んでいました」

一言一言に気をつけながら、シルゼーロマは話し始める。嘘も脚色もないように、できるだけありのままを話す。縛り付けていた縄を解いていくように、少しずつ外へと出していく。

「よく遊ぶ仲でしたので、ものによっては時々競争になることもありました。早く来たほうが勝ち、早く食べたほうが勝ち、牙が長いほうが勝ち、背の高いほうが勝ち……。思いついたことなら何でも競争にしていました」

事務的な内容なら饒舌に話せるのに、シルゼーロマの口調はただとしかかった。自分のことを話すことがこんなにも緊張するものだと改めて知った。

「ある時、イズトリカムは空を飛べるようになっていました。天竜にとって飛行は成人の第一歩だと思っていましたので、子供は自然と懂れるのです。その成人の証に、イズトリカムは私より早く近づくきました」

「天竜族は成人に近づくにつれて自然と飛べるようになるのですが、

私は、身も心も子供だった私は、彼に嫉妬しました。自分よりも上にいる彼を羨ましく思い、同時に嫉みました。勝負事をすれば勝敗は五分五分であつたのに、彼が飛べるようになった事実は当時の私を深い敗北感に陥れました。自分よりも優れた彼を、憎くさえ思いました」

「彼に負けて悔しくなった私は、その日を境に彼と遊ばなくなりました。彼と会うと自分がいかに劣っているか感じてしまうと思つて、彼から距離を取りたくなつたのです。その代わり、私は自分の能力を高めようと訓練に取り組みました。両親に頼んで、飛び方はもちろん、社会学や心理学など難しい勉強に励みました。イストリカムに負けたくない、その一心で頑張りました」

「五年ほど経つたある日、彼と久し振りに会う機会がありました。私は様々な訓練をして、いろいろな勉強をして、彼がどのように成長していようと負けることはないだろうと思つていました。成長した自分を見てほしい、ここまでできるようになつた自分を見てほしい、本当にそれだけでした。私の心は子供のままだつたのです」

「久し振りに会つた彼は年相応に大人びていました。子供の頃の純粹さはそのままで、落ち着きも出ていました。私を見て、ひどく驚いていました。あとで振り返つて気づいたのですが、私の体には訓練でできた傷がたくさん付いていましたし、目つきも厳しいものに変わつてしまいました。昔と変わった私に、彼はびっくりしてしまつたのでしょ」

「彼は私を責めました。どうしてそんなふうになつてしまつたのかと。彼としては、子供の頃を共有できるような私を期待していたのかもしれませんが。変わってしまった私を見て衝撃だつたんだと思います。私も、彼にそんなことを言われるとは思つていなかったので、

同じように衝撃でした。その時もまた、子供の頃と同じように、どちらかが勝ち、一方が悔しがることになるだろうと思っていました。……でも実際は違いました。彼は、イズトリカムは、私と距離を置いてからは勝負や競争なんてしていなかったのです」

「彼に本音に気づいた私は、自分が恥ずかしくなりました。今までしてきた努力が無意味になってしまった。彼に見せるためにしてきた時間が無駄になってしまった。否定されてしまった。独りよがりの気持ちで費やした月日が意味をなくしてしまって、私はやるせなくなりました」

「彼の責める言葉は私をさらに無意味なものにしていきました。自分を否定された気持ち、勝負に固執していた気持ち、それを表に出しても良かつたのですが、その時に私の口から何を言っても彼を傷つけるだけだと思いました。だから、自分を否定し尽くさないように、一言だけ言ったのです。“おまえには分からないよ”と」

「その日以来、イズトリカムを外で見かけなくなりました。私は自分のしてきた努力が無駄にならないように、組織へ加入しました。会えない日が続き、そして今日に至ります」

シルゼーロマは長い昔話を終え、一息ついた。

「……私はずっと後悔しています。あの時、イズトリカムにあのようなことを言ったから、彼は心を閉ざしてしまったのではないか。もっと別の言葉をかけてやれば、彼は変わらずに生活できたのではないか。イズトリカムを変えて閉まったのは自分ではないのか。ずっと、ずっと考えているのです」

皮肉な話だと思った。

シルゼーロマはイズに認めてもらいたかったから離れたのに、離れたためにイズの競争心を削いでしまった。

簡単な話なのに、相手は自分が考えていたほど子供のままではなかった。

自分の知らないうちに、少しずつ大人になり、自分とは違う考え方をもち、それでいて自分のことを案じてくれていた。

シルゼーロマの心境に、香乃は思い当たる節があった。

異世界に連れて来られる直前、香乃は恋人に言った言葉がある。

恋人の転勤が決まったが、彼は香乃と一緒にいて行くことに反対した。

それに対し、私は彼に言い放った。

私と一緒になのがそんなに嫌なの、と。

住む場所が変わることは、本当は大変なことだ。向こうの地理を覚えなければいけないし、特別な習慣や風習があるかもしれない。そんな現実が待っているから、彼はただ自分を心配してくれていたのだ。

それなのに、香乃はよく考えもせず、自分の勝手な解釈で不満をぶつけてしまった。

今思えばあの言葉はとても酷いものだった。絶対に彼を傷つけていた。

自分の感情をぶつけてしまったせいで、相手を傷つけてしまった。

同じだ。

香乃とシルゼーロマは今同じ立場にいた。種族の違いこそあるが、

同じ感情を持っていた。

ただ、彼と同じところにいたい。壁があっても、競い合う仲でも、それらを一緒に経験して、同じものを眺め、聞き、感じていたい。それだけだった。

ちっばけな願いかもしれない。しかし、香乃にとってもシルゼーロマにとっても、どんなものよりも優先したいものだと思った。共感できることが嬉しくもあり、同時に切なくもある。

「……」

こんなにまつすぐな気持ちを抱いているのに、昔からそうだからと言って歩み寄らないのだろうか。

いつか変わることを願うだけで、変える努力はしないのだろうか。

香乃は大きく息を吸い、そして深く吐き出した。

「……すみません、お願いがあります」

もうここには来ないだろう。

もう誰にも会わないだろう。

本当は、誰かに別れの挨拶をしたかったけど、誰かにあったらきつと維持でも止められるだろうからしないでおう。

自分の部屋を見回して、今までの自分自身を振り返った。

何もなかった。

何もしなかった。

ただ、だらだらと時間を浪費しただけだった。

今日の答えを出すのに、どれだけの時間を使ってしまったのだろう。

簡単なことなのだから、もっと早くに気づくべきだった。それだけが後悔だ。

こんな言葉を自分が言うのは変だと思うけど、心の中で伝えたい言葉がある。

家族と親友へ。

ありがとう。こんな自分の面倒を見てくれて。

そして、今日会ったばかりの人間の女性へ。

ありがとう。こんな自分を放っておかないでくれて。

他者への感謝と自分への後悔を胸に、僕は出入り口へと向かった。まずはここから出て、それから……

「どこへ行くの？ イズ」

今感謝したばかりの人間の女性が、出入り口を塞いでいた。

賽と深淵と迂回路と風と

出入口には香乃が立ち塞がっていた。

腰に手を当てて、背筋を伸ばした姿勢は彼女の気持ちの強さを感じさせる。

「どこに行くの？もう夜遅くだよ」

人間の女性は、その小さな体でイズを止めようとしていた。

イズが腕を振れば容易く飛ばされてしまいそうな大きなのに、イズを正面から見据える双眸は一寸の恐怖さえも含めていなかった。

だが、イズだって負けてはいられない。決めたことをやり遂げなければ、自分の腹が満たされないのだ。

「どこだっていいでしょ。自分のことぐらい自分で決められる」

イズは香乃の質問を冷たく返した。

どう思われたって構わない、どうせ自分はいなくなるのだからどう思われても関係ない、と未来の心配をしなくて済むようになってから考えが明確になることができる。

冷徹な返事をされた香乃は、それに構わなかった。今は自分が伝えなければいけないことを優先して、話を切り出す。

「お祭、遅くなったけどこれから始めるんだって。イズも一緒に行こう？」

お祭。こんな時に祭だという。自分の気持ちとは正反対に、世の

中は行事で盛り上がりつつとしている。

いつになっても暢気な世の中に対してイズは怒りを覚えた。だが、それが無意味であることをすぐに理解すると、沸き上がった感情は反動で深い虚無へと落ちていった。

「行かない。カノだけ行けばいいよ」

「なんで行かないの？」

理由を聞いてきた。こんな時に理由なんかを訊いてきた。自分の気持ちなんかまるで知らないかのような口振りで図々しく訊いてきた。

イズは俯き、苦虫を噛み潰したように齒を軋らせる。

どうしてこうも自分の思い通りにいかないのか。ただ香乃の言葉を無視して、独りでどこかへ消えるだけなのに。

大事な時であるほどそうだ。陸猩族に襲われた時だって、自分がしっかりしていれば香乃が怖い思いをしなくて済んだ。もっと強ければシルゼーロマに痛い思いをさせずに済んだ。

今この瞬間も同じだ。香乃を振り切るだけでいいのに、容易く止められようとしている自分がいる。

最期くらいけじめを付けさせてほしいのに、どうしてこの世界は死にたい時に死なせてくれないんだ。

「……なんでここにいるんだよ。香乃もみんなのところに戻ってなよ。僕なんかを構わなくていいんだよ」

「天竜族に送ってきてもらったの。私はイズの部屋を知らないし、外は歩き回れる天気じゃないから」

香乃は愚直な答えを返してきた。

「……そんなことを言ってるんじゃないのに……」

「……」

こんな世界は嫌いだ。自分の思う通りにならないし、自分にとって嫌なことばかりが起きる。

何も悪いことはしていないつもりなのに、この世界の生き辛さにはもううんざりしているのだ。

できない、自分には真似できない、と諦めることが悪いとは分かっているが、それをどうすれば直るのかイズは知らない。

結果的に、できないと諦める自分を嫌うことになっていた。

悲しいことから避けることの何が悪い。

苦しいことから逃げることの何がいけない。

どこの誰もが陰ながらしていることを明瞭に実行することの何がいけないというのだ。

説明したところで、どうせ理解してもらえない。説明したところで他者には理解できないのだ。

説得に來た父親も、イズを理解できないとわかるとすぐに手を引いた。肉親ですらイズをわかってはくれなかった。

わかるはずはない。

わかってくれない。

誰もイズをわかろうとしてくれない。

誰もイズに歩み寄ろうとしない。

結局みんな、自分のことなどどうでもいいと思っているに決まっている！

「カノもみんなも、祭でも何でも勝手にやっていればいいだろ！」

大声を出して言い放つイズに、カノは……

キレた。

「あんたが心配で様子見に来たに決まってるでしょうがッッ……！！」

怒りを怒りで返されたイズは、晒していた感情が引っ込んでしまった。

香乃は自分の見た目を構うことなく、自分の感情をむき出しにしていた。

今のイズには筋の通った説得は聞き入れない。感情的になっているなら、自分も感情ごとぶつかっていくしかないと思った。

「いつまでいじけてるのか知らないけどね、私は絶対にお祭に連れて行くから！何度だって来るよ！何回だって言うよ！参加しないのは、私が許さない！」

香乃の固められた決意を聞いて、イズは辟易すると同時に悲しい気持ちになった。

こんな自分を見捨てないでいてくれる香乃の気持ちは素直に嬉しかった。しかし、イズにも固められた決意がある。

香乃が自分の決意を押し付けるといふのなら、イズだって自分の決意を通したかった。

「もういいんだよ……。僕が行かなくなったら物事はうまく進む。僕がいてもいなくても、どっちでもいいんだよ」

いつか何とかなるんじゃないかと希望を持っていたこともあった。閉じ籠もっている自分を見捨てず孤独から解放してくれる誰かが来てくれたら、今の自分から変わる勇気を持とうと思っていたこともあった。

その“誰か”というのは、香乃なのではないかと思った。突然現れたし、彼女のために何かをしようと心が動いたのも事実だ。

しかし、動いた結果が今日の顛末だった。イズは変わるどころか、変わりたいと願う気持ちさえも失ってしまった。

香乃を怨むつもりはない。怨むのは他でもない自分自身だ。自決する勇気をいつまでも先延ばしにして、最良の選択から逃げていた自分自身が許せなかった。

だから、イズは全ての責任を果たすために、この決意を固めたのだ。邪魔をしないでほしい。

「そんなことを決めるのはイズじゃない！みんな、イズが来てくれるって待っていてるんだよ！それでも来ないっていつの！？」

「……そんなのは、嘘だよ」

来てからずっとうじうじしているイズに香乃は怒りを隠せなかった。

せつかくの行事の時にこういう態度を取られたことに対してではない。せつかく無事に帰ってきたというのにそれを悲しんでいるイズの態度が気に入らなかった。

それに、イズは間違っている。それを正さなければいけない。

「いつまで気にしているの？何をそんなに気にしているの？イズだって頑張ったから、こうして無事に帰ってこられたんじゃない」

「……もう、僕がすることは迷惑にしかないんだよ。カノだって知ったでしょ。僕が何かをしようとしても無駄なんだよ」

今回の件はイズが発端だ。イズが何もしなければ、何も考えなければ、物事はもっと無事で済んだはずだ。誰も傷つかず、何も失わずに済んだ。

今回だけではない。親友を変えてしまった時だってそうだ。

自分が何も言わなければ彼女は変わらずに済んだ。

いや、自分という存在が最初から無ければ、彼女はもっと彼女らしい生涯を過ごすことができたに違いない。

自分さえいなければ、どれだけの存在が幸福になれただろう。

自分さえいなくなれば、どれだけの存在が利益を得られただろう。

自分は一体どれだけの者達から福利を奪ってきたのだろう。

これまでの自分が犯してきた罪を考えていくと、イズはもう顔を

上げることができなかった。

「……黙って聞いていれば、何それ……？イズがしてきたことは、全部意味がないっていうの……？」

香乃の手はわなないていた。

イズが過去を自責しているのは予想がついていた。

だが、今日この日にあったことすらも否定しているイズが許せなかった。

そして何よりも、イズがしたこと全ての中には香乃も含まれているにもかかわらず、卑屈になっているイズが悲しかった。

「私が帰りたくなって悲しかった時に、空を見に行こうって言ってくれたのも無駄だったっていうの！？」

「……」

言ったことが何だというのか。今のイズには理解できなかった。

「……そうだよ。無駄だったよ。僕がそんなことを言ったから、今日のようなことが起きたんだ。僕が軽んじた行動をしたから、みんなを危険な目に遭わせたんだ。みんな、みんな僕のせいだ……」

さっきまで独りで考えていた結論を口にするのは簡単だ。静かに自分でも不思議に思うくらいすらすらと言葉が続く。

「香乃だって僕がいけないほうがいいに決まってる。……本当は面倒だっと思っているんでしょ？手間のかかる奴だって、そう思ってるでしょ？」

尋ねられる形になった香乃は、すぐには答えずに黙っていた。何も返事が来ないことに、イズは、それを肯定と受け取った。口では何とでも言うけれど、結局本心はそうなのだ。非常識だったり、内側に閉じこもったりする者に対して、世の中は冷たい。誰だって無理して関係を作りたくないのだ。

この考え方を否定する者はどこにはいるだろう。だけど、イズはその否定を跳ね退けなくなる。

もしこの考え方が間違っているのなら、どうして自分は何年も一人ぼっちだったのか。どうして誰にも助けを求められなかったのか。どうして、こんなにもたくさんの悲しい気持ちを知ってしまったのか。

それは、自分の考え方が正しいことの証左でしかない。

どんな理屈を説かれようと、どんなに改心を求められようと、今の自分には全てを無意味なものへと変えることができる。

説得も、香乃も、目の前でちらつく希望への道標が全て嫌になった。

「僕は……僕なんか、本当はいないほうがいいんだよ。生まれて来なければ良かったんだよ。そうすれば、香乃だって危ない目に遇わずに済んだんだ。あいつにだってつらい思いをさせずに済んだ。僕がいることも僕がすることも、周りにいる者たちに迷惑をかけるんだよ！」

イズは初めて自分の気持ちをさらけ出した。本当の心の内側を見せた。

自分さえいなくなればいいのだ。それが『全て』に対する解決策

だ。

イズの答えを聞いた香乃は、もう我慢できなくなった。

「ふざけるなっ!!」

香乃の張り上げた声は、今は震えていた。

「私はイズに誘われて感謝してるよ!落ち込んだ私を励まそうとしてくれてるんだって思っで、イズの気持ちが高しかった!結果なんてどうでもいいの!あの時のイズが何もしてくれなかったら、私はずつと落ち込んでた!今の私がいるのは、イズ、あなたのおかげなんだよ!?それなのに……!」

香乃の顔を窺うと、怒りで顔を真っ赤に染めて、涙が溢れそうになっでいた。

「私の高しかった気持ちも感謝の気持ちも、イズにとっては無駄だっで言うの!？」

「……ッ!」

高しかった。感謝している。

今まで考えもしなかった感情だった。

自分のしてきたことは全て禁忌のように捉えてきた。誰に対してても悪い結果を招くだけだと思っできた。

それなのに、香乃にとっては悪くなかったのだろうか。

……いや、違っで。こんなものだけで判断するべきではない。視点

はそこだけに絞るべきではないのだ。

「だからって、結果を無視できるわけじゃないでしょ。カノだって危険な目に遭わせたのに、僕がしたことが“いいこと”だって思えるわけないのに……」

「いいことだったじゃない！危険だったかもしれないけど、誰も失わずに済んだよ！どこにも悪い結果なんてない！」

「最悪の結果にならなかったのは、運良くみんなが助けに来てくれたからだよ。僕自身は、何もできなかった……」

「だったら！」

香乃はイズの太い腕を掴む。

「自分で何とかできるようにしなさいよ！何もできない、何をしても無駄だって、どの口が言うのよ！私よりもずっとできることが多くいけに！何かを悟ったような顔する暇があるなら、自分から何かをできるようにする努力くらいしなさい！」

何かをすることに許可なんていらない。

誰かのためにすることに心配なんていらない。

結果を恐れては何もできなくなってしまう。今のイズがその状態だ。

イズは自分で思っているほど無能ではない。かといって実力があるかといえは違う。

要は、何もしていないだけなのだ。過去の失敗が彼を今日まで立ち止まらせてしまっている。

何もできないからといって、何もしてはいけないという決まりなどないのだ。

そして、何かができるようになるためには努力と時間が必要だということも知ってほしい。

「……」

香乃の説得はイズにとって複雑なものだった。

確かに、香乃にとっては全てが悪いことだったわけではないようだ。百歩譲って、香乃にとっては良かったといってもいい。

しかし、イズがしたことはこれだけではないのだ。

どう謝っても許されないことをした。永遠に癒えない傷を負わせた。

彼女が謝ったとしても、自分自身を許すことができない。

「香乃には感謝してるよ。こんな僕に熱心に関わってくれて、本当は嬉しかった。だから、お願いだよ。もう放つといて。それと、気が向いたらでいいんだけど、みんなにごめんって伝えてほしい……。もう僕はいなくなるから……」

本当は悲しい。

もうイズは生きることをやめようとしている。

今までの生涯を振り返っても後悔しか思い出せない。

自分は一体何だったのだろうと、自分の存在意義へ答えを出せなくなっていた。

それが、とても悲しかった。

自分がいなくなっても困ることはないだろうけれど、みんなには迷惑をかけたのだ。これでいいんだと、今この瞬間にも自分に言い聞かせる。

イズは自分を決めた。

あとは、香乃がこの場を去ればいい。それだけだ。それで全部、終わる。

イズの頑なな意志を聞いた彼女は、思いついたままにイズに言った。

「そうか。思っていた通り、お前は私のことをずっと心配してくれていたのだな」

「え!？」

返事の主の声にイズは仰天した。
返事をしたのは香乃ではなかった。

声の主は、出入口のほうからゆっくりとその身を現す。

この場においてほしくなかった人物。
この話に関係している人物。

この気持ちをぶつけないならならぬ人物。

幼なじみの親友シルゼーロマが、そこにいた。

香乃がここまで送って来てもらったと言っていた。その時は問い詰めなかったが、誰に、と疑問を持つべきだった。

シルゼーロマはおそらく、香乃をここまで送り届けたあと、身を隠して今までのやり取りを聞いていたのだろう。

イズは急激に恥ずかしくなった。

自分の本音を知られただけが理由ではない。自分が知らないところで本音を聞かれたことも恥ずかしい理由だった。

イズは突然のことに頭が回らなくなっていた。ついさっきまで激情していた思考が冷静になりきれていなかった。

「シ、シルゼーロマ……聞いてた、の？」

「ああ。立ち聞きは気が進まなかったのだが、カノさんからの提案があつてな。お前とカノさんとの話を聞いてほしい、と」

はっと香乃のほうを向く。香乃はごまかさず、静かに頷いた。

「イズとシルゼーロマの昔話を聞かせてもらったの。子供の頃はとも仲が良かったこととか、よく競争をしていたこととかね。それで、二人が最後にあった日のことも教えてもらったの。シルゼーロマは、自分の一言がイズを深く傷つけたって思っ、ずっと心配してきた、って」

香乃の話に、イズは違和感を覚えた。

シルゼーロマが、自分を心配する？
どういうことだろうか。

確かにイズはシルゼーロマから『イズには分からないよ』と言われ、悲しくなったことはある。

それは、シルゼーロマよりも先に飛ぶことができたために彼女のプライドを傷つけ、月日が経っても彼女を理解しきれないまま自分の感情だけを押し付ける形で責めてしまい、結果突き放されたからだ。

悪いのは自分だけだと考えていた。そうとしか考えられなかったのだから。

「ど、どういう……こと？」

うまく働かない思考が余計に混乱した。もうシルゼーロマ本人に問い質す他なかった。

混乱したイズの様子を見て、香乃は事情を説明する。

「イズ、君は自分がシルゼーロマを変えてしまったって言うってたね。彼女のプライドを傷つけてしまい、生き方を変えてしまった、つてもね、シルゼーロマはそんなことなかったんだよ。ちゃんと理由があつて、イズに冷たい言葉を言っちゃったの」

香乃はイズにシルゼーロマから聞いた話を説明した。

シルゼーロマは競争する気持ちが強かったこと。

イズが先に飛べるようになって、人一倍努力をしたこと。

成長してから再会し、イズの競争する気持ちが薄れていたのを感じ取ったこと。

それらを説明した。

シルゼーロマから聞いた話を勝手に話すのは少し気が引けたが、今事情を説明できるのは香乃だけだと考えた。

シルゼーロマ本人からイズに説明しても、イズが彼女に対して拒

絶の意識があれば聞き入れられない可能性があった。

こういった意識がある時は、無理をせず第三者から説明したほうが冷静に聞いてもらえやすい。

部外者が首を突っ込むなど言われればそれまでだが、事情を知った者として今協力できることはこれぐらいだと思い、香乃は仲介役になろうと決めた。

香乃はイズとシルゼーロマそれぞれの事情を聞かされ、ようやく状況を理解していたから。

二人は嫌い合ってなんかいない。

イズはシルゼーロマを心配して悲しんでいる。

シルゼーロマはイズを心配して熱心でいる。

つまり、二人ともお互いに微妙な勘違いをしているだけなのだ。

「シルゼーロマはね、イズのことを怒ってなんかなかったの。ただ君に負けたくない、って思いで努力しただけだった。それを、二人とも勘違いしていたんだよ」

「そ、そう……なの？」

イズが首を傾げながらシルゼーロマに確認する。

「カノさんの言う通りだ。私は子供の頃から、お前に負けたくないと言う気持ちをずっと持っていただけだ。そして、お前に競争の気がないと分かって、急に自分が恥ずかしくなったのだよ」

微妙なすれ違い。どちらも一言が足りない者同士だからこそ起きてしまった勘違い。二人はそれに気づくことができず、確かめるこ

ともできず、ずっと苦悩してきた。

「イズトリカム、私はな、お前のことを恨んだ覚えはない。お前のせいで生涯を変えられたと思ったこともない。私はお前が羨ましくて、少しでもお前以上になりたいくて、相応の努力をただけだ。今私がこうしているのは、紛れもなく私自身がそう望んだからだ」

イズは驚きを隠せなかった。

今まで気に病んでいた通りにはなっていなかった。

大切な親友の生き方を変えてはいなかった。

シルゼーロマの受けた心の傷は思っていたほど深くはなかった。自分が考えていた通りではなかった。

こんなことつてあるのか。

都合が良すぎるのではないのか。

自分を傷つけまいと、香乃とシルゼーロマが嘘をついているのではないのか。

自分が背負おうとしていた罪を少しでも軽くしようとして……。

「イズ、大丈夫だよ。君が心配していたことはなかったの。だから、ね?……」

香乃はイズの腕に自分の手を軽く添えた。

「そんなに泣かないで」

香乃に諭されて、知らないうちに泣いていることに気づいた。そんなつもりなんてなかったのに、どうしてか涙が止まらない。一度は生きることを諦めようとしたからか、気持ちがおかしくなっている。自分に泣く資格なんてないのに、ぼろぼろと分らない気

持ちがあふれてくる。

「なんでだよ……なんで、今さら………僕、ずっと……」

拭っても拭っても泣くのをやめられず、イズの顔はすっかりぐしゃぐしゃになっていた。

イズは誰よりも純粹だった。だからこそ、こんなに悩んでしまった。

ずっと心を痛めつけていたからこそ、溢れる感情は大きなものなのだろう。

「安心しちゃったんだね。ずっと心配してたんだもんね、シルゼーロマのこと」

イズの大きな指先を握りながら、香乃は穏やかな気持ちで見守る。泣きじゃくるイズにシルゼーロマが近づき、自分の額をイズのそこに押しつけた。突然のことにイズは目を見開く。

「お前にはひどいことを言ってしまったな。すまない。もっと早く謝りに行くべきだったのに」

「僕も、ごめん……。自分のことばかりで、お前のこと、ぜんぜん考えてなかった。……本当にごめんね」

「何度聞けば分かるんだ。私は怒ってなどいないんだぞ。お前は昔から——」

二人は不器用な言葉を繰り返す。こんな二人だから、今回のような気持ちの違いが起きてしまったのだろう。

しかし、幼なじみだけあって仲直りもすぐにできそうだった。

一言を放れば、一言が返ってくる。

一つ一つの言葉が二人の仲を修繕していくようだった。

二人の仲を眺めながら、自分もできるだろうかと思った。二人のようにお互いの気持ちを確かめ合って、仲を取り戻すことができるだろうかと。

心配し始めたらきりがないが、お互いに気持ちの勘違いがあるかもしれないのだ。きちんと話し合わないと分からないのなら、時間をかけてやってみようと思った。

彼との仲直りを。

かつこいい弱虫

「さくさく運べよー！次入れるぞー！」

搬入口の辺りからスラスタハルの声が響いた。それと同時にたくさん
さんの天竜族が出入りしていく。

香乃は今、集会場の一角にいる。物品の進路を妨げるわけにはい
かないと思い、なるべく邪魔にならない場所にしようとした。

イズの説得が終わってから、香乃は祭に参加するためにここへ戻
ってきていた。

シルゼーロマも準備に当たらなければならなかったため、そのついで
に背中に乗せてもらった。

香乃は集会場をぐるりと見回す。

山の頂にあるとは思えないほど広い一室。目測でしかないが、東
京ドームかそれ以上の広さがあるのではないかと思える場所だ。

ここへ初めて案内された時はみんなで落ち着いた雰囲気で休憩し
ていたが、今は座っているような者は誰もいない。皆が皆、それぞ
れの分担作業に徹し、祭の準備を着実に進めていつている。

物品の搬入は天竜族が続々と持ってきている。この部屋にも天井
がないため、全員空から直接入れてくる形になっている。

香乃も休んでいるのは気が引けて、何か手伝えることはないかと
近くの天竜族に尋ねたが、そうはいかなかった。来賓であるからと
断られただけが理由ではない。

まず、使用する食卓はとても大きく、人間では十人がかりでも手

に負えなさそうなものを運んでいた。その他に使用する物も大概が巨大で、どう頑張っても無理だと香乃も理解した。

また、祭の際に並べられる食べ物はその特殊なもので、香乃が手伝えるようなものではないとのことだった。

申し訳ない気分になったが、それを察してか相手の天竜族は「お気持ちだけでも大変嬉しいです」と笑顔で言ってくれた。

やはりこの世界の住民は抜かりなくハイスペックだった。

香乃がぼんやりと眺めている間にも、準備は滞りなく進んでいく。天竜族の作業の能率はとてつもなく高かった。

集会場にイズの姿はない。

イズの説得には成功したようだが、祭の参加には変わらず消極的だった。

一つだけ希望があるとすれば、香乃がイズの部屋を出ようとした時の、イズの一言だ。

「時間が欲しい。まだ、ちゃんと自分と向き合えていないから……」

彼は確かにそう言った。

一緒に祭へ参加できないというのは寂しいが、贅沢は言えないだろう。

今までずっと嫌っていた自分とようやく見つめる気になってくれたのだ。結果としては重畳だといえる。

たどたどしい一言だが、香乃にとっては充分だった。

一筋縄ではいかない心の傷だったが、治る兆候が見えた以上、あとは時間の問題だろう。

来年でも、再来年でもいい。いつか、天竜族のみんなと顔を合わせて、祭に参加できるようになってほしいと切に願う。

「少し退屈かもしれませんね」

隣にいるシルゼーロマが話しかけてきた。

本来ならば彼女も準備に取りかかっているはずなのだが、香乃を一人で待たせるのは失礼だからという理由で、ここにいた。代わりに時折大声で指示を出しているが。

「準備はほとんど終わっていたと思っていたのですが、大変申し訳なく存じる次第です」

「仕方ありませんよ。天災には適いませんし」

シルゼーロマが責任を負う必要もないのに謝ってきたので、香乃は受け取る代わりに苦笑した。

本来ならば祭は宵の口にでも始める予定でいたそうだが。そのために準備も進められていた。

しかし、香乃とイズが地上に降りたと連絡があり、その後治国組織の全員で捜索に向かってしまい、会場には誰もいなくなってしまった。

無防備になったところへ、山頂の特徴である暴風がここぞとばかりに吹き荒れ、会場を薙ぎ払ってしまった。

それに気づいたのはみんなで晴れ晴れと帰ってきてからであり、スラスタルの開いた口が塞がらない顔が印象的だった。

「ある程度の下準備は被害がなかったので、まもなく完了すると思うのですが……」

「まあまあ、気にしないでください。こうしてのんびりする時間も嫌いではありませんから」

「ご迷惑をおかけします」

シルゼーロマの謝礼をもらっておき、香乃はふと話を切り出した。

「……残念ですね」

「何かご不満でも？」

「いえ、私だけのことじゃなくて。……イズが来られなくて、ちょっと残念だなーって思っただけです」

「アレは、それこそ仕方のないことです。今までの過去を一晚で乗り越えられるほど、精神が強靱だとは思えません」

「け、けっこう辛い評価を出しますね？」

「ひねくれても幼なじみですから。不肖ながら、あいつの性格は総指揮官殿よりも理解しているつもりです」

本人が聞いたなら再び後ろ向きに戻りそうな評価を聞いて、香乃は苦笑するしかなかった。

ふと、あることが気になり、尋ねてみた。

「あの、一つ訊いてもいいですか？」

「はい、何でしょう？」

「これは、イズやスラストハルがいない時に訊くのは失礼だと思うのですが……」

「イズトリカムはともかく、総指揮官殿は態度に反して寛大ですから心配には及びませんよ。何でもどうぞ」

この天竜、実の上司に対しても厳しいと思いながら、香乃は気になる点を尋ねた。

「スラストハルの奥さん……イズのお母さんは、いないんですか？」

いろいろな天竜族と挨拶を交わすうちに浮かんた、単純な疑問だった。

最初に集会場に案内された時も、今行われている祭の準備も、それらしい人物を見かけていない。

今までのイズやシルゼーロマ、スラストハルとの会話にも、過去に関係する話の中にも、母親に触れた話を耳にしていない。

天竜族は見たところ雌雄に別れた種族のようなので、親が一人ということはないと思った。

スラストハルは仕事に熱心だったから、イズの変化に気づいてやれなかったという話を聞かされた。仕事に熱心でいられたのは、家のことを誰かに任せておけたからと考えられる。

また、イズが地上に降りてはいけないと言い聞かされていたのは、身近に教育者がいた証拠だ。

つまり、イズの母親はいるということだ。

その母親に対して、香乃は何となく不満を感じていた。

母親はスラスタハルがいられない分、イズの傍にいたはずだ。母親ができるだけ早く気づいてあげていれば、イズはもう少し苦しまずに済んだのではないかと思っている。

いらなかった、または気づけなかったのか。そうであれば、その理由は何なのか。

香乃にとって知っておきたい理由だった。

さすがに何でもどうぞと言っていたシルゼーロマも、プライベートルすぎる質問には逡巡せざるを得ないようだ。

何度か迷い、口を開いては閉じ、一つ深呼吸をしてから、シルゼーロマは低い声で答えた。

「イズトリカムの母君は……エルフィリテ・ベルバーセン女史は……
……何年も前に亡くなりました」

答えるシルゼーロマはつらそうな表情を浮かべる。

「彼女は私とイズトリカムがまだ幼かった頃に、病気でこの世を去りました。病原菌が滅多に上ってこないこの土地ですが、地上では話が違います。彼女もまた地上に興味を持っていた人物でもあったため、頻繁に雲の下に降りていました。ある日突然高熱でうなされ、原因も治療方法も分からないまま、息を引き取りました。地上へ降りることへの忌避感に追い打ちをかけることになった出来事でもあります」

「……」

「他の者には伝染しなかったのがせめてもの救いですが、あの時の

総指揮官殿とイズトリカムの悲しい顔は幼かった私でもつらいものでした。総指揮官殿は悲しみを少しでも紛らわせようと治国政策に精を出し、イズトリカムは反対に家に閉じ籠もりがちになりました。あいつがまともに話してもらえるようになるまで、だいたい二年ほどかかったかと思います」

「二年も、ですか……」

「……少し話が逸れましたね。エルフィリテ女史はイズトリカムが幼い頃に亡くなりました。彼女が生きていれば、イズトリカムがあれほど悲しみ、孤独に苦しむことはなかったかもしれません」

香乃と同じような意見を、シルゼーロマは最後に付け足した。考えは読み取られていたらしい。

また、一言で片づけられていたが、シルゼーロマ自身も、悲しみに暮れたイズを励まそうと二年も頑張っていたらしい。

今のイズが母親の死に囚われていないのは、シルゼーロマが必死で励ましたらからだろう。

改めて、二人の絆は強いと思った。

「お話、ありがとうございます。それと、思い出させてしまったてごめんなさい……」

「とんでもない。私もエルフィリテ女史にはお世話になったので、時々思い出したくなるのですよ。それが、死んだ者への、せめてもの弔いだと思っています」

そう言ったシルゼーロマは温かいほえみを見せた。

日本には彼岸や灯籠流しなどで死者を偲ぶ風習がある。全世界を見ても、墓を作る習慣や花などの供物を備える習慣が強く根付いている。

過去を振り返ることを悪く言う意見もあるが、過去に自分と関係した者がいたからこそ今の自分があるのだと振り返ることを忘れてはいけない。

悲しい感情しか思い出せないかもしれないが、誰かが頑張ってくれた分まで自分が生きようと思えるようになれば殊勝だ。

それを実現できたのが、イズトリカムであり、スラストハルであり、シルゼーロマなのだろうと思った。

「おーい！早く運んでこいってー！……だー！違う、そこじゃねーよっ！」

神妙な雰囲気になっていたところへ、スラストハルの悲鳴が聞こえてきた。

香乃とシルゼーロマが振り返ると、準備も仕上げにかかってきているところだった。先ほどの悲鳴は、搬入した物の置く場所が違ったために響いた悲鳴のようだ。

「ああやって見ていると、悩みなんて一つもないように見えますね」

「頭脳戦より肉体戦を好む方ですから。指示を出すだけでなく自分からも動く方ともいえますが」

「信頼されているんですね、スラストハルって」

「ええ。実力は誰よりも優れているのに、本人は酔狂するところがおくびにも出さないのです。天竜族の皆が信頼を置いている、立派

な方ですよ」

スラストハルのほうへ視線を送りながら、シルゼーロマは絶賛の言葉を並べる。

シルゼーロマとスラストハルのやりとりを聞いた時は、うだつが上がらない上司の世話で頭を抱えている補佐役、と言う印象だったのだが、違ったようだ。

そうこうしているうちに、スラストハルを始めとした集団が次々と何かを運び入れていく。

自家用車ほどの大きさがあるが、運ぶ者は重そうにしていない。色はどれも薄いが、赤、黄、白、緑などいくつか種類がある。運んでいる間、その形が崩れないように気をつけている。

部屋に運ばれたそれらを見て、香乃は不思議な気持ちになった。

「これって……もしかして、雲？」

隣にいるシルゼーロマが答える。

「そうです。私達が主に口をしている、大事な食料です」

香乃が驚いているうちにも食料である雲が次々と運び込まれてくる。

「触ってみてもいいですか？」

「ええ、どうぞ」

シルゼーロマに許可をもらい、香乃は食用の雲に触れてみた。

香乃の知る雲は気体で、触っても何の感触もないものだ。

しかし、目の前にあるそれは違っていた。触れると弾力があり、まるで綿飴のように固まっている。ぷにぷにとした感触がやみつきになりそうだった。

「ここからある程度飛んだ場所に、こういう雲が群生している場所があります。雲は一つの場合に一種類あるのが基本なので、豊富に種類を集めるには様々な場所に出向かなければいけません。大変ですが、食べるためですからね。この食料調達も、私たち治国者の重要な任務でもあるのですよ」

シルゼーロマの説明があっても、香乃は信じ難かった。
イズと出会ったばかりの頃、主食を尋ねた時に雲を食べることを聞いていたが、その時は半信半疑だった。

天竜族の国と地上を隔てる雲海も、食料とは似て非なる物だと聞かされていた。

香乃が予想とした物とは違つと説明されていたが、今ひとつ漠然としていた。

まさか、こんなに不思議な物だったなんて。

「あとは、と……おい！そちは用意できてつかー！？」

スラストハルが部屋の反対側へ声を張り上げる。

「できてますよー！」「今持っていくますねー！」「うほー！うまそー！」

同じように声を張り上げた返事が聞こえてきて、

「おいこら、食うんじゃねえぞー！」

スラストハルが了解の変わりに釘を刺した。

数名の天竜が、仕上がった物を運んできた。遠目ではよく見えな
いが、目の前まで運ばれてからそれが何なのかすぐにわかった。

「……」

「へえ、こういうのを食べるのか？ 確かにうまそうだな」

スラストハルの感想を聞き流して、香乃は絶句していた。

湯気の立ち上る器。鼻先を撫でるダシの香り。ぐつぐつと煮える
汁の中で踊っている白菜やしらたき。なんやかんやと騒いでいるう
ちに、香乃のために用意したという料理が目の前に並べられた。

「これって……鍋？」

「話では、確かそういう名前だったな」

火にかけられた土鍋の中で、材料が泡と一緒に揺れている。どこ
で鍋を手に入れたのかは知らないが、ダシの染み込んだ具材から美
味しそうな香りが出ていて食欲をそそる。

「カノさんの世界に行った時にな、現地の人に、火で熱くするだけ
で作れる食べ物はないかって聞いたんだよ。そうしたらこれをオス
スメされたってわけ」

香乃が涎を出している傍らで、スラストハルが一応の説明をして
いた。

天竜族の者達是要領よく作業を進めていく。会場を整理する者。食べ物を用意する者。まだ会場に来ていない天竜を呼びに行く者。全員が協力して、祭の準備に取り掛かっていた。

香乃が啞然としているうちに、準備はほとんど終わってしまった。

「よし、準備はできたなー！それじゃあ……」

スラストハルは大きく息を吸い込む。開始の合図を出すところだった。

その時、

「っ！総指揮官殿！お待ちください！」

「はじめ……何？なんか足りなかった？」

暢気な受け答えをしながら、スラストハルは視線を出入り口のほうへ向ける。それに倣って、香乃や他の者も同じ方向へ向く。

出入り口を見た者全員が、絶句した。

香乃も同様に、声を忘れるほど驚いた。

ここにいるとは思わなかった人物。

ここに来られるとは思わなかった人物。

誰もが来てほしいと心から願っていた人物。

「……イズ……？」

落ち込んでいた天竜族、イズトリカム・ベルバーセンが、そこにいた。

俯きがちな姿勢は変わっていない。気弱そうな雰囲気もそのままだ。だが、眼には今までに感じられなかった強さが表れている。まるで何かを決意したような、固い意志だ。

イズはこの場にいる全員の視線を受けているのも構わず、こちらに向かって歩き出した。体のあちこちには地上でできた傷が所々に見え、背中 of 大きな羽は無惨な穴が開いてぼろぼろだった。

しかし、それを見られていることも気にせず、ゆっくりとした歩調で近づいてくる。

目先まで近くなると、イズはそこで足を止めた。何を考えているのかは知らないが、会話するには困らない距離だ。

香乃は思わず駆け出して、イズの傍に寄った。

「イズ、来てくれたんだ！良かった……もう大丈夫なの？」

香乃の問いかけに、イズは小さく頷く。

「なんとか、ね。……ちょっと、父さんと話させてくれる？」

「？ うん……」

イズの何らかの決意を確信して、香乃は少し離れた。

「おっ？俺に用か。何だ突然？」

スラストハルが気さくな態度で応える。

「……」

イズはすぐに話し出そうとせず、俯いてしまった。いざ本題を出す場面になって臆病になってしまったのだろう。

「イズ……」

香乃が心配そうに声をかけると、イズは香乃に一瞥する。

「大丈夫だよ。……カノも、そこにいて」

体が震えている。握り拳は固く閉じられ、目は先の一点だけを見つめている。

がちがちに緊張した態度で父親でありこの国の頂点と向き合うイズは、目の前の相手に話し始めた。

「大事な祭の前に邪魔してごめんなさい。でも、どうしても今、言いたかったからここまで来たんだ」

声まで震えているが、退くことなく言葉を続けていく。そしてラストハルは一瞬も気を許すことなく話を聞いていた。

「父さん……いえ、スラストハル・ベルバーセン殿。突然の申し出に大変失礼だと重々承知の上で、お願いがあります。無理であれば取り下げてもらって構いません」

そこまで切り出したイズは、一度呼吸を整える。

自分の意気、自分の運命を決める随意、自分という存在を決定づける決意を、ここで表明するために来た。

昨日の自分と決別する。

明日の自分と会合する。

自分の全てを懸けて、イズは言った。

「……僕を、治国組織に加入させてください」

「イズ……」

思わぬ要望を聞かされた親は、目を丸くした。

あのイズが、あの後ろ向きだった息子が、一国を担う重要な柱の一つに加わろうとしている。

誰との繋がりも断った者が、誰との繋がり大切にする役目を負おうとしている。

今日は何と良い日だろうか。善哉としか言いようがない。

一息ついたあとに口元に小さな笑みを浮かべたところを、香乃は見逃さなかった。

「馬鹿言っな。お前みたいなぽつと出の奴が、いきなりなれるわけねえだろ」

返された厳しい返事に、イズは顔を沈ませる。

やはり無理だったのだ。変わろうとすることは簡単なことではない。

変わりたいと思って理想の姿を思い浮かべた時、一番最初に描かれたのが父親の後ろ姿だった。子供の頃に見た父親の姿は頼り甲斐があつて、とても大きかった。いつかあんなふうになりたいと子供の心で憧れを持っていた。

少しでもそこへ近づきたいと思い、治国組織への加入を考えた。総指揮官の息子としてではなく、誇りある天竜として。

理想を叶えようとしたが、それが無理だと知った。世の中は易しくないと思い知った。それはすでに分かっていたことだ。今までの悲しい気持ちに比べれば大したことではない。

また別の道を探そう。そう考えた。

「……分かった。用はそれだけだから、これで……」

この場から去ろうと、イズは踵を返す。

「おいコラ。誰が“入れない”つつったよ？話は最後まで聞くもんだぜ」

スラストハルが制した。驚いたイズは、思わず父親と再び向き合う。

「まずは必要な訓練を積んでからだ。お前は今までだらけてた分、頭も体も教育し直さなきゃいけないえからな」

そう付け足した親はシルゼーロマのほうを向き、

「おい、シルゼーロマ。イズトリカムの教育係を頼むぜ。こいつをみつつちり鍛えてやれ」

「承服致しました」

シルゼーロマがイズと向き直った。

「そういうことだ。音を上げるまで教えるから覚悟しなよ？イズトリカム」

微笑みながら本気なのか冗談なのか分からないことを言う彼女の目は、イズが心に焼き付いて離れなかった拒絶のものではなく、彼女なりの親しみがこもった目だった。

「おい、イズトリカム」

スラストハルが呼ぶ。

名前を呼び、呼ばれることなど、何年振りのことだろう。

一国の組織の総指揮官としてではなく、父親として、スラストハルは言った。

「よく言っ たな。待っ てるぜ」

自分でも馬鹿だと思っていた。

絶対に取り下げられると思っていた。

それでもイズがこれを言い出したかったのは、香乃の励ましがあったからだ。

自分がしたことが間違いではなかったと言ってくれた。

自分を変える一番の味方は自分で、そのためには努力する必要があると教えてくれた。

こんなけなしの勇氣でも、僕は踏み出すことができたのだ。

「よかったね、イズ」

イズの瞳から涙がこぼれた。泣くことを我慢することができなかった。

ずっと、あのままだと思っていた。

ずっと、悲しい気持ちを抱えたまま、一人だけで過ごしていくのだと思っていた。

ずっと、親友に合わせる顔を持ってないまま生涯を終えるのだと思っていた。

ずっと、自分を責め続けていくのだと思っていた。

本当は、嫌だったのだ。

本当は、あの気持ちを誰かに聞いてほしかった。

本当は、親友と一日でも早く仲直りをしたかった。

本当は、何かをできるようにしたいと心から望んでいた。

望んでいた現実に一歩近づくことができた今は、しゃくり上げながら頷くことしかできなかった。

「おっしゃあ！めでたいこともあったことだし、お待ちかねと行くぜ！」

スラストハルの号令に、周りから威勢のいい掛け声が上がった。

「祭の始まりだああああー！！」

開始の掛け声とともに、あちこちの天竜が真上に火を噴き上げる。それを合図に、集まっていた天竜族が「うおー！」とか「きゃー！」とかの声を上げ、一気に場が盛り上がった。

最終章 幻想世界との別れ

年に一度の豊饒祭。これまでの充実した富に感謝し、これからの繁栄を祈る記念の祭。

この世だけでなく、別の世界の同じ時間も祝福する。それがこの祭の真意だ。

真意があることは分かって、建前としてしまうのが祭の特徴だ。この豊穰祭も例外ではないらしい。

つまり、食べ物と参加者が集まれば騒いで楽しむものらしい。

香乃は今、鍋の置かれた机にいたままだった。鍋のことは忘れていないが、おそらく食べ始めたら食べることに夢中になってしまいそうだったので最初のうちは遠慮しておいた。日にかけたのはついさっきだったから、煮込みすぎなければある程度時間をおいたほうが味も良くなるだろう。

鍋を後回しにし、香乃は周囲を眺めていた。

さらっと見てみても、天竜族は本当に不思議な種族だった。漫画や小説に出てくるファンタジーの塊のような存在だが、祭を開いて大勢で騒いでいる様子は人間とさほど変わらない。

鋭い牙や爪を持っているが血肉を求めているわけでもなく、大きな翼を広げて畏怖を撒き散らすわけでもない。

とても温厚で、神仏のような手の届かない場所にいるわけでもない。なので親しみやすい。笑うし、涙も流す。存在の仕方が普通すぎて違和感を覚えてしまうほどだ。

「お味はどうだ？ カノさん」

スラストハルが話しかけてきた。香乃が一人で寂しそうにしていたのを見兼ねたのだろう。

まだ手をつけていないのだが、社交辞令という形で返事をすることにした。

「はい、美味しいですよ。わざわざ私の土地の食べ物まで用意してくれて、どうもありがとうございます」

「礼なんかいらねえよ。こっちは勝手に連れてきた身だし、俺らの食い物はおそらく口に合わねえだろうしな」

天竜族のために用意された食べ物物は特殊な雲だ。人間が食べられるような代物ではないだろう。

「他の方と話さなくていいんですか？この国の長だったら、挨拶回りや大事な話もたくさんあるかと思うんですが」

「連れないこと言うねえ。人間の社会はよく知らねえけど、俺たちは普段からよく顔を合わせるから、改めて挨拶や用事なんて持ち込まねえんだよ。それに、せっかくの祭なんだから、楽しむほうが先だろ？……それとも、俺と話すのは嫌か？」

スラストハルの諧謔に香乃は笑顔で答える。

「いいえ、国の代表と話すことができるなんて光栄ですよ。お話もお上手ですし」

「わははは！照れることを言ってくれるねえ！カノさんのとこの文化は礼儀が洗練されているみてえだな！」

人間社会の文化に褒め言葉を添えて、スラスタハルは大きな口を開けて大笑いした。体格が巨大なので近くでそれを見ると至極圧巻である。

天竜族の文化はまだ詳しく知らないが、他の同族と交流することに関して並々の頻度を持っているようだった。

確かに、電話や電子メールがない以上、直接合って話すというアナログな方法で交流するしかない。普段から会っている分、“久しぶり”という感覚があまりないのだろう。地球の文明は間接的なやりとりが多くなっているの、それはそれで羨ましいと香乃は思う。

香乃は試しにポケットの中身を取り出して見せた。

「スラスタハル、これって何か分かりますか？」

香乃が持っているのは携帯電話だ。通話・通信を目的とした個人用携帯型通信端末で、日本では普及率が実に九割を超えており、決して珍しいものではなくってきた代物だ。

「……なんだこりゃ？ 新手の鏡か？」

携帯電話をまじまじと眺め、手にとつてぐるぐると回して観察した第一声の感想がそれだった。おそらくディスプレイを見た印象からの分別だったのだろうが、知らない人に見せた反応は本当に面白い。

「それはですね、同じ物を持っている人と会話や連絡のやりとりができる機械なんですよ」

香乃は得意顔になってそれを説明した。香乃が発明したり製造したりしたわけではないが、細かいことは隠しておいた。

「へえ……こんなので離れた相手と話ができるのか？」

スラスタハルは興味津々といった様子で携帯電話から目を離さない。そんな子供っぽいところが可愛いと思った。

「仲介役として電波を繋ぐ仕組みと施設が必要になるんですけどね、私の世界じゃ重宝されている物なんです」

仲介役というのは電話交換機のことなのだが、香乃は詳しくないのでこの説明が精一杯だった。

日本の場合はISDN網やDSLだけでなく、課金制御やATM通信などにも交換機が用いられている。電話番号やメールの内容を暗号化し、他の端末と情報をやりとりをする重要な役割を担っている。

スラスタハルは相変わらず携帯電話を見続けている。裏返したり、受話マイクの部分を耳に当てたりしている。

やはりというか、未知の物に対する好奇心が半端でなく強いようだ。また、携帯電話で話をしているドラゴンというシニールな絵が出来上がっていて笑えた。

香乃が気分良くその様子を見てみると、スラスタハルがぼつりと言った。

「なるほどね。つまりは多個体と間接的に連結する電子的人工シナプスみたいな媒体か。こういう手段もあるんだな」

突然訳の分からない単語が飛んできて、香乃は耳を疑った。

「……はい？」

香乃の不思議そうな反応に、スラストハルは隠しもせずと答える。

「他の異世界でも同じような物を開発している種族がいてな、一連の説明をしてもらったことがあるんだよ。その種族は片目に特殊な細工を施して、通話・通信から情報収集、架空空間でのコミュニケーションをできるようにしてたんだ」

「なっ……！それ本当ですか？！」

「ああ。目の前で見せてもらったんだけどな、さすがに文字通り次元が違うから他端末との通信はできなかったけど、俺らの身長やら体温やら心拍数やら、気温やら湿度やら風速やら、あと山の測量とか表面層の成分分析とかも、眼球を向けただけで瞬時に測ってたぞ」

「ありえん……」

「そう思うだろ？俺も最初見た時は信じられなかったぜ。世界は広いよなあ」

スラストハルは感慨深く頷いている。

一方、香乃は言葉を失うぐらい驚愕していた。

『幻現』を見せられた時から、異世界とのテクノロジーの差があることは図らずとも知っていた。身近な物を取ってみても歴然とした差が出ている。異世界の技術の進歩を改めて知ったところで驚きは大きくなるらない。

香乃が驚いたのは、天竜族の理解力だった。異世界の技術であってもそれを理解し、順応している。さらには構成までも理解してしまっている。

この世界に来てから何度驚かされたのか分からないが、いつ実感しても目を見張ってしまふ。

もし物作りの技術を与えたら、とんでもない文明ができあがるのではないかと香乃は思った。

携帯電話を返してもらった香乃は、あえてそれを言わずにポケットへしまった。

「……そういえば、まだ訊いていなかったのですが」

「ん？何だ？」

香乃は気になっていたことを質問した。

「わたしをこの世界に連れてきた天竜族って、もしかしてスラストハルなんですか？」

夕方に携帯をいじっている時、空から黒い影が覆い被さってきたのを覚えている。拉致された直後は気絶してしまい、次に意識が戻った時にはすでにイズの部屋の中だった。

香乃は誰の手によってこの世界に来たのか、まだ知らなかった。連れてきた人物どこるか、連れてきたのがドラゴンだったこともあとになって分かったのだ。

「ああ、そのことか。カノさんの言う通り、俺が張本人だよ。招待するのは長の役目って毎年決まってるんだ」

「そんなこと言って。あなたのことだから、どうせ楽しみたくて買
って出ているだけじゃないんですか？」

「わはははは！バレたか！」

どうやら香乃の予想は的中したらしい。

ある程度把握してきたことだが、スラストハルという人物は娯楽
を追求する性格らしい。楽しいのが一番、楽しむことに対して手間
を惜しまない、というのが印象に強い。そうでなければ、このよう
な宴会のような祭にならず、もっと形式張った催しになっていただ
ろう。

「連れてきてもらったことはもういいんですが、どうしてイズの部
屋で私を待たせたんですか？」

質問されたスラストハルは、すぐに返事を言わなかった。ただ笑
顔を向けるだけで、答える気配がない。

その反応を逃さず、香乃は問い質すことにした。

「初めからなんとなく変だと思っていたんです。お客さんを招待す
る態度は悪くないのに、待機のためのしかるべき場所はなかったの
かって。この集会場で待たせることもできたはずです。なのに、わ
ざわざ個人の部屋、それも交流に難のある人物の部屋で待たせるな
んて、あなた方の親切さからはとてもかけ離れています」

初めてイズの部屋に来た時、香乃は大変驚き、そして戸惑った。
敵意がないと分かってからも、イズの後ろ向きな態度に少々気を遣
ったのは事実だ。

他の天竜族の住居があるにもかかわらず、スラストハルはイズの

部屋に香乃を待たせた。

何らかのトラブルを起こしてもおかしくないというのに、どうしてそのような措置を取ったのか。

香乃のまっすぐな視線から、スラストハルは視線をそらすことなく答えた。

「さあな。たまたまあいつの部屋しか空いてなかったのさ。偶然としか言いようがないな」

そう言っ、スラストハルは手に持っていた雲にかぶりついた。まるで何かをごまかすように。

やれやれ、とかのは溜め息をついた。

スラストハルは話しかけられるのを避けるように雲を咀嚼している。自分の顔よりも大きな物に顔を突っ込んででもぐもぐする様はなんだか可愛くて、自然と笑えてしまった。

「スラストハル、それって美味しいんですか？」

「まあな。俺らの主食だし。……いっぺん食ってみるか？」

スラストハルは手に持っていた食用の雲を差し出してきた。

「いいんですか？じゃあ……」

香乃がそれを受け取ろうとした時、

「異界の民にここの食料を口にさせるのは駄目だと、去年も申し上げたはずですが」

いつの間にか傍にいたシルゼーロマが注意してきた。

「やっぱ駄目かな？」

「私たちには何ともなくても、カノさんにとっては毒となる物が入っていたらどうするのですか」

「俺らは食えるんだし、食い物なんてどこも一緒だと思うんだがなあ」

「あれだけ異界渡航を繰り返しておきながら、まだ異世界と我々との差異を理解していないのですか！たとえ外見が同じでも、それまでの習慣や環境が違っただけで体質が異なるんですよ！」

「分かった分かった。俺が悪かったから唾を飛ばすなっつての」

部下からのやかましい正論にスラストハルはうんざりとした表情を浮かべる。

「そうやって部下のありがたい注意を蔑ろにしているからシルゼーロマの苦勞が減らないんだよ、父さん」

シルゼーロマの後ろからイズが追いついてきた。

「イズ、今までどこに行ってたの？いつの間にかいなくなってたから心配したよ」

「ごめんね、カノ。組織に加入するなら今のうちに顔を覚えてもらって、シルゼーロマに今まで引き回されてたんだ」

「何を言っているんだ。こついうのは最初が肝心だと言うことを知らないのか？お前の顔を知らない者も多いんだから、こちらから挨拶に行くのが常識だろう」

「だからって、力ずくで引っ張らないでよ。あとでちゃんと行こうと思っただのに」

「大事な用事を後に回すのは大馬鹿だ。こついうのは早いほうがいいに決まっているんだよ」

イズとシルゼーロマが言い争うのを見て、香乃の頬が緩んだ。

「何笑ってんだ？カノさん」

「いえ、この二人、まるで姉弟みたいだなんて思っただけ」

「まあ、もともと仲のいい関係だったからな。今までちょっと距離があっただけだし。……こんな光景を見られるのも、カノさんのおかげだよ」

「あら、おだてても何も出せませんよ？」

「あちゃー、そりゃ残念！」

スラストハルは大袈裟に額へ手を当てた。

「いいか、お前はとにかく一般常識が抜け落ちているんだ。まずはそこから叩き込むからな」

「シルゼーロマだって人の話を聞こうよ。一方的に教える指導の仕方はどうかと思う」

「何だ、上司に盾突こうっていうのか。いい度胸だな」

「肩書きや職歴を盾にしないでくれる？それじゃ教わる気にもならないし」

傍らからはまだ口喧嘩が続いていた。

「……なんだ、こいつらまだ言い合ってたのか」

「ほんとに仲いいですねえ」

「こりや頭として、一喝しなきゃいけない場面かねえ……」

「まあまあ。あの二人の仲だからこそですよ。“喧嘩するほど仲がいい”って私の国ではいいますし」

「ほう、そりゃ的を射る表現だな。これから俺も使わせてもらおうか」

「仲が悪いっていうのは、あの二人には似つかない言葉でしょうね。親しげに額をくっつけ合ったりしてましたし、心配はないかと……」

「なにっ！？本当か！」「か、カノさん！！」「うわ、言っちゃった……」

スラストハル、シルゼーロマ、イズが同時に悲鳴に近い声を出して香乃に振り返った。

今まで喧嘩していた二人もそんなことをしていなかったかのよう
に驚いていて、香乃は息を飲んだ。

「えっ……と……？私、そんな変なこと、言いました……？」

戸惑いを隠せず、恐ろしげに訊いた。

「ほほう……お前ら、俺の知らないところでずいぶんいいトコま
で行っちゃってんじゃないかねえか、ええ？」

スラストハルがにやにやと歪んだ笑顔を浮かべてイズとシルゼー
ロマを窺う。

「あの……それは、ですね……」

「ば、ばらされた……」

シルゼーロマは慌てて弁解しようとし、イズは恥ずかしそうにそ
っぽを向いている。また、二人は同じように顔を真っ赤にしていた。

「あの……どういうこと、でしょうか……？」

なんだかとても罪深いことをしてしまったような気がした香乃は、
スラストハルに理由を尋ねた。

「カノさん、あんたの世界じゃ、親しい者同士とする接触行為って
あるか？特に、友人よりも深い関係ですることで、だ」

「え？」

質問で返された香乃は、言葉の通りに思い浮かべた。

親しい者同士での行為といえば、握手とか抱擁とかだろう。肌の直接的な接触は親睦のある表現として世界で共通している。

だが、それらは確かに親しい仲ですることだが、友人よりも深い関係となると少し違う気がする。

友人よりも深い関係、つまり恋人となると、単純な思考で思い浮かぶのは……

キス……とか、だろうか。

「ありますけど……それが？」

香乃の想像する様子に、スラストハルは大きくにやついて言った。

「額を触れ合わせるっていうのはな、俺たち天竜族の文化じゃ、それに該当するんだぜっ」

スラストハルが楽しそうに言い切ると、イズとシルゼーロマの顔が、ぼんっ、と赤くなった。

「~~~~~っ！」

二人は声にならない声を上げて固まってしまった。

つまり、シルゼーロマからの一大決心を受けたイズだったが、それを他の者から実の親に暴露されたということになる。これは香乃でも恥ずかしい。

「えっと……二人とも、ごめんね？」

恥ずかしさで何も言えなくなってしまった二人を前に、香乃はなんだか悪い気がしてならなかった。

「だはははは！！構わねえ構わねえ！こりゃ食って祝うしかねえな！わっはっは！」

二人の心情など全く気にしないで、スラストハルは大笑いしながら手に持つ雲に大きな口でかぶりつく。

「カノさんに賞味できないのが残念だが、なかなか美味いんだよ。味もいくつがあるから、飽きることもないしな」

言い終えて、再び雲にかぶりつく。おいしそうな様子に釣られた香乃の口には唾液がたまり、お腹が鳴った。まだ温め始めたばかりだが、体は待ってくれないらしい。レンゲで小皿に白菜と椎茸と汁をよそる。立ち上がる湯気とダシの香りが鼻孔をそそる。

そろそろいい塩梅だろうか。

白菜を食べやすい大きさに切り、口に運ぶ。

甘みが染み出た上にダシの染み込んだ具は、空腹感など忘れてしまっただけ美味しかった。疲れた体に至福の安心感が広がっていく。

「美味しーっ！」

香乃は自然と顔が綻んでいた。

噛めば噛むほど口の中に美味しさが満ちていく。『空腹は最高のスパイス』という俗説があるが、あれは本当にあるのだと実感した。

「こんなに美味しいご飯を用意してくれて、どうもありがとう！」

「はははっ！喜んでもらえたようで何よりだ！現地の人に食材選
びを協力してもらった甲斐があったよ」

「正解！それ超グッジョブ！」

香乃はとびきりの笑顔とサムアップで答える。少し古い言葉が漏
れ出たが、そんな些細なことなど気にならないほど感激していた。

「なかなか親切な人でな、俺が必要な物を曖昧に聞いただけで手
に入る場所を案内してくれたんだ。なんか困ったような雰囲気だった
けど、自分の都合を二の次に考えてくれた、すごく好印象な人間だ
ったよ」

そういう人は珍しい。確かにいないわけではないが、スラストハ
ルはとても運が良かったといえる。

「食材もそうだけど、味付けも本当に最高！私たちの世界ではね、
こういうのって……」

香乃が言うよりも早く、スラストハルは言わんとしたことを感じ
取ったようだ。ズバリ、といったふうに人差し指（？）を向けて言
った。

「“萌える”っていうんだろ？」

香乃は危うく吹き出しそうになった。

笑顔から仰天の顔に一転した香乃の様子に、スラストハルは理解
しきったような顔で続ける。

「違ったか？現地協力者から『食べちゃいたくなるほどもでたいもの』に対して使うつて聞いたんだが」

違う。絶対違う。言葉の意味は合っているかもしれないが、使用所が間違っている。あと、その『めでたい』っていうのは『目出鯛』ではなくて『愛でたい』だ。

買い出しに協力したのは称賛するが、異世界の国の長になんてことを吹き込んでいるんだうちの愚民は。

小皿を落としそうになるのを必死で堪えて、香乃は質問した。

「あの……それって……」

「ん？どんな人だったかってこと？ちょっと待ってな」

言葉の本当の意味と用途を説明しようとしたが、スラストハルが勘違いをして遮った。

どこに持っていたのかは知らないが、スラストハルは再び『幻現』を取り出し、体に纏い始めた。

「幻現は体を伸縮させるだけじゃなくて、擬態もできるからな。今その人を再現するぜ」

人相を知ったところでどうしろというのか、スラストハルの意図がわからない。まあ、適当に相槌を打って場の雰囲気悪くしないようにしようと思った。

幻現の効果により、スラストハルの姿が少しずつ変わっていく。

「確か……こんな姿だったかな？」

変身を遂げたその姿を見て、今度は本当に小皿が香乃の手から滑り落ちた。

見開いた瞳に映るのは、よく知っている人間だった。

細身で短髪のシルエット。

けだるそうに曲げられた背中。

自分よりもはつきりとした二重。

首筋に一つだけある小さなホクロ。

他人とは言えない男性。知らないと言を切れない異性。

この世界に来る直前に喧嘩をした相手。

スラストハルが変身した姿は、香乃の恋人だった。

香乃は口をわなわなと震わせながら、質問をぶつけた。

「あ、あの……その人とは、どうやって会ったんですか……？」

会った経緯を聞くなどおかしいと思う。しかし、尋ねないわけにはいかなかった。他でもない、彼のことなのだから。

聞かれたスラストハルは、特に気にするふうでもなく答えた。

「カノさんをこっちの世界に招待したあと、俺はもう一度カノさんの世界に行ったんだよ。できるだけ同じ着地点にな。で、いい人はいないかと探したら、偶然その人を見かけたわけ。特に厳選したつもりはなくて、ただ一番最初に見つけたからって理由で協力を頼んだんだよ」

スラストハルの説明は実に単純で自然に聞こえる。
だが、香乃にとってはおかしい点がすぐに分かった。

彼と喧嘩したのは、彼の部屋の中だ。

しかしスラストハルは彼を外で見たという。

おそらく彼は、喧嘩したあと、私を追いかけてくれたのではないだろうか。

どんな思惑かは知らないが、彼が外にいた理由がそれだったらと思うと、香乃は急に怖くなった。

もし、万が一、いまだに戻ってくるのを待っているとしたら。

香乃がこの世界に来てから何時間も経っている。それでも、いつもの彼だったら、おそらく……。

心配そうな様子だったと見受けたスラストハルの印象は間違っていないのだろう。

都合のいい解釈かもしれない。自分勝手な希望が縋い交ぜになっているのかもしれない。

それでも、香乃は彼の気持ちを信じたかった。それと同時に、自分がまだ彼のことを好きでいるということも信じたかった。

香乃は落とした皿とレンゲを拾い、テーブルの上に置いた。

「……カノ？」

イズを始めとした天竜族の面々が心配そうな面持ちで香乃を窺う。

「すみません、私、もう帰らなきゃいけないんです」

香乃の気持ちは決まった。

一分一秒でも早く、彼にまた会いたい。喧嘩はしたけど、すぐに仲直りしてやる。今はただ、彼の元へ帰りたかった。

「もう間に合わないかもしれないけど、あの人が待っていてくれるかもしれないんです。私は元の世界で会わなきゃいけない人がいるから、だから……」

あの人顔が見たい。

あの人後ろ姿に頼りたい。

あの人雰囲気の中にいたい。

ちょっとした間かもしれないけれど、離れてみて分かった。

香乃は彼のが好きだ。嫌いになんかなれない。

「大変失礼なのは承知しています。でも、すぐにでも行かなきゃ、私……」

「分かった。カノさんの気持ちはそれで充分だよ」

香乃の言葉を遮ったのは、スラストハルだった。ついさっきまで見せていた宴楽の態度はなく、紳士的な雰囲気を感じられた。

「祭の開始時間も遅れちゃってたし、もともとは無理矢理連れてきてたんだ。帰る理由があってもおかしくねえさ」

「スラストハル……」

「帰りは責任を持って、俺が送り届けるぜ。今度は安全飛行でな」

そう言って口端を曲げて笑った。

「総指揮官殿。そういう役目は私がしますから……」

シルゼーロマが代役を担おうとすると、

「お前はそこまで仕事熱心にならなくていいんだよ。それとも何だ、俺の楽しみを奪う気か？」

スラストハルはいたずらっぽい笑顔で返した。

「いえ、そのようなつもりでは……」

困ったふうにはシルゼーロマは口をつぐむ。

「まあほら、お前は普段からクソ真面目なんだから、こういう時ぐらい羽目を外しとけよ。今年は逢い引きの相手もいることだし」

「「ブッ……!？」」

イズとシルゼーロマが同時に吹き出した。

「なっ!何を言っているんですか!私がこんな奴と逢い引きなど……!」

「そうだよ!シルゼーロマが困るようなこと言っなよ!」

「い、いや、困るというかな、私は、その、ただ……」

「えっ、な、何？な、なんでそんな下を向いてるんだよ……？」

イズが窺い、シルゼーロマがわずかに面を上げる。そこで一瞬だけ視線が合うと、二人とも恥ずかしそうに顔をそらしてしまった。

「おやおや、二人はアツアツだな」

「ほんと、お似合いですねえ」

「俺もそろそろおじいちゃんって呼ばれるんだろうなあ」

策士に嵌められたイズとシルゼーロマはあれこれと薄っぺらな言い訳を並べて反対してくるが、すでに耳に入らなかった。

香乃とスラストハルは意に介さず、本題を進める。

「さてと、カノさん、帰ると決まったのはいいが、いつにする？」

元の世界に戻る時期を質問され、香乃は即答した。

「できれば今すぐにでもお願いしたいんです。少しでも早いほうがいいので……」

「よっしゃ、そうと決まれば話は早いな」

そう言うと、スラストハルは手を差し伸べてきた。

「俺の背中に乗りな、カノさん」

「ええ、よろしく願います」

言われるがままに手に近づくと、スラストハルは香乃の体を持ち上げ、自分の背中に乗せた。イズの背中に同じように乗せてもらったが、どこか手慣れているためか乗りやすかった。

スラストハルの首に掴まりながら、二人の天竜族のほうを向く。

「シルゼーロマ、私とイズを守ってくれてありがとう！イズのこと、立派に鍛えてあげてね。あんまりケンカばかりしちゃダメだよ」

会って最初の時からずっと献身してくれたおかげで、香乃とイズは無事でいることができた。

ずっと雄々しく、時には我が身の犠牲もいとわずに、常に前に出してくれていた。

命の恩人といっぴい天竜なのに、香乃とは壁を作らず開放的に話してくれた。感謝してもしきれない。

「私こそ、イズトリカムのこと、感謝しています。本当にお世話になりました」

シルゼーロマが凜とした姿勢で答える。

そして、もう片方の人物も。

「イズ、この世界に来てからずっと傍にいてくれてありがとう！君ならきつといい天竜族になるよ！シルゼーロマのこと、ちゃんと守ってあげてねっ」

何度か心の壁にぶつかっていたけど、悲しい気持ちがあったにもかかわらず香乃のことを心配してくれていた。

後ろ向きだったかもしれないけれど、小さな一つ一つの思いや行動が香乃を守ってくれていた。

最後には本音で話してくれたから、ちゃんと心を通わせることができるのではないかと思っている。

「僕、カノに会えて良かったって思ってる！この世界に来てくれて本当にありがとう！帰り道気をつけるんだよ！」

イズの声は涙で滲んでいた。別れが悲しいのだろう。

香乃も、本当はもう少しこの世界にいたかった。もう二度と来られないだろうから、天竜族のみんなとたくさん話をしたかった。

でも、今は何よりも優先して選びたいものがある。他の誰でもなく、自分のために。

香乃も惜別の思いに駆られながら、しかし絶対に涙など見せまいとし、笑って手を振った。

「イズ！シルゼーロマ！それに、天竜族のみなさん！またね！」

いつか会えるようにと願いを込めて、別れを告げる。

力任せに手を振ると、イズ達は香乃の真似をして手を振ってくれた。

ごつごつした体躯に鋭い爪を持った手で人間のように手を振るなんて、なんて和やかなのだろう。最後の最後までこのドラゴンは笑わせてくれる。

「よーし……行くぞ！」

スラストハルのかけ声がかかり、香乃は掴まる腕に力を込めた。翼が大きく広げられ、筋が伸びきり、翼膜が全体で風を捉える。姿勢を屈ませ、両足の筋肉が隆起し、尾が天を仰ぐ。

両翼が何度か羽ばたき、ならし運動を行う。風が旋回し、体の周

罅に纏っていく。

程良くほぐれたところで、スラストハルが深呼吸を一つ済ませる。

「しゅっぱーっ!」

大きく広げられた翼が力強く羽ばたき、両足が跳ぶように伸張し、尾が地面を叩く。体が急に重くなったような錯覚に陥る。翼はさらに何度も羽ばたき、空気を掴んでは体を昇らせていく。

風が全身を拭いていく。イズに乗った時は風の強さと激しい上下運動が伝わったが、今回はそうでもなかった。風を受けることはさすがに避けられなかったが、つらいというほどではない。スラストハルが飛び方に配慮してくれているようだった。

自分の気持ちに余裕があることに気づき、香乃は目を開けた。

すでに空高く舞い上がっている。空には地球とは違う星空が広がり、夜を彩っている。

眼下には『久蔵峰』が広がっている。その頂には天竜族の国がある。

数時間の滞在だったが、いろいろなことがあった。

悲しいこともあった。苦しいこともあった。

だが、それらと同じだけの、嬉しいことと楽しいことがあった。

天竜の国の一角に、先ほどまでいた集会場を見つけた。そこには天竜族の面々と、イズ、シルゼーロマの二人も見つけた。

よく見ると、ずっとこちらを見つめ、手を振り続けてくれていた。

どうかお幸せに。

二人の幸福を願いながら、香乃はもう一度手を振った。天竜族は夜目が利きにくいほうみたいだが、見えていなくてもよかった。その代わり、この願いが届いてほしい。

「そんじゃ、次元を渡るぜ」

スラストハルは出発の合図を出した。

「シルゼーロマのやり方は少々荒かったかもしれないが、俺のは平穩だから心配しないでいいぜ。次元渡航ってのは、正確には“現在所在している世界を変える”って意味でな、安定したやり方なら揺れたり揺さぶられたりすることはないんだよ。周りに他の物質が極力存在しない空間でやるってのもコツなのさ。位置の調整に多少移動することはあっても、基本的には動かねえから」

そう前置きのような説明をすると、スラストハルはその場で滞空した。

「それでは、カノ様のおなーりー」

戯けた合図を言うと、カノとスラストハルの周りの景色が一気に変わった。見える景色に星空も天竜の国もなく、ただ一色の黒が占めている。一方で、照明はないはずだが、自分の姿やスラストハルの姿はよく見えた。

「カノさんの世界は……………これだな」

何も見えない空間でスラストハルは独り言を呟く。

「位置を調節するから、ちょっとだけ動くよ。まあ、何の障害もな

いんだけどな」

そう言っ、移動を始めた。今は翼を羽ばたくことなく、姿勢を前に傾けるだけで動いているようではある。周囲が真っ黒であり、空気抵抗も何もないため、今ひとつ実感はない。

数十秒の時間が経過して、体を元の姿勢に立て直す。

「んじゃ、カノさんの世界に入るぜ」

合図を終えると、周囲の景色が明らかに変わった。

見覚えのある星空。

見覚えのある風景。

見覚えのある町並み。

間違いない。

今、香乃達は香乃の住んでいる町の上空を滞空していた。

懐かしい気持ちが増える。帰ってきたという安心感が沸き上がってくる。

今まで生きてきて、こんなにも自分の町が愛おしいと思ったことはなかった。

「どこに降りようか？カノさんが知った場所がいいんだけど、人間が多い場所だと混乱するからなあ」

スラストハルが辺りを見回して、手頃な着陸地点を探していた。

町の中で人のいないところなど見つけるほうが難しいのだが、多少の目撃は妥協するべきだと思った。

どうせスラスタハルは元の世界に帰ってしまうし、マスコミが騒いで香乃を追うことがあっても白を切ればオカルトで済む話だ。

町中で天竜族と陸狸族を大勢の人に目撃されているが、今いる場所は駅前から多少離れているから大きな問題にはならないだろう。

香乃はスラスタハルに場所を指定し、目的地の最寄りの駐車場に向かつてもらった。駐

車場なら開けているし、人がいなければ問題ない。それに、指定した駐車場は恋人の住む場所にも近い。

スラスタハルは指示通り移動し、すぐに目的地の上空に到着した。翼を優雅に動かし、ゆっくりと下降していく。途中で気圧の変化で耳が痛くなったが、地上に到着する頃にはなくなっていた。

集合住宅の最上階よりも下がり、電柱のてっぺんが触れるような高さになり、程なくしてスラスタハルは駐車場に足を着ける。降り方に気をつけてくれたようで、着地時の音は予想以上に響かなかった。

スラスタハルに抱えられて、香乃は彼の背中から降りた。久し振りの地球の地面。コンクリートを踏むその感触が妙にしっくりする。

香乃はここまで送り届けてくれたスラスタハルを見上げた。

「ありがとう。何から何まで。スラスタハルのような天竜があの世界にいてくれてよかったって思ってます」

「お褒めに与り、光栄です……なーんてな」

スラスタハルは戯けてみせるが、すぐに表情を苦笑へと変える。

「カノさんにはもう少し楽しんでもらいたかったんだがな、せがれの世話でとんだ迷惑をかけちゃったって申し訳なく思ってた。…すまねえ」

柄にもなく謝罪の言葉が出てきて、香乃は笑顔で答えた。

「そんなことはありませんよ。むしろ、イズやシルゼーロマに会えまして、行ってよかったって思ってます」

「それならいいんだがな。……今回の件で、イズトリカムはカノさんのおかげで助けられた。たった一人の息子を更正してくれて、俺は感謝しきれない思いでいっぱいなんだよ。今年の招待客がカノさんで本当によかった。息子ともども礼を言わせてくれ。……ありがとう」

スラストハルは真剣なまなざしで謝礼を述べる。

確かに、イズとぶつかったり、陸猩族に追い回されたりと、思えば酷くて面倒くさい渦中にいた時もあった。時には命すら危つい場面もあった。

しかし、イズに会い、シルゼーロマに会い、様々な人物に会い、感情同士で言い合い、自分の本音を再確認し、普通の人ではまず体験できないことをたくさん経験した。

これがなぜ迷惑だといえるだろう。

「天竜族のいる世界に行くことができて、私はかけがえのない思い出が作れました。今年のお客さんに私かなれて、本当によかった。私を選んでくれたスラストハルにも感謝していますよ」

偽りのない感想を言われたスラストハルは、心配そうな顔をぱつと晴れさせた。

「そう言ってくれちゃ、今年の祭は大成功だな！」

「ふふつ、そうですね。また誘って下さいね？今度はいきなりじやなくて紳士的に！」

「わはははっ！誘うのはいいけど、あとの難しい注文だぜ！」

駐車場に二人の笑い声が響く。近所迷惑になっているかもしれないが、笑わずにはいられなかった。

「それじゃ、そろそろお暇するかな。誰かに見つかったら大変だ」

言うや否や、スラストハルはその大翼を羽ばたかせ、すぐに離陸した。

民家の屋根と同じくらいの高さまで飛ぶと、そこで振り返った。

「今年の招待にお越しいただいて、ありがとうございました。またいつの日かお会いしましょう」

初めて聞くスラストハルの丁寧な挨拶に、香乃はちょっとだけ吹き出した。

もしかしたら本当に紳士的にしてくれているのかもしれない。

「スラストハル、その言葉遣いは似合わないよ！」

「けじめだっつの！けーじーめー！」

つつこむと、いつものスラストハルの返事が返ってきた。

「それじゃあな！」

別れの挨拶とともに、スラストハルは手を振った。こつちの世界の挨拶を覚えてくれたらしい。香乃もそれに応える形で手を振った。スラストハルはどんどん上昇し、月と重なるまで飛ぶと、まるで雪が溶けるように消えていった。

振っていた手を下ろし、香乃は空に向かって言った。

「じゃあね。ありがとう……」

香乃は深呼吸をして、気持ちを切り替えた。

これから自分にとっての本番だ。

彼から本音を聞き出さなければいけない。

彼と本音で言い争わなければいけない。

恐怖はあると思うが、今の香乃には勇気のほうがたくさん持っている気がした。

話さなければ分からないことがある。話してみて分かった実例を思い浮かべて、自分もそうなれるようにと胸に手を当てた。

世の中は難しいことが多いだろうけど、思っているほど小難しくはないと信じる。

人と人との関係に言葉は必要不可欠なのだ。

できることを全部やろう。

なりたい理想を叶えよう。

できることなら誰かと一緒に実現しよう。

思い描く自分の夢に嘘をつかず、そのために必要なことを挙げて、そして、香乃は思い人の住む場所に向かったため、駐車場をあとにした。

F I N

最終章 幻想世界との別れ（後書き）

こんにちは、作者の甘森礎苗です。

この度は『夕闇のいざないと鬱ドラゴン』をお読みいただき、おつかれ様でした。

去年の2月に連載を開始し、ようやく完結させることができました。いろいろと試しながら、時には仕事に阻まれながら、構想をほとんど立てないままの見切り発車でしたが、いかがだったでしょうか。

予想ではもっと短い話のつもりだったのですが、書きたいことをだらだら並べていったら、気づけば文庫本サイズ（42文字×17行）で380ページという長編に…。これはもう誰かにダイビング土下座したくなります。

更新しては読んでいただいた方、お気に入り登録、ブックマークで愛読していただいた方、たまたま目が留まって興味本位で読んでいただいた方、本当にありがとうございます。お世辞にも多いとはいえない閲覧数でしたが、なければ続けられない作品でもありません。この場を借りてお礼を申し上げます。もしよろしければご評価・ご感想をいただけると幸いです。次の作品に活かします。

どうもありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7588j/>

夕闇のいざないと鬱ドラゴン

2011年10月9日21時13分発行